

人生イージーモード

EXIT.com

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家族を一度失った柊春仁（ひいらぎはるひと）と比企谷兄妹が共に成長していくお話。

オリ×いろは

目次

序章

プロローグ

第1話

第2話

高校一年生編

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

高校二年生編

第10話

第11話

第12話

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

第19話

第20話

1

5

11

18

29

35

42

48

55

68

74

84

94

102

109

117

126

134

143

150

158

第 4 2 話	第 4 1 話	第 4 0 話	第 3 9 話	第 3 8 話	第 3 7 話	第 3 6 話	第 3 5 話	第 3 4 話	第 3 3 話	第 3 2 話	第 3 1 話	第 3 0 話	第 2 9 話	第 2 8 話	第 2 7 話	第 2 6 話	第 2 5 話	第 2 4 話	第 2 3 話	第 2 2 話	第 2 1 話
364	353	343	332	319	309	296	287	279	269	261	253	244	236	229	219	210	201	192	183	175	166

序章

プロローグ

「ただいま」

ランドセルを背負った少年が学校から帰宅する。

家の電気を点けてランドセルを自室に置きに行く。おかえりの返事はなく、しんとしていた。外の往来がうるさく感じる。

一般家庭であれば家族の温かい声で迎えられ、食卓を囲んで一家団欒が始まる。TVを見ながらだらだらしている父がいて、キッチンでトントンとリズムミカルな音を奏でる母がいて、もしかしたら兄妹やペットの犬猫もいるかもしれない。

それは彼にはなかった。これが彼の日常である。

「ご飯作らなきゃ」

少年の名前はひいらぎ 春仁。小学5年生だ。

春仁の家庭は所謂母子家庭だ。父親は彼が産まれる前に離婚していた。無論、彼は父親の姿や顔を知らない。

それでも彼は幸福を感じていた。

無償の愛を捧げてくれる母親がいて、気にかけてくれる叔母とその家族がいる。

「よし、できた。テーブルに運んで〜」

春仁は自身が不幸だとは思わない。千葉から始まり、小2で大阪へ、1カ月前にこの家へと、度重なる転居の影響で転校が相次ぎ、幼馴染やクラスメイトと引き裂かれたとしても、彼は涙を流さなかった。

「うん。今日もおいしくできた。明日は学校終わったらお母さんのとこにいこつと」

春仁は良い子であろうと努めた。問題も起こさず、勉強も努力の成果もあり優秀。それは母に心配をかけたくない一心からである。

自分が泣くと母も泣く、自分が辛いと母も辛い。であれば自分が笑えば母も笑ってくれる。世の中はそれほど優しくない事を理解して

いない彼が、そう考えるのも仕方ない事だ。本当に、どうしようもない事なのである。



「おかあさん！」

「春仁。いらっしやい。来てくれてうれしいわ」

白色が基調の部屋、彼女はベッドに横たわっており、その体には医療器具のケーブルが付いていた。手足は骨と皮だけと言っているほど痩せている。

春仁は彼女に今日の出来事を楽しそうに話す。その笑顔は母親としての活力を湧きあがらせる。『この笑顔でまだ闘える』と。

彼女は癌《悪性新生物》を患っていた。

担当医からの説明では、肺から気管支、食道まで移転が進み、持つてあと1年だろうと言われている。

この事は春仁には秘密にしている。理由は言うまでもない。しかし彼女は諦めない。当然だ。当たり前だ。不変の方程式と言っている。愛する我が子を置いて旅立つ事を受け入れられる親など存在しない。

彼女は世界は優しくない事を知っている。大人であるほど欲深く、他人を蹴落とし排除する事で欲望を叶える人間。残念だが、彼女の伴侶でさえ例外ではない。愛しい、将来を誓ったにも関わらず不倫と言う結末になって離婚している。

だからこそ彼女は、人間として——春仁の母として——女として、彼に教えを説いてきた。人としての在り方——男としての在り方を伝えて来た。

「春仁、ちゃんと覚えてる？」

「うん！ありがとうとごめんなさいはしっかり言う。だよね！」

「えらいわね春仁、おかあさんも春仁を自慢できてうれしいわ」

春仁は生来の素養として映像記憶能力がある。それに付随して記憶力がかなり良い。そのため母との会話を全て覚えている。その中

には様々な事柄がある。他人に見返りを求めてはいけない事。相手からの感情はキチンと受け止める事。誰かを思いやれる心を持つ事。善悪の判断等、挙げればキリがない。

彼女は今の春仁に理解できない事は十分解っている、いつか解る時が来る——いつか解れば良い。それでいいのだ。

「昨日は何を食べたの？」

「んーとねオムライス作って食べたよ！」

「あら、もう作れる様になったの？すごいじゃない。」

「えへへ♪ 褒められちゃった。 えっとね、料理の本覚えてさ、やってみたらできちゃった。美味しかったよ！」

母と子を見守る医師の心境とはいかがなものでろうか。旅立ちに抗い闘う母と、それを無意識に支える子。それを直視して共感してしまつたら、その場にいる事はひどく困難だろう。

「じゃあそろそろ帰るね。明後日にまた来る！」

「わかったわ、待ってるわね。いつてらっしゃい。春仁」

「行つてきます。 あはは、家じゃないのに違和感ないね」

「ふふっ そうね、おかしいわね」

春仁が病室を去ってから彼女は涙を流した。



月日は流れ。春仁の日常は変化なく過ぎていった。彼も中学1年生になつていた。母の見舞いもほぼ毎日行っている。

春仁はいつもの様に病院に行った。何やら院内が騒がしく感じるが、気にせずそのまま母のいる病室へ向かう。

「春ちゃん！早く来て！」

突然叔母に手を引つ張られ駆け出す、叔母は涙を浮かべていた。それを見て状況を察した春仁の心臓がどくと跳ねる。急がなければ。速く。もっと速く。彼は暴れる心臓を抑えようと胸に手を置く。そして、ひどく遠く感じた10メートル先の病室へたどり着く。

「は……ひ……お……」

「母さん！」

「…かえ…:…さい…」

「——っただいま…」

春仁は理解した。母が旅立つのだと、自分を待っていたのだと。

涙が溢れる。体が渴いてしまうほどに流れ出す。

彼には担当医師のすすり泣く声も、叔母の嗚咽も聞こえない、深呼吸をして、ただ母の末期まっごの言葉に耳を傾ける。

「い…:…ね…」

「ううん、ありがとう母さん。」

愛を捧げてくれた感謝、待っていてくれた感謝。

旅立つ母に見せるのは笑っている自分がいい。春仁は彼女を思いやり、送りだす。

「うぐっ…:…いつ…:…てらっ…:…ひぐっ…:…しゃ…:…い、おかあ…:…さん…」

「……………つて……………す——」

医療機器の電子音がピーと鳴り、心音停止を告げる。彼女は亡くなり神となった。

彼女の顔は笑顔だった。旅の到着地点が辛かろうと。春仁に笑顔で送り出された彼女は、どんな事であろうと全力で闘える確信が持てる、そんな安らかな笑顔だった。

「——うっぐう…:…えぐっ…」

「春ちゃん…:…よくがんばったね…:…妹を看取ってくれてありがとう」

声が嗄れるほどに叫び、喉が裂ける様に吼える。出でた声が天まで届くようにと願い、彼女へ最大級の感謝を贈る。

春仁は叔母である比企谷真里の養子となって、従兄妹の兄妹と暮らすことになった。

第1話

母の葬儀も滞りなく終わり。喪の49日も経過したある日の事。

俺は叔母である真里さんと共に、叔父の家に呼ばれていた。居間に通され座るように言われたので座る。子供の俺に自由などなかった。しばらくすると大人の男女が数名入って来た。聞けば全員俺の親族にあたるらしい。

真理さんしか記憶にないのだが——この人たちは本当の事を言ってるのだろうか。

「……………こんにちは」

何故自分が呼ばれたのか解らないが、誘拐はされまいだろうし挨拶くらいしても問題ないだろう。知らない親族が「こんにちは」だった。「おつす」と返事を返してきた。

定型文の様な『お悔みを申し上げます』の言葉に反吐がでそうだ。話し合いの内容は「俺を誰の養子にするか」だった。

俺の事なのに俺は蚊帳の外。意味が解らなくて震える俺の手を「落ち着いて」と真里さんは隣で握ってくれた。真里さんが俺の母の遺言状を机に置き読み上げる。

「遺産は柊春仁へ。そして春仁の親権者は春仁が望む人になってほしい。と遺言がございます」

場の空気が変わった。粘りつくような視線と、綺麗に飾られた哀れみの言葉で撫でまわして来る知らない大人達。

俺の顔はきつと恐怖に震えて青くなっているのだろう。

「大丈夫？」という声さえ恐ろしく感じた。

内容をかいつまんで聞くと、大人達が争ってる原因は俺の遺産にあった。

真里さんによると俺の遺産は相続税を引いたとしても1億円はあるらしく、俺は未成年だから養子を組まないといけない。いや組みたい。と言うべきか。

俺は呆れたが納得もできた。

やはり人間は醜い生き物だ。自身の欲望の為に、親族であろうと蹴

落とし我欲を満たそうとする。

この大人達が一度でも母の病室に来た事があつただろうか？俺の記憶にない以上、それはありえない。流石に一度見たら印象は残る。さっきの言葉や表情も、俺のご機嫌を取るためだった、養子縁組をして俺を守ってくれるのではなく、俺の遺産が目当てだったのか…

「——俺は、真理さんの所がいい……」

ぼしよりと言うところが静まり返った。しかし状況は良くはならなかった。

真里さんに対してあからさまな攻撃が始まった。

『春仁を脅してるんだろ！』

『洗脳するなんてサイテーよ！』

『詐欺だ！俺は騙されないぞ！』

人間としての品性を疑う様な言葉を吐く大人達。俺にはもう人には見えなかった。

『このアマア!!』

『きやああ！』

真里さんが殴られた。俺を守ってくれる人が危険な目に遭っている。

頭が真つ白になって身体が無意識に動いた。

「——おまえらは敵だ」

「春ちゃん!？」

気が付いた時には真里さん以外いなくなっていた。床には血が飛び散った跡がある。

きつと俺が暴れたのだろう。手の甲に鈍い痛みがある。

「春ちゃん…助けてくれてありがとう。でもね、暴力はダメだよ？」

「——…はい」

真里さんの頬が赤く腫れていたが、彼女は微笑んでいた。暴力をまき散らす悪い癖。いい加減、どうにかしないと…。



1年前に家族が増えた。俺の従兄弟で柗春仁って名前らしい。歳は同じみたいだが…弟か…だめだ。俺をお兄ちゃんと呼ぶのは小町だけでいい。

「春にい」

「にはやめろ八幡、俺とお前は同い年だぞ。」

「じゃあ俺にお兄ちゃんって言ってみろよ、気持ち悪いから」

「ねえ…はちまんお兄ちゃん…」

これはやばい。ぞわっつて来たわ…寒気で風邪ひいちやうまである。

学校サボる時に使えるか？サボったら小町に怒られるからやめとこう。

「……………」

「こりややばいな、流石八幡、気持ち悪かったぞ」

「待て、感想ついでに俺を傷つけるのはやめろ」

「気持ち悪かった」

「春仁？主語がないと余計傷つくからね？ まあ過去形だしいいんだけど」

春仁も来た時はアレだったが、俺とも小町とも本当の家族みたいに仲良くなった。

こいつは頭もいいし、運動もできる。身体も鍛えてるみたいだ。

しかもイケメンと来た。神様、俺にも何か下さい。

一年前のあいつは、学校ではトップカーストに入る事間違いない。

——と思ってたが実際には真逆だった。

こいつは俺と同等のぼっちだった。ぼっちはぼっちでも俺とは別種のぼっちだ。

俺は誰にも迷惑をかけないぼっち、いわばエリートだがあいつはなんか違う。

話しかけられたら対処するし、普通に笑うけどなんつーか普通すぎる。

ぼっちを気取ってるエセでもないし…ぶっちやけ何考えてるかわからなかった。

一緒にいるけどいけない…そんな感じだ。

母ちゃんから教えてもらった時は愕然とした…。なんだよ天涯孤
独って…。

まあ今はそれも受け入れてちゃんと笑えてるみたいだし、俺も安心
できた。

俺の接し方も嬉しかったみたいだし、俺のエリートっぷりに感謝し
てほしい。

「それで、どうしたんだ八幡？」

俺が舞い上がって「誰にでも優しい女の子」に勘違いして告白し
たが、それを別の女子グループにひどくイジられて、そのグループの
一人が『あんたに告白されたなんてカワイソー』とか抜かした時に春
仁が突然来てそいつの顔面殴ってボコボコにしたんだが。

アレだ、春仁がめっちゃ怖かった。真顔で女殴るってやばくね？

『お前結構可愛いよな。お前の顔もカワイソーって言われる様にして
やるよ』って言った時は女子ども震えてたな。俺？俺はちびったわ。

「告白の件の報告だ。俺と折本にアイツの親が頭下げて来たわ」

「流石に本人はいないか」

「あれはムリだろ。ってかあんまやり過ぎんなよ？」

「善処する」

春仁は顔真つ赤な教師に色々言われてたが『身体を傷つけるのには
文句言うのに心を傷つけるのには文句言わない理由を言え』って啖呵
切ってた時はほんとスカッ！としたわ。教師が答えに詰まったら『言
えないのかよ話にならん』って切って落としてたな。

二人で腹抱えたわ。こいつがいたから俺は救われた。そう思えて
くる。

「なあ春仁。もうすぐ卒業だが、たった一年間なのにホント色々な事
があつたよな」

「…そうだな」

「春仁が来てからの一年間は…なんつーか、濃い。三年分に凝縮され
てるまである」

「大げさだぞ八幡、いてもいなくても一年は一年だ。世界はそんなに

都合よくないぞ?」

「ばっか、マジメに返してんじゃねえよ、恥ずかしいだろうが…」
いつかちゃんと言いたい『ありがとう』って『お前に会えてよかった』って。

でも春仁がここに居るのは家族を亡くした結果だ。俺はそれを喜んでるみたいで自分が嫌いになる。だからそれはまだ言えない。

だから態度で伝えよう。こいつが俺のそばにいてこいつがしんどい思いするなら俺がぼっちにもどればいいだけだ。



総武高校入学式当日

八幡が早めに家を出た。

新しい制服は似合っていたな…いつもよりキマってた。俺も早く目覚めたが朝食と弁当作ってたら結局いつもの時間になってしまった。いつもの時間でも余裕で間に合う。

八幡もソワソワしてたから高校生活は楽しみなんだろう。

2人分の弁当を鞆に突っ込み、いざゆかん。

八幡と同じ中学校だった事と真里さんからの勧めもあり、俺は八幡と同じ総武高校に入学となった。勉強の甲斐あり学年次席で合格。八幡と過ごす3年間は楽しみで仕方ない。ペダルに力が入る。グングンスピードが上がり、俺は気だるそうにペダルを漕ぐ八幡を視界にとらえた。

「…八幡、早く出たんじゃなくのかよ…——っ!？」

急に速度を上げた?俺に気づいてるとは思えない。俺が疑問符を浮かべていると八幡は自転車を蹴り、車道へ勢いよく飛び出した。

「八幡!」

キイイイイ!と甲高いブレーキと鈍い音が鳴り、八幡の体が投げ飛ばされ、道路を数メートル転がり停止した。俺は自殺行為ではないかと気が気でなかったが、八幡に駆け寄ると彼の腕の中にはミニチュアダックスフンドが抱えられていた。

俺はその時に飛び出した理由を知る。

黒い高級車から出て来た男性に依頼して救急車を手配してもらい、話は後日に真里さんとする運びとなった。

雪ノ下建設と書いてある名刺からふと視線を上げると反対車線側の歩道にぺたりと座り込んでる少女を見つけた。

おそらく犬の飼い主だろうと、俺は少女の元に言って話を聞く。

「うえええん！ ごべんだざいく！」

「はあ…まいったなあ。とりあえず落ち着いて、君、名前は？」

「ゆい…がはま…ゆい…です…」

「災難だったけど誰も亡くなってないから、ね？ 少し落ち着いて」

「うん…ぐすつ…」

事情を聴く。彼女が日課の散歩をしていると、ペットのサブレが走り出し首輪が壊れて車道に飛び出してしまったとの事。彼女も総武高校の新入生で、入学式にも参列するみたいだ。

「とりあえず、君は家に帰って家族にこの事伝えといて。ってか大丈夫？ 帰れる？」

「あ…はい。だいじょ…ぐすつ…ぶです」

ミニチュアダックスフンドのサブレを抱きしめたパジャマ姿の少女はふらふらと帰って行った。

大丈夫には見えないけど、今は八幡が最優先だ。

俺は一路病院を目指す。

第2話

気が付くとベッドで寝ていた。俺はなんで寝てるんだろうか。今日はたしか総武の入学式で朝起きて…ああ思い出したわ。車道に飛び出して、車にはねられて、今は病院か…

ちよつと言ってみたかった。きつと俺の近くには誰もいない。

「知らない天井だ…」

「お前、それ言いたいだけだろ。バカハチ」

誰もいないと思ってつい言ってしまった…まさか春仁がいるとは。くつそ恥ずかしい。黒い歴史がまた1ページ。破いて捨てたい。こんちくしょう。

「——春仁。…スマン」

「何も言うな。どうせ体が勝手に動いたんだろ？全治3週間だつてよ」

「犬は——どうなった？」

「無傷だ。よかったな、バカハチ。身体張った甲斐あつたぞ、ああそれと、お前のクラスはF組で俺はE組だつてよ」

「バカつて言う奴がバカなんだぞ？知ってるかアホハル」

春仁がここにいるって事は、こいつは入学式サボつたのだろうか…心配かけたのは悪いと思うが、俺はぼっちでも大丈夫だから、そんなにやわじやないから。

「高校でも俺がぼっちなのは変わらないみたいだ」

「そうだな。二人ぼっちだな」

「一人だよ！勝手に増やすんじゃないよ」

「いいじゃねえか二人ぼっちでも。それになコレはどうにもならんぞ？お前がいくらぼっちだつて言い張つても、それを決めるのは他人だからな」

ぐうつ…確かに正論だ。言い返せない。

「いや、お前は俺なんかと違って上手くやれるだろ？俺はその、アレだ上手くやるのがイヤなんだよ」

「やりたくてやってると思ってるならそれは違う、やるしかなかった

からやってただけだ」

「…そうかよ。」

「おう、そうだ。あと八幡」

「なんだ？」

「…なんか」とか言うな。次言ったら本気でぶっ飛ばす。いいな？」

——やるしかなかった。か。そうだよな。こいつは乗り越えてんだよな。尊敬するわ。

そんな春仁のいう事はちゃんと聞こう。決して、怖いからとか殴られたくないからではない。でもまたちびるのはいやだ。

「わかった、わかったから。俺を睨むのをやめろ。マジ怖いから」

「俺が本気って事が伝わって何よりだ」

本気だったのかよ。この鬼いちゃん怖い。

「…小町、ハルにいが怖いよ…助けて」

「ねえはちまんおにいちゃん♪兄いはやめろって言ったよね♪」

春仁さん。声のトーンおかしくないですか？

「怖い怖い！すまん春仁！キモいからやめてくれ！」

「そうだねはちまんおにいちゃん♪」

うっわー。素晴らしい笑顔だけどマジ怖いコレ。《キユポツ》って春

仁さん？

それなに？サインペン？それ臭いからしまってくださいないか？

《キユツキユツ》

「つちよっ！待て待て待て！何書いてんだよ！」

「ふふふ、俺から八幡へ送る賛辞だ、ありがたく受け取りたまえ！」

俺の左足に巻かれたギプスに「たいへんよくできました」とでかどかど書きやがった。

春仁からの賛辞の言葉。これは惨事の間違いではないだろうか？

だったら春仁は鬼いちゃん。これもやはり違ってない。違うか？いや正しい。

「なんかほしいもんあったら言えよ？持ってくるから」

「じゃあ、読書したいから適当に持ってきてくれ」

「オーライ、またな」

これがお見舞いイベントってやつか。ラノベで見た事あるけど鼻で笑ってたわ。

いや…でも…アレだな。割と良いもんだな。



入院から3週間が経過した。

「歩けるか？」

「つく。歩けない事はないが、まだちよつとキツいな」

「もう少し入院しとくか？焦っても仕方ないし」

「それは願ったりなんだが…その、費用とかが気になってな」

「安心しろ、全額雪ノ下建設持ちになった」

雪ノ下建設との話し合いに際して、俺は事実と客観的な証言をしている。

これにより雪ノ下建設から、せめて費用くらいはと温情を頂いた。向こうも被害者といえれば被害者なのにな。

関係者と言え、サブレの飼い主である由比ヶ浜結衣は参加していない。

彼女とその家族が参加を拒否したのではなく、そもそも無関係なので呼んでいないだけだった。八幡が入院した要因ではあるけど八幡は自分の意志でやったんだし。いいだろう。

「マジか…何やったんだ？」

「何もしてねえよ。一筆書いただけだ」

内容はちよつと言えないけど。

「一筆ってお前…ああそういえばこの前、小町が来た時に『お菓子の人』来たよーって言ってたな、意味わからんかったんだが、春仁は知ってるか？」

「きつと飼い主だな、俺もあまり気にしてない」

「そうだな、俺も気にしてない。礼とか謝罪とか正直困る」

「礼も謝罪も受け止めてやれ、本人が楽になりたいだけだとしても。だ」

八幡は俯きながら答える。

「…善処する」

「んじゃ、今日は帰るわ」

「おう、いつもありがとな」

由比ヶ浜結衣か、少なくとも自宅まで足を運んだペットの飼い主。謝罪か感謝かあるいは両方を伝えに来たのだろう。家の住所どうやって知ったんだろうか？同じ学校だし教師や親伝いで教えてもらったんだろう。

帰ってから小町にどんな人が聞いてみるか。小町が何も言っていないって事はそういう事なんだろうが…。

「ただいま小町」

「おかえり、ハル兄い。ご飯もうすぐできるよー」

「あいよ、ありがとな。」

「小町、前に来た『お菓子の人』の事なんだが、どんな人だった？」

「あぁ、あの女の人ね。たしか総武高校の制服着てたよ。なんかいきなりすみませんでした！って言って帰っちゃったし、小町はあーゆー人あんまり好きじゃないや」

「なるほどな、面会謝絶状態だから自宅まで来たと」

「ふえ？そうなの？小町そんなの聞いてないよ？」

「ああ、言っていないぞ」

unnecessary 情報の拡散をして良かった試しがない、せつかくの雪ノ下家のご厚意に水を差すのもよろしくない。俺と真里さんはそう判断して、情報公開を必要最小限に留めた。

「そっかぁ、まあいいや。お兄ちゃんもそろそろ退院できるんでしょ？」

小町がブラザーコンプレックスな事はうすうす感づいているが、八幡がいない今がチャンス。俺はポケットのスマホで録音を開始する。「あの調子なら後一週間ってとこじゃないか？よかったな小町。八幡が戻ってくるぞ」

「っべー！別にお兄ちゃんを待ってなんかないんだから！」

「ツンデレ小町いただきました」

胸ポケットに忍ばせたスマホを取り出し画面をタップ。

そこからはシスコンの八幡が聞けば昇天してしまうのではないかと思われる音声が出た。

『——つべ！別にお兄ちゃんを待つてなんかないんだから！』

「きやあああああ！ ハルにい！ 消して！お願い！お願いいいい！」

小町よ、そんな声出すのか…八幡の事好きすぎだろ…。

「小町、八幡が好きなら『好き』って言った方がいいぞ？」

「ああうう、なんでわかるのお？」

「小町、俺の事好きか？」

「はるにい？うん、好きだよ」

「じゃあ小町、八幡の事好きか？」

「おにいちゃん？…ああうう…好き…だよ」

耳まで真っ赤にして俯く小町。本気な相手に軽々しく『好き』と可言える歳ではない。春仁もそこは解っている。だからこそイタズラは楽しい様だ。

小町も鬼いちゃんに隙を見せてしまった事を後悔する。

『おにいちゃん？…ああうう…好き…だよ』

「——アハ、アハハハハハ——はるにい。それ消すよねエ？ケスヨネ？消して？早くハヤクケシテ？」

「冗談だよ、ほれ。消したから。な？ちゃんと確認しろ」

小町はツンデレだけでなくヤンデレの素養もありそうだな。からかうのはほどほどにしよう。

「ごちそうさまでした。」

小町はデータ消去してもらえた事で気が抜け、ソファーにふにやりとしている。

「小町、寝るなら部屋に行けよ？」

「ん〜」

『——つべ！別に！——』

小町がガバツ！と反応したのを横目に自室に戻る。

この場に八幡がいたとしたらと思うと悪い顔になってしまう。小町サイドで俺と戦うのか？俺サイドで小町を見て悶えるのか？ある

いは第三勢力としてやりとりを眺めるのか？どうなるかはやってみないと解らない。

しかしどの選択肢を選んだとしても、最終的に割りを食うのは八幡自身だろう。



翌日。お菓子の人に声を掛けた。

「由比ヶ浜結衣さん。であつてるかな？」

「あ、はい、あたしです」

「んんん？この反応はなんだ？あの時の事忘れたのか？それならちよつとひどくね？」

「あの、何の用…ですか？」

様子がおかしい、何かに怯えている様に見える。もしかしたら…

「サブレ。大丈夫でよかったね」

「あ…ああく！あの時の男の人！」

「やっぱり忘れてたか…」

「アハハ…ごめんなさいい…」

あー…ちよつとわかつたかもな。俺に告白されるって思っちゃった感じかね？

男に声かけられるイコール告白という結論を出すのはいささか早合点が過ぎるがムリもない。

少し茶が入った手入れが行き届いた黒髪、くりつとした瞳。控え目に言つてめつちや可愛い。制服のブレザーの上からでもはつきりわかる女性らしいプロポーション。視線を制御するのに苦労する。

「まあ、それはいいとして」

「用件つて、ヒツキーの事？」

「…えっ——と。ヒツキーつて誰？」

「あわわわわ！ごめんなさい！比企谷だからヒツキーつて呼びたいな…つて」

「ああ…なるほど。うん、わかつた」

会ってもないのにあだ名呼びとは…男に近づかれるのは嫌だけど
近づくのはいいのか。

やはり女心はわからん。でも本人も言いたい事あるだろうし連れ
てってやろう。

「由比ヶ浜さん。八幡のお見舞いに行かないか？」

「——えっ？」

高校一年生編

第3話

突然、柊君に声をかけられてびっくりした。

まさかあの時の男子だったなんて——よっぽどサブレの事で頭いっぱいだったんだ。あたし。

ごねんなさい、柊君。ちゃんと覚えなきゃね。

ヒ：ひき：比企谷君の住所はママが教えてくれたけど、お菓子持っていいたらなんか頭まっしろになって——失敗しちゃった。病院ではちゃんと言おう。うん。

目の前に病院が見えて来た。ね、サブレ。やっと言えるよ？がんばれあたし。

「よお八幡。調子はどうだ？」

「よお春仁。まあまあだ。歩くのは問題ないが、走ったり飛んだりはまだムリだな」

男の子の声：比企谷君だよ。あう：緊張してきちやったよ。顔があつつい。

「八幡。今日は客を連れて来た」

「あ：あのう：：こんにちは」

「……………誰？」

「え、えーと。あ：あたしは、由比ヶ浜結衣です。えつと：比企谷八幡くん、サブレを助けてくれて本当にありがとう」

これじゃだめだ。きつと伝わらない。言わなきゃあたしの気持ち。

「あー：その：：なんだ。アレだ。別にあんたの為に助けた訳じゃないから……」

「ううん、ありがとう。比企谷くんが助けてくれなかったらきつとサブレ死んじゃってた……」

「……………そういうのは辞めろ。適当に謝られるくらいなら——」

「サブレはね。あたしのさ、家族なんだ。比企谷君はあたしの家族を守ってくれたんだよ」

「……………」

だめだ。涙出ちゃう。

「だから、ありがとう。もちろんさ。謝りたい気持ちもある…の。でもさ。あり…がどうの気持ち…ちの方が大…きいの。」

ちゃんと伝わってるかな？あたしの『ありがとう』と『ごめんなさい』

比企谷君は…優しいよね。あたしがサブレ離しちゃったから。サブレを助けたから入院する大怪我しちゃってるのにさ。

「なあ由比ヶ浜、お前は優しいよな。でもな、俺は優しい奴は嫌いなんだ。」

「……………」

「優しいから期待する、勝手に期待して裏切られて。何度もそれ繰り返して…」

「…うん。」

「何度も何度も、自分を戒めて来たんだ…期待してもどうせ裏切られるんだって。」

「……………」

「お前の言葉も上っ面だけなんじゃないかって思ってしまったんだ。」

「……………」

「…でもな。」

「俺は…お前を信じる…お前で最後にする。」

「…ぐすつ…ひぐつ…」

「由比ヶ浜。俺に本物の感謝をくれてありがとう。」

あたしは泣いた。顔もぐっちゃぐっちゃで、大きい声で。それだけ嬉しかった。

比企谷君にあたしの『ありがとう』は届いたって言ってくれた。

あたしが泣いてる間、比企谷君はあたしを見守っててくれた。これだめだ。

もつと比企谷君の事教えてほしい。ううん。あたしの事知ってほしい。

信じるって言ったからね！

「由比ヶ浜、俺と友達になつてくれないか？」

「ふえ!? いいの!？」

「ああ、お前の事、知りたくなつた。だから友達になつて欲しい…ダメか？」

「…嬉しい。じゃあ比企谷君はヒツキー！」

「いやなんでだよ、あと俺を引きこもりみたく言うな」

「ええ！ちがうよお。ひきがやだからヒツキーだよお！」

「お、おう。あー…俺も友達つての居た事ないんだ。アダ名とか初めてでな…」

あ、ヒツキー顔真つ赤だ。照れてるんだよね？そうだよね？えへへ

♪

あーでもあたしも顔あつついから、おあいこだね。うん。

「あたしもだよヒツキー！」

「マジか…わからんもんだな」

「えへへ♪ そうだね」

「そういえばさ。柊君は友達じゃないの？」

「春仁は俺のお兄ちゃんだぞ、従兄妹だけだな」

「家族だった！でもなんか落ち着いてるよね。柊君」

外で待つててくれたのか柊君がいいタイミングで入つて来た。あたしの声聞こえちゃつてたかなあ…うう…恥ずかしい…

「春仁、ありがとう」

「おうよ、よくがんばつたな、偉いぞ八幡」

「おおく。柊君つてホントにお兄ちゃんなんだね」

「春仁は鬼いちゃんだ」

「？　なんか違う感じするけど…」

「由比ヶ浜、世の中には知らない方が良い事もあるんだぞ？」

「そうだぞ、アレは知られると困るな」

「イヤ、別に困ら——」

「八幡が！」

「——おいアホアル、倒置法で爆弾設置すんじゃないやねえ！」

「あはは！　なんか息ぴったりだねっ！」

あたしもここから始めなきゃ！

もっとあたしを知ってほしい！よろしくね！ヒツキー！春仁君！



「やつはろー！ヒツキー！春仁君！」

「よう、由比ヶ浜。」

「こんにちは由比ヶ浜さん。」

結衣がむくと頬を膨らませて、何やら顔で抗議している。八幡は疑問符を頭上に浮かべ、俺は見て見ぬ振りをする。

あれからすぐに八幡はヒツキーと呼び、俺を春仁君と呼ぶようになった結衣。

彼女しかヒツキーと呼ばない。なんともいえない特別感があるのだろう、八幡もまんざらでもないみたいだ。

「むう〜！いい加減名前で呼んでよお〜！」

「だ、そうだ八幡呼んでやれよ」

「断る、恥ずかしすぎるだろ」

「八幡、良い事を教えてやろう」

「ん？」

「友達ってのは名前で呼び合うのが普通だ」
もちろんハツタリだけだな。

「ぐうつ…結…衣」

「えへへ♪なあに？ヒツキー？」

八幡はぼつちだと言い張っていたが、今は見る影もない。

結衣はどこからどう見ても美少女だ。二人でいちやこらしてる光景は実に微笑ましい。

「八幡、顔が赤いぞ？夕陽のせいかな？」

「春仁、その暴露は俺に効くからやめような？」

「ばくろ？ヒツキーお腹痛いの？」

「それ正露丸な！」

結衣が進学校である総武高校に合格出来たことが謎だと思いい八幡と顔を見合わせる。

八幡が退院して2カ月が経ち総武高校も夏休みに突入した。この2か月間の間で様々な変化があった。

普通二輪免許を取得しビッグスクーターのマグザムを購入。

それを足にして行動範囲を広げ、アルバイトを始めた。

叔母の真里さんからお金を貰うのは気が引ける。いや「いいから」って言うからもうけど。

バイトも自分の遊行費位は自分で。と考えた結果だ。

クラブ勧誘もバイトガで断ってる。あいつらしつこいんだよな。

稼いだ給料で懐を潤した俺は、結衣と小町の三人で大型商業施設らぽーとに買い物に来ていた。小町からの印象が良くなかった結衣だが、比企谷宅に来た際に改めて感謝の気持ちを伝えた事で、本当の姉妹ではないかというほど良い関係になっている。

今日は、8月8日。八幡の誕生日だ。

それをサプライズパーティーで祝う運びとなったのだ。

「俺はオツケーだ。結衣は決まったか？」

「あ、ハル君。決まったよ。これにした！えへへ♪」

インナーに黒のタンクトップ、肩が出る淡いピンク色のトップスは可愛らしくも色香があふれている。ミニスカートに見える白いキュロットから見える健康な太腿がまぶしい。周囲の男性からの視線を集める結衣が楽しそうにはにかむ。

そういえば俺をハルと呼ぶのは二人目だな。懐かしい。

「小町は？」

「小町は気持ちを贈りたいから、おいしいごはんを作るよ！はるにいと一緒！」

「一緒って…まあいいか。小町が欲しいものはないのか？」

小町がそうしたのだからそうするのが良いのだろう。小町が欲しいという夏物衣料を買い帰りにスーパーに寄る。

俺は小学生の頃から料理をしてきた。いや、やらなければ生きてい

けなかった。

そういう経緯があつたとしても、誰かの役に立つなら吝かではない。

パーティー開始まであと数時間。ちよつとわくわくしてきた。

「ただいま、ママ。」

「あら、ハル君。いらつしやい。今日は泊つていくの?」

「ちよつ!ママ!?違うから!なんでそうなるの!?!」

「アハハ:今晚八幡の誕生日パーティーをするので夜間外出の許可を貰いに来ただけです。」

「ヒツキー君のね。いいわよ。結衣、楽しんでらつしやい。」

「ありがとう!ママ!」

結衣宅に同行し。結衣ママに挨拶をする。

結衣ママに何度か会つており、度々「あらあらハル君。娘をよろしくね♪」とからかつてくる。結衣ママはやっぱり少し苦手だ。

最初姉かと思つたし:なんだよあの美貌:

ともあれ、夜間の外出許可を貰えたので良しとしよう。

顔を合わせるたびに結衣が「ママ!?!恥ずかしいからやめてえ!」と茹で上がるのでフォローが大変だ。面白いからいいけど:いやダメだろ。

そのままパーティー会場の比企谷宅に到着。

結衣には小町の部屋に時間まで隠れてもらう。そわそわしてる結衣が子犬に見えてしまうのはサブレと生活しているからだろうか。

「おーい、八幡。」

キツチンから自室にいる八幡を呼ぶ。自堕落な恰好で、のそのそと「ん?」と返事をしながら出て来た。

「どうした春仁?俺は寝るのに忙しいんだが。」

「そうか、忙しいとこ悪いが、醤油買ってくるの忘れたからちよつとお使い行つてくれないか?」

「やだよ。忙しいから。」

「そうか、仕方ないな。今日の夕飯はトマトでいいか?」

「ぐうう!胃袋を人質に取るとは卑怯だぞ!まあ行くけど:」

胃袋が人質というのはおかしくないだろうか。そんな事はさておき。

八幡はおそらく感づいている、やけに観察力があるからな。

感動つてのはな、期待を上回ってこそ感じるモノなんだ。お前の『期待して裏切られてその結果自分を戒めた』つてのはお前が信じようとした結果なんだよな？

俺は八幡にそれを知って欲しい。

「結衣そろそろ来てくれ。」

「はぁーい。」

「小町、料理はどんなだ？」

「もういけるよ！ハルにいい。」

サプライズの準備に取り掛かる3人は青春真つただ中。結衣は八幡を祝いたい。それだけの為にここにいる。

小町は今まで一人で祝ってきたがブラコンにとっては反応がイマイチだったようで、今回の催しに気合十分の様子。

俺はいつも通りウヒヒと黒く笑い八幡の帰りを待つ。キモいか？キモいな。

用意した料理はカレーライス。前日の夜から水で鶏ガラの出汁を取り、手間暇かけて仕込んだ黄金色のスープを元に作成した本気のカレー。

その工程は全部で丸2日間に及ぶ。味見した結衣が「これがカレーの味なの!？」と驚いていた。これが小町の贈り物になる。俺は手伝っただけだ。8割位。

八幡のがつつく姿を想像しながら作った小町はエツヘンと胸を張っている。

全ての準備が完了した。電気を消し、あとは主賓の帰りを待つのみである。

ドキドキしてきた。外から足音が聞こえてドアノブが《ガチャツ》つと音を出す

「ただい——」

「誕生日おめでとおおー！！」

「…はい？…え？…つちよ引つ張んな！」

鳩が豆鉄砲くらった顔の八幡の腕を結衣が《がしっ》とつかみりビングへ連行する。

小町が流れる様にイスを引いて着席を促す。

最後にロウソクが立てられたケーキを運んできて八幡の前にそつと置く。

お誕生日会の始まり始まり。

八幡がロウソクの火を吹き消し。喝采が巻き起こる。八幡の思考が追い付いていないのもムリはない。

八幡は結衣がいるとは思ってなかった。サプライズで来るとは思っただけだった。自分の為に用意してくれた事実がたまたまなく嬉しかった様で顔めつちや赤い。

なんかもう！八幡かわいい！瞳うるうるしてるし女子かよ。

「お前ら…なんつーか。その…サンキューな。」

「ほら、八幡。16歳おめでどう。」

「ヒツキー！おめでどう！」

「お兄ちゃんおめでどう！よかったね！」

それぞれが祝辞を口にして贈り物を差し出す。小町の贈り物は「本気のカレー」なので最後だ。

「ありがとな…開けていいか？」

断られるとは思ってないがちゃんと聞いて来る自慢の弟。

「——っ！これは…マジか…」

俺の贈り物は懐中時計だ。

プレゼントに時計を選ぶ意味は様々だが、共通しているのは《同じ時を刻んでいきたい》という事だ。

異性へ贈る時は注意が必要だろう。家族へ贈る時には《親愛》も含まれる事もあり、春仁から八幡への想いが感じれる品と言える。

「ありがとう春仁。次は由比ヶ浜だな…開けるぞ？」

「うん…」

「これは…ブックカバーか？」

結衣の贈り物は良く本を読んでいる八幡の事を考えて選ばれた品だった。

色は深く、黒に近い青で素材には本革が使われている。使えば使うほど味が出てくる品だ。これには八幡も「実は買おうか迷ってたんだ」と笑顔を見せる。その笑顔を見れて結衣もご満悦の様だ。

小町の料理を4人で食べてパーティーは終了と思われたのだが、食事中に俺と結衣は異様な光景を目にする。

「……………まったく……………」

「ねえハル君…大丈夫かなあ？アハハ…」

普通誕生日会という物はある程度の談笑があるのが常であり。ワイワイガヤガヤといった状況になるだろう。

残念ながらそうならなかった。

カレーの味に魅せられ一心不乱にスプーンを口に運ぶ比企谷兄妹。発する言葉は「おかわり！」のみ。

八幡も無言でカレーにがつついていている。最初は小町もその様をうれしそうに見ていたが。一口食べるともう止まらない。比企谷兄妹は暴食の悪魔であるベルゼブブに支配された様だ。

止めようとしたんだが「ご飯が美味しい事は良い事だよ！」という結衣の意見に賛同して。胃薬を用意するにとどめた。

「ぐ…ぐるじい！」

「はあ…お前らなあ…加減ってモンを知らんのか？」

「アハハ…でもすごく美味しかったね。あのカレーなら毎日食べれそう。」

「そりゃ良かった。さて後片付けはこっちでやつとくから結衣はそろそろ帰ろうか。送ってくから。」

「うん。ヒツキー！ちゃんと薬のむんだよ？ またね！」

「…ああ、気をつけてな つぐ…ぐるぢい！」

結衣を家まで送り届け、帰路につく。帰って後片付けが終わったら本当のプレゼントを八幡にやろうと黒い笑みを浮かべる。

「落ち着いたか？」

「ああ、なんとかな。」

「では八幡よお兄ちゃんからのもう一つの贈り物だ。」

「え？まだあんのか！」

取り出しまするはスマートフォン、イヤフォンを接続し、レコーダーアプリを起動。

録音された音声を再生させる。そこから聞こえて来たのはシスコンが愛してやまないブラコンの声だった。

《——っべー！別にお兄ちゃんを待ってなんかないんだから！——》

「——っ！ぐっ！——はあっ！」

つうこんのいちげき！

はちまん はしんでしまった！

おお！ はちまん よしんでしまうとなさけない！

「こりやヤバいな…グツジョブだ春仁！。これであと10年は戦えるぞ！」

「くつくくく…ああそうだな。これは内緒にしてくれると助かる。バレたら危険だからな。」

「ああ、ありがとな。」

「よし、もう寝ろ。俺は小町の様子見てくるから。つつか、あんだけ食ったらなにもできんだろ？」

「春仁…」

「どうした？」

「…ありがとう。正直感動したわ。祝ってもらえる事ってこんなに嬉しいもんだったんだな…」

「どういたしまして。感動できたか？泣くなら声は出すんじゃないぞ」

「うっせ…おやすみ春仁。」

「おやすみ。八幡。」

八幡の部屋から出てリビングに行く和小町はソファでぐっただりして、苦しい満腹感に「うゝ」とうなっていた。

満腹感で苦しいとはこれいかに？

美味しそうに食べてくれたから嬉しいけどさ、今度からはちゃんと加減しような？

「はるにいい。」

「ん？どうした小町？部屋までは運んでやるぞ？」

「ううん、お兄ちゃんどうだったかなーって…」

「大丈夫だ。今頃感極まって泣いてんじゃないのか？声ちよつと震えてたし」

「…そっか。それなら小町もうれしい！またこんな風に集まれるかな？お兄ちゃんが嬉しいなら小町もうれしいし…」

「そうだな。結衣にも聞いておこう。」

集まれる機会か。誰かの誕生日会くらいしかない気がするけど、機会はつくればいくらでもあるだろうし。友達なんだから『会いたい』って動機だけでいいだろう。

八幡の声がかすかに聞こえる中、俺はベッドで意識を手放した。

第4話

『あの！貴方の事が好きです！私と付き合ってください！』

『ごめん。君の事知らないからさ。君とは付き合えない』

『…つでも！これから知って行けばいいと思いませんか!?!』

『ごめんなさい。俺を好きになっってくれたくれた事は嬉しい。でも君とは付き合えない』

屋上での青春の1ページ。少女が少年に想いを告げる。しかし、それは少年には届かない。少女の勇気は称賛に値するが、それに応える義務は少年にはない。せめて心を折る事が少年の優しきなのだ。

「はあ〜…」

「ハル君どうしたの？」

時刻は昼休み、教室に戻って来れた俺は弁当を広げる。

「いやあ、なんつーか心が痛い」

「あー…アハハ…また “アレ” 来たんだね」

自分で言うのもアレだが俺はイケメンらしい。

成績は学年次席、運動神経も良いとくれば思春期の女子が気になるわけがなかったようだ。2日に1回は屋上に足を運んでいる。

言い寄られては突き放し。呼び出されては一刀の元に切り伏せる。

フラれた方は気持ちを切り替えて新しい恋を始めれる。

しかし、断る方はそうもいかない。

適当に言えば、悪い噂を流される。やんわり言えば、相手を期待させてしまい、自身に危害が及ぶ可能性もある。

彼女を作ってしまったえば良いのだが…

「はあ〜…マジめんどくせえ…」

「もうすぐ文化祭だからね〜」

「ああ、そういえばそうか。この時期に告りに来るのはそれが目的か」
学校行事で《私の彼氏》を見せびらかしたいのだろう。少女達は周りから羨望の眼差しを向けられ、本人は主演女優気分でスポットライトを浴びた気分になれるのだ。

しかし、少女たちが主演の “恋する乙女の物語” には本人しか登場

しない。

そして、恋する自分自身に焦がれて、その身もろとも焼き尽くす悲劇になるだろう。

「まあ、俺を装飾品としか思っていないってのはなんとなく解ってた」

「ハル君も大変だね」

「いやいや、結衣にだけは言われたくないな」

結衣も例にもれず告白ラッシュの被害に遭っていた。その手段も様々で――

『由比ヶ浜結衣さん。俺と付き合ってください』

『えつと…誰?』

直球だったり――

『結衣ちゃん。君をもっと知り『名前と呼ばないで』…ごめん』

変化球だったり――

『由比ヶ浜さん、俺と友達になってくれないかな?』

『ん…なんで?』

からめ手まであった。

「アハハハ…はあく――あ!ため息うつっちゃった!ハル君のせいで幸せが逃げる!」

「断じて俺のせいではないっ!」

「うつす、春仁。お、由比ヶ浜もいたのか」

「やつはろーヒッキー!」

「…何その挨拶?流行ってんの?アホっぽいからやめてくんない?

っていか春仁キモいぞ」

「やつはろー。はちまんおにいちゃん」

「…えっ――ハル君?」

「ほらみる春仁。キモくて由比ヶ浜が引いてるぞ?」

「そんな事よりメシ食うぞ。八幡」

「えっ?投げっぱなし?ちよつとヒドクね?」

E組に八幡が来て三人でお昼を食べる。三人にとってはいつもの光景で周りの事は一切気にしていない。最初の頃は気にして箸がすすまなかつたが「気にしたら負け」と口にしてから逆に開き直り。気

にしなくなった。



午後の授業はホームルームに変更になり、文化祭実行委員を選出する運びとなった。

俺と結衣の二人は、最初に推薦されるという危機的状況に陥るが「バイトあるから無理」、「アハハ：よくわかんないからちよつと…」でなんとか乗り切った。正直危なかった。

担任が実行委員のやりがいたとか、精神論的な何かでクラスの生徒を説得した所、立候補者が出たのでその男女二人に任せることになった。

「なんかなかったな。」

「ホントにね、知らない男子と一緒に何かやるとかちよつとムリ…」

クラスの出展について討議が始まった。食品を扱う。お化け屋敷。縁日にあるようなゲーム。

様々な案が出たがここで俺に白羽の矢が突き立てられる。

曰く『準備にもバイトで出れないのだから当日はメインでやってほしい』

当たり前だが俺も万能ではない、できる事は限られる。

それにお化け屋敷などの退屈な出展だと“っついで”風邪を引いて休むだろう。俺は嘘はつかない主義だ。

「皆の言う事も一理ある、俺が当日に交代なしでシエフをやるから、食品関連で話を進めてくれ」

「二」「終君料理できるの!?!」「」

クラスの出展は喫茶店に決まり。メニュー作成を任せられ、考える事になった。

「喫茶店か、メニューなにしようかな」

「あのカレーは難しい?あたし、あれ食べたいなあ」

「喫茶店でカレーかよ。まあ祭ってつくし、いいか」

「やたっ♪ あれすっごい美味しかったからね」

「ドリンクメニューも紅茶とコーヒー系が適当であればいいだろう紅茶だけで3種類位はいけるしな、葉っぱ変えたらその倍になる」

「わああ！なんかたのしそうだね！」



「なあ、春仁」

「ん？」

「お前らの近くにいると周りの目が痛いんだが、これはどうにもならん事なのか？」

「どうした？何かあったのか？」

八幡の顔がなんとなく暗い。本人は気付いてるのかわからんが、視線がどことなく遠い。

「春仁や由比ヶ浜と一緒にいると気にならないんだが、一人になるとどうもな。」

「なるほど、アレか？なんでオマエなんかがつてやつか？」

「あー：そうだな、そんな感じの視線を感じる。んでな。俺が陰口叩かれたり、蔑ろにされるのはいいんだ。慣れてるしな。でも俺と一緒にいて：春仁と由比ヶ浜が悪く言われるのはたまらなく嫌なんだ。でもお前らとは同じトコに居たいって思う。どうすりやいいのちよつと解らなくてな」

「そうか、八幡はそう考えるんだな。お前はやつぱすげえよな」

「お前らとの関係は壊したくないからな、アレだ壊れるのと壊すのは違うだろう？」

「ふむ、じゃあ悩める弟の八幡にアドバイスをやろう」

「ははっ。なんだそれ。よし、拝聴しよう」

八幡にはまだ理解できないだろうな。俺も母さんに言われた時は意味わからなかったが、今ではちゃんと理解できてる。八幡もいつか解る時が来るだろう。

「お前の世界の中心はどこで回ってる？」

「——スマン意味がわからん」

「解説してやろう。世界は回ってるよな？社会や経済。時間だつてそうだ」

「そうだな。当たり前的事だ」

「じゃあその世界は誰の世界だ？」

「——っ！誰…の…？」

「そうだ八幡。俺の世界は俺が自分を中心にして回してるんだ。

この意味が解るか？」

「俺の世界…中心？…俺が？」

自分の世界を、他人を中心にして回してはならない。それは自己犠牲などではなく。生きる事を諦めるのと同義だ。そんな人は死んでいないが生きてもない。

「今は理解できなくてもいい。見下してる訳じゃないからな？俺はそうしないときつと死んでいたから…——だから八幡。お前の世界は、お前を中心にして、お前が回すんだ」

「…わかった。すぐにはムリだが…やってみる」

辛くても苦しくてもそれは自分の物で、他にぶつけていいものではない。

それをぶつけても、ぶつけられた相手からは何も帰ってこない。

俺が思うあるべき姿はそれを受け入れ、背負う事だ。そうでなければカッコ悪い悲劇のヒーロー気取りにしかならない。正直ダサイ。

それと同時に、他人から贈られた、喜びや感謝なども拒否してはならない。

相手の気持ちが無下にするのはただの攻撃だ。

そんなのいらなと思うなら、受け取った後に捨てればいい。受け取ったものを持ち続ける義務などない。

「お前の事が羨ましいだけの奴なんざ気にするな」

「俺が羨ましい？…ああそういう事か」

「そいつらは俺や結衣と一緒に居れる八幡が羨ましいんだろ？」

「そうか、俺はその視線を勘違いしてたのか、自意識過剰もここまできるとヤバいな」

「自意識過剰の自覚あったのか！」

「上げて落とすのやめてくれそれは俺に効く」

「んじや、帰ろうぜ」と言い「おう」と返す八幡。どこからみても兄弟に見えない二人が並んで帰路につく。

翌日より、出展用のメニュー作成と経費の算出に頭を抱えるのであった。

第5話

「メニュー…カレー以外で…うーん」

「なんだ？春仁んトコは喫茶店でもやんのか？」

「そうだった。んで俺がシェフで。メニュー考えてる」

「春仁の作るメシなら行かないとな。使命感が沸くまでである」

メニュー作成が思ったより難航している。

校舎の中で調理をする事もあり火器の仕様は認められていない。

つまり、ガスコンロ等の火災の原因になりそうな調理器具は使えない。
い。

作り置きができる品であればなんとかできそうなのだが、正直カ
レーの仕込みで手一杯だ。

「電子レンジでパスタが茹でれるのは知ってるんだが…いかんせんそ
の後がなあ」

「パスタってアルデンテにしてソースと和えるだけじゃねえの？」

「パスタか…種類を絞ればいけるかもな…ソース系、ソース系…」

八幡の「俺はあのカレー喰えりや、あとはなんでもいいわ。むしろ

〃カレー堂〃 とかに変えちまえよ」の一言によりE組の喫茶店はカ
レー堂になった。クラスからの反発もあったが、結衣が「ハル君のカ
レーはねえ、すっごいおいしいんだよお♪」と宣伝した事もあり問題
なかった。密かに手料理食べてます宣言かました結衣が「あわわわ
わ」と子犬化するのとはまた別のお話。

「カレーに変更したとしてあと数種類はほしいな」

「うーん。果物とかどう？桃とか！」

「フルーツ盛り合わせとカットフルーツもいいな。桃は結衣が食べた
いだけだろ？」

「えへへ、ばれてた」

「まあいいだろ。白桃も追加でっ」と

「ライスがあるんだからパンもいいかもな」

「ナン。ね。あれは作るのめんどくさいからフランスパンのトースト
で代用しよう」

E組の出展にF組の八幡が噛んでるのはこの際無視するとして、カレーと言ってもそれだけだと味気ないので工夫を凝らす事になった。出て来た案を精査して材料経費を計算する。桃の単価が以外と高価だったのは結衣には言わない方がいいだろう。

「とりあえずこれで提出してみるか」

メニューにはメインに「本気のカレー」サイドに各種カットフルーツとフルーツ盛り合わせ。ドリンクにダージリン、アッサム、セイロンの紅茶三種、珈琲は一種となる。

カレーはライスとパンが選べる様になっており、パンを選んだ場合は自家製ガーリックバターを添える。

紅茶はストレート、ミルク、レモン、アップル、ピーチのバリエーションを用意した。

コーヒーにはガムシロップとミルクの他に練乳を用意。

練乳の意図はあえて言及しないでおこう。八幡をジト目で睨んでおく事にした。

「ハル君のカレー♪ハル君のカレー♪」

「アレがまた食えるのか…」

「お前ら…」



「こりややべえかもな」

「アハハ…予想以上だね…」

文化祭当日を迎えた1年E組「カレー堂」は予想を大幅に超えた集客を見せていた。

用意したカレーは約1000食分。1日目は内部公開のみ。オーブニングセレモニーから3時間経過した現在、既に200食が売れている。

「みんなカレー好きすぎだろ」

「春仁…美味しい料理作ってるって自覚あるか？」

「えっ?こんなもんじゃないの?」

「自覚ないんだ!？」

「八幡? お前食いすぎな? で。結衣? お前も、食ってばつかいなくてホール手伝え」

「俺は悪くない。目の前にカレーがある。だから食う。QED」
「はあ…まったく…」

“本気のカレー”は先日の八幡誕生サプライズパーティーとほぼ同じ工程で用意した。

これが生徒にかなり好評だったのだ。一口目は少し甘く感じるがじんわりと辛さと旨味が広がっていく。飲み込んだ後に口内に残るヒリつく辛さが二口目以降の味を変化させる違った味が広がり続けいつのまにか皿が白くなる。

今日は夕飯がカレーの宅が多そうだ。

明日には総武高校の受験生とその家族をはじめ、地域の有力者もやってくる。そちらがメインなのは間違いない。

初日は無理矢理300食で閉店させて、明日の為に戦力を温存させるのであった。

——時は遡り、オープニングセレモニー直後。

カレー堂の外では女の戦いが勃発していた。春仁を文化祭デートに誘いたい女子が、我よ我よと集まって来たのだ。彼女らは春仁にお近づきになりたいと考えるが、見渡せば敵しかいない。『敵は排除すればいい』そう考えるのは間違っていないが、相手を貶めて優位に立つとするのはいかがなものだろうか。そして彼女らは? こんな醜い私を見られたらきつと彼に嫌われる? と考え、反省する。

そして彼女らは話し合った。このままでは誰も目的を達成できない。

ここは協力するべきではないか? と。

しかし彼女らの目的は達成できなかった。

言うまでもなく、春仁がカレー堂から出てこないからである。

「なら、誘い出してローテーションしようよ!」

彼女らの戦術的判断は同盟だった。敵同士だろうと同じ目的なのであれば協力しあう。それは美しく。正しい。

成功していれば友情に彩られた青春の1ページとなっただろう。成功していれば。

「ん？ 柊君なら文化祭中はずっとここでコックさんだよ？ クラスのみなどと約束したからねー」

彼女らの目が点になりカラスの鳴き声が脳に響く。

彼女らは春仁がカレー堂から出れない事を知らなかった。

おまけに強敵の結衣も基本一緒にいる。

緻密な計画も前提を間違えれば無意味。

戦略的敗北はこの事だろう。

ちなみに、春仁はこの戦いの事を生涯知る事はなく、この件で彼女らは意気投合し、友達になった。



「ああ……くっつそ忙しかった。ちよつと来過ぎだろ」

「さすが春仁だ。おつかれさん」

「すつご〜い！ すごいすごい！」

ぐっだりと机に突っ伏した春仁。彼のシェフとしての仕事は先ほど完遂された。

カレーは完売。フルーツもクラスメイトの賄いでほぼ消費。

1年E組の出展は文句なしの大成功だった。俺？ F組は俺の存在を認知してないみたいだから無視してる。カレー喰いたいし。俺の文化祭はあのカレーだけでいい。いやマジで。

春仁はおよそ6時間ほど休憩なしで働いていた。途中クラスメイトが心配して声をかけるも「約束したから」と彼が真剣に取り組む姿に、クラスメイトは一致団結。自由行動だった生徒が各自の判断で現場に参加。カレー堂を盛り上げる。

俺はカレー喰ってた。

由比ヶ浜を筆頭としたホール担当の女子も、自然と増員されテーブルの回転率は素晴らしいものとなった。

俺は練乳入りコーヒー飲んだ。やはりMAXコーヒーは至高。

異論は勝手に言ってる。

さらに、男子が率先してゴミ捨てなどの裏方を引き受ける事により清潔感が保たれる。

その結果。かなり早い時間で完売御礼となったのだ。

楽しそうな笑顔の結衣と、真剣な春仁に見惚れた生徒は少なくないだろう。

由比ヶ浜がこっち見て笑うと心がざわざわする。由比ヶ浜を見るとなんだかもやもやする。この感覚は危険だ。つか危険じゃないよね？あー…ダメだ。

「柊君、お疲れ様。放課後に打ち上げやるんだけど来てくれないかな？」

「あー…行かないやマズいか？」

「え？ハル君も行かないの？」

「いやあ、流石に目立ち過ぎたから遠慮したいのが本心だな。すんげえ疲れたし…」

「ありや、まあ仕方ないよね。みんなにはうまいこと言っとくから、ゆっくり休んでね。それから…ありがとう柊君。文化祭すごく楽しかった。じゃあまたね！」

「おう、すまん」

「ハル君モテモテだあ」

「春仁だし、当然だろ」

「…俺は約束を果たしただけだ、嘘つきにはなりたくないからな」

彼らしい言い様に由比ヶ浜と顔を見合わせて？ニツ？と口角を上げた。

「ヒツキーキモい」って言われた。わかってるから、わざわざ言わんでいいから。

笑顔で言うのやめようね？《グサツ》とした後に《キユンツ》ってしちゃうだろうが。

また心がざわついてきたわ。心を落ち着かせなければ！このままでは由比ヶ浜に告白して振られて涙で枕を濡らすハメになってしまう

う。そんな結末はラノベの中だけでいい。

つつかそんな事はどうでもいい。いいよね？

さつき由比ヶ浜に集まる視線に違和感があった。

春仁は気付いてないだろうし相談してみようかな。

「さて、そろそろエンディングセレモニーだし、どつか静かな場所でゆっくりしようぜ」

「じゃあ屋上行くか、結衣はどうする？」

「んー。あたしは友達とセレモニー見てくる」

「そうか、じゃあまたな。結衣」

「バイバイヒツキー！ハル君！」

夕陽が眩しい。屋上で感じる風は、熱気のせいかあまり寒く感じない。

「春仁」

「どうした？八幡」

「あー…気づいてるかもしれんが…由比ヶ浜の事だ。…アイツ大丈夫か？」

「何かあったのか？」

「まだ。何も無い」

「まだ。ねえ」

「クラスが違うから俺もハッキリはわからん。でもな。なんか今日はムリしてるっつーか…えーと…上手く言えんな…」

「ふむ…俺はまだ何も見えてないな。でも、お前が言うんだ、ちよっと探ってみる」

「あー、そう。アレだ。由比ヶ浜じゃなくて、アイツの周りが関係してるかもしれない」

「わかった。ありがとな」

「…俺も力になりたいんだが、情報が少な過ぎてうかつに動けん。杞憂だったらそれでいいんだけどな。」

下校中の生徒が見える。春仁が「帰るか」と言うが「わり、本屋行く」と返し、学校を出た。本がほしいのは事実だが、ひとりで考えた事もあある。

俺は打ち上げに参加しなかったが、みんなにお礼を言いたかったの
で顔だけでも出す事にした。

クラスの皆に頭を下げて「ありがとう」を伝える。

文化祭は俺がカレーを作って成功した。それは事実だ。

でもクラスの団結あってこそ成功。これも事実だ。みんなが協
力してくれたからこそ成功なのだからちゃんと言おう。みんなが協
みんなは俺が約束を守ろうとする姿勢に共感して行動したんだと。
最初は俺にお近づきになりたいって女子も『そんなのどうでもよく
なっちゃった』ってケラケラしてた。

店を出る時に、皆は盛大な拍手で応えてくれた。なんとというか：
まあ…いいもんだな。

帰り道をとぼとぼ歩きつつ、彼は屋上で事を考えていた。

『結衣の周りの人間が、結衣に攻撃している』

「相模南…まさかな」

心当たりがあった。その少女は顔立ちは整っており、可愛らしいの
だが、性格に難がある。

彼女は自己顕示欲が強く、いきなり腕を組まれたり後ろから抱き着
かれたりと

俺も迷惑を被っている。正直ウザい。

要は、”柊君と仲のいい私”を見せつけたいのだ。

通常であれば一刀両断しているのだが、彼女は結衣の友人。

相模を拒絶したとして、そのしわ寄せが結衣に行くのは好ましくな
い。

「…どうしたもんかな」

後日、八幡が杞憂であってほしいと願った事は、実際に起こってし
まうのだった。

第6話

『柊君。部活一緒にやりませんか？いえ一緒にやるべきです！』

『強制されるのは嫌なのでお断りします。バイトもありますので』

『柊！オレ達と一緒に国立目指さないか？』

『国立目指すならこの高校受けてないです。スイマセン』

『柊君！君の走るフォームを参考にしたい！一緒に走らないか!?？』

『陸上選手のフォームでいいと思うのでお断りします』

「はあ…めんどくさい…」

文化祭の熱気が冷める間もなく、体育祭の期間に入り、先日それが終了した——のだが

3年が引退した運動系クラブの勧誘が激化した。なりふり構わず入部させようとする輩の勧誘に辟易する。

お断り文句の『バイトガ』が通じない相手もいるので、相手の揚げ足を取って論理的に反論しているが、つい独り言が漏れる。

ひと昔前なら殴って遠ざけてハイ終わりだったのが、いつのまにか我慢できてる様だ。成長が実感できるのは喜ばしいんだけど、こんな方法で実感できてもなあ。

「柊、聴いてるのか？」

「やっぱり何かしらの部活に入ってる方がいいのか？でもなあ…強制されるのはイヤだし、慣れ慣れしくされるのもイヤだし…俺にとって都合いい部活あれば最高なんだけどなあ…」

「おい柊！私の授業で上の空とは…いい度胸をしているな」

「——あつつー！」

6限目の科目である現代国語担当の平塚静教諭から鉄拳制裁を受ける。

アハハと周りが笑っているが、ふと目があった結衣は心配そうな顔をしていた。

「まったく…放課後、職員室にきたまえ」

「わ、わかりました…いたた」

30分後、職員室の平塚先生を訪ね、隣の応接室へ通された。「座り

たまえ」と促されガラステーブルを挟んで彼女の正面に座る。

「さて、柊。悩みがあるなら聴こうじゃないか」

「えっ?」

「なんだその間抜けな顔は?私がああ程度で呼び出す訳ないだろう。どうぞ部活動の件で悩んでいるのだろう?ならば他の生徒の目もあると考えてな。この場を用意したという事だ」

「ああ、はい。声に出てましたしね…」

自身の状況と要望を先生に話す。自分勝手も甚だしい要望だという事を彼は解っている。その手段が取れないのであれば。切れる手札はないに等しい。

「柊、お前の今の状況の確認なんだが、部活の勧誘が煩わしいから、バイトを優先させても構わない文化系の部活に入って勧誘を拒否する正当な理由が欲しい。と言った所か?」

「はい、そんなところです。あと下心を持って近づいて来る輩がいないとベターです」

「下心か。好意だとは思わんのかね?」

「先生、あれは好意なんかではないですよ?ああゆう輩は俺をアクセサリーの様に見えます」

平塚先生は真剣な顔で「続けたまえ」と言う。

「気持ち悪い事言ってるのは自覚あります。…アイツらが欲しいのは《柊春仁と仲のいい自分》だと俺は感じてます」

「何故そう感じるのだね?」

「…根拠はありません。でも慣れ慣れしくされるのは嫌です」

「どの様な形であれ必要とされる事は良い事だと思うが、君にとってはそうではないのか?」

「友人や家族なら必要とされて嬉しいですけど…友人じゃない人に…その、必要とされても困ります…」

「ふむ…なるほどな」

先生は顎に手を添え、目の前の少年を見る。

「柊。私が顧問の部活。奉仕部に入りましたまえ。君の要望は通してやろう」

——は？

「えっ…バイトでほばいませんけど？」

「かまわん。自主参加を許可する」

「ありがたいのですが…理由を伺ってもいいですか？」

先生の意図する事がわからない。手放しで喜んでいいものだろうか。

騙されるな春仁。大人は醜い何かウラがあるはずだ。

俺は少し身構える。

「君の過去は君のモノだ、しかし未来は君だけのモノではないよ」

「…先生。答えになってない気が…」

「これはヒントだ。答えは自分で考えたまえ」

先生に促され応接室を出た後、彼女に連れられ特別棟の4階に向かう。

この辺りは生徒も少く静かだ。パンプスがコツコツといい音を立てている。

？ガラツ？と扉をスライドさせる静に「先生…ノックを…」と苦言をこぼす少女が目に入った。

「君はいつも返事をしないではないか。雪ノ下」

「先生が返事を待たないからでしょう？それで、用件は？」

長く透明感のある黒髪。凜とした顔立ち。透き通った声。

どこか懐かしさを感じる。ふいに彼女と目が合うと、時間が停まった様な感覚になった。

「っ…：久しぶりね…：ハル」

「なんだ、君達は知り合いだったのか？」

「ハル？…その呼び方…もしかして。ユキ…か？」

「ええ、そうよ。覚えてくれてたのね…小学二年以来だから九年ぶりになるわね…」

先生は状況を察したのか優しく微笑んで無言で退室していった。

これには驚きを隠せない。二度と会えないと思っていた幼馴染が、瞳を潤ませて可愛く微笑んでいる。これは夢ではないだろうか。幻ではないだろうか。俺はいったい何を言えいいのか——

「ユキ…本当にすまなかった」

「…何故謝るの？もつと相応しい言葉があると思うのだけれど？」

別れ際に『さよなら』すら言えなかった。引き裂かれる原因を作ったのも実際俺が原因だった。この九年間連絡すら取っていなかった。つい先ほどまで忘れていた昔の事がまるで昨日の事の様に甦る。

彼女の言う相応しい言葉は「謝罪」でも「感謝」でもない。

「…ただいま。ユキ」

「おかえりなさい、ハル。あの時は助けてくれてありがとう」

「ああ…あれは自分を守ろうとして暴れた結果だ。ユキの為に動いたんじゃない。結果的にそうなってたみたいだけどな」

「ふふっ、そうよ私は貴方に救われたの」

11年前出会った友達への、始めての自己紹介が交わされた。

やはり今更感があり凄まじく恥ずかしい、俺は顔をそらし、雪乃は俯いていた。

俺たちが耳まで赤かったのは言うまでもない。俺たちは互いの本名を知らなかった。

「まさかユキが『あの』雪ノ下だったとはな」

「あら、家の事を知ってるのかしら」

「いや、入学式の車両事故は知ってるか？」

「ええ、よく覚えてるわ。その車に乗っていたもの」

「その事故で、車道に飛び出したのは俺の従兄弟だ」

「……………そう」

「ユキ。責めてないから。そんな顔はやめてくれ。それにこの件はもう終わってる。そうだろう？」

「ええ、そうね。それでも…ごめんなさい」

「それと、気になったんだが。アレから大丈夫だったか？」

「……………残念だけれど——」

「アレ」とは九年前の暴力事件の事だ。

当時、十名を超える児童からの暴力行為イジメを受けており、それに反撃したのだ。

恨みは、怒りを通り越して殺意となって顕在化して、女であろうが、

泣こうが、喚こうが、無表情で報復した。

その狂気に母が危険を感じ、転校となったのだ。

これによりユキをイジメていた女兒が入院。それ以降学校に来な
かった。

結果的にそれで彼女は救われた。

「でも本当の悪夢はまだ始まっていなかったのよ」

小学三年になり雪ノ下建設の顧問弁護士が『葉山家』になった。息
子の名前は『葉山隼人』偶然にもユキと同じ小学校だった。

彼は女兒から絶大な人気を集め『みんな』を重視する人柄だった。
ユキと彼は『家』での付き合いもあるため一緒にいる時間が長い。

繰り返し返すが、葉山隼人は女兒に絶大な人気がある。そんな彼が、美
少女であるユキと一緒にいるとどうなるのか、想像は容易い。

雪ノ下雪乃は女兒からの攻撃に晒されたのだ。

「ユキ…話すの辛かったらいいんだぞ?」

「…大丈夫。貴方には聞いてほしいの」

六年生になった頃にはユキへのイジメは更にエスカレートしてい
た。誹謗中傷は日常化し、盗難、器物破損。人権侵害などザラだった。

彼女は抗う事の無意味さを理解していた。抗うのであれば俺の様
に、殺す気でやらなければ意味がない事も理解していた。

「そして悪夢が始まったわ」

葉山がユキを庇い『みんな仲良く』という主張の元『みんな』をま
とめようとして加害者達は彼女が葉山に泣きついたと勘違いして『
葉山隼人がいない時だけ』彼女を標的とする様になった。

その結果ユキは心を閉ざし。中学生の間はアメリカへ留学する事
になった。

「ハル…泣いてくれるのね。」

「えっ…ああ…そうだな…俺も悲しいよ」

俺はいつの間にか声も出さずに泣いていた。

ユキは俺の頭をそっと胸に抱きしめてなでてくれた。

「ハル…私はもう大丈夫だから…」

「……………」

おかえり、ユキ。

「それで、俺は部員でいいのか？」

「ええ、歓迎するわ」

どこに行っても、いくつ歳をとっても人間の本质は変化しないだろうか。

過去にユキが経験した事が、結衣にも起ころうとしているこの状況をどうにかできないだろうか。

暴力はだめだ、最終手段としておこなければ、せつかく再開できた雪乃とまた引き裂かれてしまうだろう。俺はそれにきつと耐えれない。だからこそユキに助言を求めた。

「ユキ、ユキが受けたイジメを俺の友人が受けるかもしれない、知恵を貸してくれないか？」

「…どういう事？ 説明してほしいのだけれど」

第7話

「なるほど…状況は理解できたわ」

「まだなにもないが、様子がおかしいのは確かだ」

「その由比ヶ浜さん？に、一度話を聞いてみないと何もできないわね」
「やっぱそうだよな」

「言った様に、絶対にこっそり聞くのよ？でないと同じ事になるわ」

「ああ、ありがとう。ユキ」

彼女の経験を元にしたアドバイスは3つあった。

『貴方との距離にもよるのだけど、突き放してはダメよ』

『大勢の目の前では注意して行動する事ね、勝手に勘違いするのよ。
あの人達はね』

『ハルが何らかの犠牲になるのは一番ダメ』

何故という疑問は浮かばずに、ストンと胸に落ちた。

16歳ともなると様々な手段が案として出てくるが、同時に法律に制約を受ける事になる。

つまり、俺が使える手段はそれほど多くない。

小学二年の暴力事件は本来であれば傷害罪に問われるが、相手が複数だった事により自衛と認められ、事件にはなっていない。中学三年の件も相手側の親が非を認めたので同様だった。

しかし今回は違う。暴力は傷害罪。相手が女性であればもれなく暴行罪もついてくる。何よりも誰も救われない結果になるのは目に見えている。

俺は思案を巡らせながら帰宅した。

「八幡」

「ん？どうした春仁」

八幡に相談を持ちかける。内容は結衣の事だ。

「お前の考えを聞きたい」

「人気者の男子が一人の女子を懇意にしていると容疑者が勝手に勘違いして、その嫉妬から容疑者が問題を起こした場合。お前はどうか対処する？当事者の場合と部外者の場合で教えてくれ」

「やけにリアルな質問だな…由比ヶ浜が絡んでるやつか？」
「まだ。だな。でもうなるかもそれない。そうなった場合俺は当事者になる」

「そうだな…他人なら、どうでもいいってなるけど由比ヶ浜がってなる…」

「当事者だったら俺により強い悪意を向けさせる」

「部外者だったら…そうだな。そいつらの関係を破壊する様に裏で動く」

八幡は最後に「俺に悪意が集まるのは変わらない」と付け足した。



『どうしたの(・ω・)』

『少し話をしたい。今日の放課後空いてるか?』

『わかった。空けるねー!』

『すまん。一旦家に帰っておいてくれ。他の人に見られるのは良くない』

ハル君からメールが来た。

同じ教室で互いの距離は数メートルしかないがあえてメールでやり取りをするのはなんでだろう?今日はさがみんと遊びに行く予定あるけど、ハル君を優先させよう。

他の人に見つかったらダメって事は大事な話なんだろうし。

さがみんには家の用事で。って理由で納得してもらった。なんかやだなあ…さがみん。もやもやする。

ハル君とは何もないのにぐちぐち言ってくるのやめてほしい。ちやんと言えないあたしも悪いんだけどさ。

あたしが家に帰って少ししたらハル君から電話がかかってきた。電話ってちよつと緊張するよね…メールだとそそれでもないのにさ。

『もしもし』

「やつはろーハル君。それであたしはどうしたらいい?」

『今晚外出れるか?』

「うーん…ママに聞いてみる」

ハル君はママのお気に入りだったりする。いつつも「あらあら〜♪」ってわざとらしく胸押し付けてからかっている。もう!ママったら!あたしが恥ずかしいんだからせめて玄関ではやらないで!ってダメじゃん!

場所の問題じゃない。やめてほしいな。うん。

んでママに聞いてみたら案の定ニヤニヤしながら「外でナニするの〜♪」って言ってきた。その時わかった。ママはあたしで遊んでる!もう!もうもう!

あー顔あつつい。

ママが「ウチでご飯食べたらいいわよ」って言ってくれたからそれを伝える。

あれ?保留になってない…って事はさっきの全部聞こえてた!?

はわわわわわわ!おちけつ——じゃなかった!おちつけあたし!

「…ハル君。ママがね。あたしんちで…ご飯食べるなら許可するって…」

『…予想のはるか上が来た』

「え?どしたの?」

『なんでもない、呼ばれますって伝えといてくれ。また連絡する』

「あ、うん。わかった」

電話を切った後に部屋のベッドでごろごろ悶えちゃった。

あの会話しこえてないよね?はう〜恥ずかしい…全部ママのせいなんだから!

——1時間後。

ハル君から『今着いた』とメールが来た

音を聞いたママがいきなりドア開けて「いらっしやあ〜い」と出迎える。

ママ:そんなに速く動けるんだね…

やっぱりママは抱き着いてた。胸を顔にぐいぐいしてた。あたし

を見ながら。

こつちみんなし！つてかそれやめてえ！顔真っ赤「ママ!?!ここ玄関だよ！」と思つてた事言つちやつてさ。やつぱりあたしはあわあわしてた。うん。

「いただきます。」

ハル君が食事のお礼を言い、舌鼓を打つ。箸は止まる事なく真つ白なお皿が残った。

あたしの食べる量見てハル君がなんか失礼な事考えてるみたいだったからジト目で睨んだ。いいじゃん！たくさん食べたっていいじゃん!!

「ぶちそうさまでした」

「お粗末様でした」

あたしの部屋に始めて男子が入る。正直かなり緊張してたけど、落ち着いてるハル君見てたらなんか力抜けて気にならなくなった。ハル君すごいなあ、なんか大人っぽい。

そして、ハル君が話を切り出した。

「最近、結衣の様子がおかしいと感じるんだけど、何かあったか？」

「……ない。つて言うとうソになっちゃうかな」

「…言いづらいか？」

「アハハ…ちよつとだけ。」

「じゃあ、違うなら違うつて言ってくれ」

「…うん。」

「普段一緒にいる女子グループでイヤな思いしてないか？ ないと思いたいが相模から何かされてないか？」

確信をついた質問だった。ハル君気づいてたんだね…。

「されてる。のかな？ ううん。まだされてないつて言つた方が正しいかな」

「良ければ教えてくれないか？ 多分…俺も無関係ではないと思うしや」

もうダメだ。隠しきれないよ…でもハル君も無関係じゃないつて言つてくれるしさ。

相談してみよっかな。

「なんかさ、さがみん。いつもだれかの悪口言ってるさ。あたしが『そーゆーのよくないよ』っていつてもさ。なんでか毎回どこかで『春仁君と一緒にいれる結衣ちゃんを羨ましいな』って言われて…。あたしなんか悪い事したのかな…」

あたしはそのまま続ける。

「あたしがさ。『そんなことないよ、友達だったら普通じゃん？』って言ってもなんか茶化されてさ…こんな関係でもさがみんは『友達だよね？』って言うしさ。なんか色々わかんなくなっちゃって…」

「結衣は、今の状況をどうしたい？」

「あたしは…：どうにかしたけど。何をどうすればいいのかわかんないや…」

「じゃあ質問を変える、相模とどうなりたい？ 俺は、相模ははつきり言ってる関わりたくない類の人だ」

「あたしも悪口ばっか言う人はヤダな…：でも友達はやっぱり欲しい…」

友達は…：ヒツキーとハル君しかいない。友達ってどんな関係なんだろう…：さがみんは友達だって言ってくれてるのは嬉しいけど。さがみんとの関係は二人のそれとは違うんだよね…

「八幡と友達になった時の事、覚えてるか？」

「うん。よく覚えてるよ。嬉しかったし、多分ずっと忘れない」

「八幡の言う友達ってのはな《信じる》って事なんだ」

「あはは、ヒツキーそう言ってたね。——！そっかあたしさがみんのこと…」

「もう一度聞けど。結衣、相模南とどうなりたい？」

そっか…：そういう事か。友達って事。少しわかった気がする。

あたしは決めた。あたしが決めた。さがみん…：ごめんね。

「相模さんとは他人でいい」

「わかった」



朝。時計を見て、しばし硬直する。

かなり寝坊してしまった。

結衣が決断した顔を見て安心できたのはいいが、帰ってアレコレ考えてたら夜が白んでいた。

少しだけ眠れたが身体がたるい。朝食を用意して弁当を作る。いつもより遅い時間だが、ギリギリ遅刻は免れそうだ。

しかし八幡のヤツ：！手伝わずに置いていくとはいい度胸だ。イヤ寝坊したの俺だけど。寝坊したのも俺が原因だけど。でもなんかイタズラしてやろう。

喜べ八幡。今日のお昼は栄養満点のトマトを沢山入れてやろう！

午前の授業はよく覚えてない。顔に跡がついてないので寝てはなかったみたいだ。

八幡がこつちに来る前に俺は奉仕部に避難する事にした。

ユキに事の顛末を説明しなきゃだしな。遠くで『おい春仁！これは——つていねえのかよ！』つて聞こえて来たが無視だ無視。残したら今後作ってあげないんだから！

地味だな、俺。あとキモい。

「なるほどね、今の状況なら私もそれがいいと思うわ」

「相模が事を荒立てるなら俺にも考えがあるが、なるべくやりたくはないね」

「そうね、付き合ったフリなんてしたら貴方発狂するわよ？」

「なんでわかるんだよ！」

「ふふっ。なんででしょうね」

結衣が相模に物申したら連絡がある。

俺たちはさっと昼食を食べ終えてその時を待っていた。

「ユキ、ありがとうな」

「私は何もししていないのだけれど…どういたしまして、ハル」

彼女はなんだか照れ臭げにする。するとスマホに着信があり、出てみると結衣の噛み殺した嗚咽が聞こえた。結衣に優しく「屋上に行つてろ」と言い返事を待たずに通話を終了する。

「ハル、行ってらっしゃい」

「ああ、行ってくる」

屋上へゆっくり向かう。そこに着くころには彼女も少しは落ち着いているだろう。

男は女の涙には弱いんだ。泣き止む時間があってもいいだろう。つてか泣き止んでほしい。

屋上に着くと結衣が眼を晴らしていたが、もう泣いてはいなかった。

「――すぐくつらいんだね」

「そうだな…よくがんばったな結衣。お疲れ様」

「うん…ありがとう…」

彼女は肩を震わせ、声を殺してまた泣いた。

これは安易に人を信じた罰ではないだろうか。そう思えてしまう。結衣は友達を失ったのか？おそらく違う。

これが八幡の言う『勝手に期待して勝手に裏切られて』って事なんだと俺は理解できた。

第8話

『いらつしやいませ』

美しいイルミネーションが街を彩る。恋人たちは寄り添い、暖めあう。

恋人がいない者は集まり騒ぎ、荒れ狂う嫉妬心を燥いでごまかす。しかし、俺には関係ない。

『ありがとうございます』

クリスマス。それは恋人たちが愛を確かめ合い、昇華させる日。

クリスマス。それは集まってパーティーしたりする日。

『またのお越しをお待ちしております』

何か変だ。クリスマスでなくても愛は確かめ合えるはずである。

どこかおかしい。クリスマスでなければパーティーができないのだろうか。

そもそもクリスマスとは何の日なのか。

『いらつしやいませ』

所説はもろもろあるがイエスキリストを奉る日と言うのは共通しており、調べれば文献が沢山出てくるだろう。

歴史上の偉人を奉る。それは間違いではない。しかし、クリスマスだから恋人とラブラブしたり、友達と騒ぐのは何かズレていないだろうか。

『おう柸。上がっていいぞ』

彼らはクリスマスの由来など調べはしない。

彼らは会う為の、騒ぐ為の『クリスマスだから』という理由がほしいのだ。

「お疲れ様です。お先に失礼します」

「お疲れ！急なシフトでスマンかった、助かったわ！きいつけて帰れよ！」

クリスマスに欠勤したバイトスタッフに代わり、休日にも関わらず昼頃から呼び出され、先ほど勤務が終了した。どうも俺です

クリスマスに愛を確かめ合うのも集まって騒ぐのも大いに結構だ。

それは個人の自由だし、部外者がとやかく言う事ではない。

しかしあえて言いたい

「やる事やってからヤレよ」

誰と何処で何をどの様にするのか、〃いつ〃を含む5W1Hで言えってツツコミは10年後にお願いします。

「帰って夕飯の用意するか」

仕事が終わったあとに家事をするのは気が重いから「やっぱしんどいわ」とごちり、小町に丸投げするメールを送った。

単車に座っているとスマホがブルツと震えてメール受信を知らせる。画面を見た俺は血相を変えて電話をかける。差出人には《ユキ》本文には『助けて』と書いてあった。

ユキは『こんにちは、ハル』といつもの感じで電話に出たのだが、それどころではない。

「ユキ！どうした！大丈夫か？」

『ハル？何をそんなにあわてているの？』

「え？…いやお前。メールで『助けて』って……」

『…ごめんなさい』

結論から言うと。単なる誤送信であった。無事で良かったけどさ…

《ハアア》と大きくため息をつく。

幸いそれほど互いの距離は離れていなかったなのでユキを拾いに行く事になった。

文句のひとつでも言いたいが、電話口でくすくす笑う彼女はなんだか楽しそうなので、何も言わなかった。

「猫カフェに行きたいのだけれど、なかなかたどり着けなくて」

「道もまちがえてんじゃねえか！」

前言撤回、見事な手のひら返しである。

ただの迷子で『助けて』ってどうやってたら間違えるんだ？

彼女は顔を赤くして何やら抗議しているが、適当にあしらい目的地である猫カフェを目指す。そういえばユキは猫が大好きだったな…

道中にユキが猫がいかに愛くるしい生き物なのかを熱弁していた

があまり覚えてない。

気にするな、ユキはこれが平常運転だ。

そんなこんなで猫カフェに到着。カランカランと中に入る。

店内は落ち着いた雰囲気です。ピアノジャズが控え目に流れていた。

店員のお姉さんに案内され席に座る。

「…あら。ロシアンブルーかしら」

彼女の膝の上にぴよんと飛び乗って《にゃ〜》と鳴く子猫。

スマホのアプリにニャウリングルというものがある。

ネコ語の翻訳機能があるらしいのだが、それがなくても解る。

この猫はユキに『愛でろ』と言って居るのだ。それが解る彼女は優しく子猫を愛でる。

そつとスマホを構えて——《パシヤツ》猫に夢中な美少女を撮影するのだった。

ユキが「ちゃんと許可を…」とか「肖像権が…」とか言ってたけど、顔赤いからね？論理武装する前に顔に出さない訓練しろ。あとユキが可愛いのが悪い。

写真あげたらそれはもう《ぱあああ》って嬉しそうな顔してたので、俺の罪は勝手に水に流されていった。

「うちのカマクラもこんだけ愛嬌あればなあ…」

日々のカマクラからの仕打ちに心で涙を流す。あいつのせいで俺の背中には生傷が絶えない。

料理中に背中に爪立ててよじ登って来る。座っていると足首あたりにまとわりついて足かじってくる。寝てる俺の首に全体重のせてまったりしている。

いやかわいいからいんだけどさ。痛いのは辞めて頂きたい。

「…貴方、そんなに侍らせて…ズルいわ」

こちらを見たユキが羨ましそうにぼやく。

肩に一匹、膝に一匹、抱き着いてるのが一匹、計三匹にかじられたり爪を立てられたりしつぽで顔をペしペしされてる俺にズルいと零す彼女。侍らせるという表現は間違っていない。でも正解でもない

だろ？

「侍らせてる様に見えるなら代わってやろう」

「結構よ。私は一途なの。この子だけで十分よ」

「遠慮するなユキ。しっぽが顔に当たってうっとおしい事この上ないが、かわいいぞ？」

ウザかわいい。かわいいとつけければなんでもいいのだろうか？そう思いつつも口にする。

そんな猫たちにガジガジされて参ってる俺のシャッターチャンス
を彼女が逃すわけがなかった。

「ふふっ。仕返しよ」



ハルに買い物に行きたいと伝えたら、ららぽーとまで連れて来てくれたわ。

バイクの後部座席はちよつと怖かったけど、慣れれば案外楽しいものね。

今日はクリスマスなのだし、何か彼に再会の贈り物をしたいのだけ
れど。

なかなか難しいわね…私の目的地はここではないような気がする
のだけれど。

まさか…迷ってる？いいえ。私が道に迷っている訳ないでしょう。

そう。そうよ。これは物色しているの。いいものがないか探して
いるだけよ。

……………ここはどこなのかしら？

「ハア…ユキ。ほら」

「…はい」

はう…ハルにはバレていたようね。手を握られるのは昔を思い出
して安心できるのだけれど…なんだか引率されてるみたいで恥ずか
しい。

私、迷子ですって言ってるようなものじゃない。私は手を放して彼

の服の箸をちよんとつまむ。

「こ、こつちでいいわ。」

ハル。貴方が優しいのは知ってるけど。今はこつちを見ないでほしい。「仕方ないなあ」って私はもうあの時みたいな子供ではないのよ？

それから館内をぐるぐる回ったのだけれど、結局プレゼントは買えなかったわ。

「なにかピンとくる物があればと思ってきたのだけれど、何もなかったわね」

「お前が抱きしめてるぬいぐるみを説明しろ」

「何を言ってるのかしら？これは取ってもらったのであって、買っていないのだけれど」

「喜んでもらえて何よりだ」

パンダのパンさんのぬいぐるみ。ハルがクレイゲームでとってくれたのだから私の言い分は間違っていないわ。そうではなくて？

ハルがなにやらごそごそと鞆から何かを取り出して私に差し出す。

「ユキ、はいコレ」

「これは？ プレゼント？どういうつもりかしら？」

「再会のプレゼントだよ。決してクリスマスだからではない」

ハルと考える事は同じだった。私はしばし硬直してしまっただけ。

「開けていいかしら？」と聞いて、ラッピングを解く。

「リボン…かしら？——！猫の耳？」

「ああ、良い色のデザインがあっただんでな、こつそり買っておいただ」

「ふふっ。少し待ってて頂戴」

私は自分が可愛いと自覚してる。今まで言い寄って来た男どもがそれを証明してる。

彼がくれたこのリボンは私が選ばない色調だった。

これをつけた私を見せる事をプレゼントにしましょう。

淡いピンク色で、生地自体に少し光沢が出ており、端が猫耳の様にデザインされている。黒髪に鮮やかなワンポイントが自分自身の存

在感を際立てる様ね。

「どうかしら？ピンクの色を付けるのは初めてなのだけれど」

「似合ってるよ。ユキがピンクってのは想像できなかつたけど、あえて選んでみた」

「ありがとう。ハル」

ハルの笑顔は出会って始めて見たけど、昔から変わらないわね。

そういえばお母さまはお元気なのかしら…事情もあるかもしれないし、ハルが話してくれるまで待ってましよう。

「ハル、今日はありがとう。迎えが来たから私はもう行くわ」

「おう、またな。ユキ」



「ありがとな小町」

「もうすぐ結衣さんも来るからー」

「え？」

「お兄ちゃんが誘ったんだよ！」

「待て小町。誘ったのはお前だろうがお兄ちゃんはウソつきに育てた覚えはないぞ」

「そうだね、お兄ちゃん。小町日本語間違えたね♪お兄ちゃん”で”誘ったの間違いでした〜！」

「八幡、どんまい」

「春仁、その目をやめろ。泣きたくなるから」

わいわいやってる最中にがちやりとドアが開いて「こんばんは！お邪魔します」と結衣が入って来た。

俺と八幡はかなり驚いたが、聞けば事前に小町から入って来て良いと言われていたらしい。事前に言ってくれ、ホント。

「ヒッキー！呼んでくれてありがとう！」

「由比ヶ浜。呼んだのは小町だ」

「え？そうなの？でも小町ちゃんさつき『兄は今手が離せないの代わりに連絡しますね——』って言ってたよ？」

「さあさあ！そんな事よりクリパしましよー!!」

「ごまかしたな。八幡よ、小町はアレでいいのか？いつか刺されそうなんだが」

「言うな、春仁。そんなフラグは建てなくていい」

「ふろつぐ？　なんでカエルなの？」

結衣がいつも以上に絶好調な様だ。

「なんで俺の小学校時代のアダ名しってたんだよ。ってかフロッグじゃねえ。フラッグだ。旗だ」

「カエルだったんだ！」

「結衣、フロッグがカエルって事知ってたんだな。見直したわ」

「うう〜！ハル君がひどい！」

微塵も嫌がってない由比ヶ浜結衣であった。

結衣は八幡に誘われていなくても彼といれるだけで喜びを感じている。

彼が結衣に伝えた《お前を信じる》の一言が先日の事件で理解できなかったからだ。

騒ぎすぎてお隣さんから苦情来て頭下げて謝った。俺が。解せぬ。

いや俺が年長扱いだったわ。お隣さんすいません。

クリスマスパーティーも終わり、単車で結衣を送っている。

八幡が誘ったのだから八幡が送るべきだという小町の主張は「俺と一緒にいると逆に通報される」の一言で通らなかつた。

結衣と小町が『あ〜…』と言ってしよげた八幡にエールを送りたい。

『このヘタレが』と。

「ハル君。いつもありがとう」

「ん？ああこれくらい気にすんな」

「ううん。いつも助けてくれるよね。だからさ、ありがとうだよ」

「おう、どういたしまして」

結衣が恥ずかしそうに感謝を述べる。何やら「あの…その…」と言いたそうにしていると爆弾が飛び出した。

「——でき。…ハル君ってさ。すごく落ち着いてるよね？　もしかし

てき…彼女…いるの…？」

「……はっ？」

結衣からのスタングレネードが直撃して少し硬直した。



聴いちやった。ちよつとやってしまった感ある。ハル君ってき。クラスの男子とは明らかに違うよね。

それ気になつちやったんだ、あたし。ヒツキーもハル君もさ。あたしの事いやらしい目で見ないしき。ヒツキーは見ちやいけないって感じて目そらすから分かり易いんだけど、ハル君はなんか…平然としてる。

赤くなることあんななかったし…ママに胸押し付けられても困ってただけだったし。

ホント…なんでだろ？なんで、気になってるんだろ。

好き…なのかな？好きってどんなの？なんかわかんなくなってきたちやった。

「彼女なんかいないぞ。ってかどうしたいきなり？」

「…変な事聞いちゃってごめん…ただなんでだろ…って思ってたき」

「まあ、どこか座るか」

ハル君がママに電話してくれてる。いつの間にかあったかい紅茶が出て来て、近くの公園のベンチに座る。

クラスの男子はこういうさりげない優しさを見習ってほしい。でもあたし以外の女子にやってね。困るし。

「ハル君ってき、高校生っぽくなくて、なんていうか——うん。大人っぽくなって」

「…ふむ」

「それでね、クラスの男子はあたしのむ、胸…チラチラ見てるけど…その……ハル君はあんまそーゆーの感じなくてき」

「…んー、そうか？」

「一緒にいて安心できるの、ヒツキーとハル君だけなんだ。あたし。」

でもヒツキーは結構顔に出るからわかるんだけどさ。ハル君はなんか違うなって」

あたしへの返事は彼女いた——とか好きな人いる——とかなんだけど。まさかそんな答えが来るとは思わなかった。

「結衣それはきつとな、俺が童貞じゃないからだ」

「——えっ？——えええええ!!」

「声がでかい」

「っ!ごっごめん!」

「結衣落ち着け、だれも襲ったりしない」

っつて童貞じゃない!?えええエツチした事あるって事だよな?あわわわわわ!あ、あああたし超動揺してる!

落ち着かなきゃ落ち着かなきゃ。アホの子って思われちゃう。

スーハースーハー。——うん。おっけー。

相手はどんな人:じゃなくなつて!「結衣?」はあああ。すーはーすーはー。うん。落ち着いた事にする。

「アハハ:ホントに大人だった」

「よせ、俺も恥ずかしいんだ。どっちかって言うらと奪われたが正しいけどな」

「~~~~!ひゃああ!——もう!そういうの言わなくていいからあ!」

「はいはい、すまんね」

「あしらわれた!なんか拍子抜けだよお:」

「あともう一つ:あるかな。多分こつちのが理由の本命だろうな」

あれ?ハル君:なんか顔怖い:かな?ううん。悲しいんだね。

あたしは「教えてほしいな」って言った。そしたらハル君が話し始めた。

「俺は八幡と従兄妹だ。んで、比企谷家に住んでる。それは知ってるだろ?」

「うん」

「柊家は俺だけだ」

「——えっ:それってどういう……」

「父は俺が産まれる前に離婚している、顔も知らない。母は…俺が中学二年の時に癌で世界した。今は比企谷家の養子になっている」

視界が徐々にぼんやりしていく。

「ごめ…ん……なさ……い」

「結衣、お前が言わせた訳じゃない、俺が話したんだ。間違えるなよ？」

「う、うん。……ごめん。」

——あたし…サイテーだ。ハル君は俺が話したただけだって言ってくれてるけどさ。先にあたしが『話したくないなら話さなくていい』って言うべきだよな？興味本位で聴いて良い話じゃなかった…。パパいない？ママもいなくなった？しかも中学の時に？

——あたしそんなの耐えられないよ…でもハル君は耐えたんだね。

あたしはまたないちゃった。こんな涙出ない人いるのかな…

ハル君が落ち着いてる理由…少しわかった気がする。

「…大丈夫か？」

「…ありがとう」

「辛かっただろ？ごめんな結衣」

「ううん…ありがとう…話してくれて」

「まあ、そんな訳で俺は大人びてしまったって事だな。俺には一人で生きていく力が必要だったんだ。それで料理もできるし、身体も鍛えている。勉強だってできるに越したことはないし、バイトで少しづつ貯金もできてる」

「…あたし…バカだなあ…」

「…結衣？」

「あたしね…ハル君の事お兄ちゃんみたいだなって思った…。それでね、きつと無意識に甘えてたの…」

「由比ヶ浜結衣。ハッキリさせとこう。」

「えっ？あ、うん」

「お前、八幡に惚れてるだろ？」

「……うん…ヒツキーの事…すき…です」

「んで、俺にも同じような感情持つてるだろ？」

「っ！んなっ！なんでわかんのか？」

「顔に出てる。んでな。結衣が俺に抱いてる感情つてのは『憧れ』って言うんだ」

「あこがれ：うん。そうかも。なんかストンって来た」

「じゃあもう大丈夫だな。八幡には黙っとくっていか本人も気付いてるんじゃないか？」

「うひえああああ！」

「スツキリできなかつたらまた来ればいい。んじゃ、そろそろ帰つとけ」

あたしは家に向かった。家に着いたらママからハル君が連絡くれた事を教えてくれた。

「結衣く？」

「何？どしたの？」

「ハル君とヒツキー君。どっちが好きなの？」

「ちよっ！ママ!?!どっちでもいいじゃん！」

うひゃああああああ！ママ！やめてえ！恥ずかしいからあ！

「あら〜♪どっちかって事は認めるのね〜」

「うううううう！」

「じゃあ今度ヒツキー君がウチに来たらママ誘惑しちやおうかな〜」
♪

「だめえええ!!ヒツキーはあたしのなんだからあ！——あつ…」

「あら〜。結衣はヒツキー君が好きなのねえ。じゃあママはハル君を誘惑するわ」

「それもダメえ！ヒツキーは好きな人だけど、ハル君は傍にいてほしいのっ！——あう…」

もうダメだ。あたし。顔真っ赤なのわかる、超あつっい。

ママは爆笑してるし。ちよっとママ笑いすぎ！そんなに床ダンドンしなくてもいいじゃんかあ！



大晦日になった。ゆく年くる年。

社交辞令がやたら飛び交うこの日。我が家の比企谷兄妹はというと。

「お兄ちゃんお茶いれて〜」

「断る。自分でやりなさい、ついでに俺のもたのむわ」

「まったく…お前らは…」

こたつで超だらだらしていた。

コタツは人をダメにするというが、実物が、ダメになった人もセツトで目の前にあるので説得力抜群である。

「そういえばさ、お正月どうすんの？お兄ちゃんズは初詣行くの？」

「小町、ズってなんだよズって。俺たちは配管工じゃないぞ？」

「あーはいはい。それで、初詣行くの？」

「行かない。家から出ない」

「バイト、行けない」

3が日は全部バイト突っ込んだ。店長からも喜ばれたし、悪い気はしないが、休み希望だしてた奴はおみくじで大吉引いて不幸な事件に巻き込まれればいい。

「お参りは行きたいなあ…ねえお兄ちゃん…ダメ？」

「…あー…じゃあ夜中は危ないから…朝になったら行くか…」

「八幡たのんだ」

小町の上目遣いにめっぼう弱い八幡。お前ちよろ幡って呼んでやろうか？

新年が明けた。何がめでたいのかいまいちわからん。

特にメールで来る『あけおめことよろ』せめて『あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします』と全文打て。返信しただけどき。

後から聞いたけど神社で結衣と鉢合わせたらしい。そのまま3人でわいわいやって元旦は終わったらしい。よかったな3人も。

俺は仕事だ。またクリスマスみたいな事が起こって俺の勤務時間が倍になった。ホント大人って…。

そんなに姫がしたいなら姫がしたいですって俺に頭下げろ。
考えてやる。考えるだけだな！

あえてもう一度呪詛を込めて吐き出す。

「やる事やってからヤレ」

第9話

2月14日それは女の子が頑張る日であり男の子が涙を流す日である。

男の子の涙の理由は…まあ、想像におまかせしよう。

「まじかよ…体がだりいく…」

バレンタインデーなんぞなくてもいいと俺は思う。

もともとは親しい人に贈り物をするって日だったし、送るのは愛情じゃなくて感謝だったはずだ。

だから女性から男性以外でも意味のある歴史的な日だったのに、お菓子メーカーかデパートかの告知で今の流行が定着したらしい。それはいいとして。

義理の愛情ってなんだろうな。そんな意味不明な物をがんばって作る女子は尊敬できるわ。

見習いたくはないけどな。

男も男でそんなまがい物貰って嬉しいのか？嬉しいんだろうな。じゃないとここまで浸透してないか。

「ああ…頭いてえ…」

こんな日に風邪を引く。割とガチな風邪。

こんな日だからか？俺も中学時代はかなり貰えたけど、『義理だよ！』って渡してきたやつのはどんなにルックス良くても全部『本命とか義理とかこだわるならいらぬ』って突き返したからなあ…

何人か泣いちゃったし…マジめんどくさかった。でも『好きです』ってド直球なラブコメントのがめんどくさかったわ。

「どうした春仁？って顔色悪すぎだろ。まるでモテない男子の呪いを一身に受けてる様だ」

「…………じゃあお前も風邪引いてないとおかしいぞ？」

「ぼっか！お前俺がモテると思ってるのかよ、熱のせいだな春仁。学校には言っとくから今日は寝てろ」

解せぬ。八幡は俺から見ても整った顔してんのに、あいつが元気なのはなんか腹立つ。

——はあ…呪いかあ男じゃなくて女の呪いだろ…

「軽く食って病院行くか…」

ひとまずユキにはメールだけ入れとこう。

俺はタクシーを使って病院まで行って診察を受けた。

熱が結構あつたみたいで医者に『なんで歩いてるんだ！』って怒られた。なんで俺が怒られるのか謎だ。

んで点滴打ってもらって正午に家に着いて服着替えて、今ベッドの上にごろんとしている。

スマホに通知があつたので、見たらユキから返信があつた。本文には『お大事に、またね』とだけあつた。

はあー。点滴ってやばい。熱が下がるのが解って気持ちいい。睡眠薬も混ぜてるみたいでぐっすり眠れた。

「…もつかい寝るか」

俺は何の抵抗もなく眠りについた



ハルから『風邪引いた、しんどいから休む』とメールが届いた。わざわざメールしなくても大丈夫なのに。

急にいなくなった事を気にしているのね。彼らしい気遣いに私は嬉しくなってしまう。

急にいなくなってしまった仕返しに急に現れてあげましょう。

午後の授業は早退してスーパーに寄って、車を出してもらって目的地に向かう。

着いたのはいいのだけれど…呼び鈴を押しても応答がない。まさか死んでないわよね？——あら？

「不用心ね…」

鍵が開いている…きつと病院にからもどってそのまま忘れたのでしよう。仕方ないわね。

私は「おじやまします」と一言口にする、返答はなかったので誰もいない事がわかった。玄関には靴があつたのでハルはきつと寝てる

のだろうと思いいりビングに荷物を置き、先ず彼の安全を確認しに行った。

「……ハル？」

ハルがベッドで寝息を立てていた。良かった死んではなかった。じゃあ起きた時の為にお粥でも作ってあげましょう。

ふふっ起きた時にどんな顔するのかしら。

料理を作っていると前にハルが言ったカマクラがのそのそと出て来た。彼はいつもこの子と過ごしてるらしいけど、正直言ってるらしい。私のマンションはペット不可の物件だから我慢するしかない。この家に遊びに来れたらいいのだけれど…。

「ふあああ〜——え？、ユキ？」

「おはよう、ハル。おきたのね。お粥もうすぐできるから少し待って」

「あ、ああ。ありがとう…いかん。思考が追い付いてない…」

「ふふふっ。どうしたの？ハル。夢でも見てるのかしら？」

作戦は成功みたいね。私は小さくガツポーズをしてしまう。ハルにまた謝られたわ「意趣返しかよ…ホント悪かったって」ってこちらの考えも伝わった様でなによりだわ。

お粥をよそって彼の前にコトンと置く。病院に行ったとはいえず治ってる訳ではないのだから、味は薄目に仕上げた。

「美味しい。ありがとうユキ」

「お口にあってよかったわ」

美味しいのはわかってのだけれど。感想を言ってもらえるとやっぱり安心できる。

「具合はどうなの？」

「ああ、朝は熱がひどかったから病院に行ったんだが、そこで点滴打ってもらってな、今晚寝たら治るだろ」

「そう、それなら良かったわ」

「そういえばユキ」

「なにかしら？」

「なんているんだ？」

——すごく今更な質問が来たわね…ハル？気にしたら負けなのよ？

「早退してお見舞いに来たのよ。メールでまたねって送ったでしょ？それで来てみたら呼び鈴押しても出てこない。でも鍵が開いてたから不用心だと思つて、悪いけどお邪魔させてもらったのよ」

「……マジか」

「マジよ」

「ユキなら断らないから、次から来る時は来るって言つてくれ」

「お見舞いはもうない様にしてほしいのだけれど。」

「ははっ、そうだな。でも連絡はしてくれよ？そのまま帰らせるのは申し訳ないからな」

「わかつたわ、それじゃ迎えも来た様だし、私はお暇するわ」

「ありがとうユキ、気を付けてな」

「お大事に、ハル。」

私は車に乗り込み下宿先のマンションに向かう。私はハルに嘘をついた。今日ここまで来たのはお見舞いの為だけではない。昨日用意した私の感謝を渡したかった。そつとメモを残してテーブルに置いてきたのだけれど、彼は気付いてくれるかしら…？体調が良くなつてからで構わないから味わつてほしい。《ブブツ》ハルが気付いた様ね。

『ユキの感謝を受け取った、ありがとう』

私はまた嬉しくなつてしまった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
「ただいまっ」と

春仁は大丈夫か？朝に真つ青な顔してたが、心配だな。

しかし今日は隣のクラスが超煩かった。あんなに騒がしいならバレンタインは学校休みでいい。むしろ閉鎖しよう。国民の休日に指定するまである。つていうか、バレンタインデーってお菓子メーカーの販促だよな？

露骨なステマ。大丈夫ですか？隠せてないよ？

しかし春仁のスペック高いよな。俺だつて眼がヤバい以外は顔は悪くない、運動神経だつていいはずだ。つてか何で俺、張り合つてんの？目立ちたいの？ハッ！全力でお断りします。俺はぼっちエリートだ。エリートは学習するからエリートでいられる。結論、俺はぼっちでいい。

「小町は…まだか…」

チョコはマイエンジェル小町からだけでいい、まだもらつてないけど。もらえるよね？下さい！結局欲しいのかよ。あれ目から汗が…

由比ヶ浜もそわそわしてたが、まあムリもないだろう。春仁休みだし、春仁目当てで他クラスや他学年の女子いっぱい来てたし…でも今日の由比ヶ浜はなんか辛そうだったな。

「由比ヶ浜…なんかあつたのか…」

…あいつを意識してるのか…俺は由比ヶ浜から貰えなくて残念なのか？あいつが渡したいのは春仁だろう。あいつら仲良すぎでしょ。名前呼び合つてるし…つか由比ヶ浜に名前で呼ばれてるのつて春仁だけじゃね？イヤでもヒッキーつてのもあいつしかよばねえな…

由比ヶ浜が悩んでる原因はわからんが、あいつの力になってやりた
い気持ちはある。

由比ヶ浜の事は信じるつて決めたんだ。いい加減にしないとな。

「はあ…」

俺は由比ヶ浜が気になつてる、あいつが笑つたり近くにいたりすると無意識に目で追つてる。何より心がわぎついて素直になれない。でも由比ヶ浜が気になつてるのはきつと春仁だ。あいつイケメンだしできない事ないんじゃない？

由比ヶ浜が春仁を好きなら俺はそれを応援したい。これは本心だ。

春仁が言つてた『自分で世界を回す』つて事もまだよくわからん。自分を中心に回したらそれはただの自己虫じこちゅうでしかないんじゃないか？

春仁の理論で言えば、俺はたしかに今まで他人を中心に世界は回つていてと考えてた。むしろ回つてる世界の外にいてと思つてた。で

も自分で回して大切なものが壊れてしまうならそれは違うんじゃないか？

俺はどうしたいんだろうな…。

高校二年生編

第10話

俺のバイレンタインデーのその後と言えば。

——2月16日

母の命日だったので比叡山延暦寺まで墓参りに行った。

千葉から京都まではかなりの距離があったが、バイクで出発。

途中静岡のサーブエリアで見た富士山はすごかった。寄り道もけっこうしたけどおおよそ6時間ほどで到着。

近況報告^{お参り}だけしてそのまま7時間くらいで帰った。せっかくだしと寄った大阪のたこ焼きはヤバかった。

あの味は盗めない。

——3月3日

小町の誕生日だった。

友達のお宅で盛大に祝ってもらおうようで、俺と八幡でプレゼントだけ用意した。

俺は送り迎えだけやったけど、八幡は残念そうだったな。でも帰って来た小町が超甘えてたら優しく小町の頭なでなでしてた。小町にとってはそれがプレゼントなのだろう。

——3月14日

ホワイトデー。

クッキーを適当に焼いて適当にラッピングして世話になった人全員に配った。もちろん男女問わず。

文化祭で一致団結もできたし、1年^{このクラス}E組でいれるのもあと少しなんだよな。

ユキにはバイレンタインのお返しも兼ねてちよつと特別感出した。

あと平塚先生にも渡しといた。デスクにあったゼクシイの事は俺は知らない。

——3月20日

学期末テストがあった。

俺も八幡も余裕だったが、結衣が危なかった。『高校で留年とか絶対ヤダ!』って必死なつてた。主に俺と八幡が。

当人は『えへへえ♪』ってお花畑に頭突っ込んでるし…なんつーか。二度とやりたくない。

——そんなこんなで2年に進級。

「やったあー!同じクラスだね!」

「結衣もF組になったのか。八幡は?」

「Fだ」

結衣がびよんぴよんしてる。周りの男子の視線が上下しているが結衣には黙っておこう。

八幡は別段興味ない様にしてる。1年の時の様子を俺と結衣は知らないが、文化祭の時を思うとぼっちやってたのかもな。

クラス名簿を眺めていると『葉山隼人』と『相模南』の名前を見つけた。

葉山隼人君。

彼はユキの幼馴染って言うていいだろう。なにせ小学校3年からのおつきあいだ。ただ…あれだけの事態になって平然としてられるのは不気味だ。

爽やかなイケメンだが、あの顔は俺の遺産目当てで近づいて来た親族に通ずるものがあるな…一応用心しておこう。

相模南。

結衣にばつさりされてからは、悪口もあんまり言わなくなった。

しかし時折こちらを羨ましそうに見ている。結衣と仲良くやりたいのだろうか勇気が出ないみたいだ。

機会があれば声かけてやろう。もともとの狙いは俺だったはずだし。結衣に危害が行かなければいい。

「席につけー」

マジかよ…担任かよりによってあの人が…。

俺は心で悪態をつくがどこか安堵を覚える。間違いなく一番世話になってる教師だ。

「担任の平塚だ。これから1年間よろしく頼む」

そう言つて平塚先生は原稿用紙を配布して、〃高校生活を振り返つて〃という題で作文を明後日までに書けと言う。

1年間何をしてきたのか知るためだろうか？ 俺はめんどくさいと思いつつも1年間を振り返る。

八幡もめんどくさいというのが顔に出て先生に睨まれてた。

——翌日の放課後。

〃〃高校生活を振り返つて。〃〃

2年F組 柊春仁

高校生活の1年間を振り返つて得たモノは何もない。今はそう思う。

この類のモノは大人になってから始めて得たモノに気づくのではないだろうか？ 高校生になって、中学生の頃を鑑みればたしかに得たモノはあると言える。

今必要なのは、自分の能力の低さを認めて向き合う事。それを高め、社会に出て1人で生きていける力を培う事だ。自分の能力が低ければ、他人を蹴落として我欲を満たす醜い大人になるだろう。それは絶対に嫌だ。

人を妬んで邪魔する時間があるなら、自分を磨く時間に使う方が有意義だ。

しかし、誰かを羨望して自分を磨く人は少ないと言い切れる。その理由は考えるまでもなくイジメ問題だ。

どんな年齢であろうと関係なくイジメは起こる。しか、俺はそれをどうこう言うつもりはない。勝手に妬んで、勝手に醜くなって、自滅する他人の人生など、どうでもいい。

話がそれだが、1年間を振り返つて得たモノはないが、感じた事はある。

それは人間は醜い生き物だという事だ。

「——それで、柊。これは一体何かね？」

「先生が出した作文ですが？」

「そんな事はわかつている！ ちゃんと振り返つてはいるが、なんだ

「この内容は！高校生が書く内容ではないぞ！」

「先生、俺は高校生なんですが…あと妄想ではなくて事実ですからね？」

「はああー…まあいいだろう。お前といい比企谷といい…まったく…」

「柀。君はもう行っていいぞ」

「はい、失礼します」

八幡もやらかしたのか。そういや『青春とは嘘であり、悪である——』って書きだしてたな。後で見せてもらおう。

今日はバイトがあるが、職員室に呼び出されて少々時間を食った。少し急いで下校する事にしよう。



「はあ…チョコ渡したかったなあ……」

あたしはひどく落ち込んでいる。バレンタインデーにヒツキーにチョコレートを渡す事に失敗したからだ。

ハル君に教えてもらいながらという手段は一番最初に浮かんだけど、あたしだってがんばれるって事みせたかった。

こういうのって一人で作らないとだめだとおもうんだ。

ちゃんとあたしの『ありがとう』と『ごめんなさい』は伝わった。次は『好きです』って伝えたい。

前にハル君と話して自分の気持ちハッキリした。すごく恥ずかしいし怖い。

断られたらどうしようって思っちゃう。あたしがヒツキーと恋人になっても…ハル君は変わらずに接してくれるのかな…

あたしが料理のれびし？見ながらやってみただけでできたのは予想と全然違った。

結果は……なんか黒い塊ができた。あんなの渡せないよね？それくらい、あたしでもわかる。

「はああ…——」

「どうした由比ヶ浜、ため息は幸せが逃げると言われているぞ?」

「あ……先生……」

「話してみたまえ」

「えっと……なんといいいますか。おいしいチ……クツキーとかを作れる様になりたくないなあ……でもあたし、料理がてんでダメで……」

「そうか、残念だが、私も台所関連は上手くないから私ではそれに応えられないな」

「はあ……どうすればいいのかなあ」

「由比ヶ浜、奉仕部に行つて依頼してみたまえ」

「ほーし ぶ?」

「そうだ、特別棟の4階の端にある教室が奉仕部だ。そこで相談してみたまえ、何かコツがわかるかもしれないぞ?」

「わかりました……行つてみます」

あたしの目的は決まつてただけどき。なんかいつの間にかすりかわつてた。

あたしはヒツキーに想いを告げたかったの。丁度バレンタインだからチョコになつただけだった。

いつのまにか作る事が目的になつちやつてたなあ。贈る物はなんでもいいのにな。

でもあたしががんばつたつて事をヒツキーに見てほしい。そのためにもクツキーはがんばろう。うん。

あたしは迷わずに辿り着き、扉をノックしてそろーっと中を覗き込む。

「お……おじやましまーす 奉仕部つてここであつてますか?」
ヒツキー!?! つななつたんでヒツキーがここにいんの!?!」

「うるせえな、仮入部したんだよ、ついさつきだがな」

「あはは……部員なんだ……。 あ、あたしは由比ヶ浜結衣です」

あわわわ、ヒツキーが目の前にいる。ヒツキーに渡すのにヒツキーに教えてもらうつておかしいよね!?!

黒髪の超かわいい子が「雪ノ下雪乃よ」つて返してくれた。

「比企谷君、貴方彼女に何したの? 通報してあげましょうか?」

「オイ、気持ちわかるが出会って数時間で俺を犯罪者に仕立て上げるのはやめろ」

「そんなことより比企谷くん、由比ヶ浜さんに椅子を用意してあげたら？」

「俺の冤罪がそんなことかよ、まあいいけど。ほれここ座れ」

なんか仲よさそう…あたしのヒツキーが取られちゃう？ そんなのダメ！って思ってたなら「ヒツキー！何デレデレしてんの!? バカ！」と本音もれちゃった…アハハハ…

「俺、今労働してるよね？ いい眼科紹介してやろうか？」

「椅子だしてるだけじゃんか！」

あたしは二人に向かい合う様に座って、やりたい事を話した。

「つまり『おいしいクツキーを作る様になりたい』ということかしら」

「うん！そう！」

「クツキーは作り方が決まってるからそんなに難しくもないわ それじゃ、家庭科室に行きましようか」

「あ、ヒツキーに伝えとくね」

「そうね、お願い。由比ヶ浜さん」

ヒツキーは雪ノ下さんに頼まれてジュース買いに行ってくれた。文句言うけど結局やってくれるんだよね♪エへへ♪

ヒツキーに『家庭科室へ移動するよー(´へ´)／』って送つといた。

雪ノ下さんが手本を見せてくれて、あたしはそれをじっと見てた。

雪ノ下さんも簡単だからって言ってたしき。

あたしでもちよちよいつとできるよね。

雪ノ下さんのクツキーは美味しかった。これデパートで売ってるクツキーじゃない？って思えるくらい美味しかった。同じ手順でやればヒツキーにも美味しいクツキー食べてもらえる——

——と思っていた時期があたしにもありました。

できたのはやっぱり黒い塊だった。なんでよお！——ぐすん。

ヒツキーも合流して、味見してくれることになった。ヒツキーごめんね…

雪ノ下さんはテーブルに突っ伏してため息ついでる。タハハ：はあ。

「どうすれば伝わるのかしら…」

「やっぱ、あたしって才能ないのかなあ…」

あたしが思った事を口に出したら、雪ノ下さんが真剣な顔で言った。

「由比ヶ浜さん。その言葉は努力した人だけが言っているいい言葉よ。努力もしないうちから『才能がない』というのは努力している人への侮辱だわ」

「つでも、雪ノ下さんにも迷惑かけっぱなしだしさ、きつと向いてないんだよ。友達とかにもそう言われた事あるし」

「由比ヶ浜結衣さん。貴女、自分の向き不向きを他人に勝手に決められて悔しくないの？できない理由を他人のせいにするのもひどく不愉快だわ。」

ハッキリ言われた…苦しい。けどさ。本気で言ってくれたんだよね？今までの人たちとなんか違う。

これが叱るって事なんだろうな。あたしは嬉しくなって泣いてしまいたい。

でもちゃんといわなきゃ。ね。

「…ありがとう…」

「はっ…」

「あの、由比ヶ浜さん？話聞いてた？結構キツイ事言ったつもりなんだけど」

「うん、苦しいし、泣いちゃいそう。でもさ。雪ノ下さんが本気で叱ってくれたから…嬉しかったの。ごめんなさい雪ノ下さん、次はちゃんとやるから」



由比ヶ浜が雪ノ下に事細かく指導を受けながら、クッキー生地を練り上げる。

その表情は真剣であり、教えている雪ノ下もそれを見て『由比ヶ浜さんが真剣なのに私が手を抜く訳にはいかない』と容赦なく指導する。そうしてキツネ色に焼きあがったクッキーが完成した。

俺はは腹を労りつつ味見——いや毒味をする制作物を見る。

由比ヶ浜の確かな成長は見られるが、劇物と言っても過言ではないそれらをこれから腹に収める。

「やったあ〜！できたあ〜！」

「おめでどう、由比ヶ浜さん」

「…んじゃ、喰うぞ…」

クッキーを持つ手が震える。このクッキーは由比ヶ浜の努力の結果だ。それを食べないって事は彼女の努力を否定する事にならないだろうか？俺は覚悟を決めクッキーを？さくり？と咀嚼する。さつきの「物質」を？ゴリツ？と処理したが、これはまさしくクッキーの食感であった。ようやくクッキーが食べれる！と期待したのも束の間、口内に拡がる「物質」の味に、ささやかな期待は打ち砕かれた。「見た目は改善したのに…どうしてかしら」

「アレだ、由比ヶ浜が二度と料理しないって方法で良くないか？」

「ええ！ヒツキイ〜ひどいよおー！」

「比企谷君、それは最終手段よ」

「雪ノ下さんまで!?!」

「つーかお前ら、なんでおいしいクッキーに拘ってんの？」

「えっ？どうせなら美味しいの食べてほしいからにきまってんじやん！」

「…どういう事かしら？由比ヶ浜さんの努力が無駄だとしても言いたいのかしら？」

雪ノ下は怒りを帯びた声で言う。

「雪ノ下、話は最後まで聞け。今回の依頼はおいしいクッキーを作る事か？たしかに実際にやってみて作り方を学習させるのは必要だが、万人がおいしいと感じるクッキーを作るのは不可能だ。違うか？」

「…たしかにそうね」

「由比ヶ浜の努力が感じ取れたら、味とか見た目とかは重要ではない

んじゃないか？ それにな、男つてのは単純なんだ。去年の誕生日にホント久しぶりに祝ってもらったんだが、俺はプレゼントよりも、祝ってもらった事の方が嬉しかったんだ。あぁいや、プレゼントがどうでもいいって訳ではないからな？」

これが俺の正直な気持ちだ。祝つてくれる時点ですでに嬉しいし、自分の為に頑張ってくれた事が感じ取ればなんだったっていいだろ。あー、でもまともなクッキーが完成する前に卒業してそうだな。

「…ヒッキー」

「…そうね、それはよく理解できるわ」

「んでまあ、アレだ。奉仕分の方針としては、由比ヶ浜の努力を確認するってのが落とし所だと思うんだが、どうだ？雪ノ下」

「そうね、それなら奉仕部の理念とも合致するわ、由比ヶ浜さん、貴女はどう？」

「あたしもそうしてほしいな。雪ノ下さん、ありがとう！」

「由比ヶ浜、あんまり頻繁に持つてこなくていいからな？アレだ。3年に1度くらいでいいから」

「年単位だ！ 長いよお〜！作ったら味見してよお〜！」

「私も比企谷くんを支持するわ」

「雪ノ下さんまで!?!」

——翌日の放課後。

昨日平塚先生に勧められて仮入部してみたんだが、ここが以外と心地いい。

すごい静かだ。時計の針の音とページをめくる音しか聞こえない。何もなかったら読書やら勉強やらしていいし、雪ノ下が俺を罵倒してこなければ文句ないんだが。

俺がふと本から目線を上げると雪ノ下と目があつた。

「今日もヒマだな」

「ええ、そうね」

突然《ガラッ!》とドアが開き「やつはろー!」とアホっぽい挨拶が響いた。

「やつはろーゆきのん!ヒッキー!」

「こんにちは、由比ヶ浜さん」

「おう」

「その…ゆきのんっていうのはひよっとして私の事？」

「そっだよー雪乃だからゆきのん♪」

雪ノ下が明確な拒否をしている。しかし由比ヶ浜には話が通じていないのか一方的にまくし立ててゆきのん呼びが定着した。

こうなった由比ヶ浜は動かない、雪ノ下諦める。もう手遅れたぞ？雪ノ下がしぶしぶ諦めて「ハア…」としてると由比ヶ浜が「ゆきのん♪ゆきのーん♪」って抱き着いてた。

美少女が美少女に抱き着いて抱き着かれた美少女は「ちよっと…近いわから離れて…」と口では嫌がつてはいるけど突き放したりはしない。むしろあの「離れて…」ってのは「もっ」とって意味だろう。

そーいや由比ヶ浜が来る前に雪ノ下から聞いたんだが、春仁もこの部員らしい。

でもバイトある日はそっち優先でいないんだそうさ。

平塚先生からは「ためしに入ってみたらどうだ？続けるかどうかは任せよう」って言ってくれたけど、案外ここの空気も悪くないんじゃないだろうか？今日で「やっぱやめとくわ」って言おうとしたけどその選択肢は捨ててしまおう。

俺はいちやこらしてる百合ノ下と百合ヶ浜から本に目線を逸らしひとりごちる。

「今日の由比ヶ浜はピンクか」

第11話

「平塚先生」

「ああ、柊。わざわざすまないね」

俺は平塚先生から『放課後に職員室にきたまえ』と言われ、職員室を訪れていた。隣の応接室に通され用件を聞く。

「柊、部活はどうかね？ ああそうだとクツキー美味かったよ。感謝する」

「お口にあつたようでよかったです。おかげさまで周りは平和になりました、9年ぶりの再会もできましたし、ありがとうございます」

「はは、それはよかった。それで来てもらった件だが…」

「成績の事…ですか？」

「察しが良くて助かるよ」

俺の成績は学年総合三位に落ちた。俺も勉強をしていない訳ではないが、記憶力に頼りすぎるきらいがある。

人間が衰えるのは必然であり、記憶力も例外ではない。

「学生における『勉強』とはテストの点を取るのではなく、勉強する事を『習慣』とする事だ。」

しかし俺はバイトがあり習慣になりづらい。それが今回の原因だ。高校2年生にもなれば、進路や将来の事を考える必要が出てくる。

それを考えるのは早いにこしたことはないのだ。

「柊、まだ早いと感じるかもしれないが、高校卒業後はどう考えてるのかね？」

「…：…そうですね。大学には行きたいと考えてますが、その先まではまだですね…」

「そうか、ちゃんと考えてるみたいだな。なら、アルバイトはまだ必要かね？」

「ああバイトは目標金額まであと少しですから、それで辞めますよ。流石に今のままで大学に行けるとは思えません」

「よし、ちゃんと理解している様でなによりだ。可能であれば大学で、何を学びたいかも視野に入れておきたまえ」

「…はい」

俺は一礼して退室し、奉仕部に向かう。何やら大きな声が聞こえるので「何事か？」とごちつて奉仕部のドアを《ガラツ》と空けた。

「あら、こんにちは。ハル」

「やつはろー！ハル君！」

ユキと結衣に「よう」と挨拶を返す。八幡は何やら怪しい男の友人？——いや知人とめんどくさそうに話していた。八幡にどうしたと内容を聞いた所、この怪しい男『剣豪將軍』材木座義輝が書いた小説を読んで、感想を伝える』という事らしい。八幡個人宛と思えば奉仕部宛の依頼だった。

「はあ…まためんどくさい事を…」

「それで、なんでここに来たんだ？材木座」

「うむ！以前平塚教諭にここに行けば願いを叶えてくれると言われてな！参上した次第である！」

材木座君は所謂中二病だ。八幡がユキと結衣に説明すると「つまりあれを治せばいいのね？」とユキがぶつ飛んだ解決策を提案し、「キモい！」と結衣が拒否反応を明確に示した。

材木座と八幡の関係は『忘れたのか！あの苦痛に満ちた時間を！』とにも走った仲ではないか！』なんか色々捏造されてる気がするが、要約すると体育でペア組んだだけという関係だった。

言い回しが大層なのは気にならない、むしろ本人がやりたいなら好きにしたらしい。

——しかしだ。俺と話す時はペコペコし、ユキと結衣に至っては、女子と話すのが苦手なのか恥ずかしいのか知らんがまともに会話をしない。

マトモに話せるのは八幡だけという状況に次第に俺はイライラしていった。

しかし俺もガキじゃないし、最低限の礼儀はわきまえてる。いきなり怒鳴ったり、拒否したりはしない。

「ちよつといいかな？材木座君」

「…なな、なんででしょうか？」

「奉仕部への依頼なんだよね？」

「…は、はい…その通り…です」

「奉仕部の理念はね、自立を促す事なんだ。例えば『飢えてる人に魚ではなく釣り竿を与える』という事なんだ、これはわかるよね？」

「しよ、しよれは理解できましゆ」

「なら、俺たちは『感想を貰える様に、材木座君を自立させる』って対応になるんだが…あってるか？ユキ」

「ええ春仁。あってるわ」

「なら奉仕部への材木座君の依頼は『小説投稿サイトに投稿する手段を教える』で解決だ」

材木座君は予想を裏切られたと思ったのか、大きな声で訴える。

「なぬっ！八幡!!話が違うではないかあ！我との盟約を忘れたかあ！」

「うるさいぞ、声を落とせ材木座。つつか話してねえし、盟約もしてねえだろうが、作り話は小説の中だけにしろ」

八幡のいう事は正しい。熱意が本物なら発言に嘘がまざるのはダメなんじゃないか？

俺は誠意のない人間が嫌いだ。自分で最低限の事もやらないうちに他人に頼ってくる神経に虫唾が走る。

「材木座君、何故小説を書いているの？」

「書きたいから書いているのだ！」

書きたいから書く。ね。

「書くだけなら感想もらう必要はないんじゃないかな？」

「……………我は！小説家になりたいのだ！」

「それで、上手くできてるか解らないから感想がほしいって事？」

俺は苛立っているだろうな。無理矢理な笑顔作ってる、つか絶対目が笑っていない。

他の三人は絶対気付くだろうな…八幡は一緒に一年以上一緒に生活してるし、結衣は空気読める。

ユキに至っては幼馴染だ。

俺はあまり怒らない様にしてる。暴力に走ってしまうと八幡と結

衣、もちろんユキも悲しむからな…。

俺のあんな姿はできるだけ見せたくない。八幡には見られてるけどな。

「その通りだ。我には読んでくれる盟友など八幡以外におらぬ」

「八幡、ユキ。 どうするんだ？」

「…奉仕部の依頼だし、春仁の案でいいと思うぞ」

「私もそれならいいわ」

「はちまああああん！」

「うひゃあ！ちゆうにキモい！」

材木座君が八幡にすぎり、泣きついた。

自分の要望が通らなかつたら泣き落としかよ。結衣怖がつてるし。

結衣はまあいいか。

「だああ！うつとおしい。離れろ！ ハア…じゃあ折衷案だ…聞け材

木座。 お前はひとまず投稿サイトに作品をアップしろ、それから他人

が出した評価を俺たちが一緒に見る。これならどうだ？」

「それなら奉仕部の理念には反しないわね」

八幡の案は『小説投稿サイトに作品を投稿し、書かれた感想や評価を確認する事』だった。

これであれば、第三者目線からの指摘、改善点。ひいては本人のメンタル強化に繋がるだろう。

まさに奉仕部の理念に最もふさわしい。流石だ八幡。

「ちよつとくらい読んでみてくれてもいいではないか!!」

——は？ つと我慢だ我慢。

「材木座君、読んでほしいなら、せめてその態度を改めてくれないかな？」

俺の堪忍袋も限界が近い、なんで初対面の相手に無礼な態度でごちやごちや言われなきやなんねえんだ？

そもそもコイツの我儘を依頼ってだけでうけなきやならんのか？

そんな仕事給料もらってもお断りだ。

「どこに改める必要があるのだ？ちゃんと頭を下げて頼んでいないではないか？ どうしてこうリア充共は上に立ちたがるのか、我には理解

できん」

「ああそうかよ、じゃあな」

「……………ハル……」

奉仕部の空気が凍り付いたのが解る。俺は何事もなかったかの様に下校した。ユキごめん。



春仁が真顔で「じゃあな」って帰った。あの顔はマズい、中学3年の時に女子の顔ボコボコにした時の顔に近い。

もう春仁には暴力を振るってほしくない。もし春仁が退学とかになったら二度と会えない気がする。

そんなのはダメだ。俺は春仁を独りにしたくない。

「材木座…お前なあ…春仁怒らせんなよ…」

「……………」

こいつ黙ってるけど解ってるのか？ ハア…フォロー入れんの俺なんだから、余計な事しないでほしい。

ホントめんどくさい。

「雪ノ下、由比ヶ浜。大丈夫か？」

「ええ…大丈夫よ。ハル…心配だわ」

「はああああー、こわかったよおー！」

やっぱ一緒にいた時間が違うか。大丈夫そうだ。

「我の…どこがおかしかったと言うのだ！」

「『全部！』」

「……………すいません」

春仁が退室した後に残され俺たちは、先程の反省会を行う事にした。

言っちゃアレだが、春仁の事を少しだけ話した。雪ノ下は知ってるみたいだったけど。

「げいもく、ぎょ？君。正直に言うけれど、本当は私も依頼は受けたくないわ。ハルの事もあるのだし」

「……ゆきのん。うん、あたしもそうかな」

「由比ヶ浜さん。その呼び方はやめて頂戴って言ってるでしょ？」

「いいじゃん！ゆきのんゆきのん♪」

「ちよっ…近いわ。 由比ヶ浜さん」

「お前ら…百合百合すんな。んで受けたくない理由って…アレか？」

「我にも教えて頂きたい…」

「材木座、お前マジで解ってないのか？いいか？——」

めんどくさい、ほんとめんどくさい。でも言わないと春仁が遠くに行ってしまう可能性が上がる。

それは俺がイヤだ。そうだ。この説明は俺の為だ。

「——まず、お前は嘘をついた。体育でペアになったのは事実だが、俺達は友達ではない。あと盟約するのはお前の妄想であって、そんな話もしていない」

「次に、頭を下げたと行ってたが、俺以外に下げてないし、『お願いします』すら言っていない。雪ノ下と由比ヶ浜に至ってはロクに会話もしていない。んでアレだ。要望通らなかつたら泣きついて来ただろ、お前」

「最後に、春仁が歩み寄ったがお前はそれを突っぱねた。以上だ。何か質問ある？」

「我は嘘などつ——」

「ああ材木座、アレだ、先に言っておくぞ。お前が中二病だからとか、俺らには関係ないからな？よく考えて発言してくれ」

危ない…いらん事言わんでくれ。

「雪ノ下と由比ヶ浜はなんかあるか？この際だ、言いたい事言っていだろ。つか、お前らは完全にとぼっちりだしな」

「…そうね、私からはひとつだけ。〃口は災いの元〃とだけ言っておくわ」

「…あたしはハル君にちゃんと謝ってほしいかな。あたしたちじゃないくてさ」

「由比ヶ浜、謝罪は逆効果だ。今の材木座は春仁の視界に写らない」

「そっか、うん。やっぱり…そうなっちゃうか」

由比ヶ浜はやっぱり優しいな。雪ノ下は遠回しに「もう話さない方がいい」って言ってるな。辛辣だ。

「我はそこまでの事をしたのか!? それに八幡! 何故それを言い切るのだ!」

「春仁は俺の兄貴だ」

「ツなんだとお!! なんて黙っておったのだ!」

材木座: いい加減その芝居やめてほしい。日常なら問題ないよ? 今は非日常だからね? そこんところよろしく。

「まあ従兄弟だけだな、あと春仁のメシはマジで美味しい。ってゆーか、お前に教える必要ねえだろ?」

「え? 同じ家? でも終って…」

「お前が何考えようと知らんけどな、雪ノ下も言ってただろ? 〃口は災いの元」だって。その意味から調べてこい、小説書く以前の問題だぞ」

材木座は言葉が出ないようだ。まあそうだろうな。

「…材木座、自分が言った事おぼえてるか?」

「……覚えておる」

「ならいいんじゃないの? 知らんけど。それと雪ノ下、材木座の依頼受けるんだろ?」

「ええ、比企谷君の案で受けるわ」

「だそうだ、材木座。作品、サイトにアップしとけよ?」

「……心得た」



翌日になった。俺は少し思い返す。

あの時はかなり頭に血が上って危なかった。落ち着いてからユキに『ごめん』とだけメール入れたら『大丈夫』とだけ返信があった。

校庭が見えるベンチに座ってぼーっとしていると八幡が隣に座って来た。

「春仁」

「どうした八幡?」

「ごめんなさい」

「ど、どうした八幡?何かあったのか?」

「材木座の件だ。あの後に春仁と俺の関係を少しだけ話した」

「なるほど。それでごめんなさいか」

八幡は俺の過去を、勝手に話してしまった事を謝罪する。材木座君を納得させる為とはいえ、勝手に話した事は事実だ。八幡はそれを気にしていたのだろう。

「八幡、ありがとな。もう気にしてない。大丈夫だ」

「本当?怒ってない?」

「その言い方可愛いな。本当だ。気にするなら罰を与えてもいいけど?」

「この話は終わろう、そうしようむしろそれがいい」

「はは、そうだな」

俺は全く気にしていなかった。というか気にしない様に「した」。つまり材木座義輝という人間は俺の世界には存在しない。小説家になりたい夢を持つてる?中二病を拗らせた?友達がいらない?」

「それがどうした」

かの自由惑星同盟軍第13艦隊分艦隊司令官のアツテンボ〇ー中将が言うには最強の言葉だそうだ。たしかに強い。

「材木座の依頼は俺の案で受けた、そんだけだ」

「そうか」

ユキと結衣にも少し悪い事したな、後でちゃんと謝っておこう。

——さらに翌日。の放課後。

今日も今日とて奉仕部に向かう。

昨日結衣にちゃんと謝ったらすぐく心配された。それでいったん話は終わったんだが——

「ゆきのんとどういう関係なの!」——ってめっちゃ迫って来たからこれから話さないといけなくなった。

ホント子犬みたいな子だな。興味持ったら一直線で間違えない。

ちゃんと考えてるのはわかるんだが、もうちよつと周りに気を使っ

てほしい。

『パンツ見えてるよ』とか俺から言えんだろ。ちなみに水色だった。

「よう、ユキ早いな」

「こんにちは、ハル」

少しして「やつはろー」と結衣が入って来た。いつもの席に座る。

教室の黒板側が依頼者の席、その反対側の窓側にユキ、その隣に結衣、その隣に俺、ドア側の端に八幡って感じになってきてる。

「ハル君！ゆきのん！」

「昼間の件か？」

ユキは首を傾げてきよとんとしている。

「そうーふたりはどんな関係なの？ そっその…つつつつつき合ってるのっ!？」

俺とユキが揃って『幼馴染』と答えた。今度は結衣が「はえ？」つてきよとんとした。

もう！ お前らあ！ 可愛いから自重してくれ。

「あはは…そうなんだ。なんかさ。 すぐく自然な距離だからさ。

特別なのかなーって思って」

「特別、そうねハルは特別な人だわ」

「俺もそうだな、ユキは特別だ」

「つきあってんじゃん！」

『違う』

結衣の顔が赤くなってきた。そろそろ暴走しそうだし、アレ使ってみるか。

俺はカバンからアレを取り出し「結衣」って呼んで「ん？何？」こつち向かせてこれを《スツ》とつければ。

「ほらユキ」

「ああ…猫…にゃく♪」

結衣が暴走しそうだったからユキを暴走させて沈めてみる試みは成功を収めた。

ユキが「にゃー♪」って可愛く鳴きながらネコミミカチーシャ装備の結衣を《なでなで》としている。

「えっ？　ちよっ！ゆきのん？　ゆきのん!?　うひゃあ！　待って
待って！ゆきゆう…はふう」

「うふふふふ。可愛いわ。ほらにゃくんと鳴きなさい」

「はふう。　あうう。　んにゃー…えへへえ」

「……………」

「ユキ、ほどほどにな」

「ええ、ごめんなさい」

何事もなかったかの様に俺とユキは読書が始める。放置された結衣は顔を真っ赤にしてぷるぷる震えてる。

俺が「結衣？どうした？」と聞くと「ふたりともひどいよお！ちやんと相手してよお！」とおねだりしてきた。

ユキが「うふふ♪　仕方ない子ね♪」と再び愛でていた。今度はユキに犬耳カチューシャ着けてみよう。

ユキは猫の事になると周りが見えなくなる。

スカートめくられてたから黙ってさっさと直しといた。

ピンクだった。

第12話

材木座がようやく作品をネットにアップした。あいつが言うにはぼつぼつコメントも来てるらしい。

ちよつとスマホで覗いてみたんだが、最初にごちやごちやと世界観やら主人公の説明のくだり多すぎて本編の内容あんまりなかった。

流石の俺でもあれはキツイ、正直見る気失せた。あとはネットの暇人に任せよう。

皆さま、どうぞご存分に。

そんなことを考えながら俺は普段弁当を食べてるベンチに移動して、ぽかぽかと春を感じながら1人の時間を満喫する。2年になってからは、春仁も由比ヶ浜も奉仕部でお昼休みを過ごしている様だ。

先日クラスのトップカーストの金髪縦ロールと由比ヶ浜がなにやら揉めてた様だが「ゆきのんが待つてるから」ってきっぱり言ってたな。縦ロールはなんとも言えない表情してた。

俺も気が向いたら行こうと思う。多分。そのうち。気が向いたら。最初は由比ヶ浜に無理矢理連れていかれたが、俺が嫌がると誘わなくなつた。

いや、嬉しいんだけどさ。メシくらい静かに喰いたいし、一人でぼーつとしたい時間も大切だと思う。

何より3人の邪魔したくない。

春仁と雪ノ下は幼馴染って聞いたし、由比ヶ浜は雪ノ下大好きだし…春仁も気になってんだらうな…

食事を終えてMAXコーヒーをくぴりと飲む。あ？ああ…んま

い。
「あれ？ ヒツキーなにしてんの？」

「うひあー！」

「あはは。 ヒツキー、変な声出てるよ」

「んぐつ。 急に話しかけられたら誰でもびっくりするだろ。 ってか由比ヶ浜は部屋じゃなかったのか？」

「うん！ ゆきのんとゲームしてたの。 ジャン負けでジュース奢るっ

てやつね。んでき。最初はゆきのんも『くだらないわね』とかいろいろ言ってたんだけどね。あたしが『へえーゆきのん勝つ自信ないんだね』って言ったらす。ぷつくく…『由比ヶ浜さん、それで挑発のつもりなの？ いいわよ、後悔させてあげるわ』って言ってね。 あっははは。その時のゆきのん超可愛かったんだよ！ ハル君も笑い堪えててき。ふるふるしてた！」

「それで負けたのか。雪ノ下のドヤ顔が目には浮かぶな。『私の勝ちね由比ヶ浜さん。いつでもかかってらっしゃい』とか言ってそうだ」「あはははは！ ヒッキー似てる!! でも、それは言ってなかったけどさ、小さくガッツポーズはしてたよ。ゆきのん」

雪ノ下の初見はなんというか…いきなり通報されそうだったからな。なかなか可愛らしい一面をお持ちの様で何よりだ。本人に言ったら何されるかわからんから言わんけど。いやでもアレだ。そんな一面あるならちよつとは仕返ししてみようかなって考えてしまう。今度怒らない程度にイジってみよう。

「あつ。 さいちゃん。 やっはろー！」

「や、やっはろー由比ヶ浜さん」

由比ヶ浜の友達だろうか？と声をする方へ視線を向ける。

ジャージを着てテニスラケットを持った“女”生徒が、こちらへ歩いてきてにこやかな笑顔で返事していた。

めっっちゃ可愛い…由比ヶ浜や雪ノ下も相当レベルが高いが、この子もかなり可愛い。

「あつ 比企谷君…だよな？」

「お、おう。そうだが…で、誰？」

「知らないんだ!? 同じクラスだよ!」

「アハハハ…えつと。 戸塚彩加です。よろしくね。比企谷君」

俺は戸塚さんから目が離せない。何？この曇りなき笑顔。

人か？いや天使だ。天使でいい。

ってか。この笑顔はやばい…ど真ん中だ。ど真ん中すぎてバツトが折れるまである。

アナタを好きになっていいですか？好きになって、告白して…振ら

れて。ってそれあかんやつや。

「えつと…比企谷君？」

「…はっ！…どうした？戸塚さん」

「むう〜！ヒツキーきもい！なんで男の子にでれでれしてんの!!」

——は？

いやどう見ても女だろ。こんな可愛い男がいるワケがない。

「あはは… ボク、真正正銘の男なだけど…」

まじかあ〜男だったかあ〜。振られる率が天元突破してたわ危ない危ない。また黒い歴史が1ページ増える所だった。

イヤだから告白から離れようね。八幡君？

「そつ、そうか。ところで、戸塚はテニス部か。がんばってんだな」

「うん。比企谷君もテニス上手だよね！体育の時のフォームがすごく綺麗だし、ちよつと声掛けようかなって思ってたん——」

「戸塚。俺と一緒に壁打ちしないか？」

俺は戸塚の手をギュツと握って言う「ヒツキーそれ2人の意味ないし！」由比ヶ浜、少し黙れ。ばれるだろ。

「あはは…壁打ちは今度でいいかな…。それよりちよつとお願いがあるんだけど」

「どうしたの？さいちちゃん」

聴けばテニス部に入ってほしいという事だった。

しかし俺は既に奉仕部に入っているので入部ができない。

それを言うとすぐ残念な顔をしたので心が締め付けられた。

罪を少しでも軽くしたい俺は、奉仕部へ依頼したらどうだ？と提案した。そしたら「ありがとう比企谷君！」と言って戸塚スマイルが俺に直撃した。

キンコンカンコンと昼休み終了のお知らせが鳴った。そういえば由比ヶ浜はなんでここにいたんだっけ？

「由比ヶ浜」

「なに？」

「お前、ジュースは？」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
今日の昼間のユキはなんとというか相変わらずだった。じゃんけん勝ってガッツポーズとか。もうね。

午後の授業も終わり、俺は奉仕部でユキが淹れてくれた紅茶を味わっている。八幡も指定席に座って「おお：美味い」ってくびくび飲んでるところに「やつはろー！」と結衣が来た。

俺がバイトしてる事もあり、4人が揃うのはなんだか久しぶりな気がする。

「今日は依頼人を連れて来たよー」

「あれ？ 柊君もこの部員なんだ」

依頼人は戸塚君だった。

少し前にテニス部に勧誘されて《バイトガ》使って断ったんだけど、その時の罪悪感がやばかった。なんかこう、胸が苦しくなった。

上目遣いで『だめ？』とか覚えたら逆らえない気がする。

可愛いだろうなあ：だが男だ。

戸塚君の依頼はテニス部を強くしたいって事だった。

「うちのテニス部ね、すごく弱いんだ：3年が引退したらもつと弱くなる」

「なるほど、それで奉仕部に依頼に来たという事ね」

「それでね、ボクがテニスうまくなればみんなもやる気出してくれると思うんだ」

「じゃあ私たちは戸塚君の練習のサポートをする。という事になるのかしら？」

「そうなるな、練習メニュー考えたり、マネージャー的な人員がいるだけでも大分違うだろうし」

今日の放課後から戸塚君へのサポートが開始される事になった。

ユキが「とりあえず、死ぬまで走る、死ぬまで素振りね」とか言っていたけど、無視したらちよつと拗ねてた。

後でネコミミ結衣を与える約束したら機嫌なおしてくれた。結衣には何も言っていないけどまあ大丈夫だろ。あの子ユキの事好きだし。

トレーニングは基礎体力作りから開始となった。

——ランニング

準備運動を済ませだいたい2キロほど軽く流して走る、軽く汗をか
くくらいがベストだ。

今本気で走る必要はないだろう。テニスに必要なのは瞬発力と持
久力ではないだろうか。速く走れるにこしたことはないが、優先度は
それほど高くない。何より身体を起こす事が大事だ。

結衣も走ってた。超がんばれ。

——腕立て伏せ

手の位置を変えつつ50回ほどこなす。ここでも必要以上にやる
事はない。腕に求められるのはしなやかさだ。

腕に負荷をかけた状態でラケットを握る事がトレーニングのポイ
ントだろう。

八幡が地味に鍛えてるみたいで難なくこなしてた。戸塚君は少し
辛そうだ。

——球出し

ユキがギリギリとれるかどうかの位置にボールを送り戸塚君が打
ち返す。戸塚君の膝が笑いだしたのを見て柔軟をして今日は終了と
なった。

八幡が撮影した動画でユキのフォームと自分のフォームを家で確
認してもらおう。

「すごいね！短時間でもこれだけできるって始めてだよ！」

「雪ノ下だしな、さつき死ぬまで走るとか言っただけど、それじゃなくて
良かったわ」

——翌日の昼休み。

さつと昼食を終えて、俺と八幡と戸塚君は校庭にあるテニスコート
に向かう。ユキと結衣は、奉仕部でジャージに着替えてからテニス
コートの申請を出して合流する予定だ。

昼休憩の時間はそれほど多くない事もあり。軽く試合形式で練習
しようという運びになった。

戸塚君の相手はユキと俺が勤める。ユキは体力がないから、俺がユ

キの交代要員って訳だ。八幡はスマホで撮影役をやってもらおう、これは戸塚君からのお願いもあったし、八幡も快諾した。

結衣はマネージャーとしてベンチに控えてもらった。

ポコーンポコーンとラケットの音が繰り返される最中、ユキがきわどい位置にスマッシュを打ち込んだ。それに戸塚君が素早く反応して打ち返しそうとする。彼は今までトレーニングはひとりですつと続けていたのだろう、一朝一夕ではできない動きだった。

俺は戸塚君の一生懸命な姿勢を応援したい。自然とそう思える。

「うわっ！」

戸塚君の脚が言う事を聞かなかった様で派手に転倒してしまった。

それを見て結衣が駆け寄る。膝は擦りむいた様で出血していた。

それよりも、少し変な転び方をしてたから捻挫が危ぶまれる。

「さいちゃん、大丈夫？」

「イタタ：大丈夫だよ。ありがとう。由比ヶ浜さん」

戸塚君が立ち上がるが少し様子がおかしい。きつと足首を捻ったのだろう。少しだけ違和感のある歩き方をしている。

「雪ノ下さん。続きをお願い」

「……まだやるつもりなの？」

「うん、やりたいんだ。お願い、雪ノ下さん」

「わかったわ、でも先に応急処置をしましょう」

「戸塚、捻挫を甘く見るなよ？あれはクセになりやすいからな」

怪我をしても戸塚君の熱意は冷めなかった。それほど本気なのだ。

それがユキにも、八幡にも、もちろん結衣にもビシビシ伝わってるだろう。

結衣は優しく戸塚君を支えてベンチに座らせ、ユキは「保健室に行ってくるわ」と言って消毒液を取りに行った。

「ありがとう。みんな！」

「戸塚、テーピングするから——」

「あつれー！ テニスやってんじやーん！ ねえ、隼人お、あーしもテニスしたあーい」

偏差値低そうな声の方を見ると、制服であるブレザーに身を包んだ

美少女と言って差し支えない金髪の女子が立っていた。たしか名前はみうら？だったか。くだらない話を大声でしてるので俺は良い印象は持っていない。

八幡のいうクラスカーストとやらの上位に君臨する女王様らしい。隣には例の葉山君が爽やかな顔をしている。

「そうだね、ちよつと遊んでいこうか。由美子」

遊び？

遊びだと？

こいつら俺らがジャージ着てんの見えてないのか？ ただの遊びに見えるのか？ 戸塚君が一生懸命に打ち込んでる邪魔をするのか？ たしか葉山君はサッカー部だったよね…

「み、三浦さん。 ボク達…遊んでる訳じゃ——」

「ああ？ きこえないんですけどお〜」

戸塚君が三浦さんに睨まれてしゅんとした。それを見兼ねた八幡が割って入る。

「こつちは部活でやってんだ。遊んでる様に見えるのかよ。それに、こつちはちゃんと許可取ってんだ、部外者は入ってくんな」

「はあ？ あんたらテニス部じゃないっしょ？ あんたらも部外者——」

「まあまあ、由美子落ち着いて。ヒキタニ君だったかな。どうだい？ みんなでやった方が戸塚君の為になると思うんだ。どうかな？」

八幡が「ハッ」と鼻で嘲笑って続けようとするが、俺は我慢する事をやめた。

「おい、葉山隼人」

「柊君、何かな？」

「お前、戸塚君が一生懸命にやってるのわかってて言ってるんだよな？」
俺が怒気を存分に込めて言うと葉山君はたじろいで答える。

「あ、ああ。もちろんわかってるよ。ただ上手い人と練習した方がいいと思うってね、実際に由美子はテニス経験者だよ」

「そうか、ならサッカー部で同じ事しても笑ってられるって事でいいんだよな？」

「え？いや。なんで——」

「いいんだよな!?!はつきり答える!!」

「……………」

葉山君は黙って俯いた。自分が何をしたのか考えてるのか、それとも理解したのか。もうどうでもいい。いまさら遅いし許さない。トップカーストかなんだか知らんが、他人が真剣に打ち込んでる場所に勝手に上がり込んでそれを奪うって行為がどれだけ残酷な事か教えてやろう。

「つちよーひーらぎーあーしはただテニスしたいだけだし！隼人は関係ないっしょ!?!」

俺は三浦を無視してベンチの戸塚の所へ向かい、八幡達3人に話す。

「戸塚君、大丈夫か?」

「う、うん…大丈夫。だよ。あの柊君。僕の事で怒ってくれるのは嬉しいけど。ちよつと怖い…かな」

「春仁。気持ちはわかるが落ち着いてくれ。たのむ」

戸塚君の足首を見ると少し腫れていた。捻挫だと見てわかる。

「この足じゃ昼の練習はできないな。放課後に足を使わないトレーニングをしよう」

「…………ハル君」

俺は結衣にユキへの連絡をお願いして、戸塚君を負ぶって保健室へ向かう。保健室に着くとユキが待っていてくれて、膝の消毒と足首を固定させる為にテーピングを施術した。八幡によると、結局テニスコートは使われてなかったらしい。

俺達はユキに事の顛末を話した。

「そう…そんな事があったのね」

ユキの悲しそうな表情に結衣も黙ってしまう。八幡も顔が険しい。こいつも思うところがあるようだ。

戸塚君は「もういいよ、まだがんばれるから」と笑顔を見せる。

俺は今日の放課後に、意外な結末が訪れる事を知る由もなかった。

第13話

気が付けば今日の授業は終わっていて、教室はがらんとしていた。午後の授業はなんだっただろうか。あまりよく覚えていない。ノートを見直してみたらちゃんと俺の字で書いてた。記憶にならない。

俺はそれほど腹が立ってたのかと反省する。

テニスコートで頭が熱くなって、怒鳴って…あいつらに気を遣わせてしまった。

俺もまだまだって事か。

しかし、よく手を出さなかったと思う。

いつのまにかグツと握りしめていた左手の力を抜く。

手のひらを見てみると爪の後が赤くじんわりとついていた。

俺は冷静に考える。

さっきのでわかった、わかってしまった。葉山君は何も成長していない。ユキが酷い目に遭ったことも、アメリカに留学した真相も、一切気づいていない。会えなくて寂しいくらいにしか思っていないのだろう。

ユキの事も戸塚君の事も、最早過去の事だ。今更何を言っても変わる事などない。

何故アイツが他人の心を、気持ちを踏みにじって、平然としてられるのか分からない。俺の怒りは既に消え失せていた。

「あの…春仁君」

「…ああ、相模さんか。どうした？」

「えっと…みんな帰ったのにまだいるから…何かあったのかなって」

「そんな顔してたか…ありがと相模さん。大丈夫だから」

「あつ…うん」

俺は教室を出て奉仕部へ向かう。

「すまん。遅くなった」

「こんにちは。ハル」

「おう」

「結衣は？」

「オトモダチとお話。だそうよ」

「柊君。声かけても反応ないんだもん。寝てるかと思っちゃった」

「すまんすまん。少し考え事しててな」

どうやら昼間の件について話してたようだ。俺は素直にみんなに謝罪し、みんなはそれぞれの言葉で俺を許してくれた。

「春仁、葉山はどうするんだ？あの言い方だとサッカー部に乗り込んでやり返すのか？」

「その選択肢は最初に考えたけど、俺は戸塚君に謝罪してもらいたいな」

八幡が「だよな」と言う。

俺はアイツと同レベルの事をするのが恥ずかしい。

アイツは「みんな仲良く」が根幹にあるのだろう。あの場を丸く収めようとした。それ自体はいい。

しかしそれは状況によりけりだろう。戸塚が怪我をしているのがわかっていいるなら、気遣う一言があつて然るべきではないか？

「ボクはいいんだけど…ケンカはよくないよ？」

「普通は戸塚が許せば終わりなんだが…春仁はそれじゃ納得できないってよ」

「ああ、納得はできない。じゃあみんなは納得できるか？自分の「友達」が一生懸命がんばってる事を蔑ろにされて、黙ってられるか？」

「スマン春仁。それは俺も無理だ」

「私も我慢できないわね。由比ヶ浜さんのクッキーの時がそうだったわ」

「うん。自分なら我慢できるけど、ボクもそれはイヤだな」

ここにはいない結衣もきつと同じ考えだ。伊達に1年間友達やってないからな。それくらい分かる。

そうしたら三浦さんを連れて結衣が部室に「やつはろー」と戻って来た。いつもより元気がない。

結衣の後に続いて三浦さんが入って来た。正直意外だった。

彼女は結衣と昼の事を話してたのだろう。少し俯いており、表情が

少し暗い。

ひとまず、結衣に椅子を用意してもらい、彼女に座ってもらった。「優美子がね。みんなに話あるんだって。ハンパな気持ちじゃないから聴いてほしいな」

少しの沈黙の後に三浦さんが口を開いた。

「戸塚、部活の邪魔して…ごめんなさい」

「三浦さん…ボクはいいんだけど、ボクを友達だって言ってくれてる人たちが納得できないと思うんだ。だからね。理由を教えてほしいな」

三浦さんはこちらを見る。俺達は彼女と視線を合わせて小さく頷いた。

「戸塚が羨ましかった。一生懸命テニスやって、それを支えてくれる人がいるのがすごく羨ましくて…気付いたらあんな態度取ってた…ほんと…ごめ…んなさ…い」

「うん…わかった。もういいよ三浦さん」

三浦さんは涙を流しながら本心を打ち明けてくれた。彼女も一生懸命にテニスやっていたのだろう。

俺たちは彼女が話し終わるまで静かに聞いていた。結衣は優しく微笑んで彼女の頭を「よしよし」と撫でていた。

三浦さんがひとしきり泣いた後、結衣が「ちよつと行ってくるね」と言って彼女を連れて出て行って、数分後に戻って来た。

おそらくメイクを直しに行ったのだろう。目は赤く腫れているがスツキリとした表情をしていた

その顔は凜々しく、俺は少し見惚れてしまった。

「三浦優美子さん」

「ひーらぎ…なんだし」

「俺も貴女を巻き込んだ。ごめん。それと戸塚に謝りに来てくれて、ありがとう」

「…ひぐつ…ううえ…」

あ、俺やらかしたか？

「ハル…貴方意外と鬼畜なのね。何度女性を泣かせれば済むのかしら

？ほら三浦さん、温かい紅茶よ」

「やっぱ春仁は鬼いちゃんだな」

「優美子くよしよし。ハル君…前科あるんだ」

「なんだお前ら！俺を犯罪者みたく言うな！心に来るだろ」

戸塚君はこの状況を見てすっごくいい笑顔をしている。

「あら、私も由比ヶ浜さんも、貴方に泣かされているのだけれど？」

「っぐー…その話は俺に効くからやめてくれ」

「春仁…一体何やったんだ？自首したら楽になるぞ。多分」

「八幡。犯人わかってんだから出頭な。ってそうじゃねえよ」

「ぶっくく…あははははー！」

戸塚君と三浦さんがお腹を抱えて笑い出した。

ユキと結衣が微笑んで、俺と八幡が眉をハの字にして肩をすくめる。

三浦さんが元気になった様でなによりなんだが、こいつらにはいずれお灸が必要の様だ。



葉山せんぱいの様子が少しおかしい。いつもは“彼の”マネージャーに愛想振りまいてるのに、今日は少し暗く見える。なんだか調子狂っちゃう。

わたしがサッカー部に入部したのもマネージャーとして葉山せんぱいに認められたかったから。

だからわたしは手を抜かない。がんばってる“一色いろは”をみてほしいから。

認められたわたしは、どんな景色を見れるのだろうか。わたしはそれが知りたい。

あの時に泣いてたわたしを助けてくれた人と同じ景色が見れるだろうか。

仕事しないマネがひそひそ話してる事が耳に入る。わたしは自然と聞き耳を立ててしまった。

聞こえて来たのは『柘先輩と葉山先輩が揉めた』って事だった。

——柘せんぱい。わたしはまだ見た事がないけど、葉山せんぱいと
同じくらいの有名人。

だけどわたしはまだ見た事がない。どんな人なんだろうか…

柘せんぱいに聞けば葉山せんぱいが暗い事もわかるかもしれない
と思い、私は他の女子マネから奉仕部の事を聞き出してそこに向かっ
た。

特別棟の4階の端に電気がついてる教室があった。わたしはそこ
の扉をノックする。中からの『どうぞ』に応える様に扉を開けた。

「こんにちはあー」

そこには5人の生徒が談笑していた。リボンの色から全員2年生
である事がわかった私は「可愛い後輩の私」に切り替えて話を切り
出そうとした——のだけど…

「柘せんぱいっていらっしやいますかあ〜?」

この声だったらだいたいの男子はイチコロのはずなんだけど、2人
の男子の内1人は『げっ』みたいな顔してもう1人はこつちすらみて
いなかった。なんだか負けたみたいで「むう〜」って頬つぺた膨らま
してしまった。

「ハル、貴方に用があるみたよ」

「ああ、はいはい。俺だけど、どちらさま——つて。あれ?…どこかで
会ったことあるような…」

「えっ」

うそ…もしかして…あの時の人?

「君さ…小学生の時に東京で迷子になった事ない?」

「…あ、あります…もしかしてあの時に助けてくれた人…ですか?」

「ハル…貴方よく覚えてるわね。私は雪ノ下雪乃よ。貴女のお名前は
?」

「一色いろはです」

「あたしは由比ヶ浜結衣。よろしくね。いろはちゃん」

「あーしは三浦優美子」

「戸塚彩加です。よろしくね。一色さん」

「…比企谷八幡」

由比ヶ浜せんぱいが、椅子を用意して私を座らせてくれて、雪ノ下せんぱいが、紅茶を入れてくれた。

一息ついた所で雪ノ下せんぱいが「ハル、覚えてるなら話してほしのだけけれど、迷子なんてどこにでもいるでしょ?」と言つて、柊せんぱいが話し始めた。

「だいぶ前だな、俺が用事で東京駅に一人で行つた時なんだが、用事済ませて帰ろうつて時に泣いてる女の子がいたんだ。それが迷子つてすぐわかつてな。場所が場所だから心配になつて、大丈夫? つて声かけたんだ。そしたらままあく! つて大泣きしてな」

——っ! あつてる! うひゃああ! はっはずかしいよう! でもすごい: : : ちゃんと覚えてくれるんだ: : :

「そんなのほつとけないだろ? だから一緒におかあさん探そうと思つて、駅の迷子センターに連れて行こうとしたんだけど、怖がつて動かないんだ。しかもあまりにも泣くもんだからぎゅつてだっこしたら泣き止んでくれたんだけど、そこから手を繋いでたら普通にしてたんで安心できた。でも少し離れたら泣きそうになつてな。あの時はヒヤヒヤしたわ。」

——ああああああ: : : やばいですやばいです。顔がすつごく熱いです。

「最終的に、お母さん見つかつてお礼言われて終わりだと思つたんだけど、手え離したらまた泣いてな。おかあさんも困っちゃつてな、結局夕飯一緒に連れてつてもらつたわ。これがその時のエピソードだ」
「はわわわわわ: : : ちよつ! ひいらぎしえんぱい! なんでそんなことまで覚えてるんでしゆかあ! 今いわなくてもいいと思うんですけどお!」

わたしの恥ずかしいエピソード暴露されていますよね! これってひどくないですか!

でも: : : ほつとけないとか、手を繋いだとか: : : あうあう。

「春仁の記憶力やべえな: : : 由比ヶ浜も分けてもらえよ」

「ほんとに?! ほしい!」

「結衣、あんたなにいつてんだし、できるわけねーし」

「一色さんの反応を見る感じだと本当みたいね」

「まさかここで会うとは思わなかったな」

わたしもそう思う。柗せんぱいをあの人だと認識してから胸のドキドキがすごい。男子を手玉に取る時はもちろん、葉山せんぱいと話す時ですらこんな風になった事はない。その時わたしは自分の気持ちを知ってしまった。

でもその前に確認しておきたい事がある。さっきまで忘れてたけど。

「あの柗せんぱい。実は聴きたい事がありました」

「ん、なんだ？」

「葉山せんぱいとどんな事で揉めたんですか？」

その話を聞いたわたしは、いろいろな事がどうでもよくなった。それほどの衝撃だった。

第14話

まさかの再会だった。

一色いろはちゃん。

亜麻色のセミロングの髪の毛は手入れが行き届いており、部室の蛍光灯の光ですらわかるほどツヤが出ていた。

彼女がひたむきに自分を磨いてるのだと一目でわかる。

あの泣きしてた少女がこんな素敵で可愛い子になるとは、誰が予想できただろう。

でもあの時のママさんもかなり美人だった。あのママさんの面影と一色ちゃんとは重なって思い出せたのだろうか。

「揉めた事。ね。っとそろそろ時間だな。」

ふと時計を見ると最終下校時刻が迫っていた。皆にそれを伝えとりあえず場所を変えようと俺たちは帰り支度を始めた。一色ちゃんが「私もお手伝いします」と言ってくれてカップやポットを洗いに行ってくれた。

戸塚君は奉仕部を気に入ってくれたみたいで「また来るね!」と言いはたばたと帰って行った。彼はまさしく天使だった。八幡も隣で彼の背中を見つめている。きつと桃源郷が見えているのだろう。

「もおく! ヒツキーもハル君もさいちゃんにでれでれしすぎ!」

「由比ヶ浜。戸塚は天使なんだぞ?それがわからんとは人生損してると言わざるを得ない。」

「八幡、人生語る気持ちはわかるが、ほどほどにな。」

「なんか人生でてきた! もおく! ねえねえゆきのんく。二人になんか言っちゃってよお!」

「そうね、彼にはきつとネコミミが…うふふ。」

「ゆきのん!? ネコミミだったら誰でもいいの!」

結衣のツツコミが冴える。ユキも楽しいのかわざとやってるみたいだ。またおねだりさせてみよう。

俺はニヤリと悪い顔をした。

「なにかあったんですかあ〜?」

一色ちゃんが帰って来たが、状況の説明が正直めんどくさい。

俺と八幡が天使に見とれて結衣がそれにぷりぷりしてユキがそれを揶揄った。なんて言おうものなら絶対こいつも張り合っつきやるんって仕草してくるのが目に見える。それは部室に入った時のこんにちはの声と俺を呼んでる時の声に違和感がありすぎる事から予想できた。つまりめんどくさい。

だから俺は「いつものことだよ」と答えた。

八幡は結衣を送らせる為に帰らせた。八幡は「なんでだよ」と文句を言っていたが結衣が上目遣いで「…ダメ？」と、強制という名のお願いをしたら「…ったく、ほれ、いくぞ」と顔を赤らめて陥落した。結衣が強烈なのか、八幡がちよろいのか。やはり彼女のお願いを彼は断れない。なんだか薄い本ができそうだ。

ユキの車の迎えが来て見送った後、俺と一色ちゃんは下校途中の喫茶店に寄って話す事にした。

席に座り、注文を済ませる。お互い向かい合う様に座ったが、彼女は恥ずかしいのか少しもじもじしている。

「一色ちゃんはどんな事を聞いたのかな？」

「わたしサッカー部のマネージャーやってるんですけど、他のマネが揉めたって事を話してるの偶然聞いたくらいで内容は何にも知りません。」

「そうか、じゃあ葉山君に聞かなかつたのは何故だい？」

「…葉山せんぱいが普段と違って…なんだか暗かったので、話しかけれませんでした…」

「ふむ、じゃあ普段はそういう質問にちゃんと答えていたって事か？」

「普段は…いえ、今思い返せば全部はぐらかされてる気がしますね…」

「一色ちゃんは葉山君の事が知り——」

「柀せんぱいちよつといいですか？」

「あ、ああ。どうしたんだ？」

「一色ちゃんって柀せんぱいに呼ばれるのがすごく違和感あるんで、い…いろいろはって呼んでくれませんか？」

違和感はもちろん俺にもあった。過去に出会った時に、ほんの数時

間だけだが彼女の事を名前で呼んでいたのだろう。俺は彼女の目を見て「いろは」と呼ぶと、彼女は顔を赤くして「…ひゃい」と俯いてしまった。

俺もかなり恥ずかしいし、顔も赤くなってるだろう。しかし俺はそのまま続ける。

「それで、葉山君の事が知りたいのか？」

「はい。どうして暗いのか分かれれば葉山せんぱいに近づけると思うので。」

俺はいろはに「俺の主観が入るけど」と前置きした上で事実だけを話す。

陰口を叩く奴と思われるのは心外だし、先に布石を打っておく。

「なんで怒鳴ったんですか？」

「一生懸命頑張ってる友達を蔑ろにされたと感じたからだ。」

「葉山せんぱいはそんな事しないと思うんですけど…」

「それは葉山君の目的ではないからね、そんな事ができる奴じゃない。」

「じゃあなんで…」

「三浦さんがテニスしたいって言いだして、口論になりそうだったから丸く収めようと」したんだろ。」

いろはが人差し指をつんと唇に当てて「ん〜」と考えている。

「葉山君は、自分のまわりでイザコザは起こってほしくないんだろうね。どことなくだらしない内容だとしてもだ。」

「ああ。それなんだか分かる様な気がします。ほら、わたしって可愛いじゃないですかあ、でも他の女子マネと同じ対応してくるんですよ。それって聴いたのと同じ様に争いが起きるのを避けてるって事ですよね？」

「そうだね。根本のところは同じだね。」

いろはが少し剥れてる様な気がしたが「可愛いわたし」を演じてるのか見え見えなので放置しよう。

「わたしが可愛いって部分はスルーですか!?!わたしを可愛いって認めてくれるのは嬉しいですけどまだ再会して数時間しか経ってないの

で初対面に近いです数年の時間を埋めるのはもっとじっくりふたりに埋めたいのでちゃんと気持ちを込めて言ってもらっていいですか。ごめんなさい」

よく噛まずに言える事に感心する。

それよりも内容なんだが、何言ってるか分かってるのだろうか？再会できて嬉しいからわたしと二人の時間作って下さいって言ってるんだが？でも彼女はかわいいし、そこに触れてあげてもバチはあたらんだらう。腹筋背筋に力を入れ、気持ちを込めていぎ――

「そうだね、可愛いよ」

「えっ。あ、ありがたいとうございませゆ……」

「そこ噛むのかよー！」

いろはがぼんこつなのはさておき。

「たしかに友達がバカにされたりするのはわたしもイヤですねぇ。」
「わかってもらえて何よりだ。三浦さんも戸塚君に謝りに来てくれたからね、彼女とも仲良くできそうだ」

「あの…葉山せんぱいは謝ってないんですか？」

「来てないね。まあ今日の話だし何か考えてるんじゃないか？…まあ来るとは思ってないけどね」

「…そうですね。」

「彼が戸塚君に謝るって事は、丸く収める」って事を否定するって事だし、テニス部の練習を妨害した、事を認める事になる。彼にはできないうよ」

いろはが寂しそうな表情で俯く。それはそうだろう。経緯はどうあれ、憧れてた人の本質を見てしまった。

微妙な空気が二人に流れて来た事もあり、俺達はその場で解散となった。



わたしは家に帰ったあとベッドでもんもんと考えている。

わたしがほしいものはなんだったんだろうか。

わたしは葉山せんぱいに認められたい。素敵で可愛い一色いろはである事を認識してほしい。サッカー部のマネージャーとしてだけでなく、後輩でもなく、ひとりのわたしとして見てほしかった。

その為に柘せんぱいに話を伺いに行つて、いつのまにか放課後デー卜の様な事をしていた。

柘せんぱいは葉山せんぱいほど知名度が高くないけど、やつぱり有名つちや有名でそんな人と一緒にいる事を認識してしまったわたしは、喫茶店の席で顔を真っ赤にして悶えてしまいそうになるのを抑えていた。

あれ絶対ばれてる。

「柘せんぱい…」

あの人は葉山せんぱいとは真逆の人だ。葉山せんぱいはなんとうかアイドルみたいな人。みんなに等価の愛情を振りまいて決して受け取らない。だからこそわたしはそれを求めた。

でも柘せんぱいは——なんというか：ベースとか弾いてる人っぽい。ベースの音つて音楽聴いてもほとんど聴こえない、でもバンドやってる人からするとベースは必須みたい。『聴きたい人だけ聴けばいい』つてベースの音が好きな人はみんな言つてた。わたしにはよくわからなかった。

「なんであんな事言つたんだろ…」

きつと柘せんぱいには伝わってしまった。『この関係で終わりたいくない』つて事が。『また会いたい』つて事が。

葉山せんぱいに認められたい。この気持ちは恋じゃない。柘せんぱいを知りたい。この気持ちはきつと——

気付いたら朝でいつもよりよく眠れた気がする。

起きて、シャワー浴びて、ご飯食べて、いつものわたしを作つていく。鏡を見て今日も可愛いわたしをチェックして、さあ登校！

——クラスで「おはよおー♪」つてあいさつして。

みんなの反応は、まあ悪くない。女子は相変わらず敵ばかりだけど、そんなの知らない。

——授業はマジメに受ける。

当たり前。遊んでる風に見られたくないのもあるけど、やる事はやらないとね。葉山せんぱいは学年総合2位だし。

——お昼休み。

そこそこ仲のいい友達数人と机を囲んで「いただきます」シヨツピングに連れて行く。荷物持ち君が声掛けてくるから可愛いわたしで上手くあしらっておく。わたしとでかけれるご褒美の効果はばつぐんだ！

——そして放課後。

ホームルームが終わって、葉山せんぱいに会いにサッカー部に——
「こんにちはあー。」

「あら、一色さん。いらっしやい。」

行かなかった。

「雪ノ下せんぱいしかいないんですね。ほかの先輩方はどうしたんですか?」

「ええ、ハルは今日はアルバイトで来ないわ。由比ヶ浜さんと比企谷君はそろそろ来るんじゃないかしら」

「そうですか?」

わたしは残念だと思った。それが顔に出ていたのか見破られたのか雪ノ下せんぱいに「ハルに会いたかったのね」と言われてハツとした。

「いえいえ!そんな事…ないともいえないです…」

「ふふつ。せっかく来たのだし紅茶でもいいかが?」

「いいんですか!ありがとうございます。」

美味しい。すごく美味しい。雪ノ下せんぱいの淹れる紅茶の虜になりそう。むしろここに来る理由にできる。

わたしが目的を忘れて紅茶を味わっていると「やつはろー!」と元氣よく由比ヶ浜せんぱいが入って来た。

「こんにちはあー」と返すと「あれ?いろはちゃん来てたんだあ、ハル君は今日は来ないよ?」と言われた。

なんでバレてるし!そんなにわたしわかりやすいのかなあ…

「はい。昨日のお礼をちゃんと書いたくてお邪魔しました。」

「あれ？でもいろはちゃんサッカー部だよな？あつちはいいの？」

「あー、えー、それはですね。アレです。マネージャーは沢山いるので私は今日は休みなんです。」

嘘ではない。きつと。多分。

「へえ〜そうなんだ。じゃあさ。この後さいちゃんのテニスの練習付き合うんだけど一緒にやらない？優美子も来るって言ってるしさ。」

三浦せんぱいが!? 一体どういう事だろうか。三浦せんぱいと言えど1年生の間でも有名で、葉山せんぱいの傍にずっといる人だったはず。それがどうなつてテニスの練習に付き合う様になつたんだろう。確かめたい。

それに雪ノ下せんぱいも由比ヶ浜せんぱいも、綺麗で可愛くてファンが相当いるお方だ。わたしも自分には自信あるけどお二人には敵わない部分が沢山ある。この人達を知る事でわたしはほしいものに近づける気がする。こういう時の女の勘はわたしは疑わない。

「じゃあ。せっかくなんで見学させてもらいます。」

そのまま奉仕部でジャージに着替えてテニスコートへ移動した。

そこには制服姿の比企谷せんぱいが、ジャージ姿の戸塚せんぱいと三浦せんぱいの試合形式の練習をスマホで撮影していた。

「ヒッキー！おまたせ！」

「こんにちは、比企谷君」

「こんにちはあ〜」

「おう…ってなんでお前がいるんだよ。葉山せんぱいはいいのか？」

「はい。由比ヶ浜せんぱいに声かけてもらって見学に来ましたあ」

比企谷せんぱいは「そうか」とだけ短く返して撮影に集中している。

「さいちゃんの足大丈夫かなあ…」

「戸塚が大丈夫って言うんだからやらせてみるしかないだろ。一応、今日一日気にしたが、違和感はなかったぞ。」

「そう、ならいいのだけれど。念のためにテーピングをしておきましよう。」

なんかすごい…サッカー部でもこんな会話聞いたことない。しかもこの人達はテニス部よりも部員っぽい。

試合をしてるお二人もすぐ楽しそうで。なんだか羨ましい。

勝負は三浦せんぱいが勝ったみたいで、ベンチ付近に戻って来た。由比ヶ浜せんぱいが「はい！優美子。さいちゃん」と素敵に笑顔でタオルを渡して。雪ノ下せんぱいが「戸塚君。足を見せて頂戴」とテーパーピングを始める。

比企谷せんぱいは撮影した動画を見直してテーパーピング中の戸塚せんぱいとなにやら話してる。

「一色。サッカー部は？あんたここでなにしてるし？」

「こんにちは。三浦せんぱい。テニス練習の見学に来ましたあ。」

「あんたがここに来るなんてね、いっつも隼人に近づこうとしてたのに、どしたん？」

「えーつとですね…うん。終せんぱいに会いに来たんですけど…いらっしやらない様だったので…」

「あーわかったし。隼人がちよつとわかんなくなつたって感じっしょ？それあーしも同じだし。」

よくよく話を聞けばクラスでも様子がおかしかったらしい。いつも近くにいる三浦せんぱいがそういうのだから疑う余地はない。

先輩方の話を聞いて私は考える。

わたしは葉山せんぱいに認めてもらいたくてサッカー部に入った。でも葉山せんぱいは自分の世界から出てこないし、誰もそこに入れようとしんない。このまま頑張り続けても「一色いろは」は空回りするだけなのは目に見えてる。

それならば、わたしをちゃんと見てくれる可能性を模索するのが最適ではないだろうか？

少なくともこのままサッカー部の優秀で可愛いマネージャーを続けるよりかは何倍もマシに思える——いや。マシだ。

わたしは自分の意志で決断した。迷わない。

「雪ノ下せんぱい。」

「なに？一色さん。」

「わたし、奉仕部に入りたいです。」

第15話

どうしてこうなったのかしら。

私はこめかみに指を当てて「はあ…」とため息をはいてしまう。

決して頭痛がしている訳ではないのだけれど。アタマは痛いわね。

『わたし、奉仕部に入りたいです』

『……それは許可出来ないわ』

『……分かりました。今日は出直します』

「雪ノ下せんぱいの紅茶すつごく美味しいです！」

「そ、そう。ならいいのだけれど」

昨日、戸塚君の練習中に彼女に入部したいと言われて私は断った。はずなのだけれど、「こんにはあー」と甘ったるい声で自称可愛い後輩がやってきたわ。

そう、一色いろはさん。

昨日、一色さんは経緯はどうあれ、ハルに会いたくて奉仕部に来た。彼に会いたいなら、私ではなくハルに頼む方がずっと入部しやすい事は考えるまでもないはず。

私は、何故あのタイミングで、何故私に行って来たのか、知りたくなかった。

「一色さん」

「はい。雪ノ下せんぱい」

「昨日はごめんなさい。キッチンと理由を聞かないまま断ってしまったわ。よければ…その、入部したい理由を教えて欲しいのだけれど」

「理由…ですか」

私は「ええ」と返す。適当な理由をでっち上げる事はとても簡単でしょう。でも彼女はそれをしない。いえできないでしょうね。

でも私が考えていた事全てが杞憂だったわ。

「終せんぱいの見てる景色が見たいです」

私は納得できた。これ以上にならない程に。

「一色いろはさん。ようこそ奉仕部へ、貴女を歓迎するわ」

「うえ!?!、いいんですか?」

「さっきの一言で十分よ」

「あ、ありがとうございます！」

一色さんが入部届を書いてる間に由比ヶ浜さん達が部室に入ってきた。今更だけれど、あの「やつはろー」というのは挨拶なのかしら？世の中には謎が多いのね。

私は美味しい紅茶を振る舞う為に席を立った。

「いろはちゃん、入部したんだね」

「まあ…よろしくな」

「やつぱ来たか、予想より早かったな」

「はい！よろしくお願いします！」

奉仕部が大分賑やかになってきた。私は胸の高鳴りを抑えれない。始めは平塚先生の一言からだった。その後ハルが帰ってきて来て、比企谷君と由比ヶ浜さんが来て。

今日、一色さんが来てくれた。

私はドキドキしている。私は今まで友達という関係に縁がまったく無かった。

始めてできた友達は突然いなくなってしまった。留学先でも別れが決定しているのだから、歩み寄ってくれる人達を遠ざけてしまった。別れは辛いから…悲しいのはもう嫌だった。

「ユキ…大丈夫か？」

「えっ…あ…」

涙が出ていた。ぽたぽたと私のスカートに斑点ができていく。

「ゆきのん」

「由比ヶ浜さん…」

優しく抱きしめられた。トクントクンと心臓の音が心地よい。

「よかったね。ゆきのん」

「ゆい…が…はま…さん…」

頭を撫でてくれた。彼女の手のひらが温かい。頭を撫でられたのはいつぶりだろうか…

私も彼女の背中に手を回して抱きしめる。嬉しいから。言葉にできない嬉しさを伝える様に強く抱き着いた。

◆◆◆◆◆
ゆきのんが泣いてた。

あたしはびっくりしてハル君の方を見る。そしたらヒッキーとハル君が領いているはちゃん連れて部室から出て行った。

3人とも優しい顔してたな。

ゆきのん。と声をかけて、だきしめて、頭なでてあげたらわかった。嬉しいんだよね？わかるよゆきのん。

あたしもゆきのんがそう思ってくれて嬉しいな。だつてさ。ずっと欲しかったんだよね？こーゆーの。あたしも欲しいって、ずっと思ってたんだ。

あーヤバイ、あたしも泣いちやいそう。でも我慢だ。うん。

ゆきのんが休んでる時つてさ。あたし知らない。

だからね、あたしと二人の時は甘えてほしいな。

「由比ヶ浜さん、ありがとう…」

「ねえ、ゆきのん。結衣って呼んで。」

「え、ええっ…あの…その、ゆ…ゆい。」

「ちゃんと呼んで、ゆきのん。」

「ゆ、結衣さん。」

「ゆきのん。あたしは離れないから。ね？いつでも甘えていいんだよ？」

ゆきのんが顔を真っ赤にして「ありがとう。結衣さん」と言ってくれた。

あたしは嬉しくて嬉しくてつい胸に《ぎゅっつ！》てしちゃってちよつと睨まれちゃった。アハハ…

胸が大きいのはあたしせいじゃない、あたしは悪くない。うん。

ハル君に連絡して戻ってきてもらった。

ゆきのんは「嬉しかったのよ」とみんなに説明していた。ハル君とヒッキーは『そうか』で済ませてたけど、いろはちゃんがすごい。

なんかもう、ゆきのんにベタベタしてた。腕くんだりき。抱き着い

たりさ。

ゆきのんも「近いわ…一色さん」とか言ってるけど振りほどかないしや。

「いろはちゃん！ゆきのんはあたしの!!——あっ」

またやつちやった…超はずかしい。

部室内がシーンとした。あたしの声が反響して聞こえる。

「春仁、用事できたわ。帰る。」

えっ？ヒツキー用事あったの？

「そうか、俺も用事できたから帰るわ。」

ハル君まで！っていうか、できたって何!?

「あっ！柊せんぱい！わたしも柊せんぱいと用事思い出しました！」

いろはちゃんは顔でわかる。悪い顔してる。

「みんなそれうそじゃん!!」

「結衣さん…貴女はホントに…ハア…」

「うわぁーん！まってよぉ！口が滑ったの！」

さんざんみんなから揶揄われて、いつのまにかいろはちゃんからも結衣せんぱいって呼ばれてた。えへへ♪

トントンと扉がノックされた。ゆきのんが「どうぞ」って言ったら扉がスライドして既視感のあるコートを着たキモい人が立ってた。

「柊殿はおられるか？」

「ああ、いるよ材木座君」

つい先日の事が思い出される。あの時のハル君は怖かった。またあの感じになるのかな。中二が分かってくれてたらいんだけど。

「先日は申し訳ない。改めて感想を一緒に見てくれぬだろうか？」

驚いた。ちゃんと中二が頭下げてる。

あたしたちは中二が投稿した作品の感想欄を見る。そこには暴言や汚い言葉も沢山あったけど感想や批評も割とあった。中二は「ぬわあああああー」とかうるさかったけどちゃんと受け止めてた。よかったね中二。

「材木座。パクリはだめだろ。パクリは」

「ぐっはあああ！」

「文法もおかしいじゃない、てにおはって知ってるのかしら？」

「んぐうううう！」

「ここで脱ぐ意味なくないですかあ〜？ぶっちやけキモいです」

「ぐげええええ！」

「アハハ：みんな容赦ないね。でも中二すごいよね？難しい言葉沢山知ってるしー」

「……………はぽっ」

「結衣が息の根止めたぞ、でも材木座君」

「な…なんでござろうか……」

「ここの感想にもあるけどさ。熱意はちゃんと伝わってる。適当に綺麗な文字を書く人より、熱意あるぐちやぐちやな文字の方が俺は好きだな」

「柊殿……」

「小説家になるんだろ？熱意が伝わる事知ったんだから。もう大丈夫かな？」

「ああ、大丈夫だ。評価も受け止めて見せよう。そして奉仕部の方々に感謝する。それと我儘だが…また読んでくれぬだろうか？」

「完結してるならいいよ」

「……………はぽんっ」

中二は満足そうに部室を後にした。中二ははつきり言ってキモいけどさ。あの一生懸命な姿勢と諦めない心はかっこいいと思う。ハル君もそう思ったから感想書いたんだよね？あたしわかってるよ。多分中二以外全員わかってる。ハル君ってさ。一生懸命なの好きだよね♪



材木座先生の襲来を退けた俺たちは気ままに過ごしていた。

女子3人は姦しくおしゃべりやら楽しそうに話し、俺と八幡は振られた話の時折まざるくらいで基本読書をしていた。いつのまにか美

少女3人はお互いを名前で呼ぶようになりユキの涙の理由が良き結果に終わった事に安堵する。彼女らはこの先たいていの事では離れないだろう。9年前に突然いなくなつた俺は何も言えないが。

「つてか。いろは」

「はあい。柊せんぱいっ!」

「きやるんつてするな気持ち悪い。お前サッカー部どうしたんだ?」

「春仁:ストレートだな:」

「気持ち悪いつてなんですかあゝ!可愛いですうゝ!」

「ん”んっ!——いろは、可愛いよ」

「はう!うう。ふ、ふふ不意打ちはずるいですうゝ!——ハッ!柊せんぱいそうやって私の事可愛いって言つてもう彼氏気取りですか? すぐくうれしいんですけど昨日の今日でいきなりすぎて心の準備まだできてないんでまだムリですごめんさい!」

「ぽんこついろは」

「柊せんぱい!」

「おお:春仁がフラれてる」

「八幡。お前ちゃんと聞いてないだろ?」

「アハハハ:いろはちゃんがすごい」

聞けばサッカー部は辞めたそうだ。本人が決めたのだから口を挟む気はないが、目標がすり替わつて努力の方向まで転換してしまわないだろうか。せっかく努力した事を無駄にしないでほしいものだ。

——1週間後。

今日も今日とて奉仕部は騒がしい——主にいろはが。

ふと俺と結衣にメールが届く。俺は無視しているが、結衣は眉をハの字にして悲しい顔をした。

「またきたよ:これ何通目かなあ。こんなのヤダな」

届いたメールは所謂チェーンメールだった。特定の個人を中傷する内容が匿名で書かれておりその悪質さにユキと俺が怒りを露わにする。俺たちにとって絶対に許容されるものではないのだ。

今日は来客が多いようでまたしてみドアがノックされて、かの葉山

隼人が入って来た。

彼の奉仕部への依頼は今まさに起こっているチェーンメールをどうにかしてほしいという事だったのだが、問題はそこではなかった。中傷されていたのは彼のグループの男子3人の事だった。

戸部は暴力的でカラーギャングの仲間。

大和はラフプレーで相手に怪我させている。

大岡は3股をかけるクズで女の敵。

極めつけに言った葉山君の一言。

「犯人を捜したいんじゃない。丸く収めたいんだ」

俺は周りに目で合図する『危なくなったら俺を止めてくれ』と。そして俺は葉山隼人へ言葉の槍を突きつける。

「依頼は受けない。自分でなんとかしろ」

「えっ…なんでだい？ここは相談に乗ってくれるんだろ？」

「お前が俺達にした事を忘れたとは言わせないし、お前のグループがどうなろうと知った事ではない」

「……………すまなかつた」

「今更謝罪なんぞいらん」

「そうね、葉山君。依頼はこの通り受けないわ。お帰りはあちらよ？」
葉山君は肩を落として帰って行った。しかし結衣が嫌がつてるのも事実。俺にもこのメールは来てるしウザい。

だから俺たちは結衣の為に自分で解決策を講じる事になった。中傷をする動機はなんだろうか、それを探る為、明日俺と八幡が彼らを観察する事になった。結衣が言うには三浦さんともう一人のグループ女子も辟易している様だ。なにか情報があればいいのだが、あまり期待はしないでおこう。

——翌日。

動機は判明した。来週にある職場見学会の班決めが3人1組な事が背景としてあり、葉山君を含めると4人になる。そこであぶれる1人になりたくないという事だった。小学生かよ。

動機が分かった。犯人は意外にも中傷されてた3人に絞られた。

放課後の奉仕部で結衣を除く4人で解決策を模索する。結衣は三

浦さんと海老名さんというメガネ女子と一緒に買い物に行く様だ。結衣と三浦さんは一時期ギスギスしてたけど、戸塚君に三浦さんが謝罪に来た時に打ち解けて、以前よりさらに仲良くなっている。二人とも笑顔が眩しかった。

「春仁、ぶつちやけ葉山があいつらに組まないって言うだけでチェインメールはなくなるんだが、それじゃダメなのか？」
「ダメだ。」

「そうね。人の尊厳を踏みにじる輩は排除すべきだわ」
「わたしは噂なんか信じないんですけど、ほっとくつてのは選択肢にないんですかあ？」

俺達には一切関係ないし、実害もない。でも結衣が嫌がってるって事だけで十分だ。

一度味を占めたら、阿呆はそれを繰り返す。次は誰が標的になるかわからない。

「いろは、残念だけどそれは今のところない。八幡の案が最終手段だな。でもこの3人の中で明らかに被害が少ない奴がいるな」

「大岡って奴か。俺は知らんな」

「八幡：クラスの奴くらい覚えてやれよ…」

「どういう事かしら？3股ってけっこうな風評被害だと思っただけけど？」

「ユキせんぱい。男子からすると3股って一種のステータスですよ？3人の女性に好かれるってすごい事ですからね？」

「調べたらすぐわかる事なのにな、いつそのこと調査するか？」

「やだよ！めんどくせえ」

「ですよー。さすが八幡ぶれない。」

「関係者に話を通してみるか」

「三浦か。それもアリかもな」

「結衣さんとも仲いいみたいだし、一度話しておくのも悪くないわね」

結衣はチェインメールでクラスの空気が悪い事を嫌がってる。三浦さんはグループ意識が強いけど、この前の件で少し考えが変化した

かもしれない。

「んじや。明日にでもF組の女王に話聞いてみる」

「三浦せんぱいは怒らせたらダメな人です。コワイです」

チエーンメール問題解決はさらに明日に持ち越しになった。

第16話

「それであーしを呼んだって事ね。」

「そうだ。三浦さんも無関係じゃないからね。意見を聞きたい。」

放課後の奉仕部で昨日の話の続きが始まった。正直俺は葉山のことなんざどうでもいい。職場見学は戸塚と一緒にいけるからな。俺に声をかけてくれる戸塚は天使だ。天使にお誘いを受けて断るという選択肢は俺にはない。天使と一緒に巡る職場は天国だろう。迷える子羊、つまり俺をを救済すべく下界に舞い降りて…

あれ、俺死んでないか？

ちなみに職場見学の希望欄に「家」と書いたら平塚先生に小突かれた。

将来の職業が専業主夫で何が悪い。

春仁はぶんぶんしてるが、その内収まるだろう。春仁がぶんぶんしてるのは由比ヶ浜が嫌がってるからだ。金髪縦ロールこと三浦がこの状況に一石を投じる事に期待して、俺は手元の本をペラつとめくる。

雪ノ下も今は読書をしている様だ。

一色はまだ来てない。むしろ来なくていい、煩いから。

「ひーらぎ、何もすんなし。これはあーしらの問題だし。」

「優美子。それでいいの？葉山君は話してくれなかったんだよ？あたしあんなのやだな…」

「あーしはユイと姫菜の3人で仲良くしてると思ってるし、仲良くしたい。隼人達の事まで気にする必要ないし。」

なるほど。三浦は葉山グループを見限ったのか。

彼女は自分達3人と、男子4人は、別グループだ。と線を引いたのだろう。それもそうだ、チェーンメールなどで誹謗中傷をしている可能性のある連中と、仲良くできる人などいない。

俺も雪ノ下も読書をやめて耳を傾けていた。

ギスギスする様な、欺瞞だらけの関係ならいつそ破壊してしまえばいいと俺は思う。でもそれは簡単ではないのだろう。三浦がグルー

プに固執してるのがいい証拠だ。

今までは葉山の7人グループと思っていたが、葉山と三浦が近いだけで3人と4人が一緒に見えただけだった。って事か。

「結衣はどうしたい?」

「あたしは…もうあの4人とはムリかな。」

春仁が問い、由比ヶ浜が答える。このやり取りだけでも信頼関係がある事が分かる。

「ちよつち待つてて、姫菜連れて来るし。」

「あ、優美子。あたしも行く。」

由比ヶ浜と三浦は前に進む為に行動した。俺と雪ノ下はそれを見守る。春仁は一体何を望むのだろうか。

春仁の価値観は俺とは違う。それは当たり前前の事だ。

だからであろうか、以前春仁が、俺に説いた事を俺は未だに理解できずにいる。

世界を自分“で”回すってどういう事なんだろうな。

俺の価値観だと、ただの自己中心的な独裁者にしかならない。

しかし春仁はそうではない。俺と春仁との違いが分かれば俺も少し前に進めるのだろうか。

思考の沼に腰辺りまで浸かったあたりで「ハロハロー」とメガネ女子が部室に入ってきた。

「姫菜、説明するね。」

由比ヶ浜が海老名さんに現状の説明と自分がどうしたいかを伝えている。それを黙って聴いてる三浦は優しい微笑を浮かべていて、なんつーかオカンみたいだった。本人に言ったら「は?」とか言われてちびりそう。だから今度春仁に言ってもらおう。

「つまりは葉山君の取り合いて事ね!」

「や、なんでそうなんだよ。いや、あつてるつちやあつてるけど。」

「姫菜…あんた擬態しろし…」

「三浦さん。貴女も苦労してるのね。分かるわ。私も結衣さんが—」

「ゆきのん!?!昨日はあたしに甘えてたじゃん!」

「ちよつ結衣さん?…わぷつ…ちよつ…苦しい…」

「ほらほら♪ゆきのーん♪」

おお…雪ノ下がメロンの餌食に…百合百合しいです。

よし。あいつらは放置しよう。

腐ってる海老名さんはあっち側の人間でした。聞けばハチxハルが最近ではマイブームらしい。

そんなマイブームは異世界に捨ててこい。火山の噴火口でもいいぞ。キラウエアでもマウアロナでも好きな方選べ。

「俺と八幡の絡みが面白いからあっちはどうでもいいって事ね」

「春仁、誤解を招く言い方は止めろ。マシになってきた目が濁る」

「まあ言っちゃえばそうかな、私は優美子と一緒にいれればいいしね。でもね。残念っちゃ残念だよ?」

春仁は顎に手を当てて考えた。

「わかった。ならば俺は、今回は何もしない」

「ひーらぎ、ありがと。やっぱあーしらの事だし」

「いや、俺が悪かった。三浦さん、ごめんなさい。勝手に7人の問題だと勘違いしてた、3人の問題なら俺がとやかく言う事じゃない」

三浦と海老名さんが春仁に「ありがとう」と言っている。由比ヶ浜と雪ノ下もその光景を見て微笑んでいる。美少女4人に囲まれてる春仁は――

「こんにちはあー」

5人になりました。帰りたいたい。

甘ったるい猫撫で声かと思いきや割と素の声で入ってきた。

それと入れ違いで三浦と海老名さんと由比ヶ浜は3人で帰っていった。今日もアイス喰うらしい。三浦、前も行ってなかったか?もうそこで働けよ。

「結局何もしないって手段になったんですねー」

「結衣達の問題でもあるからな、しんどかったら言ってくるだろ」

「あー、そのヘルプ割と早く来るかもしれませんよ?」

一色が言うには、一切情報がない場合はチラチラと見られるらしくかなりウザいみたいだ。大岡だけなら問題ない、むしろ勝手に自滅す

るから好都合なのだ。

問題は、由比ヶ浜、三浦、海老名の3人が勝手に大岡の彼女扱いはれる可能性がある。という事だった。

「わたしなら近づかない事でやり過ぎしますけど、三浦せんぱいが葉山せんぱいの近くにいる限りそれは無理です」

「その可能性はあるけど、大丈夫だろ。三浦さんだし」

「そうだな、三浦だし」

「貴方たちが胸を張る事ではないのだけれど…」

「いやいや、あいつオカシだから。由比ヶ浜に何かあつたらめっちゃ怒るから」

しかし職場見学の班はどうするんだろうか俺と戸塚と春仁？まあなるようになるだろう。

俺は考えの甘さを痛感する事になろうとは思いましなかった。



昨日の話し合いの翌日。

午後のロングホームルームにて俺は『頭痛が痛い』の真っ最中だ。

通常であれば『頭痛』が正しい使い方である。

つまり2倍痛い。意味が解らないと思う。

頭沸いてるんじゃないか思う。安心してくれ。

俺もわからん。

『このチェインメールに書いてある事は事実無根の事だから戸部、大和、大岡の為に鵜呑みにしないでくれ。こいつらはイイ奴なんだ』

事の始まりは葉山隼人のこの演説から始まった。丸く収めるどころか引つ掻き回してるのだが、本人には自覚がない様だ。ホントにため息しか出ない。

平塚先生は魂抜けた顔してるし、なんなんだアイツは。

葉山隼人の正義とは。自分の周りで問題が起こらない事。

起こったとしても自分が納得できる解決方法じゃないと実行しない事。このあたりだろうか。

それに巻き込まれたクラスの39名はいい迷惑だ。いや38名か。どちらにせよこのまま放置はできない。

ふと平塚先生と目があつた。眉間にシワを寄せて俺を見ている。八幡は腕を組んで目を瞑り、結衣と三浦さんは俯いてる。海老名さんはイライラしてる様子だ。

三浦さんはショックだっただろう。彼女は葉山君を信じて「あーしらの問題だから」と言った。

今、彼女が俯いてるのは何故だろうか。おそらく彼女に相談は一切なかつたのだろう。

彼の行動は間違っている、しかし間違っているにしてもなんとかしたいという想いはある。

グループに対しての優しさをひしひしと感る。だからこそ三浦さんは何も言えないのだ。

そんな彼は今もうどうだ壇上で話している。ちゃんと聴いてる人はいるのだろうか。

そろそろめんどくさくなってきたから、俺が拳で黙らせてもいいだろうか。

しかし、それで友達に心配させるのはおかしい。俺は間違えたくない。

ならばどうする、葉山隼人はトップカーストの中心人物である。

彼の暴走を止めれるのは同じくトップカーストの人間だけだろう。

誰にも頼れないこの状況で收拾をつけるには――

「いい加減にしろ葉山隼人」

――俺が論破するしかなかった。

「柊君…」

「戸部君、大和君、大岡君以外は無関係だ。皆すまない。先生、解散でいいですか?」

平塚先生は一言「任せる」と言つて職員室に帰つて行つた。先生ホントお疲れ様です。

「無関係な人は帰つて構わないと先生もおっしゃつてたからみんなは自由にしてくれ」

クラスメイトが三々五々、めいめいに散っていく。

何人かは俺に「ありがとう」と「ごめんね」と言ってくれた。俺は声に出さず頷いて応えた。

残ったのは奉仕部3人と葉山グループ4人と三浦グループ2人。八幡に結衣を連れて行くようお願いしたが、彼は首を横に振って断る。

結衣も同様だった、前を向きたいのだろう。目には力強い煌めきがあった。

「バカバカしいにも程があるぞ。オマエは問題がちゃんと見えてんのか？」

俺は怒気を込めて言う。

「問題はチェーンメールの存在だろ？言われなくても——」

「葉山。それは違う。春仁が言ってるのはチェーンメールじゃない、その原因だ」

アタマの足りてない阿保の代わりに八幡が丁寧に解説する。

「隼人くうくん。アレはちよつとキツツイわあ。他に方法あったっしょー？」

大和と大岡が「だな」「それな」と戸部に相槌を打つ。

「お前ら…オレはお前らの為を思つて——」

「隼人。あーし見損なつたし。あーしらの事なのに奉仕部に丸投げしてたのもおかしい上に、何やってるし。こいつらの公開処刑でもしたかった？」

「優美子。俺は間違っていない。こいつらの事を悪く言われるのは我慢できないんだ。発信されてしまったメールはどうにもできない。だから『その情報は嘘だ』と声を上げたんだ。」

「ああ、そうだな。お前の考えは正しいよ。反吐が出るくらいな。でもそれだけ大事ならお前だけわかってれば良かっただろうが！壇上でわざわざ庇う様なマネしてんじゃねえよ！」

俺のボルテージが上がって来た。どうどう。また拳を作ってた。手の力は抜いておこう。

葉山君は俯いて黙ってしまった。

「この際だハッキリ言っておくか、メール送ったのは大岡だろ？正直に言っとけよ？沈黙も肯定ととられるからな？」

俺の尋問の様な質問に大岡は自白した。黒だった。動機も俺達が予想した通り職場見学の班だった。つまらん。

理由はさらにつまらなかつた。本気で殴ってしまいそうだったので壁殴った。拳から血が出た。そんな事は後でいい。

曰く「柊が羨ましかつた」だとよ！クソがあ!!

俺がユキや結衣といった有名な美少女と一緒にいる事にコンプレックスを感じてたらしい。

「俺が羨ましいからこんな事したのか、じゃあ代わってやるよ。俺の今までの人生あつての今だから当然同じ状況になつてくれんだよね？両親は生きてんのか？親父の顔は知ってるか？友達と引き裂かれた事はあるのか？バイトでしんどい思いはしたのか？全部ないだろ？なあ俺と代わるんだろ？」

言わなくていい事は解ってる。だが言葉が止まらない。言わなければ俺はまたまき散らす。

大岡は始めて向けられる「憎悪」にガタガタと震えている。

「お前から見たら俺はさぞイージーな人生に見えるだろうな。ざけんじゃねえぞ。お前らにとつてのハードが俺のノーマルなんだよ。適当な事言つてんじゃねえぞ！」

「春仁。落ち着け」

「――八幡。すまん取り乱した」

「ハル君！…もつう…やめてえ！」

八幡はじつと俺を見ながら肩にポンと手を置いた。結衣がその横で声を出して泣いている。彼女は俺の服をちよんとつまんでいるだけなのにそれを振り払うことはできなかつた。

「ひーらぎ…あんた…」

三浦さんも俺の事を察した様だ。海老名さんは結衣を《よしよし》と頭を撫でて慰めてくれる。

しばしの沈黙の後「本当に、すみませんでした」と大岡が俺と戸部、そして大和に、額を床にこすり付けて謝罪した。

冷静になった俺は口を開く。

「…大岡君。もういいよ。今後は気を付けてくれ」

「…ずびまぜんでしたあ!」

戸部も大和も彼を許す様だ。

流石にここまで誠意をみせられたら許すしかないだろう。戸部がうつすら涙を浮かべて大岡を慰めていた。

大和も数日前より良い顔をしている。彼らは本物の友情を育むことが出来るだろう。

そうであつてほしい。ここでの俺の怒りという非生産的なモノが、生産的な結果になればいいなと思う。

それでは本題の葉山なんだが。俺が再び着火する前に八幡が話を付けてくれた様だ。ありがとう八幡。

「柀君。本当にすまない。戸塚君の件も今更だけどちゃんと彼に謝罪する」

「そうか、ちゃんと謝ってくれ。その件は”それでいい”」

帰宅したあと八幡にお礼と謝罪を伝えた。「あんな事言わないでくれ!」って言われて少し泣いてしまった。

俺は、明日もみんなにキチンと謝罪する事を決意して眠りについた。

第17話

「八幡、昨日はありがとう。」

春仁に昨日の事でお礼を言われた。俺にできる事をしたただけなのだから、お礼を言われるのはなんだかむず痒い。

俺は春仁の肩をぼんぼんと叩き、気にしてない事を態度で示した。だが、本当はもつと文句を言いたかった。春仁の苦しみをあんな風になぶつけるのは違う気がする。

由比ヶ浜が泣いてしまった事も彼女がそれを察知したからだろう。伝えるのであればキチンと伝えてほしい。そう思った。

「結衣、昨日はごめん」

春仁が由比ヶ浜に謝罪している。彼女は昨日を思い出したのか、悲しそうな顔で春仁に応える。

春仁はいっただって感謝と謝罪の言葉を間違えない。朝に俺に言ったありがとうと彼女に言っているごめんなさいの違いはないはずだが、俺はそこに違和感を感じる。何故謝罪なのだろうかと考えようとしたが、すぐに答えが出た。

「ううん。あたしは大丈夫。でもさ。あんなのはもうやめてほしい」

春仁は彼女の目をじつと見て「わかった」と答えた。

由比ヶ浜のいう「あんなの」というのは、俺も検討がついた。

彼女も俺と同じ不満を春仁に感じたのだ。

それと同時に、俺は昨日の事を思い出す。少し顔が熱い。

昨日、春仁に頼まれて彼女を家まで送ろうとしたが、彼女は顔を手で覆い大粒の涙をぼろぼろと零して泣いていた。

『ほれ、いくぞ』と催促しても彼女は動かない。俺は仕方なく手をそつと握り、とぼとぼと歩みを進めたのだが、彼女もいろいろ考えていたのだろう、肩を震わせて立ち止まってしまふ。

俺は何も言わずに由比ヶ浜の背中に手を回し、優しく抱きしめた。

反対の手は後頭部に添えてよしよしと撫でる。

『大丈夫だから。な？少し落ち着け』

『えぐっ……うう……ひつきい……』

由比ヶ浜がパツと腕を払えば簡単に抜け出せたが、彼女は逆に体重を預けて胸に顔を押し当てて来た。力いっぱい抱き着かれた俺は抵抗せず、背中をトントンと叩いて落ち着かせてやった。歩道のだ真ん中で。

「ヒッキー？」

俺は由比ヶ浜を連れて彼女の家の近くにある公園に向かった。

彼女が落ち着くまで好きなように甘えさせるためだ。

結論から言おう。由比ヶ浜は公園で俺にやった事を覚えていない。

俺は彼女が起きた後は平静を装い、『泣きつかれて寝たんだろ』とごまかしておいた。

『送ってくれてありがとう』

『おう、じゃあ。またな』

彼女は腕に抱き着いてきたり、胸に顔をぐりぐりしてきたり、首を噛んできたりした。膝枕でうーうー唸って、最後にはそのまま寝やがった。

俺は何か違和感を感じて無抵抗でそれを受け入れた。恥ずかしかつたけど堪えた。

誰か俺を褒めてほしい。誰にも言えないけど。つつか。言ったら俺の人生終わる。

俺が由比ヶ浜を突き放す事は簡単だった「やめろ」と言えばすぐやめただろう。

でも俺はそれができなかった。下心がないといえれば嘘になる。

今、彼女を突き放してしまうと壊れてしまう。

そんな気がした。俺は、それがたまらなく怖かった。

「もう！ヒッキーってば！」

「お、おう。 どうした？」

「今日の放課後にハニトー食べに行こー！」

「お、おう。 いいぞ」

しまった。断るつもりが即決してしまった。昨日の由比ヶ浜を見るから色々やりづらい事この上ない。

いつもと同じ距離のはずなのに、どこか近く感じる。いつもと同じ

笑顔のはずなのに、眩しい。

ざわついてたはずの心が、昨日からやけに静かに感じる。

俺は由比ヶ浜の事が好きなのだと自覚した。多分。



「三浦さん、海老名さん。昨日は申し訳ない」

俺はきつちり頭をさげる。何に対しての謝罪かと問われれば、答えは一つだ。

俺の勝手な怒りをまき散らして彼女達の居場所を壊してしまったからだ。

「ひーらぎ。頭あげろし。あーしこそごめん。ああなったのはひーらぎの責任じゃないし」

「柊くん。ありがとう。なんか結果的にいい方に転んだっぽいし、あれでいいんじゃないかな?」

海老名さんが指刺す方に戸部達3人が本当に楽しそうに談笑していた。大岡も大丈夫そうだ。

「あいつら3人でクラスのみんなに頭下げてたし、昨日のひーらぎがキレたのが効いたんしよ。やるじゃんひーらぎ。あれだけキレて手え出していないのも偉いし」

「ぐフフフ…遠慮がなくなった3人はくんずほぐれつの一——」
「姫菜。擬態しろし…ころこっち向いて。」

何やら薔薇色の妄想をして倒れてしまった腐女子を介抱している。なるほどこれか。

俺は八幡が言ってた「オカン」ってのが理解できた。

オカンって呼ぶことにしよう。声に出したら『は?』とか言われそうだから声には出さない。

この手の女性は怒らせたらダメなタイプだというはが言ってた事を思い出した。

関係者への謝罪を終えた俺は平塚先生に呼び出しを受けていた。昼休みに職員室へ行くと、いつもの応接室へ通される。

「終、昨日は助かった。なんかあったようだね」

「丸投げされた時はヒヤヒヤしましたよ。やはりあの段階だと、教師は介入できないんですね」

「そうだ。君は話が早くて助かるよ。それで今回呼び出した件なんだが――」

先生は俺に予備校に行くのかどうか、行くのであれば夏期講習の内容、その費用などの話をしてくれた。

以前はバイトをやっていて、成績が落ちた事を気にかけてくれた。今回はその先のどんな大学で何を学びたいのかという事を気にかけてくれている。

「将来の事。ですか」

「そうだ。漠然とでいいから何かあるかね？」

俺は何がやりたいのだろうか。俺は独りで生きる力と知識があればそれでいいと思ってたし、それがおかしいとは思わない。ふと、最近の出来事を思い返してみる。八幡と出会って、結衣と出会って、ユキに再会した。

材木座君の小説を見てボロくそ言っつて、戸塚君と一緒に汗を流して、葉山君達と揉めた。

材木座君の熱意に振れた時に、応援したいって気持ちになった。

戸塚君の練習を邪魔された時に、悔しくなった。怒りも沸いた。

葉山君のどうにかしたいって気持ちに共感できた。

俺は一生懸命な人が好きだ。一生懸命に努力する人に『ちゃんと見てる』って言っつてあげたい。

「…俺、教師になりたいです」

「…そうか。では教育学部のある大学をピックアップしておこう」

平塚先生は嬉しそうにはにかむ。

「ああ、それとだな。スカラシップについて教えておこう」

「なんですかそれ？」

「予備校の奨学金制度の事だ。予備校での成績上位者は予備校の費用が免除される仕組みがある。予備校の資料にも明記してあるからしっかりと確認する様に」

俺は返事をして応接室を後にした。弁当を食べようと部室に行くところにはユキだけしかいなかった。

「結衣さんは今日は三浦さんたちと食べるみたいよ」
なるほど。昨日あんなことがあったのだ、結衣ならそう動くだろう。

八幡もそれに付き合わされてるに違いない。

俺は「そうか」と短く応え、いつもの席で腹を満たす作業に取り掛かる。

自分が作った弁当に感慨もクソもない。ものの十数分で完了した。

「ユキ。言っておきたい事がある」

「何かしら?」

ユキの淹れてくれた紅茶を味わいながら話を切り出す。

「俺のいままでの事なんだが――」

度重なる転居とその影響。母の疾病と逝去。その後の遺産問題。中学時代にあった事。

俺は全てをユキに話した。今更と言われたら謝るしかないが、彼女には伝えておきたかった。

「そう。わかったわ。話してくれてありがとう。ハル」

ユキからはそれ以上の言及はなかった。

放課後に進路指導室で大学の資料をばらばらと見ていると青がかったポニーテールの女子が入って来た。

「なんだ柊じゃん」

「川崎か、お前も進学先の資料見に来たのか?」

「ま。そんなとこ」

総武高校にいるんだから当たり前か。俺は彼女とあまり話した事はない。

俺は川崎からも情報を仕入れようと予備校の事を聞いてみる。

「川崎はどここの予備校行くんだ?」

「は?急に話しかけないで」

「……………おう」

なんだか川崎はピリピリしていた。

少しイラツとしたが彼女には彼女の事情があるのだろう。藪蛇になるのは目に見えてるのでこれ以上の接触はしない方が賢明だ。

俺は千葉大学教育学部の平均成績や項目のチェックをして進路指導室を後にした。



「こんにちはあ〜」

今日の退屈な授業も終わり、正式に部員になったわたしはいつもの様に部室へ足を運ぶ。

「こんにちは、いろは」

部室には柊せんぱいしかいなかった。他の先輩方はサイゼリアで勉強会をやってるらしい。

なんで柊せんぱいは参加しなかったのだろうか？彼はたしか学年総合3位だったはず。

「俺も呼ばれたが行かなかった。俺はほとんど記憶力で点数とってるからな、教えるのは向いてないんだよ」

「そうなんですネ。てつきり可愛い後輩のわたしをひとりぼっちにさせない為にいてくれるのかと思いましたあ」

「まあ、それが一番の理由だな。来て誰もいなかったらアレだし」

「ふふっ。どうですか？可愛い後輩とふたりつきりですよお？嬉しくないですかあ？」

「はいはい。嬉しいよ」

「むう〜！じゃあわたしが柊せんぱいの寂しさを癒してあげますね〜」

「いらんぞ。勉強の邪魔するな。っておいひつつくな！」

わたしは柊せんぱいの腕にしがみついて、わざと胸を押し当てて肩に顔をすりすりした。

柊せんぱいは少し困ってたけど。わたしに抱き着かれて嫌がる男なんていない。

私はうりうりと可愛いアピールを全力でやっている最中に、少し疑問に思う。

なんでわたしは『違和感を覚えない』のだろうか。

こんな事は誰にもしたことはない。クラスの荷物持ち君達には袖や服の端をちよんとつまむに留めてる。

柘せんぱいは始めてわたしが抱き着いた男の人だ。他の人に私から抱き着く想像をするだけで気持ち悪くなる。

比企谷せんぱいもかっこいい人だけど、抱き着いてまで可愛いアピールはできない。せいぜいあざとく迫るのが精いっぱいだ。こうして抱き着いていることが当たり前前のように感じてならない。

「なあ、いろは」

「はい。なんですか？」

「抱き着かれて少し恥ずかしいんだが、あんまり違和感がないのはなんでだろうな」

「柘せんぱいもなんですね！わたしもなんです。びっくりしました」

昔に大泣きした時に居てくれた安心感が、雛鳥の刷り込みみたいにわたしの中に残ってるのだろうか。

腕に抱き着いたまま私は話しかける。

「柘せんぱい」

「なんだ？」

「これからわたしとデートしましょう」

ほら違和感ない。ちゃんと仕事してほしい。

でもこれは問題かもしれない。わたしが異性として意識してないのか、わたしに魅力がないのかハッキリさせたい。

たっぷり間を置いて柘せんぱいが答えた。

「デートはいいんだが、この後はちよつと用事あるんだ。それ終わってからでもいいならいいよ」

「だめですよー！ 用事はわたしもついていきます。それ込みでデートしましょうー！」

柘せんぱいは仕方ないなあど柔らかな笑みを浮かべる。

私に離れる様に促して、優しく頭を撫でてくれた。

気持ちよくてつい目を細めてしまう。「んう…」って変な声もでてしまった。

下駄箱あたりでぽんこついろはってイジられた。わたしはぽんこつじゃないですう！

「ところで用事って何なんですかあ？」

「…うーん。言っちゃっていいか」

なんだろう。聞いちゃマズい事だったのだろうか。

私は少し身構えてしまう。

「実は…独り暮らし始めようと思っとな。部屋を見に行くんだ」

「えっ。今の家じゃダメなんですか？」

「あー…うん。よし。いろはちゃんと聞いてくれ」

「えっ、あ。はい…」

信じられない話を聞いた。柘せんぱいは本当の意味で孤独だった。彼が下宿先を探す理由も頷ける。

自分の家だけど自分の家じゃない。そんな環境で心は休まるのだろうか。わたしはそんなの絶対耐えられない。

「柘せんぱい…」

「いろは。もう乗り越えたから大丈夫だ」

わたしは彼の手をぎゅつと握る。柘せんぱいもほどよい力で握り返してくれた。

やっぱり違和感は仕事してない。

物件を探しに来た私たちは店を数件巡った。

未成年が部屋の契約をする場合には、親権者の同意と連帯保証人が必要らしく今日は借りれないらしい。

柘せんぱいは元々知ってたみたい。この人できない事あるんだろうか？

色々な部屋をパソコンで見せてもらった。

柘せんぱいの条件に合致する物件はあまりないみたい。

オートロックのマンションで、光ファイバー使えて。2DK以上でバストイレ別で。学校から徒歩圏内。

あるにはあるらしいけど家賃が18万円とかしてた。18万円で何できるだろう…

終せんぱいはお店の人たちにはもれなく『彼女さんですか?』と聞かれたけど『違います』と即答してた。

ううう!ちよつとくらい悩んでくれてもいいと思うんですけどお

今日は下見だけだったみたいで最寄り駅の喫茶店でお茶して解散した。

喫茶店で対面で座る時と駅前で別れる時だけ、違和感さんが仕事してました。

もうアレです。一緒に居たら隣にいるのが当たり前で、歩いてるときは手を繋いだり腕を組んだりするのが普通みたい。でもふいに腰を抱かれたのはすごく恥ずかしかった。あーゆるー不意打ちはズルい。今夜は仕事を始めた違和感さんが邪魔してなかなか寝付けなかった。

第18話

八幡と小町が朝に帰ってきた。

俺はバイトを辞めてから早朝のジョギングを日課にしている。俺と入れ違いに2人が帰ってきたのだ。何かあったのかと少し心配になって、八幡に聞いてみたが「色々あんだよ」とはぐらかされた。つまり、詮索しないでほしいって事だ。

俺も八幡も高校生だ。八幡の言う様に、色々あるのだろう。

いつもの日常が消費されていく。

クラスでは職場見学の話で賑わっていた。

しかし俺はまだ誰とどこに行くのか決めていない。

どうしたもんかな。と考えていると、八幡から声をかけられた。

「春仁。葉山をこっちに誘おうと思うんだが、いいか？」

葉山君はあの演説以来、元のグループとの関係が薄くなっている。自分から距離を置いているみたいだ。あの時に一度完全に壊れたのだからまた作り直せば良いだけなのだが、彼にはそれが分からないのだろう。いや、分かっていて、それを認めたくないのかもしれない。

いずれにせよ、グループに拘らない俺は八幡の提案を受け入れた。

八幡の班は戸塚君とのペアに葉山君を入れて3人。三浦グループは元々3人、そこに戸部君達に加わり、職場見学は9人でまとまるだろう。俺はどうにでもなるからな。

「ああ、それでいいぞ。俺は適当な所に混ざる。」

「ぼっちになるのは俺の役目なんだが、あの状態の葉山は危なっかしいからな。三浦と戸部がうまくやってくれんだろ。」

俺は教師になるという目標を掲げた。どうせ行くのであればそれにあつわる場所に行きたいと考え、受け入れてくれる企業リストをパラパラとめくる。

「あの…柊君」

「ん？」

俺を呼んだのは相模だった。彼女は1年の時も2年の時も同じクラスだったが、両手で数えられる程度の会話しかしていない仲。つまり

他人だ。

1年の時のような自己顕示欲は見られなくなっている彼女は、元とは言えトップカーストに君臨していた容姿の整った美少女だと言える。

ほとんど接触がなかったのにこのタイミングで話しかけてくるのは何か深刻な相談でもあるのだろうか？

「うちね。職場見学の班まだ決まってないんだ…その、一緒に行ってくれないかな？」

お前に一体何があった。相模南。

結衣にばっさり行かれたくらいでそこまで人間変わるものだろうか。

いや、でもあれからかなり経ってるし、彼女も反省したんじゃないか？

いやいや、演技という線も捨てきれない。

俺は相模がした事をハッキリ覚えてる。だからこそ疑ってしまった。だが。反省するには1年間と言う期間は十分ではないだろうか？相模は彼女なりに努力した結果の今ではないだろうか？

俺は思考を巡らせて結論を出した。

——頑張りが見えたら褒めて、問題を起こしたら叱ってやればいい。と。

「ああ、いいよ。どこいくかはもう一人誘ってから決めようか」

「えっと。うちはどこでもいいから。もう一人の人と決めちゃっていいよ」

相模にありがたそうと返事をして先ほどの資料に目を通す。相模が興味深々に覗いて来る。互いの肩が触れ合う距離で資料を見ていく。始めて見る彼女の自然な横顔に少し緊張してしまう。

「アンタも教育学部に進学希望なんだって？」

「んあ？なんだ川崎か。『も』って事は川崎も教職員系が進路希望なのか？」

まあね。と顔を逸らしながら川崎は答えた。

お前この前俺に「いきなり話しかけんな」って言って来たけど。自

分はいいのかよ。

まあ色々あるだろうし。水に流しておこう。

「アタシは保育園とか小学校とかで働きたくてね」

「そうか、俺も教師になりたくて平塚先生に相談してる所だ」

「わあ。柘君も川崎さんもすごいね。将来の事考えてるってすごいな。うちも考えないといけないのはわかってるんだけどね…」

相模はやりたい事が見つからない様だ。職場見学の本来の目的は、やりたい事やってみたい事を見て。触って。体感する事なのだから、相模の在り方は間違っではない。

「じゃあ、絶対行かなそうな所行ってみないか？これはイヤだっと思えるやつ」

「あー。そういう事ね。アタシもアンタも見学行く意味ないから、悪い体験しとこうって事ね」

「ウチにはその思考はマネできない…アハハ」

俺達の職場見学は適当な工場の見学になった。

——そして当日。

八幡のそこは9人で行くはずが葉山シンパの増員があつたらしく、かなりの人数で行くことになったらしい。

ちなみにマスコミ関係だった模様。八幡、お前そこ絶対いかなだろ

：

結果として職場見学は思ったより有意義だった。

仕事としては絶対やりたくないが、良い話を聞いた事が満足だ。

俺達が聞いたのは「レンガ積みの男」という話。

A B Cという3人の男が教会を作る為に、同じ現場、同じ作業量、同じ賃金で働いている。

Aの表情は辛そうだ。彼はこの仕事は自分の生活を支える為にやっている。重労働の割に賃金は安いと感じている。体には疲労がたまるばかり。やりがいなど感じられない。

Bは歯を食いしばっている。身体が悲鳴を上げて今にも倒れてしまいそうだ。しかし彼は家族を支える為に仕事をしている。家族の為に弱音は吐かないのだ。やらなければという使命感を感じる。

Cは何故かにこやかに笑っている。彼だけが楽をしている訳でも、サボっている訳でもない。彼は自分の労働で教会が完成した後、ここで子供たちが祈りを捧げられる。これは素晴らしい事だと考えているのだ。

その工場長は最後にこう言った。

『迷った時は、今やっている事が何になるのか考えてみなさい。もちろん、なんでも解決する訳じゃあない。考えて考えて、考えぬいても、行動しないと結果はでないんだ。いつか君たちが行動する時の理由の手伝いになればいいと思うよ。』

俺達は意外な所でとでもいい体験ができた。川崎も相模も来てよかったと言っていた。



職場見学に来てはいるが、俺はそんな事はどうでも良かった。サボりたかったとかそういう事じゃない。

先日、春仁に素っ気ない態度を取ってしまった。それから春仁とは少し距離がある様に感じてしまう。

川崎沙希の弟である川崎大志から小町に相談があり、それを奉仕部で受けたのだが、内容が内容だった事もあって、春仁には関与させない方がいいと思って黙っていた。

俺が気にしすぎなのだろうか、それとも本当に距離が開いてしまっているのだろうか。

春仁が今回の件を知ったらきつと怒る。また自分の過去を話し出すだろう。

俺も由比ヶ浜も、あんな辛そうな春仁はもう見たくない。辛い思いをしてほしくない。これは俺の本心だ。

しかし俺は自分の行動に疑問を持つ。これは本当に春仁の為なのだろうか。

思考と行動が乖離している。

自分がイヤだから、見たくないから逃げてるだけじゃないのだろうか

か。

「はあ……」

無意識にため息が出る。幸せが逃げると言われるが、無くなるとは言われていない。誰かが俺の幸せを拾ってくれるならそれでいい。自己満足で構わない、可能であれば春仁に届いてほしい。

俺は自己嫌悪の渦から抜け出せずにいる。

「ヒツキーどうしたの？　なんだか辛そうだよ？」

葉山達の少し後ろを着いていく俺に由比ヶ浜が話しかけて来た。

「ああ…春仁の事でちよつとな」

「ハル君とケンカでもしたの…？」

「いや、自意識過剰なだけだと思っただが…その、気になってな」

「……………そっか」

「由比ヶ浜。その、なんだ…後で、ちよつと相談していいか？」

「ヒツキー…うん。いいよ」

俺は職場見学が終わってから、喫茶店に移動して由比ヶ浜に相談した。

思えば彼女を頼るのは初めてではないだろうか。入学式でサブレを助けて、お礼言われて、友達になって。かれこれ1年間の付き合いになる。彼女は産まれて始めての友達だ。

そうだ、俺は由比ヶ浜を信じた。こいつで最後にしようって決めて、今も目の前にいてくれるこいつを信じてる。

「ヒツキーは悪くないよ」

「そうだろうか…俺は、俺のエゴで春仁を傷つけたと思ってる」

「だとしても、ヒツキーは悪くない。だつてさ。今ね、ヒツキーが苦しんでるんだよ？　あたしはヒツキーの味方だから、信じてほしいな」

「由比ヶ浜…ありがとな。かなり楽になった」

「えっへん！ヒツキーも、もつとあたしを頼っていいんだよー！」

由比ヶ浜が手を腰に当てて胸を逸らす。メロンが目の前でぶると揺れてつい目を背けてしまう。

その姿勢するなら事前に言っておいてくれませんか？

見てしまったら『ヒツキーのエッチ！キモい！』とか言ってくるのわかってるから。

俺は無罪だ。見る事が罪なら総武高校は女子高になるだろう。男子はもれなく懲役だ。言わせんな。泣きたくなる。

「そうだな。ほんと由比ヶ浜は頼りになるよ」

「わああ！ヒツキーが素直だ！ 大丈夫!? 検査してもらおう？」

「由比ヶ浜、検査って言葉知ってるのか。偉いぞ」

「ばかにすんなし!!」

くっそ。ほんといい笑顔だ。眩しすぎて直視できん。

微妙な照れ隠ししかできない。顔が熱い自覚もある。人を好きになるってすごい。

今まで由比ヶ浜や春仁に告白してる人はこんな感覚に耐えてたのか。少し尊敬する。

「ありがとな…由比ヶ浜」

「えへへ♪ どういたしまして」

俺と由比ヶ浜は会計をして喫茶店を後にする。彼女を家の近くまで送って帰路についた。

家に帰ると春仁と小町が話をしていた。

ちらつと小町の顔見た感じだと軽い話ではなさそうだった。

ひよつとして俺が関わっているのだろうか。

ひとまず俺も話に加わる事になった。

「八幡。俺は独り暮らしを始める」

「……………俺が黙ってたからか？」

「ん? 『ああ色々あんだよ』って言った件か? あれは関係ないぞ。といつか言いたくない事くらいいくらでもあんだろ」

そうか、そうだったのか。結局は俺の早合点で早とちりでただの自己意識過剰だったって事だ。

俺は春仁を傷つけてなかった。じゃあ独り暮らしの理由はなんだ。

俺達と暮らすのがイヤになったのだろうか。

「正直に言う。俺はこの家を自宅とは思えない。どうしても気を使ってしまう」

春仁は真剣な眼差しで続ける。

「八幡と小町の事は好きだし、大切な家族だ。でもここは俺の家じゃない」

「ハルにい…小町はさびしいよう…うう…」

小町はこらえきれずに泣いてしまった。俺はお兄ちゃんスキルが発動したのか無意識に頭を撫でている。

「大丈夫だ。合鍵も渡すし、ここにもちゃんと来るから。それは約束する」

「…わかった。引越はいつになるんだ？俺も手伝うから決まったら教えてくれ」

春仁はわかったと返事をして小町を慰めていた。

「いつかは独りで暮らすんだし、遅くても大学生になったらそうなる。失敗するなら高校生の内におきたいんだ」

春仁の決意は固い様だ。

ならば俺は尊敬する兄の為に、春仁が自慢できる弟になろうと心に決める。

第19話

奉仕部の面々に手伝ってもらって、俺の引越しも終わり、電気、水道、ガスも使える様になった。木の模様が施されたフローリング、白く統一された壁紙、手をパンと叩けば音が反響して防音がしっかりしている事がわかる。

とりあえず住める状態。というのが相応しいこの部屋を都にすべく、俺は必要な物をリストアップしている。

エアコンは備え付けがあるが。冷蔵庫と洗濯機、電子レンジ辺りの白物家電は速やかに用意するべきだ。テレビとPCも必須だ。それ以外の黒物家電はおいおいでいいだろう。買いに行くなら日曜日である今日が理想だろうか。

何もないガランとした、ただの2DKが徐々にアップグレードしていく様を思い浮かべて心が躍る。

はずなのだが――

「柘せんぱい！オーブン欲しくくないですか!?お菓子作ってあげますよお！」

――なぜか一色いろはが超ノリノリだった。

お菓子作りは自宅でやれ。

そもそも何故いろはがここに居るのだろうか。俺は昨日からの一連の流れを思い出す。

昨日は引越しが終わって、解散して、比企谷宅で寝て、起きて、荷物持って下宿先のカギ開けたら。俺の後ろにいろはが立ってた。ホラーだ。

いろはも昨日手伝ってくれたが、今日も来るとは聞いていない。まさか俺の記憶違いだろうか。

「柘せんぱい。無視したら大声で誘拐されたって叫びますよ?」

「やめなさい」

可愛らしい笑顔でとんでもない事言いやがるな。

こうなつては仕方ない。追い出してもキーキー言うだろうし、なんだかんだ言つて、俺はいろはとの時間を楽しんでる。

「オーブンは実物見て考えるか。ほれ東京までいくぞ」
「りょうかいでくす♪」

俺はマグザムの後部座席にいろはを乗せ、家電量販店が密集している東京界限に向かった。

本命はコンシエルジュサービスがある秋葉原の店。そこに行く前に近隣店舗で値段を出してもらう。

もちろん価格交渉に使うためだ。安く買う為に足を使う。これは必要な事だった。

——2時間後。

「ちよつと…休憩、しま、せんか」

「そうしよう！あー！足いてえ。大丈夫か？」

「だ、大丈夫です。でもお腹すいたのでどこか入りませんか？」

「わかった。そうしようか。何か食べたい物はあるか？」

「おまかせしまくす」

じゃあ。という事で目的地の秋葉原の店舗の近くにマグザムで移動して、ふと目に入ったオムライス専門店に入った。足をいたわりつつ、ふわふわのオムライスを堪能する。二人とも、東京の雑踏に慣れていない事も重なり、ガチで疲れて会話らしい会話はほとんどなかった。店の中はカップルと女性客で賑わっていたが、俺達のテーブルだけ無言に近かったので店員さんからチラチラ見られてた。

あの、ケンカしてないので安心してください。

適度に腹を満たした俺達は目的地である店に入り、家電を物色していく。

冷蔵庫はまあ一人暮らしだしそんなに大きいのは必要じゃなかったから、省スペースな品に決めた。

洗濯機はバルコニーに置けるやつで手入れが楽な品にした。電子レンジもこだわりはないのでそこそこの物にする。

いろはが眼を輝かせていたオーブンコーナーにさしかかる。

「終せんぱいっ！わたしーこれで料理したいですう！きつとおいしく作れますよ♪」

「……………おこ」

「おや、やはり彼女さんでしたか、初々しいですねえ。私の娘も最近結婚しましてな——」

待ってました！を身体全体で表現しつつ《きやるんっ》というスパイスを忘れないあざとさ満点の一色いろは。

俺の腕にぎゅつと抱き着くが、ターゲットは俺ではなくコンシエルジユの店員さんだった。

そこそこ歳をお召しの男性。左手には指輪が光っているのがはっきり見える。

色仕掛けか。いや違う。いろはす仕掛け。彼氏に奉仕したい健気な女の子を演じる魂胆の様だ。

「いや…オーブンはあってもいいが…予算がなあ」

「ご予算の関係でしたら、可愛らしい彼女さんにサービスということ…こちらのお値段ではいかがですか？」

提示された金額はおおよそ2割引の金額だった。現段階では予算にも余裕があるが、まだテレビやパソコンも見えていない事もあり、キープにしておいた。

いろはが小さくガツポーズしてたので後ろからチョップかましておいた。

部屋はリビングがないので大きいインチの品はかえって邪魔になる。丁度現品特価の30インチの液晶テレビが相場の半額ほどあったのでそれを選択。PCも最新は避けてそこそこのスペックの品を購入する。

「お客様。今のところ、お品物が冷蔵庫、洗濯機、電子レンジ、扇風機、オーブン、テレビ、パソコン、炬燵の7点で御座います。金額はまとめ買い価格で50万円です。他にご希望の品は御座いますでしょうか？」

店員さんが丁寧な言葉遣いで案内してくれる。あざとい彼女はオーブンが残ってる事を知ってご機嫌である。

炬燵もいろはがおねだりしてきたが、炬燵はあっても困らないし、後でどうせ買うのが目に見えてるので一緒に買う事にした。

「他にいるものかあ…ベッドとか椅子とかデスクとか家具系ですね。

ありますか?」

「ソファーもほしいです!」

「はは。元気な彼女さんですね。ベッドは生憎取り扱っておりませんが、パソコン用のデスクであれば商品としてあります。ご覧になりますか?」

パソコンデスクは何かと用途が広いので見せてもらうことにした。店員さんの「かしこまりました」がすごくカッコいい。なんかこう…プロって感じがする。

デスクはL字型の品が、間取りともマッチしていたのでそれで即決。ほどよいチェアも紹介してもらって合計で55万円の買い物となった。

「なあいろは」

「はい。なんですか?」

「いつまで引っ付いてるんだ?」

「細かい事は気にしちやダメですよ」

もう諦めた。好きな様にさせよう。

ふとスマホが気になって見てみると受信メールがあつた。来た時刻は丁度バイクの運転中で気づかなかつたのだが、相手に少々問題があるかもしれない。メールの差出人には《ユキ》とあつた。

これは少しまずいかもしれない。今の時刻は15時を回った頃だ。

春仁はゴクリとつばを飲み込み、いろはに腕を捕まえられたまま『どう説明したのか』と頭を悩ませた。



由比ヶ浜の誕生日に近い事もあり、ららぽーとまで来たのはいいのだが。人が多くてダルい。

目的を達成する前に家に帰りたくなる。

そして、何を渡せばいいかわからない。去年に彼女が選んでくれたブックカバーは素直に嬉しかったし。今でも使っている。

由比ヶ浜は何を送ってもきつと喜んでくれるだろう。それは疑う

余地はない。

しかし適当な物は贈りたくない気持ちもある。

「……はあ」

春仁や雪ノ下は何を贈るのだろうか。あいつらとかぶるのは避けたいところだ。しかし雪ノ下はちゃんを選べるのだろうかと少し気になる。あれだけ普通って言葉が似合わない女の子もそういないだろう。

あ、一色がいたわ。

「ん？あれは…雪ノ下か？」

ひときわ目立つ綺麗な黒髪はピンクのリボンで後ろに纏められ、白いワンピースの上に淡い水色のカーディガン羽織っている。何気に彼女の私服を見るのは初めてだった。

しかし、どこか挙動不審でうろろしている。まさかとは思うが…

「…迷子か？」

そんな事があるのだろうか。

部室で俺を楽しそうに罵倒してくる“あの”雪ノ下が…

まあ。困ってるなら助けてやってもバチはあたらんだろ。

「よお、雪ノ下」

「ひいっ！」

なんだこの女。ナチュラルに悲鳴上げやがった。

「……じゃあな」

「待ちなさい」

怖い怖い。そんなに睨むんじゃない。俺の顔見てガチの悲鳴上げたくせに命令かよ。ホントブレないなこいつは。

まあ、でも。そうじゃないと調子狂うってのは否定できない。

「雪ノ下も買い物か？こんな所に来るなんて珍しいな。」

「え、ええ。そうなのだけけど。丁度よかったわ。結衣さんの誕生日プレゼントを買いに来たのだけれど、どれを買っていいかわからない上に、下種な男性に声を掛けられて迷惑していたの。」

俺は短く「そうか。」と答える。

雪ノ下は一度鏡を見た方がいいんじゃないだろうか。あ、始めて

会った時に『私、可愛いもの』って言ってたね。声かけられるのわかってて外出るとか、ある意味チャレンジャーだな。

「その…まことにいかんなのだけれど。今日は隣を歩く事を許してあげるわ。だから…その…一緒にみてくれないかしら…」

「んぐっ………ああ…いいぞ…」

雪ノ下の！ 上目遣いの破壊力が！ ヤバい！

由比ヶ浜の《ダメ？》も、そうだがなんで女の子の瞳は毎度うるうるしてるんだろう。涙腺コントロール出来るように訓練でもしてるのだろうか。もしそうなら日本の未来がヤバい。

雪ノ下に《ダメかしら？》とかされて断れる男いるのか？

奴隷の様に扱われても許してしまえばいいから絶対にしないでくださいね。

「…それで、どんな物をさがしてるんだ？」

「服とかはサイズがわからないし…アクセサリーとかもあまりつけてないでしょう？勉強とかもがんばってるみたいだから、参考書。というのも考えたのだけれど、喜ぶ顔が浮かんでこないのよ」

雪ノ下が真剣に悩んでいる。あの時の涙は本物なのだろう。雪ノ下は友達由比ヶ浜に喜んで欲しいのだ。

俺は彼女のその気持ちに応援したい。そう思う。

「そーいや、由比ヶ浜はあれ以来クツキーなりなんなり持ってきたのか？」

「持ってきてないわ。でもまだ続けてはいるみたいよ」

「ならキツチンで使えそうな物とかはどうだ？あいつの依頼もまだちゃんと終わってる訳じゃないし『覚えてる』って伝える事もできる」俺が事細かに決めるのは違う気がする。だからカテゴリーまでは絞ってやろう。

雪ノ下はそれに乗っかる形で、プレゼントをエプロンに決めたようだ。

雪ノ下が黒猫をモチーフにした紫色のエプロンを試着していた。

その姿が似合い過ぎて俺は少しの間見惚れる。

彼女はくるりと回って――

「どうかしらっ？」

「あー…よく…似合ってるじよ」

噛んだ。恥ずかしい。死にたい。

聴けば由比ヶ浜に似合うかどうかの感想だった。それ着る意味ないよね？

でも似合ってたのはホントだよ？オイため息つくな。

アホっぽい色。とだけ伝えたら理解できたのかピンクを基調としたぽわわしてるエプロン買った。

「結衣さんの依頼。きつと終わらないわ」

その『終わらない』と言う言葉にどれだけの想いが込められているのだろうか。上達しない。という現実は置いとくとして。

終わって欲しくない。或いは終わらせない。そんな想いがこもってるのだろう。

始まりがあつて、終わりがある。

俺と由比ヶ浜の始まりは病院だった。俺がサブレを助けて、車道に飛び込んで怪我して。それで春仁が連れて来てくれた。その時に彼女に心からの『ありがとう』を言ってもらえた。

思えばそれからはほとんど一緒にいた気がする。退院して、誕生日祝ってもらつて、文化祭も一緒にいたな。

由比ヶ浜への恋を自覚したのは最近だ。でも自分の気持ちを告白する事が怖い。俺が振られる事はいい。そんなの慣れてる。

俺は、独りよがりの気持ちをぶつけて彼女を悲しませたくない。彼女には幸せになってほしい。

でも、幸せにするのは俺じゃなくて構わない。

ならば、彼女が泣く要因を少しでも減らしたい。俺はそう考えてプレゼントを買いに行く。

念のために春仁にも何買うかメールで聞いておこう。

俺と雪ノ下はペットショップに移動し、俺は目的の物を購入するのだが。

「にゃ〜」

「……………」

あの、雪ノ下さん？

「うふふ。にゃ〜♪」

「……………はあ」

子猫とにゃーにゃー会話してる雪ノ下。

なんというか、まあ。うん。楽しそうだからしばらくそつとしておこう。

変なナンパに引っかけかかって困ってた割には行動が自由すぎないか？

あ、俺がすでに変だったな。

…ぐすん。

30分ほどで雪ノ下がアツチから戻って来たので、少し休憩しようと手頃なベンチに座らせて紅茶を買ってきてやった。体力がないのは相変わらずみたいだ。

俺が彼女と少し距離を空けて座るとにスマホにメールが届いた。

確認すると春仁から『俺といろはもそこに向かってる。何買ったか後で教えてくれ』と来ていた。

「はあ……………疲れた」

俺も雪ノ下も由比ヶ浜への贈り物は用意できた。あとは適当に帰るだけなのだが、しばらく時間をつぶして春仁達と飯食って帰るのもいいだろう。もちろん春仁のおごりで。

「なあ、雪ノ下。この後——」

「あつれ〜？雪乃ちゃんじゃなくい！こんな所でどうしたの？」

「……………姉さん」

「は？……………姉さん？」

第20話

いろはを後部座席に寄せ秋葉原からの帰路について10分ほどしてから八幡からメールが来た。適当なコンビニで内容を確認すると結衣の誕生日プレゼントの件だった。別の日に買いに行く予定だったが、逆に好都合なので今日に予定変更。

理由は言うまでもなくいろはだ。

このあざとい後輩はいきなり現れて、連れて行かざるを得ない状況を計算するだろう。今日がまさにそれだったし、ある意味脅迫だ。

つまり、外出する回数是可以するだけ少ない方がいい。

彼女は自分がどの様に振る舞えば男が喜ぶか、ちゃんと知ってる女だ。

それでいて、外見だけでなく内面も自分を磨き続けている。

だからこそ油断はできない。男が喜ぶ事を知っている。ということはその逆も当然理解しているのだから。

「ただいまです」

「おかえり」

ひとまずいろはを座らせて、この後の事を相談する。

いろはも結衣の誕生日の事をちゃんと考えていた。贈り物は香水にするみたいだ。

「一緒に買いに行きましょうね」

「そ、そうだな。なら今日で済ましてしまおうか」

さりげなく俺は提案する。

しかし返ってきたのは予想通りの期待外れな答えだった。

「明日の放課後でもいいですかあ?」

「……………」

はははこいつめ。面白い冗談だな。

「えっと…今日ららばで買——」

「明日の放課後でもいいですよね?」

「……………はい」

凄くいい笑顔で酷い事を言われた気がする。

俺は、今は逆らわない方が良いと考え、いろはの言う事に従った。

「ららぽーとに着いた俺達は八幡を探す。もはや手を繋いでるのが当たり前のは。彼女はふんふんとうご機嫌だ。」

「ここはいつも面白い物客やカップル、学生で賑わっているのだが、東京の雑踏に比べれば格段に歩きやすく感じる。」

「ひとまず1階フロアで八幡に連絡を取るべくスマートフォンを取り出した。」

「あれ？あそこにいるの、ユキせんぱいじゃないですかあ？つていうか誰かに絡まれてませんか？」

「…マジかあ。ここで会うのかあ」「えっ？」

ユキと八幡が一緒にいる。意外だが、それはいい。ユキと八幡に絡んでる人物。それに問題がある。

「1年前、俺が交通事故の関係者として証言をした際に同席してた人物。」

「雪ノ下陽乃。ユキの姉。一応、小学生の頃も交流はあったが、当時の印象は欠片も感じられない。今では完全な他人であった。」

「俺は証言の際に底知れぬ違和感を抱き、その違和感の正体がわからず恐怖したのを覚えてる。」

「彼女との邂逅は避けられるのであれば避けたい。少なくとも今は。陽乃さんが八幡をいじくりまわしてる間にユキにメールを入れておく。」

「ユキと目が会い、俺は小さく頷いて隠密に行動した。」

「息を殺し。足音を消し。するりするりと死角へ移動する。他人から見れば、どう見ても怪しい。不審者扱いされて通報されるまでである。しかし、陽乃さんに見つかるのは良くない。」

「俺が陽乃さんにいじくられる事は問題ない。八幡とユキがいじくられるのも問題ない。と思う。」

「つまりそう。アレだ。」

『いろはと会わせるのがマズイ』

ただでさえ厄介ないろはが陽乃さんのマネをしだすと、俺の平穩がなくなるのは目に見えてる。

それは全力で避けるべき未来だ。

いろはも身の危険を感じているのか、握る手に力が入る。

好都合だが、怖がらせるのは本意ではないのできゅつと軽く握り返した。



なんだかすごい人がいた。

綺麗で、スタイルも良くて、女のわたしでもどきどきしてしまいうな人。

柊せんぱいによるとユキせんぱいのお姉さんらしい。

なるほど言われてみればたしかに似てる。

しかし気になる。柊せんぱいが隠れた事に意味はあったのだろうか。

「こんにちはあ〜」

ユキせんぱいと合流して比企谷せんぱいにもあいさつをする。

どこかお二人の様子がおかしく感じるが、先ほどの柊せんぱいの様子も大概だったので黙っておくことにした。

「こ、こんにちは。いろはさん」

「…うつす」

「ユキせんぱい無事ですか？そのケダモノに何かされたんですか？」

「むしろ俺が被害者なんだが…」

知ってます。知っててわざと聞いてるんですけど。

「比企谷くんには何もされてないわ」

そうですか。と。どうでもよさそうに返事をして、先ほどのすごい人の事を軽く聞いてみる。

「雪ノ下陽乃。私の姉さんよ」

「…姉妹だけあって似てるが、あれはなんかこう、ベクトルが違う」

わたしは自分の目で見た物や聴いた事しか信じない性質^{タテ}だけど、ユキせんぱいがものすごく嫌そうな顔をしてたので、そう認識しておく。

わたしにとって、人伝いの情報はあまり意味をなさない。精々あの時のあんな話止まりだろう。

そんな事より、目の前の状況が気になる。

「お二人もデートですかあ？」

あえてこんな質問をするわたしはきつと小悪魔だろう。いや、ひよつとしたら柘せんぱいの腕に抱き着く効果でランクアップして中悪魔くらいにはなってるかもしれない。

「違う」

「プレゼントを買いに来たらコイツがまよ——」

「比企谷くん。私たちは偶然ここで会ったのでしよう？それ以外の返答はないと思うのだけれど」

「…そうだな」

「ユキが迷ったから八幡が声かけたって事だな」

柘せんぱいがわたしの耳に息がかかるくらいの距離でほしよつと教えてくれた。

柘せんぱい。ちよつと近いです。わたしの香りそんなに嗅ぎたいんですかあ？って言えたらいいな。

恥ずかしい。ムリ。

「ところで、お二人も。という事はあなた達はデートをしていたのかしら？」

「いや、突然いろはが家の——」

「はいーデートしてますー！」

ユキせんぱいの反撃！惜しいですね。その程度でわたしが恥ずかしがるタマだと思ってるのでしょうか。

これはわたしにとって反撃の意味を成しません！どうですか？ユキせんぱい。いい加減素直になった方が良くないですか？

「朝、下宿先に発生してな。連れて行かないと大声出すって脅された」
柘せんぱいがばらしたせいでユキせんぱいにとっても冷めた目で見

られました。

柘せんぱいも結構ノリノリだったはずなんですが…というか。発
生って何ですか？せめて出現にしてほしいです。

少し残念な気持ちになってしまった。

「でも、まあ。デートつちやデートだなこれは、ずっと手は繋いでる
し、腕に抱き着いてきたりもしたからな」

「つちよーはわわ。そこまでバラすのはダメです！」

ユキせんぱいに生暖かい目で見られました。

やめてください。まだ冷めた目の方がよかったです。

「あの、いろはさん」

ユキせんぱいが遠慮気味にわたしを呼ぶ。いやあ！そんな目でわ
たしをみないでえ！

「貴女、やっぱりほんこつなのね」

「やっぱりってどういうことですか!？」

こ、この女…。ぐぬぬ！やっぱりって事は前からそう思われてたつ
て事ですよ。自覚があります。ええ、ありますとも。でも面と向
かって言われると恥ずかしいです！

比企谷せんぱいは素知らぬ顔して他人のフリしてやがしました。

柘せんぱいに言いつけておしおきしてもらおう事にします。

少しの間4人でたのしくおしゃべりしていると。色々な事がわかり
ました。

ユキせんぱい猫大好きなんですね。それはもう溺れるくらいに。

柘せんぱいに猫カフェの時の写真を見せてもらいました。

もう絶句しましたね。てつきりかいぐりかいぐりと構い倒すのか
と思えば、何ですかこの慈愛に満ちた微笑み。静止画でもわかる愛
情。なによりカメラ向けられて気付かないって女としてどうなんで
しょうか。

自然な状態でこんなに綺麗なユキせんぱいはズルいです。

「ハルのも見せてあげるわ」

柘せんぱいはなんとというか。なんだか猫に愛されてるのでしよ
うか？噛まれてますよね？これ。

聴けば爪も立てられてたみたいで顔にペしペし当たるしつぽもウザかったそうです。

ふと目の前のユキせんぱいの身体がこわばりました。

「あ…ああ、比企谷くん…いい、犬が…」

「ん？」

後ろを振り向くと茶色のミニチュアダックスフンドがおもちやでも追いかけてるかの様に走って来ていた。

ユキせんぱいは比企谷せんぱいの服をつまんで助けを求めている。ガチでびびってますね。

「んあ？結衣んとこのサブレじゃないか？」

犬はジャンプして比企谷せんぱいがキヤッチ。綺麗に抱っこされました。ユキせんぱいはビビり損ですね。

わたしと柊せんぱいは可愛いユキせんぱい見れてちよつと鼻息荒いです。

「サブレーー！」

聴きなれた声が遠くから聞こえて来た。声が出た方に視線を向けると、茶色がかつた黒髪のお団子ヘアースタイルが眼に入る。

胸は見えません。でも走るだけであんなに揺れるなんて超肩凝りそう——

——すみません超見えました。

「すみませーん！ウチのサブレがご迷惑を！ってええっ！みんないるしー！」

結衣せんぱいが手をぶんぶん振ってわたわたしている。本当に高校生なのだろうか。せんぱいってつけるのやめようかな。

「結衣さん。こんにちは」

「やつはろー。ゆきのん、えつと、皆で集まって何、してるの…かな？」
あー。これはマズいかもしれないですね。結衣せんぱい被害妄想

のスイッチ入っちゃうかもしれない。

仕方ないでのここはわたしが愛するせんぱい方の為に一肌脱ぎましようか。

「結衣せんぱあ〜い♪」

「わわっ！いろはちゃんどうしたの？」

結衣せんぱいのやわらかい胸に飛び込んで自然に耳元で囁ける状況に持っていく。少しくらい堪能してもきつと怒られない。ぐりぐりぽよぽよと顔を押し付ける。結衣せんぱいは少し恥ずかしそうだ。「結衣せんぱい。楽しみにしててくださいねっ」

結衣せんぱいはちよつとキョドっちゃったけど、ちゃんと伝わった様で、くりくりした瞳をうるうるさせながら小声で「ありがとう」と言った。

「サブレありがとうね。ヒツキー！あたしはまだ用事あるから行くね！ばいばい！」

奉仕部の5人の内4人が集まっていたらきつと誰もがのけ者にされてるとか、隠し事れてるとか、そう考えてしまう。

本当はサプライズで祝ってあげたかった。でも、あれくらいのカミングアウトならかえってうまく働くのではないだろうか。

せんぱい方も「よくやった」と褒めてくれた。柊せんぱいは頭を撫でてくれて、また私は「んう」とぼんこつな声を出すのであった。

結衣せんぱいの誕生日会は比企谷せんぱいのお宅でやる事になった。今日がその日である。

わたしも思ったより楽しみにしていた様で。授業の内容を全く覚えていない。いつもの荷物持ち君も来たかどうか覚えてない位。

ちゃんと「可愛いわたし」ができていたか少し不安だ。

そんなわたしは、部室でユキせんぱいの淹れてくれた紅茶を堪能している。

この部屋から紅茶の香りがするようになったのはいつからだろうか。

ガラガラと部室のドアが開いてF組の先輩方3人が入って来「やっはろー!!」ああもう。結衣せんぱい超元気。

奉仕部が揃ってさあ行こう！れっつぱーりー。うえーい。

——とはならなかった。

奉仕部のドアが《ドンドン》と強めにノックされる。ユキせんぱい

がため息をついて入室を促した。

誰だろうか？奉仕部員はここに揃っている。平塚先生はノックをしない。ノックをするという事は依頼人だけだ。

ドアが開いた先にいたのは、この前わたし達にフルボッコにされた中二の人だった。

彼は眉間にシワを寄せてふるふる震えながら立っている。

「八幡！柊殿！」

なんだか深刻そうだ。わたしは距離を取りつつ、お二人にまかせる事にした。

あの、ユキせんぱい？目が怖いですよ？結衣せんぱいは少し表情を隠す訓練したらどうですか？

というか、お二人ともストレートすぎます。

「なんか用か？材木座。俺らこれから用事あるから今度にして——」

中二せんぱいの一言で場の空気が変わった。

「我を……助けてほしい!!」

第21話

材木座君が鬼気迫る様相で救援を求めてきた。

今までであれば大仰な言い回して相手するのもウザかったのだが、今日は一味違う様だ。

彼は端的に分かりやすく「助けてほしい」と言ったが、正直めんどくさい。時間も押している。

八幡んここで結衣のパーティーが控えているのだから、議論の余地はない。

「どうしたんだ？材木座」

八幡がめんどくさそうに聞く。

そういえば材木座君は女性との会話が不自由だったな。

ちよいちよい設定だけだったりプロットだけの状態で持ってきてるから少しは慣れたと思っていたのだが、この3人はどうしても緊張してしまうらしい。

「カツアゲでもされたのか？」

「うわあ、ド直球。んで材木座君。誰にいくら盗られたんだ？」

「違うわー！そもそもカツアゲ如き、備えがある我には隙はない！」

備えあれば憂いなし。よく聞く言葉だ。

カツアゲという犯罪行為にどの様に備えるのか少し興味が湧く。

相手は多数、しかも実力行使を躊躇わない。ソースは俺。

俺も昔は集団でリンチにあつたりしてたが、リーダー格を見極めて徹底的に反撃した。そこで得た結論。

暴力に備えなど無意味。これに至る。

では、剣豪將軍の備えとやらを拝聴しよう。

ああもう。うんたらかんたら中二設定はいいから早よ言え。

「彼奴らあやつが欲しいのは金であろう！ならば我はそこに罫を巡らせる。つまり！その金を持ち歩かない事で、彼奴らに精神的な屈辱を負わせているのだあ！！」

ユキはため息を吐いた。それはもう深呼吸と聴き間違える程の露骨なため息。

結衣は顔を痙攣らせている。携帯をポチポチいじっているいろは。どうやらガチで聞いてない様子。

俺と八幡はたっぷり10秒ほど硬直した。

だるまさんがころんだ。後ろ向いてそのまま帰れ。

ってかさ。お前もう足利將軍じゃなくてペルセウスで良くね？石化できるし。ゴーゴンの首獲る前に石になってそうだけど。

不覚にも半裸の材木座君を想像してしまった。声付きで。

うわあ…変な汗が出てきた。

いや待て。何故俺が精神攻撃を受けているのだろうか。

剣豪將軍、恐るべし。

「いや、それ備えて言わねえから。むしろ負けてるから」

「言うな！我に現実を突きつけるでない！」

「どうでもいいから。材木座君。用件は何だい？助けてって何を？」

剣豪將軍の言葉を咀嚼して、紐解いて、結論づける。

これが色々と厄介極まりない。なにいつてるかわからん。

何せまともに会話出来るのが八幡だけで、女子3人はお芝居の最中は露骨に遠ざかる。俺は結論が聞きたいので、背景やら状況やらはどうでもいいのだ。がんばればちまん！

「つまり、自分の夢を否定されたから、一言物申したい。」と

予想の遙か斜め下だった。斜面じゃなくて断崖の方。

間違いなく全員が同じ事を考えたであろう。

『いや、一人で行けよ』と。

「その通りだ。ネットで非難されるのはもう良い。文句言いたいがあえんしな。しかし身近におけるなら話は別だ！クソ生意気な鼻っ面をへし折ってくれるう！」

「そうか。頑張れよ。材木座。じゃあな」

八幡がすぐくめんどくさそうに単語をつらつらと言う。

「ちよ。待って待って。応援、応援だけでいいから！ はっ！ 終殿

！どうか慈悲を！我をお助け下され！」

ユキは深呼吸、いや、ため息を吐いて。こめかみに指を当てていた。

お前は保健室行ってバファリン貰ってこい。50パーセントの優しさでもマシになるだろう。

どうしたものかと腕を組む。文句言いたいのなら言えばいいし。そこに俺達がぞろぞろついて行くのもおかしい。

「いや、俺ら関係ないと思うんだが…」

「あー！もう！めんどくさいっ！ぱつと片づけて早く行きましょう！お腹すいてきましたし！文句言いたいだけですよね？何処ですか？」
材木座君の案内で目的地に向かう。

結局、彼のの泣き落として文句を言うのを手伝う事になった。

なんでこんな事を俺たちがしなければならぬのか憤りを禁じ得ない。

「ここだ！」

材木座君の案内で俺たちは2階に案内され、扉に遊戯部と書いてある部屋に着いた。

ノックをすると応答があつたので中に入る。

ユキによると最近できた部活の様だ。そこがどんな部活なのかは説明を受けるまでもなかつた。

室内に積み上げられた様々なゲーム。トランプはもちろんの事、ベーゴマやおはじきなどの時代を感じる玩具もある。

単純にゲームなどで遊ぶだけの部活ではない様だ。どれもどこかしら使った跡がある。

「誰もいないのかな？」

結衣が不思議そうに言う。たしかに返事があつたのに誰も出てこない。

すると奥からメガネを掛けた男子生徒が現れた。

「あの、遊戯部に何か御用ですか？」

「あれ？剣豪さんじゃないですか？まだ何かあるんですか？」

メガネが増えた。

「貴様あ！1年坊の分際で生意気な口叩きおつて！」

「材木座。少し黙れ」

「んなっ！八幡！何を言うかあ！こやつこそ我の敵であるぞお！」

「いや、俺の敵じゃねーし。文句言うんだろ？さっさと済ませろ。俺たちはこの後予定あんだよ」

なにやら1年生がひそひそ話をしている。どうやら憧れのユキ先輩というはが目の前にいてびつくりしている様だ。

材木座君が文句言っつてそれで終わり。帰ってからの行動をシミュレートしていると材木座君が口走った。

「モハハハ！そうであつたな！待たせたな1年坊。この剣豪將軍、材木座義輝が礼儀つてもんをキツチリ教え——」

「不愉快だ」

「——てやるう！ え？」

俺の一言で場の空気が変わった事がわかる。反省はしているが後悔はしていない。

1年生の二人には悪い事をしているだろう。後日ちゃんと謝りに来よう。

「ハ、ハル君…？」

しかし、はつきり言っつておく必要がある。俺達は何故ここにいるのか。この男はいつになったら学習するのだろうか。

この後予定があつて時間がないと俺たちははつきり伝えている。ひよつとしてバカにしているのだろうか。

俺達の時間を自由に使つていい権利でも持っているのだろうか。俺達に熱意が伝わってるんだからそれでいいじゃないか？何が不満なんだ？

「おい春仁…落ち着けつて」

「あ、あああの。終先輩。どどどどうかしたん——」

「材木座義輝」

俺は明確な意志を持つて、簡潔に、幼稚園児でもわかる様に言う。
「俺は、お前のそういう所が嫌いだ」



材木座はいい加減学習してほしい。一色も『めんどくさいからパツと終わらす』って言ってたよね？

俺たちはここについて、20分程経過しているが、まだ肝心の話は切り出してない。

時間も時間なので由比ヶ浜と雪ノ下は俺の家に行ってもらった。

一色は自分が言ったのだから。と、一緒に残るみたいだ。春仁が心配なのだろう。

『…待ってるね。ヒッキー』

『ハルの事…お願いね。』

本来であれば今頃は小町も含めた6人で由比ヶ浜の誕生日会が始まる頃だろうか。

「材木座君。俺たちはお前の何だ？」

トーンが低い。前のチェーンメールの時よりもずっと低い。

この声が春仁の素の声って事なのだろうか。

あの時は怒りをまき散らしたが、今は冷静に見える。

一色は春仁の服をちよんとつまんでいる。こんな時にいちやこらする気じゃないだろうな。

「…その…友達だと思ってる…ます。」

材木座が俯いてしゅんとしている。自分が何やったか理解できたみたいだ。

「あの…比企谷先輩。俺達どうしたらいいんですか？ぶっちゃけ怖いんで逃げたいんですけど…」

「あー…すまん。材木座がお前らに用があるって言うから来てるんだ。悪いが少し待ってくれ。」

「出て行きたくても出口に柵先輩いるし…これは我慢しよう」

1年生の二人、相模と秦野だったか？こいつらも運が悪い。だいたい材木座のせいだけだ。

アレだろ。どうせ材木座の夢を現実的にみて叶いっこないって素直な感想言っただけだろ。

投稿サイトの無意味な罵倒は良くて、こいつらのまっすぐな気持ち

がダメなのはなんでだろうな。

色々考えてるうちに春仁が材木座に論理的に詰め寄ってた。

あれは俺でも無理だ。俺は遊戯部の2人と少し奥に引っ込んで、様子を見る事にした。

——お前と後輩二人の諍いさかいだろ？俺達がここに来た意味を教えてください。

いやそれは…その…。

——そうだな。意味なんてない。それとも利用したかっただけか？

なっ！そんなつもりはない！

——じゃあ聞くが。お前は友達に自分の都合を押し付けるのか？今日話す必要はあったのか？それに俺たちは予定があると云ったにも関わらず、また泣き落としだ。

……ごめんなさい

——謝罪はいらない。俺は説明して欲しい。

春仁やばい。謝罪はいらない、説明を要求するって拷問じゃねえか。

——また、だんまりか。いい加減に甘えた考えは捨てる。お前の問題だろ？それとも「可哀そうだねー」とでも言っただけだったのか？

やばい。材木座がぶるぶる震えてる。泣いちゃうんじゃない？

俺の肩をちよんちよんと相模がつついた。秦野も合わせて3人で向かい合う。

「柘先輩ってなんか先生みたいです。なんか剣豪さん見てて微笑ましいです」

「だねー。柘先輩ってすごいですね。面と向かってあれだけの事ははつきり言えるってすごい事だと思います」

「…春仁はそういう奴なんだよ。おかげで色々めんどくさい」

好きの反語は嫌いではない。無関心だ。

材木座が春仁から怒られるのはこれが2度目になる。あの時はきつと無関心だったに違いない。

しかし、春仁は『嫌い』と言った。

嫌いつてのは期待の裏返しだ。春仁は材木座の一生懸命な所に惹かれた。応援したいって思った。

だから投稿サイトにわざとらしくコメントも入れてるし、ちゃんと見てる事を伝えている。

「剣豪さんが少し羨ましいです」

「……そうだね」



柘せんぱいがヒートアップしない様に見張ってますが。逆にクルというかドライというか。

そっち側になっちゃって手を繋げない。怖くて服をつまむのが限界だった。

でも途中から空気というか雰囲気というか。なんか柔らかくなっている。

あれだけキツイ言葉でも温かさを感じる。それは彼の本心だからでしょう。

柘せんぱいは、ただ分かっただけなんですね。

『俺が分かっているから』って。『他人の言う事なんか気にするな』って。

わたしも柘せんぱいの事見てますから。安心して下さいね。

中二せんぱいが俯いて泣きそうになった。わたしは見計らった様に柘せんぱいの手をするつと握って温もりを感じてもらおう。

「柘せんぱい。もういいと思いますよ。きつと伝わってます」

「いろは…」

優しく微笑んだ柘せんぱいはどこか悲しそう。

「材木座君。ちゃんと見てるから。話して来い」

「…柘殿。わかった。すぐ済ませる。時間を取らせて申し訳ない」

そこからは早かった。メガネ二人と中二せんぱいがあるコードだ言っただけで、中二せんぱいの一言で穏やかな空気が流れた。

「柘殿が、我を見てくれてる。今はそれだけでいい」

「剣豪さん…俺達も言い過ぎました。すいません」

「いや。謝罪はよしてくれ。お主らは素直に言ってくれたのであろう？今ではそれを嬉しく思う。ありがとう」

きゅつと手を握られた。私は手を放して腕に抱き着く。

「よかったですね。柊せんぱい」

「ああ。ありがとう。いろは」

そんな甘い声でわたしを呼ばないで下さい。またほんこついろはって言われてしまう。

あれ結構恥ずかしいから自粛したいので、柊せんぱいも協力してください。

「さー！帰りましょう！さよならです」

「相模君と秦野君だったかな？急に空気悪くしちゃってごめんね。機会があればまた寄らせてもらおうよ」

やっと終わった。結衣せんぱい達が向かってから1時間ほど経過している。わたしのケーキ残ってるかなあ。

残ってなかったらそれをダシにして、柊せんぱいにあちこち連れてってもらいましょう。

てくてく歩きながら自分が用意したプレゼントを確認する。

結衣せんぱいのイメージとは違うかもしれないけど、わたしが好きな香りがする香水だ。ほんのり香るふるーていで、偏差値低そうな香り。

「柊せんぱいは何買ったんですか？」

「俺はアロマキャンドルを買ってあるぞ」

ほおー。なかなかおしゃれなチョイスですね。こんどわたしも買ってもらいましょう。

「なんだ？いろはも欲しいのか？たしか4月16日だったか。それまでお預けだな」

「あひえ！　ななななんで知ってるんですか!?　まさかアレですか！　わたしの事ちゃんと見てるってアピールですか？　これ以上アピールされたら隠したいのに隠せてないほんこつ度合いが柊せんぱいを通して尾ひれと背びれまでもれなくついて歪曲したあげく拡散されるので自重してください！ごめんなさい！」

「や、もう手遅れだから」

「そこは大丈夫だよって言ってください！

むう〜！こういう不意打ちはやめてほしいです。いつか仕返しを
したいので回数を数えておこう。

比企谷せんぱいの宅に着いたわたしは予想通りだが想定外の歓迎
をうけた。

「あ！来た来たあ！いろはちやくん♪」

「結衣せんぱい！くっ！苦しいです！」

抱きしめられました。ぎゅっ！って。むにゅんって。

あの、終せんぱい。笑ってないで助けて下さい。

第22話

やっといろはちゃんが来た。あたしの大事な可愛い後輩。

前に、ちらほーとでみんなと会った時はシヨックを受けた。ひよつとして仲間はずれにされてるのかな。って思った。

あたしの心で雨が降ってる様な気がした。

雨が降ってるなら傘を使えばいい。濡れない様に、冷えない様に、自分を守ればいい。

『楽しみにしてて下さいねっ』

いろはちゃんの言葉で嵐が巻き起こる。さっきまで使っていた傘は殴りつける風に飛ばされてどっかに飛んでいった。

あたしは濡れている。でも、そんな事はどうでもよくなった。

あの時のあたしには、確かに虹が見えていた。

「ヒツキーは？」

「少しだけ遅れて来ると思います〜」

「ヒツキー！はやくはやく〜」

「結衣。はしゃいで怪我すんなよ？あと小町。レシピ用意したから少し手伝ってくれ」

「かしこまつー！」

やった！ハル君の料理だ！あたしもうこれだけでいいかもしれない。

食べ過ぎなければいいよね？

ゆきのんはまだカマクラちゃんをもふもふしてる。いろはちゃんはそのようなゆきのんの隣にちょこんと座ってる。なんか意外だ。

カマクラちゃんはぐーって伸びてるけど、リラックスしてる様に見える。

ゆきのん。カマクラちゃん疲れてない？カマクラちゃん半目だけど大丈夫かな。あたしは猫が苦手だからそっちに行けないけど、幸せそうなゆきのん見るとほっこりする。

ところでさ。ヒツキー遅くない？

ヒツキーはやくはやく。あたしが一番に言いたい。

じつと玄関を注視する。ハル君と小町ちゃんはキッチンにいる。ゆきのんというはちゃんはソファアームでまったりしてる。

ちよつと寂しいけど、我慢だ。うん。

足を崩してぺたんと座って待つあたしはまるで子犬みたい。サブレもこんな風に帰ってくるのを待つてるのだろうか。

少ししたら外から足音が聴こえてきた。——足音がやんで、ドアノブがゆっくり下がる。ひどくゆっくり感じるのはなんでだろう。

ようやく、大好きなヒツキーが帰ってきた。

「ただ——」

「おきや!…おかえり!ひつきー!」

「……お、おう。ただいま」

噛んだ。恥ずかしい。大丈夫!もみ消す!

「おじやましませーす」

「あ、さいちゃんだ!」

「こんばんは。由比ヶ浜さん。八幡に誘われたから来ちゃった」

はう。さいちゃんにもみられちゃったかもしれない。

「さいちゃんありがとう!」

「あー…その。遅くなった。スマン、由比ヶ浜」

「ヒツキーを待ってたんだよっ。はやくはやく」

こうして、あたしのバースデーパーティーが始まった。

きつと揉み消せた。うん

誕生日会は何回もしたことある。でも、してもらうのは初めてかもしれない。

料理とりわけたりさ。興味のない話に乗っかって場を盛り上げたりさ。楽しいフリしてた。

でも今日は違う。まだ始まったばかりだけど、こんなにも楽しい。

ヒツキーがいるからだろうか。ううん、そうじゃないよね。

あたしは前にヒツキーが言ってた『祝ってもらえる事』が理解できなかった。

料理もなんか本格的でふるこーす?って言うのかな。料理が順番に出てきてみんなでおいしく頂いた。

ハル君は提供する側だからって最後まで席には座らなかつた。「お粗末様でした」と言つたハル君はとても満足そう。

ゆきのんも手伝うって言つてるのに。あたしの傍にいてやれって言われてさ。

もじもじしてた。わざとあたしに聴こえる様に言うハル君は少しズルい。

いろはちゃんと小町ちゃんは気が合うのか色々話してた。あたしは隣にヒツキーが居たから、肩とか当たる度にいろいろ意識しちゃつて、2人が何話してるのかわかんなかつた。

「結衣さん。ケーキを焼いてきたのよ」

「わたしもすこしだけ手伝いました！」

お誕生日会の儀式。

盛り上がった所で出てくるのは卑怯だ。あたしは感極まつて泣いてしまった。

このタイミングで出すのはズルい!!我慢できる訳ないじゃんか!後でゆきのんに聞いたたら、ハル君といろはちゃんのプロデュースだつて。してやられた。

そのままの流れでプレゼントも貰つた。しかも一人づつ「お誕生日おめでとう」って言いながら。

もうね。うん。ダメだよ。あたしこんなに幸せでいいのかな。

——由比ヶ浜さん。お誕生日おめでとう。

さいちゃんからはヘアピンを貰つた。女の子より女の子らしいヘアピンだつた。

いろはちゃんに鏡みせてもらつてつけてみた。うん。良いアクセントになつてる。

いつもはお団子だけど、違う髪型の時に使ってみよう。

——結衣さん。その…お、おめでとう。

エプロンだ!あたしの依頼から始まつた、ゆきのんとの関係。

まだ料理はうまくできないけどちゃんと覚えてるって事だよな?

ハル君かゆきのんに料理教えてもらおうかな…。

——結衣せんぱい!ハピバです!

香水だ！トテトテと洗面所に行って手首にワンプッシュ。
はわあゝ。いい香り…。

「ほんのり甘い香りがするな、俺はこの香り好きかもしれん」
ヒッキー!?まじで！会う時つける！

「偏差値低そうな香りですよね〜」

あの、いろはちゃん?どういう事かな?

——結衣。おめでとう。

ろうそく?あ、アロマキャンドルか。リラックスしたい時に使うんだって。

始めて使うなあ。どんなんだろうか。香りはグレープフルーツらしい。

——あー…由比ヶ浜。おめでとさん。これは俺と小町からだ。

丁寧に包装を解いていく。

中からはピンク色の革のチョーカーが入っていた。あと紐。

え?紐?

あぶなかつた。アクセサリーかと思つたらサブレ用の首輪だつた。着けそうだったけど、思いとどまつた。あたし、えらい。

ヒッキーとのきっかけ、サブレだつたね。よかつたね、サブレ。ありがとうヒッキー。

あたしの涙が止まつたのは、もう少し後の事だつた。



結衣さんがようやく泣き止んだ。私も貰い泣きしそうだったけど、今日の主役は彼女。だから、がんばって堪えた。

ハルというはさんが計画したのだけれど、嬉しくて泣かせてしまうなんて…。

わ、私の時もやってくれないかしら。

「なにかゲームしようよー」

結衣さんが提案して、小町さんというはさんがそれに乗つかった。比企谷くんとハルは、まかせると目で合図してきた。

そうね、今日くらいは彼女の我儘もきいてあげましょう。

「シンプルにババ抜きといこう」

「わあーいいね。楽しそう!」

マズいわ。ババ抜きはいわば心理戦。運よりも駆け引きが重要なゲーム。

「負けたら罰ゲームとかどうですか?燃えると思います」

「じゃあさ。負けた人はその場であたし達の誰かのモノマネを披露するってのはどう?」

「「うわあ……」」

「なんでよお!勝てばいいじゃん!それとも勝つ自信な——」

「いいわ。それでやりましょう」

「ゆきのんがやる気だっ!?!」

勝てばいいのでしょうか?問題ないわ。

そうして手に汗握る真剣勝負が始まった。パラパラと手持ちのカードを減らしていく。

——負けてはならない。持ちネタなんてないのだから。

程よく枚数が減ってきた。本番はここからでしょう。

「あー!ヒッキーずるいし!」

結衣さんが比企谷くんからジョーカーを引いた様ね。そして私は結衣さんからカードを引く位置にいる。

結衣さんがどこにソレを隠そうと、持っているのがわかっていれば対策はいくらでもある。

「なんですって…結衣さん?貴女どこに隠していたの?」

まだ慌てる様な時間じゃないわ。冷静になるのよ。

その後無事に戸塚君にコレを押し付けて、私は難を逃れた。

「あっがりー!」

小町さんが一番乗りを上げた。私含めた6人も、あと数回で決着がつく。

「ぐおお!春仁!裏の裏を読むとは……」

比企谷くんが戸塚君から回って行ったジョーカーを引いた。

ハルが悪い顔で笑ってる。彼の隣じゃなくてよかったわ。

とうか。いつのまにあそこまで回って行ったのかしら。

「あがりです」

つう。残るは4人。最終局面が近い。私の手札はあと3枚。

「ぼくもあつがりー」

戸塚君がゴールしてしまった。

私はここでミスをする。誰がアレを持っているのかわからなくなってしまうた。

結衣さんの手札は2枚。わざとらしく片方だけあげている。

ふんっ。分かり易い駆け引きね。応えは簡単、目を見ればいいのよ？

結衣さん。詰めが甘かったわね。

「……………」

「っしー！引つかかった！」

なんということでしょう。目線の事を知っていたのかしら。

…わかったわ、比企谷くんね。彼が結衣さんにしかけてそれを私にやったのでしよう。

「おっしー！上がりいー」

「ぐえ。まじかよ」

「あたしもー！」

「……………」

負けられない。負けるわけにはいかない。

「ゆきのんがちよー真剣だー！」

ハルというはさんがやけに静かね。まあいいわ。結衣さんが私を応援してくれてる気がする。

比企谷くん。貴方に勝って、私は難を逃れるのよ！

——とところで。ババ抜きってこんなに盛り上がるものなのかしら？

「くっそまじか！」

「私の勝ちね。比企谷くん」

「おおー！ゆきのんの勝ちいー！」

「お兄ちゃん！モノマネどうぞー！」

危なかつたわ。今後の為にも持ちネタを考えておきましょう。そうしましょう。

ひとまず、比企谷くんのモノマネを聞いて優しく罵倒しなければ。比企谷くんが「あく。え〜」と発声練習をしている。

『由比ヶ浜さん。次は貴女の番よ。私を本気にさせた事を後悔させてあげるわ』

「あはははは！ヒツキーすごい！似てるし！」

「お兄ちゃんすごい！ あはははは！」

結衣さんと小町さんはあとでお仕置きが必要な様ね。

ハルは口を押えて、いろはさんは彼の腕に抱き着いてぷるぷる肩が震えている。たしかに似ているのだけれど。

試合に勝って勝負に負けた気分だわ。

「比企谷くん」

「は、はひゃい！」

「勝ち逃げは許さないわ」

「まだやんのかよ。いや、かなり面白いけど」

そうして白熱したババ抜きは続いた。

——小町さんが負けて比企谷くんのマネを。

『青春とは悪である——』

「つちよ！待て小町！」

——ハルが負けているいろはさんのマネを。

『は！もしかして私のマネをして笑いを取ろうとしますか？すでにかなり面白くて腹筋に良くないので遠慮してください。ごめんない』

「は？ 終せんぱい？ 何言ってるんですか？ 少し似ててムカつくんですけど！」

こうして無駄に熱いババ抜きが終わって解散となった。笑いすぎて少しお腹が痛い。

ちなみに私は負けてない。勝ってもいないのだけれど。

一人暮らしをしているマンションに帰った私は電気を点けて、いつもの様に寝る準備を始める。

静かだ。

私の生活音だけが耳に入る。さっきまでの騒ぎがまるで幻の様。

「ふふっ。すごく、楽しかったわ」

いきなり静かになると落ち込んでしまいそうになる。だから、余韻が残っているうちに寝てしまおう。

朝になればもう少し騒がしくなって、この寂しさを紛らわせてくれるから。

「はあ…夏休みに奉仕部で旅行とか行けないかしら？」

第23話

今年も夏がやってきた。

終業式も終わり、後は帰るだけの教室はいつもより賑やかだ。

ひと夏の思い出とやらの為に必死になってるのが滑稽に思える。

わたしが夏休みの計画をあれこれ考えていると、私と過ごす夏の思い出目当ての男どもが我よ我よと群がって来た。

この男たちは、わたしにないを求めているのだろうか。

そんなの簡単。わたしで青春を彩りたいのだ。

それを遠巻きにみている女が、わざとらしく舌打ちしているのが目に入った。

隠せてないよ？あ、隠す気ないのか。

悔しいの？なら女を磨け。

「い、一色さん！夏休みに海とか一緒に行かない？」

急に話しかけるのやめてくれない？ちよつとビクツつてしてしまった。

どこの礼儀知らずかと顔を見ると、たまに話しかけて来るメンタル超強い人だった。

クラスメイトだけど名前は知らない。

この男が話しかけてくるのはいつも突然だから困る。

「…う、海かあ。海いいよね。行くんだったら水着新しく買おうかなあ〜」

ふう、あぶないあぶない。素がでて「は？誰？」って言いそうだった。

彼には何回こんな感じの拒絶を繰り返しただろうか。毎日じゃないだけマシに思えてくる。

隣のクラスのイケメンはほぼ毎日、お昼休みになったらわたしの所に来て『いろはちゃん、今日はどこで買い物するの』とか聴いて来る。来る時間分かっているから相手するのも苦じゃないんだけど、さりげなく『今日は』って言うのやめてほしい。

君と行ったの1回だけだし、しかもコンビニだから。

なんだかムカついて来た。わたしとお出かけしてますアピールするイケメン君はそのうち断罪しよう。

「じゃ、じゃあー一緒に買いにいこうよ！」
「は？キモい」

おつと素が出た。いろは素。なんちて。

クラスが違う意味でざわざわしだした。2割くらいはわたしの声のせいですね。あとの10割は目の前の男が悪い。わたしの水着姿想像してたんだろうか。鼻の下が伸びてキモい。

ニタニタしてたからニタ男と命名した。

「あ、いろは。柊先輩来たよ」

そこそこ仲良しの女の子が教えてくれた。

ぐるんつ。と首を回して廊下側を見ると柊せんぱいが開いてる窓に肘をつけてぼーっと外を眺めていた。わたしが来るのを待っているのだろう。

鞆を持って柊せんぱいの隣へ行き、するりと腕を組んだ。

「お待たせしましたあ」

「…いろはちゃん？まだ学校なんだが」

「いいじゃないですかあ。それとも照れてるんですか？可愛いわたしに抱きつかれて嬉しいんですよねー？」

「はいはい、ウザ可愛いよ」

「は？一言多いです。やり直し」

「ウザい」

「そつちじゃありませんっ！」

わたしは1週間ほど前から、柊せんぱいをお願いして家まで送ってもらってる。一緒にいれて嬉しい。でも、ちゃんとした理由もある。わたしにストーカーが憑いた。

怖かった。

1人になると足音が聞こえてきて速度を上げても足音はついてくる。

家を知られるという最悪の状況には至っていないけど、それも時間の問題だろう。

柘せんぱいに電話したら走って来てくれて、そのままデートしてくれた。

わたしが1人じゃなくなっただけだからなのか、その後は静かになった。なんてめんどくさい女だろう。わたしはそう思ってしまう。

学校を出て途中の交差点で進路変更。柘せんぱいの部屋へ向かう。

「いろは。後ろの奴がそうか?」

今まで警戒して潜んでいたのだろうか。スマホの黒い画面の先にはわたし達の背後の風景が映っている。

そこには帽子を深くかぶった怪しげな男が映っていた。

「…きもちわるいです」

怖い。こんなのが続くなら夏休みどころじゃない。

柘せんぱいがずっと一緒にいてくれるなんて不可能だ。

「…仕方ないか」

柘せんぱいがわたしの腕をほだき、やさしく腰に手を回してくれた。そっと引き寄せられる。

は、ははは恥ずかしい。

「うう…こんなのズルいです」

わたしの背中に腕が当たって、包まれてる様な感覚に顔がほにやる。抱き着いていた腕が少し寂しい。

服をきゅつとつまんで腕を落ち着かせることにした。

「八幡の家に行くぞ」

「? わかりました」

背中に温もりを感じるだけでこんなに安心できるなんて、わたしは割とちよろいのかもしれない。

ほどなくして比企谷宅に到着した。

柘せんぱいが小町ちゃんに連絡をしてくれていた様で、わたしは何の抵抗もなく上がらせてもらい、ソファで紅茶を頂いている。

「ハルにいい。どうしたの?」

「鍵を取りに来ただけだ、少ししたら出る」

「鍵?なんで?—ああ…なるほどなるほど」

「小町?口に出すんじゃないぞ?」

小町ちゃんが悪い顔してる。たしかに口に出してないけど。目は口ほどに物を言うって言葉知ってるかな？

何言いたいかわかるんだけど…。

「いえいえー小町は何もしりませんよ！ええ、誰に渡すのかとか考えた事ありません！」

はうう。そうだよね。柗せんぱいの部屋の合鍵だよね。わ、わたしにくれるのかなあ…。

空のカップをわざとらしく口に運んで紅茶がすでにない事に気づく。

カップを置く手は羞恥心で震えていた。

「……録音」

「ハルにいーごめん！ごめんなさい！アレは駄目だよ！お口チャックするから！」

小町ちゃんが凄い勢いで謝ってる。録音？何を録音したんだろうか。

後でコツソリ教えてもらおう。

小町ちゃんは受験生な事もあってすぐ部屋に戻って行った。

「よし、次はいろはの家に行くぞ」

「はひい!?わわ、わたしの家ですか？」

「そうだ。状況が状況だし、挨拶も兼ねて説明しに行くぞ」

なるほど、もしかしたらお母さんも柗せんぱいの事を覚えてるかもしれない。

わたしはカップをシンクで洗ってから比企谷宅を後にした。

わたしの家に着くまでの間にストーカーらしき影は見えなかったけど、柗せんぱいはさつきと同じ様に腰を抱いてくれた。

この温もりはきつとわたしをダメにする。

いかん、顔がほにやる。

わたしが抱き着くのは平気だ。でもわたしが抱かれるのはこの先慣れる事はないだろう。



「ただいま〜」

「おかえり。いろは。遅かったわね〜。——あら？お友達？」

「はじめまして。柊春仁と申します。——お久しぶりです。の方があつてるかもしれません〜」

始めて見た時からかなり経つてるのに、あの頃と変わらぬ美貌を保持しているいろはママ。

結衣ママもそうだが、美少女の母親はどうして皆若く見えるのだろうか。

大人になった彼女たちを想像してしまい、顔が熱くなるのを感じる。

「あ〜…東京の…よく覚えてるわ。さ、上がって頂戴」

お邪魔しますと言いいリビングに通される。

「懐かしいわね。あの時のいろは、あの後もすごかったのよ？」

「そ、そうなんですか。少し心配ではありませんが」

どんだけ泣いたんだよ。あれだけ引っ付いて来るのはその反動なのだろうか。

いや、俺も違和感ないけど。

ほどなくして部屋着に着替えたいろはが自室から戻ってきた。

「お母さん。覚えてるの？」

「もちろん♪覚えてるわよ」

母が娘をいじり倒す未来が見える。ソースは結衣ママ。

話が長引くのもアレだ。先に話を切り出しておこう。

「実はちよつと面倒な事になってまして——」

いろはの身に何が起こっているのか。俺がそれをどう思ってた、どうしたいのか。

肝心な事はそれだけだ。

時と場合によっては避難が必要な場合もあるだろう。その手段としていろはママに俺の部屋の鍵を預けておく。

いろはに預けると、彼女の親に預けるのでは意味が全く違う。親がいろはに任せたのであればそれはそれで構わない。

日本の警察はストーカーは容疑だけでは手出しできない事を俺は知っている。というか調べた。

被害に遭わないと警察は動かない。だが、被害に遭ってからでは遅すぎる。

身体に傷がついたとして消えない場合もある。心の傷は言うまでもない。

「…いろは。辛かったわね」

「…お母さん」

どうやら信じてもらえた様だ。

「柊くん。鍵は私がいろはに預けておきます」

「わかりました。俺の連絡先と住所を伝えておきます」

「うふふ♪いろはのだからしない顔つたらないわね」

「はっ！ちよっとお母さん！」

いろははママにも挨拶できた。これで何かあった際に動くことができる。

俺は挨拶をして、今日そのまま下宿先に帰る事にした。

——翌日。

終業式を終えて夏休み1日目。

休みの日でも早朝に起きてしまうのは、良い習慣がついた証拠だと実感できる。

運動しやすい服装に着替えて走る。まだ7月で早朝な事もあり、少し涼しい。

散歩中のおじいさんと朝の挨拶を交わす。毎朝会うかもしれないからキチンとしておこう。

30分ほど走って来た道に戻る。ネクタイを締めた男性が欠伸をしながら自転車を漕いでいた。

自分の未来が少し暗くなった。やっぱり夏休みはないようだ。俺が目指している教師という職も同じなのだろう。

「おはようございま〜す」

「…早くないか？」

部屋の前にいろはがいた。時間はまだ6時だ。しかも昨日の今日。白のワンピースからは清涼感が漂う。まさしく『いろはす・夏』おしやれは足元からという基本も忘れてない。脛あたりまであるグラデイエーターサンダルも珠の様な肌を一層際立てている。今までのゆるふわコーデからは予想できなかった均整の取れたプロポーションも目を引く。

彼女は肩からエコバッグを下げしており、中には食材がちらほら入っていた。

「連絡したのに！返事してくださいよ〜！」

「いや、走ってたから、携帯もってないし」

ぶーぶーとあざとく頬を膨らませるいろは。

横暴だろ。鍵持つてるんだから入って待つてたらいいだろ。

冷めた目であざとい後輩を見ているとなにやら頬を染めてもじもじしだした。

「あの…お…おかえりなさい…」

時間が止まった気がした。

いつもと違う服装で、いつもより、より魅力的な一色いろは。

俺は彼女を直視できずにふいつと顔を逸らしてしまう。

顔が熱いのはきつと夏のせい。そういう事にしておこう。

「お、おう…：ただいま…」

まいったな。これはすぐには慣れれそうにもない。

たっぷり10分ほどのラブコメ展開も終わり、部屋に入って朝食を食べる事にした。

いろはがキッチンで鼻歌を歌いつつ料理をしている。俺はその間にシャワーを浴びて部屋着に着替えた。

何気に始めて味わういろはの料理。気にならないと言えれば嘘になる。

晩御飯はほとんど俺が作っていたし、俺の為に作ってもらった事は両手で数えられる程度だ。

「おまたせしました〜」

すごくにこにこしたいろはが皿を持って来た。

テーブルを挟んで対面に座る。

「いただきます」

出て来たメニユーはこれぞ日本の朝ごはんといったものだった。

白米、焼き鮭、味噌汁、漬物。どこぞの定食屋で見た事ある様なメニユー。

味噌汁を啜り、味わう。味噌汁の味は家庭と言うより個人レベルで違う。彼女の味噌汁はいりこ出汁、苦みが出ない様に頭は処理されていた。

家庭によつてはいりこが具材になるが、今回は豆腐と大根だった。

「美味しいな…」

無意識に声が漏れた。勿論、すぐ目の前にいるいろはに筒抜けである。

彼女は様々な感情が織り交ざった表情をしている。

その感情がどんなものだろうと、それは重要ではない。今までに見た事がない笑顔である事が重要なのだ。

「…よかったあ」

不安になる要素など全くと言っていいほどないと思うのだが、それを言うのは野暮だ。

俺の味覚を基準に考えてくれた事がたまらなく嬉しい。素直にそう思える。

思えば、俺はずっと誰かの為に料理を作っていた。幼い頃は自分の為に、1人暮らしを始める前までは八幡や小町に、文化祭でもそうだ。

おそらく初めてであろう食事に舌鼓を打つ。

「ご馳走様でした」

「ふふっ♪お粗末様でした」

食事中に会話は一切なかったが、いろははシェフは満面の笑みだ。

料理ができる俺はわかる。自分が作った料理を食べてくれている。これは素晴らしい事だ。

会話をしないのではなく、できないほどに。

いろはの笑顔が眩しい。先日買ったオーブンが活躍する日もそう遠くないだろう。

「さて、どこか行こうか」

「終せんばい！デートに行きましよう！」

しかし、忘れてはいけない。今のいろははストーカーという問題が憑いている。

それが解決するのは、もう少し先の話。

第24話

夏休みも1週間ほど経過した。

俺にとって、この期間はただの休みだ。それ以上でも、それ以下でもない。休みのだから好きな様に休みたいし、せつかく1カ月以上もあるのだから存分に堕落した生活をする。その為には宿題なるものを速やかに処理する必要があった。

「…めんどくさいなあ」

しかしこれをやらなければ安心できない。

宿題を気にしてる時点で悠々自適ではないのだ。

カリカリとペンを走らせるが、手が止まる回数が増えてる気がする。

脳が疲れているのだろう。すごく暴力的な甘みがほしい。

俺はギリギリ外を歩ける格好に着替えて、近くのコンビニへ向かう。

「ぐああ〜…あつつい…」

MAXコーヒー！MAXコーヒーが飲みたい！

悠々自適で堕落した夏休みの為に汗を流す俺はきつと間違っっていない。

コンビニまでは後わずか、暑さに耐えた自分へのご褒美に6本くらい買っておこう。めんどくさいし。

「なん…だと…」

不覚にも財布もって来るの忘れた。

家まで走った。超走った。コンビニで確認できたMAXコーヒーは5本だ。

流石マツ缶在庫が少ない、売れてる証拠だ。そうだよな？

すぐには売切れる事はないだろうが油断は禁物。お前の甘さは俺の人生に必要なだからもう少し待っていてくれ！

「なん…だと…」

財布に100円しか入ってなかった。

これじゃ買えねえ…。

ちよつと言つてみたい台詞をそれっぽく言っただけ。無駄に歩いて無駄に走つて汗掻いただけだった。

シャワーで水浴びをして汗を流すと、火照った身体が冷えるのがわかる。

何もしてないが、何かした気になれる。不思議だ。

非常に残念だが、MAXコーヒ―は春仁に買ってもらう事にした。

『そのうちな』

つまり今日は来ない。ですよねー。

頭から水をかぶりながら玄関に見慣れないサンダルがあつた事を思い出す。

きつと小町のお友達なのだろう。事前に言ってくれば春仁の所に避難するのに…

なんだか悲しくなつて来た。

ともあれ来客がいるなら少々マズい状況だ。

シャツとズボンは洗濯機にぶち込んで現在進行形で洗つてる。

つまり、俺は部屋まで下着1枚で向かわないといけない。

鉢合わせたら通報待った無し。いや俺の家だけどき。

見られて困る様な身体はしてないが、見られない方が良いのは当然だ。

「…ふう」

蛇口をひねり水を止める。

表に誰かいれば何らかの音がするはずだ。

「―誰もいないよな…」

音はしない。前髪から滴る雫がぴちやぴちやなつてくるくらいだ。

前髪を手櫛でかきあげてバスタオルを肩から羽織りリビングへ出た。

そろりそろりと部屋へ向かうと小町の部屋ががちやりと開いた。

「あーヒッキーどー…いつ…」

「え？は？」

「――きやあああああ!!ヒッキー!服!服う!!」

変質者でも出たかの様な悲鳴をあげる由比ヶ浜。

俺を認識してから悲鳴をあげるまで約5秒。みるみる顔が紅く染まっっていくのがはつきり見えた。叫ぶ前に扉閉めようね？

ってかなんでお前いるの？

オーケー。羞恥心が1週して逆に冷静になった。

もう部屋から出ない。うん。

布団の中で『ア』アアアア———!!!」しそうだからベッドには入らない方が吉だ。

暑いけど外行こうかなあ…ヤダなあ…ダラダラしたいなあ…。

コンコンと扉をノックされるが返事をする前に由比ヶ浜が入ってきた。

「ひ、ひつきー？いる？」

「いません」

お前はノックの意味を調べて来い。

俺がまだ半裸だったらどうするんだよ。

「いるじゃん！ちよー返事してるし！」

「ちよーキモいのノリで超を使うな。スーパーだぞスーパー」

んー。と唇に指を当てて考えている。その仕草はやめろ。

可愛い仕草に見惚れているといつのまにか首を傾げていた。

「スーパー？買い物行くの？」

「なんでそうなるんだよ！あとときよんとんとするな、反応に困る」
やっぱりこいつアホだ。

「んで。何しに来たんだ？」

「ヒツキー！宿題一緒にやろっ！」

由比ヶ浜。それ家出る前にに言えるよね？なんで今言うの？「えへへ、来ちゃったあ」みたいなノリで言えばどうにかなると思ってるの？

「断る」

「ええーやろうよー。おしえてよおー」

くっそ。こいつ…いちいち可愛い仕草しやがって。

俺は悠々自適な日々を過ごす為に、この1週間外出を我慢していたのだ。

由比ヶ浜には悪いが、これもお前の為だ。
宿題は1人でやりましょうね！

「…ひつきー…：…だめ？」

「…ったく。仕方ねえな」

ナマ言つてすいませんでした。上目遣いには勝てませんでした。

「お兄ちゃん。晩御飯どうする？」

「あー…もうそんな時間か」

ひよっこり小町が顔を出す。たしかにそろそろ良い時間だ。小町が聞いてくるって事は食材がないのだろう。

スーパーかあ…：暑いだろうなあ…：ヤダなあ…：。

「結衣さんも食べて行くでしょ？ほらお兄ちゃん！ メモはこれ！

はい！ いったらっしやい！」

「…んじや。ちよつと行つてくるわ。由比ヶ浜はここで待つてろ」

「あたしもいく！」

「お、おう。んじや行つてくるわ。追加なんかあったら言つてくれ」

ほいほーいと小町が返事した。可愛いなあ。アホっぽいけど

スーパーまでは多少距離があるが歩けない距離ではない。メモを見る結構な量だった。

そうだ。自転車を台車として使おう。

「はい。ヒツキー」

アホの子が自転車の荷台に座ってサドルをぼんぼんとしている。

「なんで乗ってんだよ」

「え？だってこつちのが楽しし」

アホの子が自転車の荷台に座ってサドルをぼんぼんとしている。

仕方がないから由比ヶ浜を荷台に座らせたままカラカラと押して出発した。

「わっ。ヒツキー、乗らないの？」

「いや…：その…：今日の服。似合ってるぞ」

赤黒チェックのミニスカート、白いノースリーブシャツの下にはインナーの白いキャミソールが透けて見える。足元はおしゃれなサンダルを履いていた。

彼女がプライベートでスカートをはくのはかなり珍しい。珍しいからこそドキツとしてしまう。

「…はう。ありがとう」

俺の意図が伝わったのか、彼女は座ったままですのままでそのまま自転車を押す。俺の服をきゅつと握る手が愛らしい。

由比ヶ浜がパンツ系なら即2人乗りして向かってるんだが…。まあ、たまにはこんなのもいいだろう。

他愛もない話をしながらスーパーに向かう。

店内で温かい目線や「若いっていいわねえ〜」という独り言が突き刺さった俺達は、二人して顔真っ赤。

おまけに由比ヶ浜が俺の服をつまんだまま放さない。帰り道ですれ違う人にまで「あらあら」とか言われる始末。

当然のごとく帰り道は無言だった。あれだ。恥ずかしすぎて会話できんかった。

夕食後は由比ヶ浜の宿題を見てやる事になった。

「ありがとね。ヒツキー」

「おう、ってかお前、コレに手えつけてないだろ…」

「アハハ…いやあ、ヒツキーと一緒にやろうと思って」

仕方ない。やるって言ったんだ。できる限りは面倒みてやろう。

「ねえヒツキー。ここなんだけど——」

「ああ、そこはだな——」



そして2時間ほど経過した。由比ヶ浜も集中してたんだろう。静かだった。

「大分進んだな、少し休憩するか」

「うわっ。こんなに時間経ってたんだ！ここまで集中できたの初めてかもー」

どうやって総武に受かったんだろうか。未だに謎だ。

鉛筆転がして受かってたらどうしよう。

「コーヒーでいいか？」

「え？あ、うん。ありがとう」

普段使わない脳を使ってるんだ。少し甘めにしてやろう。リビングに行く和小町が休憩していた様で、小町にもコーヒーを淹れてやった。

宿題がそろそろ終わる事を伝えると「小町のもやってほしい」とワケの解らない事をほざくのでブラックで出してやった。

アホめ。そんなに甘くないんだよ。

キンキンに冷えたMAXコーヒーとアイスカフェオレを持って部屋に戻る。

「…すう…すう」

「……………」

気持ちよさそうに寝息を立てる由比ヶ浜結衣。腕を枕にして口をむにやむにやしてる。

「由比ヶ浜。風邪引くぞ」

起きる気配は微塵もない。というか起こしたら悪いと思えてしまう。

父性。というのだろうか。

今日、こいつは沢山がんばったんだ。少しくらい休んでも誰も文句は言わないだろうし、言わせない。

皺になるからアウターのシャツを脱がせ、彼女の後頭部に手を添えてゆっくり後ろに倒す。

机を静かに引いて、仰向けの彼女の膝下と背中に手を入れ、お姫様だっこをして俺のベッドに寝かせる。

「よく頑張ったな」

よしよしと頭を撫でる。ほにやりと由比ヶ浜の顔が綻んだ。

これ以上構って起こしてしまうのも悪い。俺はリビングで宿題の続きをする事にした。

仕方ない、小町の宿題も一緒にみてやろう。

さらに1時間が経過して21時を回った。小町の宿題も少しだけだが見てやった。

そろそろ由比ヶ浜を起こした方がいいだろう。一応、俺から由比ヶ浜マには連絡を入れておいた。

『あら〜。貴方がヒツキー君ね。いつも結衣がお世話になってます〜。そつちで寝ちやつてるなら結衣の好きなようにさせてあげてね。娘の事、お願いします』

あつた事ないのに信用されすぎて少し怖い。あいつ親にどんな話してるんだよ。

というか『好きなように』ってどういう意味だ。遠回しにお泊り許可出てるんだけど。

まだこの時間なら家まで送れる時間だ。ちよつと様子を見てみようとそのつと部屋に入る。

「…起きてるか？」

「うーん…あえ？ひつきい？」

なんだこの可愛い生き物は。しかもなんか部屋からすごい匂いがする。

由比ヶ浜はまだ寝ぼけてるし、しばらく寝かせておくか。向こうの親にはちゃんと連絡してるし、通報はされないだろう。

無意識に頭をなでなでしていると、彼女の手が俺の腕を掴んでぐいつと引つ張つて来た。

「つ…おまえ起きてるだろ」

「んーん」

いや、起きてるから。返事しちやつてるから。

さらにぎゅつと力が込められ、双丘に腕が挟まれる。

だが、ここで慌てる様なマネはしない。チェーンメールの時、由比ヶ浜が俺にやった事に俺は耐えた。

あの時の恥ずかしさに比べたら、こんなものどうってことない。

いや、恥ずかしいのは恥ずかしいけど。

「待て待て、時間は大丈夫なのか？」

「ママにはもう連絡したから、大丈夫」

「…そうか」

うん。そうだ。と彼女は言つて抱き着く力を緩めた。少し払えば

簡単に振りほどける。

俺はゆつくりと腕を動かし頭を優しく撫でる。

「はう…ヒツキー撫でるの上手だね…」

「…小町が小さい頃によく撫でてやってたからな」

「ねえヒツキー。お話しよ？」

由比ヶ浜の囁く様な声に、強い意志を感じた。

俺の事を知りたい、自分の事を知って欲しい。

俺も同じだ。もっと知りたいし、知って欲しい。

だが、その前に確認しておこう。

「お話はいいんだが、由比ヶ浜。お前今日はどうするんだ？ お前の

母ちゃんは『お前の好きにさせてやってくれ』って言ってたぞ。だから、お前が決める。帰るか？それとも…」

「ママにはもう泊ってくつて言っちゃった。エへへ…」

えへへじゃねえよ。着替えとかどうすんだよ。

…こうなつては仕方がない。今更帰すのはばかられる。

小町の助力を請う為、彼女の部屋をノックする。

「小町。ちよつといいか？」

「どしたの？」

「あー…由比ヶ浜の事なんだが、今日泊って行く事になつてな」

「あー、それなら。はい。コレ」

ボストンバッグが出て来た。小町が言うには由比ヶ浜のバッグだ

そうだ。

「…最初から泊る気満々だったのかよ」

「結衣さんが言うには念のためみたいだよ、お兄ちゃんを困らせるのは嫌みたい」

そういう事か。帰れるなら帰るけど、お泊りになつてもいいように

準備だけはしておいた様だ。

たしかにいきなり泊るって言われても時間が遅ければ遅いほど

色々危ない。

今日のあいつ薄着だし…スカートだし。

ボストンバッグを持って部屋に戻ると由比ヶ浜がベッドでもぞも

ぞしていた。

枕に顔をぐりぐりしてんーんー唸ってる。

やめて！俺の枕からいい匂いしちゃう！寝れなくなっちゃう！

「由比ヶ浜。先に風呂入ってくるからその間に着替えとけ、暇だったら適当に本でも読んで」

「んふあ。わかった。ありがと、ヒツキー」

もう突っ込むのもめんどくさくなった。『んふあ』って何だよ。

犬っぽくマーキングしてんなら『わふう』ってのが正しいと思うんですが。

サブレよ、お前の飼い主は大丈夫か？

さっと風呂を済ませて由比ヶ浜を風呂に行かせた後、勉強に使っていた机に紅茶を持ってくる。

コーヒーとは違い紅茶には体温を上げる効果がある。眠くなった時にすんなり寝れる方が良いだろう。

部屋の片づけも済んだので読書でもして待つことにする。

「お風呂ありがとう」

由比ヶ浜が戻って来た。上気しているせいか色気を感じる。

俺はベッドの上に胡坐を組んで壁にもたれた。由比ヶ浜も俺の隣で足を延ばして壁にもたれている。

2人きりだとか、間違いがーとか。そんな事は気にならなかった。

ただ、彼女の事を知りたい。それだけだった。

しばしの沈黙の後、由比ヶ浜結衣が口を開く。

「それじゃ、お話しよっか」

第25話

昨日の晩にヒツキーといっぱい話した。

いつのまにかあたしは寝ちゃってみたい。瞼ごしに太陽の光を感じる。

鳥のさえずりというよりセミの合唱やかましい。

昨日と感触の違う枕に疑問符を浮かべながら、あたしは目を覚ました。

「起きたか」

ヒツキーの声が聞こえた。

声がる方へもぞもぞと向き直って少し重たい瞼を開いた。

「おはよう、ヒツキー」

「おはようさん」

ヒツキーの後ろに天井が見える。電気はヒツキーが消してくれてみたいだ。

え？天井？

あたしはヒツキーに膝枕されてた。恥ずかしい。顔が燃える様だ。

でもそれ以上に嬉しい。あたしが起きない様にずっとこうしてくれてた。しなくてもいいのにね。

「ヒツキー。ありがとう」

ごろんと壁側に転がっておなかあたりに顔をうずめる。

あたしのだらしない顔は見られたくない。ちらっと見えてるヒツキーも首まで紅かった。

そのままぐいぐい顔を押し付けてるとふわっと頭に手が乗せられて、優しく撫でられた。

「はあ…気持ちいい」

「…逃げないって言ったしな…」

そうだったね。昨日に本音で、本気で話して、少しだけ理解し合えたんだよね。

あたしは昨日の事を思い出す。

——お話ししよっか。

ヒツキー。

…なんだ？

ヒツキーにとつての友達ってさ。どんなの？

いきなり難しいお題だな。言葉で説明できるかわからんが、それでもないか？

うん。ちゃんと聴くから。

んー。アレだ。春仁みたいな関係が一番分かり易い。春仁は家族だからってのもあるが、もし、あんな関係を他人と築けるなら、それは本物と言つていいと俺は考えてる。

本物かあ…。

そうだ。人は簡単に裏切る。春仁が来るまでは、俺も友達を作ろうと頑張つてた。相手を信じようとしていたんだ。でも、昨日まで友達だと思つてた奴がいきなり敵になったりした。

下駄箱にゴミを突っ込まれたり、教科書を捨てられたりもしたが、それが一番キツかったな。でもそいつを責められない。そいつが俺に肩入れするとそいつにまで被害が及ぶからな。

うん。…ちゃんと聴いてるよ。

…だから俺は諦めた。その方が良いと思つた。俺が傷つくだけならまだいい。でも、俺と関わる事で誰かが傷つくのは嫌だった。これは今でもそう思つてる。

…うん。

由比ヶ浜は…その、俺と関わる事で辛い思いしてないか？本音で言ってくれ。

んー。まだ、辛くない。つてのが本音だよ。

まだ。か。

うん。そうだ。 えつとねヒツキー。あたしの思ってる事言うね。

ああ、俺もちちゃんと聴く。

あたしは、傷つかない関係なんてないと思うんだ。ヒツキーの言う本物でも、本物になる前にさ、いっぱい傷つけあってる。偽物でもそれは同じだよ。

あたしね、1年の時さがみんと仲良くやってたんだけど、その関係は偽物だったの。偽物の時点で相手を傷つけてる事がわかった。だから終わらせたの。

…あの時のか。

うん。すごい辛かった。 だからさ。傷ついてない本物なんてないと思うんだ。

なるほど。だから、まだ。なんだな。

うん。 でもねヒツキー。あたしにとって、ヒツキーは本物だよ。

…恥ずかしいんだが。

あたしも恥ずかしいよ。でもさ。あたしは逃げたくない。きっとあたしはヒツキーを傷つけるし、ヒツキーに傷つけられると思う。

…続けてくれ。

あたしはヒツキーを信じてるから。ヒツキーもあたしを信じてくれているのわかる。ああ…何言ってるかわかんなくなってきちゃった。

えつとね。辛い事あつても大丈夫だし、嫌だつたらちやんと言うから逃げないで。つて言いたい。

…たしかに、俺は逃げてたかもしれないな。

ヒツキー。

…どうした？

…あたしね、ヒツキーの事好き。

…由比ヶ浜。今それを言うのは卑怯じゃないか？

うん…わかってる。…本心だからちやんと言うの。

あたしは、ヒツキーがあたしをどう思ってるかちやんと言葉がほしい。今じゃなくてもいい。

…わかった。少し時間をくれ。おい、由比ヶ浜お前——

んふう。頭撫でられるの気持ちいい。勢い半分で告白しちやっただけど後悔はまったくない。

あたしは本心を言った。ヒツキーは逃げない努力をしてくれるだろう。

あたしはそれだけでも嬉しい。仮にフラれても、またアタックすればいいだけだ。

何の問題もない。

「なあ、由比ヶ浜」

「んー」

膝枕となでなでのコンボで陥落寸前のあたし。名前呼ばれたら無血開城まである。

顔を上に向けてヒツキーを見た。なんだか真剣な顔してる。

うう、そんなにジツと見ないで欲しい。照れちやうから。

「聴いてくれ」

…声色が違う。あたしはすつと身体をおこしてドアを背に向けて座る。するとヒツキーも、枕側を背にしてあたしと向かい合った。

「由比ヶ浜。俺もお前が好きだ」

「…ヒツキー」

「俺の彼女になってほしい」

言い終わるとほぼ同時に、ヒツキーの脇の下に腕を回して抱き着いた。彼もそつと抱き返してくれて、あたしは幸福感に包まれる。

涙も嗚咽も我慢しない。声も泪も幸せの証なのだから。

「あー…つたく。お前泣きすぎだろ」

「だつてえ…ぐすつ」

彼の胸にすぎる様な姿勢なあたしは顔を少し上げて、恋人の瞳をじつと見る。

あたしは無言でおねだりしてみた。彼に伝わるだろうか。捧げるのではなく、奪ってほしい。

ヒツキーとの距離がだんだん縮まっていく。あたしは瞼を閉じて彼を待つ。

——距離がゼロになるまで後3秒。

ヒツキーがあたしのファーストキスを奪ってくれた。

大好きだよ。ヒツキー。



由比ヶ浜が俺の彼女になった。

朝までみっちり考えて考えて、考え抜いた。

そこで出た結論。

俺は、由比ヶ浜が好きだ。

前から好きな事を自覚していたのだが、自信が持てなかった。

過去の言いふらされた件以来、人と関わる事にひどく臆病になってしまった。

告白して、振られて、言いふらされて、春仁が暴れる。これがテンプレのはずだった。

「…よく寝る奴だ」

恋人は今、俺の腕の中ですやすやと眠っている。それはもう幸せな寝顔だ。

情事には至っていない。キスした後にはすぐ寝た。ヘタレつてのは否定できないが、ガチで眠かった。

由比ヶ浜は俺を本物だと言った。俺にとっての本物とは、実は俺もよくわかっていない。

それでも、俺は由比ヶ浜に本心をぶつけてくるのだろう。俺はそれを受け止めて。言葉を紡いでいけばいい。

「…もっかい寝るか」

どうせ腕に恋人の頭が乗ってて身動き取れないんだ、もう少し寝てもいいだろう。

起こしてしまわない様にふわりと髪を撫でる。

「…ふわあ」

起きた。と思ったら身体ごとすり寄って来た。狭い狭い。

「いや、落ちるから。もう少し向こう行け」

「やっ」

や。じゃねえから。

「ったく」

「んう〜」

抱きしめて身体ごとずりずりと動かす。豊満なやわらかい塊が存分に押し付けられて顔が熱くなるのを感じる。

「とうか腹が減ったので朝食にしませんか？由比ヶ浜さん？」

「ほれ、起きろ」

「やつ」

「いや。や。じゃねえから。」

布団でいちやいちやしてるとスマホが鳴動しだした。確認してみると平塚先生からの連絡だった。無視すると後が怖いので電話をかけて話を聞いた。

「先生はなんて？」

「奉仕部で合宿に行くみたいだ」

「詳細はメールで送ると言っていたし、ひとまず腹ごしらえといきたい。本気で腹減って来た。」

「由比ヶ浜。朝飯くうだ——」

「結衣」

「……あの、朝——」

「結衣」

「だめだこれは、ゆきのんが定着した日が思い出される。呼ぶまで動かな「結衣」わかったわかった。名前で呼ぶから抱き着く力を弱めろ。」

「こいつ地味に力あるな…怒らせない様にしよう。」

「…結衣、朝——」

「なあに？ヒッキー！」

「かぶせてくんない！朝メシ用意するから、離れろ」

「小町は友達の家に行くメモがあった、適当に調理をして朝ごはんを食べる。」

「そういえば結衣はいつ帰るのだろうか。流石に一度帰った方がいいだろう。」

「結衣」

「ん？」

「一旦帰って荷物置きにいこう」

「うん。わかった」

俺が後片付けをやっている間に、結衣にはシャワーやらメイクやらを済ませてもらった。

来た時と同じ格好なのが気になるが、歩いていけばいいだろう。

道中は他愛もない話でそこそこ盛り上がった。デートしたいとかデートでどこ行きたいとかデートいつ行くとか。

どんだけデート行きたいんだよ！外暑いからあんまり出歩きたくないんだけど。

行くなら、宿題終わらせてからな。俺は手伝わないからそのつもりで。あと上目遣い禁止。

結衣を家に送り届けて帰ろうとしたのだが、由比ヶ浜マに捕獲されてしまった。

なんというか、姉の間違いじゃないかってくらい若い。

「で、二人は付き合ってるの？」

「あー…はい。お付き合いさせてもらってます」

「うう…ママ！恥ずかしいからあ！」

この後さんざんいじくりまわされて俺と結衣が首まで赤くなったのは言うまでもない。

結衣に至っては目尻に涙浮かべてた。

デートにはまだ行ってない。宿題終わらせるのが先だ。俺も行きたいんだから早くおわらせてほしい。

そしてやってまいりました合宿当日。

先生からのメールによると千葉村に行くらしい。俺と小町が集合場所である千葉駅前に着いた時には、結衣と雪ノ下がお菓子屋や飲み物などの買い物を買って済ませていた。あたりを見渡すが春仁と一色の姿が見えない。何かあったのだろうか？

「柊と一色は来れない様だ」

「え？」

「柊は体調を崩していてな、一色はその看病だ。まったくあいつらしいつもいつもいちゃいちゃと…」

「そ、そうでしゅか」

怖い、怖すぎて嘔んだ。俺にも彼女できましたなんて言えない！

結衣もそれを察知した様で、俺達が付き合ってる事は先生にはバレない様にする運びとなった。

雪ノ下は結衣から聞いたのだろう。素直に喜んでくれた。

『結衣さんは私の大事な友達なの、泣かせたら承知しないから。覚悟しておきなさい』

真夏なのに寒気がした。感覚的に春先くらいのひんやりした感じだ。

俺も明日あたりに風邪引きそうだから今から帰っていいですか？

『明日中に体調回復したら俺達も向かうから先に楽しんでてくれ』

春仁からメールが来た。先手打たれた！ちくしょう！

風邪ひくんで帰ります作戦を実行する前に企画倒れにされてしまった。

危険を回避する案をめぐらせていると遠くから俺を呼ぶ声が聞こえてくる。

「はちまくん！」

戸塚あ！戸塚も来るのか、なんで早く言わないんだ！

結衣がやつはろーと偏差値低そうな、いつもの挨拶を交わしてワンボックスに乗り込む。

平塚先生に助手席に指名されて仕方なく乗り込んだのだが――

「助手席が一番死亡率が高いのだ」

『先生がサイテーだ！』

なんとも不安スタートを切った、奉仕部の合宿が始まった。

第26話

身体がだるい。頭がズキズキする。関節も痛い。熱も39℃を超えていた。

病院に行こうにも動けない。フラフラとよろけながらも冷蔵庫から水を取り出し、喉に流し込む。

2リットルあった天然水も間もなく底をつく。摂った水分は瞬間に汗となり、体から出て行つた。

熱が出ているという事は身体の免疫が正常に機能している証なのだが、いかんせんしんどい。

「またこのパターンか…」

平塚先生から合宿の連絡があつたが、この状態では参加は不可能だろう。むしろ参加を拒否する。

食欲もあまりない。あれば食べれるだろうが、冷蔵庫の中はスツキリしていた。

自業自得なのだが、なんとというタイミングだろうか。

立っているだけでめまいがする。俺はベッドに倒れこんだ。

「終せんぱい。大丈夫ですか？」

「……かえれ。うつるから…」

一色いろはがいた。大丈夫だと言つたはずなのに、お見舞いに来たのだろう。

「いやです。わたしにも責任はあるんです」

「…だめだ。おれはだいじよぶ、だから」

彼女に責任などない。体調管理をサボつた俺が悪いのだ。

一昨日の夕方、デートの帰りし。尻尾を出したストーカーを全力疾走で追いかけて、追いかけてまわして。あと少しのところまで逃げられた。

いろはを家に帰らせて、^汗疲労困憊^くの俺は家のベッドに倒れこんだ。エアコンをつけて寝るの良くないのは知ってる。しかし、今回はそれが裏目に出た。

俺は、室内で熱中症になっていた。それに風邪が重なつてこのザマ

である。

いろはがすつと立ち上がって、何やらごそごそしている。どうやらタクシーを呼んでいるみたいだ。正しい判断だと感心する。

意識が朦朧としてきた。呼吸が荒い。水も飲んだばかりなのに唇がカサカサになつてる。

それを察知したのか、いろはが俺の体を丁寧ていねいに支えて起こしてくれた。手にはポカリスエットを持っている。

蓋が開いていた事に気づいたのは飲んだ後だった。水分とともに、彼女の優しさが染みる。

「っ柊せんぱい！」

いろはの声で意識を繋ぐ。俺の視界は傾いていた。

ああそうか、倒れそうになったのか。いろはの心臓の音が心地よい。

「ありがとう……」

ほしよりと零す。

それに応えるかのように髪を撫でられた。

「もう……頑張り過ぎです。少し休んでください……」

心地良い音と温もりに身を委ねて、俺は意識を手放した。

首元まで掛けられた布団に暖かさを感じる。熱が下がったのだらうか、なんとなく身体が軽い。

いろはに頭を撫でられてから記憶が曖昧だ。

たしか何回がよろよろと歩いた気がする。いろはがタクシーを呼んでいた事を思い出して、病院に行ったのだと辻褄を合わせていく。

腹の減りもアテにできない。今は何時だろうか。

息を深く吸うと咳せきが出た。喉の手前側に張り付いた痰たんが口の中に戻ってきて気持ち悪い。

目を開けると真っ暗だった。ドアの下から光がうつすらと漏れている。

時間も場所もわからないで咳込んでいると、扉がかちやりと音を立

てて開いた。

「顔色も良くなってきたわね。ご飯食べれる？」

入って来たのはいろはママだった。

「…えっ？あ？なんで？」

思考が追い付いてない俺はパニック一歩手前。しかも声がうまく出せない。

落ち着こうと深呼吸したらひどい咳が出た。思わず体が強張る。

「ああ…もう。ほら、体起こして」

いろはママに背中をさすってもらい、咳は治まった。

ティッシュに痰を吐き出してふうと一息つく。

痰に緑色のグロテスクな物体がまぎっていたので完治一歩手前だと安堵するが、少しだけ血も混ざっていた。

さつきよりもひどい咳をしていたのだろう。

「柘せんぱい。大丈夫ですか？」

いろはがパジャマ姿でパタパタとやって来た。それと入れ替わりでいろはママはキツチンに戻って行った。

濡れてしっとりした亜麻色の髪に艶つやを感じる。風呂上りの彼女からは、自身を磨いてる証ともとれる香りが漂っていた。

「ありがとう。いろは」

「本当に心配したんですからっ！」

彼女が目尻に涙を浮かべて心情を吐露する。

「柘せんぱいが死んじゃうって思ったら怖くなってすぐお母さんに電話して車で来てもらったんです！車にのせようとしてもぐっだりして意識ないし！これはヤバい！って必死になりました！わたしが呼びかけても反応ないし手を握っても反応ないし揺さぶったらお母さんに怒られたし診察中もぼーっとしててわたし気が気じゃありませんでした！家で看病したいって言ったらお母さんから散々揶揄われるし！すごい恥ずかしかったので責任取って下さいー！」

待て待て。すごい事言ってるけど理解できてるか？止めたいけど声が出ないから止めれない。ジレンマ？違うな。板挟みにはあつてない。

「……えがうまくでない」

カッスカスの声で言う。しかし彼女には聴こえてない。

いろはがついにぽろぽろと涙をこぼして泣き出してしまった。彼女は俯いて肩を震わせて、両手で顔を覆っている。

ふと、過去のいろはがフラッシュバックした。胸が苦しい。

俺は手を伸ばし、いろはの頭にポンと手をおいて撫でた。

はっと顔を上げて、目と目があう。

ゆつくりと彼女の背中に腕を回してそっと抱擁すると、鎖骨あたりに重さを感じた。

「声がうまく出ないんだ。ごめん。ありがとう」

「だめです。許しません」

これは貸しにしておきます♪とあざとく付け加えて、彼女は母を呼びに行った。

幼い頃に大泣きしている少女の事を思い出す。

迷子で、寂しくて、怖くて泣いていたであろう少女。

それを見た時にほっとけないと手を伸ばしたのはなんでだろうな。

いろはが泣いていたからだろうか。

ユキの涙も結衣の涙も見えた事がある。しかし苦しくはなかった。

俺が交際を断って泣かせてしまった女の子もいる。それも苦しくはなかった。

俺は、いろはが泣いてる事がたまらなく嫌なのか。

ああ…そうだな。難しく考える必要なんてない。

母がよく聞いていた「東京ラブストーリー」の一節が頭を過る^{よぎ}。

俺はとつくの昔に彼女に惚れていたのだ。

時刻も22時を回り。一色家のリビングにて遅めの夕飯を頂いてる。

出してくれたのはビーフシチューだった。非常に美味。しかも具がでかい。

衰弱してるだろうというろはが気を使ってお粥を作ってくれたのだ

が、それで胃袋が覚醒。ぐーぐーなり出したのでがつつり頂く事になった。

——いろは。パパと一緒に。

ちよつと強面のダンディなオジ様。はじめましての挨拶は一応できたけどかなり緊張した。急に酒飲みだした時は逃げ出そうかと思つた。

ひつくい声で『君が、終君か。いろはの父、巖いわおです』とか言われた時は肌が粟立つた。はあああつたため息ついて遠くを見ながら一言。

「俺にも義息子むすこができるのか…」

「なんでだよ！はええよ！」

結論。めっちゃいいパパしてた。

それを皮切りにしやべるしやべる。

どうやら今回のストーカーの事も耳に入つて、俺に一度会いたかつたそうだ。

いろはとの関係やらいろいろ聞かれた。いろはは終始トマトみたいだつたけど、逃げたら逃げたで何言われてるか不安なのだろう。自宅なのに借りて来た猫みたく隣でじつとしてた。

そこにいろはママが参戦。巖さんを名前呼びするなら私も『桃花ももか』と呼びなさいと命令された。

「今日はホント助かりました。ありがとうございます。桃花さん」

「いいのよ。いろはがあまりにも必死だったから。ね？いろはちゃん」
♪

「お母さん！もうやめてえ！恥ずかしい！」

「ははは！そうだ春仁くん。今日はもう遅い。泊つて行きなさい」

「え？あの、お言葉はうれしいんですが、俺達付き合つてないですよ？」

その場の時間が停止したような錯覚に陥る。

「えっ？わたしたち付き合つてなかつたんですか？」

「待て待て。まだ告白すらしてないだろ。っていうかお前悪い顔やめろ」

巖さんが硬直から復帰して一言。

「春仁くん。今。ここで。いろはに告白しなさい。ちゃんと『愛』を語るんだぞ」

俺というはが硬直した。二人が首まで赤くなっているのは言うまでもない。

付き合って下さい。うんいいよ。じゃあダメなのか…愛を語れって…しかも相手の親の前で…

それって結婚の挨拶の時にやるもんじゃないのか？お見合い？お見合いなの？初見じゃないけど！

「はるひとくん。私にも聞かせてほしいなあ〜♪」

「…わかりました」

「ひ、ひひひいらぎしえんぱい。あ、ああああの。っそ、その」

恥ずかしい。たしかに恥ずかしいよな。でもな。これだけの事しでもらって逃げる訳にはいかない。

巖さんは俺の事を義息子って言ってくれた。すげえ嬉しかったんだ。それに応える為にも、ちゃんと言う。

「いろは、聴いてくれ」

「っ…はい」

「おお…男前だぞ母さん」

「しっ！黙ってなさい！大事な瞬間なのよ！」

おい、あんたら。聞こえてるから。調子狂わすのやめろ。

わざとらしく咳払いをして続ける。

「俺にとって、いろはは、大切な存在だ。俺と一緒にいてほしい。俺と…付き合ってくれ」

愛は語るものじゃない。伝えるものだ。言葉で伝わるならそれでいい。でも、言葉で伝わらないものも確かにある。

「…はい。わたしも…一緒にいたい、です。ちゃんと『わたし』を見てください存在、だから」

泣いている。それでも言葉を紡ぐ乙女。一色いろは。

それを見る彼女の両親も感極まったのか、静かに涙を流していた。ありがとう。またさせてごめん。泣かないでくれ。笑っていてほし

い。

伝えたい事が多すぎる。挙げればきりが無い。だが、今は言葉は必要ない。

俺は1歩進み、彼女を抱きよせて、そのままキスを落とした。

いろはにだけ聞こえる様に耳元で「愛してる」と囁くと、彼女から口づけを交わされた。

まるで結婚式の予行ではないかと錯覚するほどの雰囲気。

この日は4人にとって、忘れられない日となった。



はるひとがわたしを好きだと言ってくれた。

やっと。やっと言ってくれた！

超待たされた。待たされた分嬉しかった。

きつと待たれてなかったらこんな満たされてない。

ある意味お父さんには感謝してる。目の前で告白させるのはやりすぎって思ったけど、家族を味方につけておいて良かった。

付き合った所でわたしたちの行動そのものに変化はない。でも、彼がわたしの家に気軽に来れる様になったのは大きい。

お父さんも彼を気に入ってくれたみたいだ。

キスした時にお母さんが言った。お母さんたちの出会いとわたし達の出会いがすごく似てるらしい。

はるひとは今日は泊って行くことになった。ちなみにお父さんの寝巻着てる。

実は一緒に寝るのはこれが初めてじゃない、わたしが勝手に潜り込んだだけなんだけど。

「奉仕部の合宿どうする？明日出発だけど」

「あくメール来てましたね。行きたいですか？」

明日の体調次第みたいです。そうですね。忘れてましたけど風邪ひいてましたね。

もう無理に行かなくていいと思う。また倒れるのはヤだし。

「ま、今日と明日は安静にする」

「そうですね♪」

「もう心配はかけたくないしな…」

ほんとです。反省してください。だから髪をもっと撫でてください。さあ！さあ!!

少なくとも夏休みの間は、極論24時間一緒に居れるから、無理はわたしがさせない。

恋人かあ…。

『俺にとっていろはは大切な存在だ』

大切なひとなんて言葉。今まで言われた事なかった。

中学も高校でも、ただ単に可愛いから〜とか。ムリしてるから〜とか。上辺だけの評価で告白されてきた。

“可愛いわたし” 目当てで、演じてるのを勘違いしてて、正直つまらなかった。

でも、彼は違った。わたしが演じてても、素でいても変わらない。

正直言つて悔しかった。

「はるひと」

「ん？」

「わたしが演じてた“可愛いわたし”に魅力ありましたか？」

わたしは彼の腕の中で問いかける。

演技はあくまでも演技。本物じゃない。相手が望んでいるであろう偶像をみせてあげるだけだ。

偽物ではないけど。本物のわたしではない。

「どうした？いきなり」

「演技してるわたしは本物のわたしじゃないんです。そんなわたしに魅力はありましたか？」

「ある」

即答だった。何故？と理由を聞く。いろはの場合は。と、前置きして話してくれた。

「演技だろうがなんだろうが、自分からやってる事は全て本物だ。だ

から「可愛いわたし」のいろはも偽物なんかじゃない」

わたしは悶えた。こんな事を言われておとなしくなってしまうのでムリ。

じたばたしてたら彼に捕まえられて動けなくなってしまった。

心地よい温もりと、はるひとの心音が眠気を誘う。わたしはそれに逆らわない事にした。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

『もう離さないでください』と想いを込めてキスをする。

わたしはすぐに眠りに落ちた。

第27話

『夏休み期間中のボランティア人員募集！詳細は平塚まで。』

夏休みが始まる前に、学校の掲示板に張り出されたプリントを見かけた。

俺は少し気になって先生に聞いてみた。

『小学生の林間学校があつてな、そのサポートを私が押し付けられたのだ。そのサポートスタッフだよ。——働き次第では内申点も考慮しよう』

俺は小学生という単語に少し反応してしまう。

あれはもう済んだ事だ。今更、どうしようもない。

「はい！みんなが静かになるまで3分かかりましたー!!」

考え込んでいたのだろう。俺は大きな声でハツとする。

まさか教師の常套手段をこの歳で聴くとは思わなかったが。

「それでは！林間学校でサポートしてくれるお兄さんとお姉さんを紹介します！」

さも当たり前前かのように拡声器が渡された。当たり障りのない事を拡声器越しに言う。「素敵な思い出をたくさん作ってくださいねー」と。

視界に、雪乃ちゃんを始めとする奉仕部の面々が映るが、柗というのは姿が見えない。彼らは参加していかないのだろうか。

ちらと横を見れば、優美子は微笑みを浮かべ、戸部と姫菜は小学生のパワーに圧倒されている様だった。

小学生のオリエンテーリングを見守りながら山道を歩く。アスファルトの照り返しがないせいか、日差しの割に涼しく感じる。草木の青臭い香りも嫌いじゃない。

時折小学生が手を振ってくる。俺は「素敵な思い出」の為に手を振り返す。これも仕事のうちだ。

ふと、前を歩いているヒキタニ君達が立ち止まる。彼らの視線の先には、既視感がある光景が広がっていた。

5人グループの女子——であってほしい。そのグループは、楽しそうな4人とそうではない1人だった。

4人はいわゆるクラスの中心的な子たちなのだろう、すぐさま俺と優美子に走り寄り、じゃれついてきた。

4人組は優美子に任せて、そつと話しかける。

「チエックポイント、見つかった？」

名前を聞くと「鶴見、留美……」と教えてくれた。彼女の背中に手を添え4人組の所まで誘導する。

歩く留美ちゃんは少し俯いていた。傍から見ても楽しそうには見えない。合流した4人組が留美ちゃんを見る視線は、友達を見るそれではなかった。

——同じだ。あの時と。

留美ちゃんも、どこか当時の雪乃ちゃんを彷彿とさせる美貌の持ち主だった。

俺はまた失敗したのだろうか。彼女に声をかける事は間違いだったのだろうか。

いや、俺は人の善性を信じたいんだ。4人を悪と決めつけるのは早計だ。

小学生たちのお昼も終わり、俺達は夕食であるカレーの準備に取り掛かる。

火の番をしている時に偶然ヒキタニ君と2人きりになった。

「……柗は来てないのか？」

「……春仁は風邪引いてまだ寝てると思うぞ」

「……いろはもか？」

「一色は看病だろ。あいつら、基本一緒にいるしな」

お大事に。と伝えてほしいとお願ひして。会話は終わった。

結局、どうすれば良いのかわからないまま時間は進み、俺はまた過ちを繰り返す。

柗が怒りを巻き散らした日に俺は学んだはずなのに、何一つ理解できていなかった。

『カレー、好き?』

『……別に。カレーに興味ないし』

その場を取り持つ為に4人組にカレーの話題を振ってなんとか場を盛り上げようとしたが——失敗。微妙な空気だけが残った。

こんな時に柊がいてくれたらと思ってしまう。

なんでだろうな、あいつはどこか俺と似てる気がするんだ。

俺達の夕食も終わり、陽も暮れて、いくばくか涼しくなってきた。ヒキタニ君の妹である小町ちゃんが紅茶を淹れてくれたのでありがたく頂く。

木々が風に揺られてざわざわと音を出していた。なんとも言えない沈黙が続く。

「大丈夫、かな…」

結衣が心配そうにヒキタニ君に話しかける。無論、留美ちゃんのことだろう。

「何か心配事かね?」

平塚先生が聞いてきた。

「ちよつと悪意で孤立してしまってる子がいたので…」

「隼人…あん時はあーするしかなかったし」

優美子がフォローを入れてくれた。

相手にしないという選択肢もあっただろう。しかし、俺にはそれが選べなかった。

「葉山。お前が苦しんでるのは分かる。顔がらしくないからな」

「はは。…そんなにヒドい顔してるかい?」

「隼人くうーん。気にしすぎっしょ。俺らはもう気にしてないんだし。元気だしてこー!」

大和、大岡。そして戸部。

彼らのはあの一件の後、俺が作ってしまった溝を埋めようと努力してくれた。

俺はそれに戸惑っていたが、戸部の明るくて、前向きな性格に助けられた。

こうやって今も手を差し伸べてくれてる。

「戸部。優美子。ありがとう」

「つちよ！海老名!」

姫菜が鼻血だして倒れた。優美子…いつもすまない。ハヤトベ？俺には理解できない言葉の様だ。

「それで、君たちはどうしたいのかね?」

先生に結論を求められる。俺は、留美ちゃんを見て見ぬ振りする事で、過去の自分を否定するような気がした。

俺は、友達を信じた気持ちを否定したくない。

「俺は…どうにかしてあげたい、です」

「貴方では無理だと思っただけけれど。そうだったでしょう?」

「……そうだね」

俺の気持ちまで否定される事は遺憾だけど、彼女には俺を否定する権利と資格がある。悔しいけど、何も言えない。

「雪ノ下はどうかね?」

雪乃ちゃんはこの案件を奉仕部の活動に含めて良いかと先生に問い。先生はそれを是とした。

そして、彼女は凜とした声で宣言した。

「私は、彼女が助けを求めるなら、あらゆる手段を持って解決に努めます」

反対の意見は出なかった。出るはずもない。

もし柊がこの場にいたら、彼女になんて言ったのだろうか。

「それでは、君たちでどうするか考えてみたまえ」

平塚先生はふわあと欠伸をしつつ去って行った。

『鶴見留美を取り巻く環境の改善方法とは』というお題で話し合いが開かれた。

優美子は留美ちゃんは可愛いから声掛けて仲良くなればいい。と主張する。

しかし、結衣がそれは優美子だからできる事だ。と反論。

姫菜の意見は趣味で友達を作る。という物だったが、薔薇の予感があったので優美子にお願いして隔離してもらった。

俺のやり方では解決はできない、何かいい方法はないのだろうか。

助けを求められてるかどうかすら、定かではない。

このまま話し合っても何も生まれえない、今日はもう寝る事になった。

俺のやり方では不可能な事はわかっている。

だから、今回は書記係に徹した。

参考書を見る為に持ってきていたタブレットが思わぬ形で役に立った。

電気を消して、横になる。じわじわと瞼が重くなってきた。

戸部が戸部らしくっべー！と騒いでいる。仕方ない。戸部だし。でも、こいつはどこか憎めない。

好きな人は？イニシャルでいいから！としつこく聞かれたので「Y」とだけ答えておいた。

戸部は姫菜が好きなんだそうだ。がんばれよ。応援する。

俺のやり方では今回は悪化するだけだ。それはよくわかる。

でも、何もしないで見つめて見ぬ振りをするのはできない。

みんなが楽しい世界を望むのは間違っているのだろうか。



「荷物は大丈夫か？」

「おっけーです！」

朝6時だというのに元気よく返事するいろは。行き先が山という事もあり、スニーカー、デニムショートパンツ、オレンジのTシャツの上からは白い長袖のパーカーを羽織っている。

バランスの良いスタイルとすらりとした脚は正に眼福である。耳元で「似合ってる」とぼしよりと伝えておいた。

彼女は相変わらず不意打ちには弱く、頬を赤らめる姿が愛おしい。

「桃花さん。お願いします」

「しゅっぱあーっ！しんこうっ！」

母と娘による息ぴったりの号令。

親子というより姉妹と言われる方がしっくりくる。

高速に乗ったあたりでいろはが俺の肩にもたれかかって、くうくうと寝息を立てる。朝もかなり早かったし、何よりついてから全力で楽しむ為に今休んでおくのが正解だろう。

「いろは、寝ちゃったのね」

桃花さんが話しかけて来た。

「ええ、起きたの5時とかですし」

抱き着いて「はー落ち着く」と言っただけで大人しくなったのも束の間、即「楽しみー」とじたばたし出した。遠足の前日かよ。何度「寝ろ」と言っただけ覚えてない。気持ちはわかるけど。

「いろはの事、よろしくね」

「はい」

短く答えて、ふと外を見る

2時間ほど走っただろうか、もう都市部は抜けている様で、深緑の大地と天色あまいろの空の美しさに息を呑む。

可愛い彼女の頭を、肩から膝上へ動かして髪を撫でる。

そのまま、俺も寝てしまった様で、千葉村の駐車場で桃花さんに起こされるまで2人して爆睡していた。

ちなみに写真のシャッター音で起こされた。

はずかしい。ちくせう。

平塚先生に到着の連絡を入れた。

帰りは先生が学校まで乗せてくれるとの事。

「わかったわ。2人とも、楽しんでらっしゃい！でも、怪我はしないようにね。」

「はい。ありがとうございます。桃花さん」

「お母さん！ありがとうございます！」

うん！と満面の笑みを浮かべて、桃花さんは駐車場を後にした。

時刻は9時くらいだ。流石に朝食は終わっているだろう。

手を繋いでのんびりと歩く。

しばらくすると八幡だけが食事をしているテーブルが見えてきた。

おかわりだろうか。茶碗にご飯をマンガ盛りをしている結衣と目

が合う。

「あーハル君！いろはちゃん！」

まだ大きな声はしんどい。俺は、手を上げて応える。

八幡も手を上げた。口がリスみたいで吹き出しそうだったがなんとか堪えた。いかん。口角がひくひくする。

「おはようございまーす。わたしは先に荷物置いてきますねー」

いろはが俺の肩からひよいと自分のバッグを取って、女子の荷物置き場に向かって行った。

「あら、貴方達。来たのね。来ないかと思ってたわ」

「ちよつと風邪が酷くてな、連絡出来なくてごめん」

「大丈夫よ。…後できっちり説明してもらおうから」

少し寒気がしたのは気のせいだ。気のせい！

そんな事より。とユキが続ける。

「今、私達はある問題解決に、奉仕部として取り組んでいるのだけけど。ハルにも知恵を貸してほしいの。葉山君が議事録をとってくれているから、彼から状況の説明をして貰って頂戴」

問題：か。それは別としていい機会だ。

丁度彼とは話をしたいと思っていた。彼は今、薪を運んでいるみたいだし、それが終わってからでいいだろう。

手持ちぶたさなので木で櫓を組んでいる八幡の所に行く。

「春仁、身体はいいのか？」

「ああ、大丈夫だ。心配かけてすまん」

「…そうか。よかった」

ストーカーの事は誰にも話していない。巻き込んで無傷で済むとは考えてないし、いろはの心に傷が残る。最悪の場合は頼らざるを得ないが…。

「柊…少し、いいかな…？」

葉山が話しかけて来た。

「葉山か。いいぞ」

「わたしも行きます。葉山せんぱい。いいですよね？」

葉山も了承。俺達3人は少し移動する。移動中も会話は一切ない。

葉山の顔はお世辞にも良いとは言えない。ユキが説明しなかった事が気になる。

疑問は様々だが、まずは話を聞くことにした。

10分ほど歩いた所で立ち止まる。

「こちらへんでいいかな…」

葉山が真剣な顔で話し始めた。

「説明するよ——」

彼の説明は客観的で要点もまとまっていて分かり易い。いろはもすぐ状況を理解した。

しかし、わからない事がある。何故、葉山はこんなにも深刻な顔をしているのだろうか。

「それで説明は終わりか？」

「…ああ、説明は終わりだ」

「聞きたい事も聞けたので、わたしは川でせんぱい方と遊んできますね。はるひと。わたしの水着、楽しみにしてて下さいねっ♪」

「…俺も着替えて行くから」

「はぁ〜い♪」

俺の彼女が可愛すぎて困る。それはさておき。

「葉山。本題はなんだ？」

「はぁ…助かるよ」

葉山が静かに、はっきりとした声で話し始めた。

「留美ちゃんが昔の雪乃ちゃんに似ててね、どうしても思い出してしまうんだ。あの時も、今日も、俺のやり方は正しくない。それは分かっている。嫌ってほど分かっているんだ。でも！見て見ぬ振りには俺はできないんだ…」

葉山がさらに続ける。俺は彼をじつと見る。

「昨日、雪乃ちゃんに否定されてね。柊。教えてほしい。俺の考えは間違っているのか？雪乃ちゃんを助けた事がある君なら、何か知ってるんじゃないのか？みんなが仲良くするためにはどうしたらいいんだ？」

葉山は自分の行動を否定されて、自分の考え方までも否定された様

に錯覚してしまったのだろう。なんとも彼らしい苦しみ方だ。

チエーンメールの時の演説も、おそらくユキの時もそうだろう。葉山は自分の考え方に基づいて行動したに過ぎない。その考え方は多くの人に理解され、賞賛されてきた。だが、ユキを、戸部達を、目の前の少女すら救う事ができない現実を目の当たりにして苦しんでいる。

「葉山…」

「俺は、どうしたらいいんだろうな…」

葉山がみんなに拘る理由。それは彼が優しいからという側面もあるだろう。だが本質はそこじゃない。

葉山はきつと挫折を経験した事がない。あるいは、挫折をそれと認識していない。

持てる者は持たざる者の事を理解できない。常に誰かが側にいる彼には1人ぼっちの事がわからないのだ。

「葉山。お前、挫折した事ないだろ」

「…どういう意味だい？」

「そのままの意味だ。お前は過去に縛られているだけで、向き合っていない。自分の考えを正当化しようと無駄にあがいてるだけだ」

「過去と向き合う…か」

「そうだ。どう向き合うかは、自分で考えないといけない」

俺も人の事は言えないけどな。偉そうな事言って申し訳ない。

「君は、乗り越えたのか？」

「…まあ、な。でも、今のお前には関係ない事だ。まあ、いつか話してやるよ」

今の葉山に話すのははばかられる。こいつは底抜けに優しいが、その優しきで傷つく事をあまり理解していないだろう。

「どうだ？少しは楽になったか？」

「ああ、ありがとう。少しだけ楽になった」

「しんどかったらいつでも来い、お前が聞きたくない言葉をぶつけてやるよ」

「ははっ。お手柔らかに頼むよ」

俺達は話を終え、川に向かった。葉山は胸のつかえがとれたのか、スツキリした顔をしている。

「なあ、隼人」

「つな、なにかな？」

「俺はお前が嫌いだ」

「…そういう事か。…俺の事を何も知らないくせに、嫌いとはご挨拶だな。春仁」

俺達はニツと笑いあつて。握った拳をぶつけあう。

隼人、いつでもいいから、今度はお前から言ってくれ。

川では桃源郷が広がっていた。美少女が水着で戯れる光景を脳裏に焼き付けるべく木陰に座って幹にもたれる。

「はるひと。どう？」

始めて目にするいろはの水着姿は黄色いホルターネックの水着だった。着やせするのはつきりと主張するバストとヒップ、抱けば折れてしまいそうなくびれた腰。水滴を弾く白い肌は美しいの一言だった。

「——あー…しよの…綺麗、だ。よくにあつてりゅ」

「はう…あ、ありがと。綺麗…綺麗かあ…えへへ♪」

噛みました。可愛い、いや綺麗な彼女から目が離せない。

水滴がきらきら光るアクセサリーの様で、瞬きを忘れてしまいそう
だ。

八幡は結衣とユキの水着姿を見て顔を真っ赤にしていた。

まああれだけ押し付けられたら赤面するわな。

何をとは言わないが。

第28話

はるひとに水着を褒められた。素直に嬉しい。可愛いじゃなくて綺麗と言われたのも始めてだった。

彼、噛んでたし、顔も真っ赤だった。わたしに見惚れてたんだよね？

あ、あんな反応をされたらこっちまで照れてしまう。

両親の前で告白されて、両親の前で抱きしめられて、両親の前でキスをされてから、わたしは無敵になった。最低限のTPOは弁えるけど、それ以外は人の目なんて気にしないのだ。

そんなわたしは、彼の隣にぺたりと座って彼の肩に頭を置いていく。

「はるひと」

「ん？」

「ふたりつきりで旅行とか行きたくないですか？」

「旅行かあ…場所次第だな」

「海がいいですっ！」

日焼け止め塗ってもらったり、沖で抱き着いたり…

色々よこしまと邪な事を考えてしまう。

「海は…ちよつと、んー…アレだな。気が進まないけど。いろはが行きたいなら行こうか」

なんでそこで悩むんですか？わたしの水着姿みたくないんですか？

抱きつかないとわからないけど、いい身体してますよね？見られて困ると思ってないでしょ？

腕が胸に挟まれるのが恥ずかしいんですか？今更ですよ？

——あーもしかして。もしかすると。

「わたしの水着姿を他の男に見せたくない。とかですかあ〜？」

はるひとの肩がびくつと跳ねて、握られた手にきゅつと力が込められる。頬が赤く染まっていく恋人の反応は、わたしの期待を裏切らなかった。

「……そうだよ。…なんでわかんだよ」

んふう。んふう。わたし、ちよくえがお。

いろはちゃんを侮りましたねえ。今のところは先手取れてるみたいですし、もつと攻めましょう。

「じゃあ。わたしの水着、選んでくださいねえ」

手をにぎにぎしてきた。絡めた指で手の甲をつつーとなぞり合う。

はるひとの顔は日焼けしたみたいに真っ赤だった。

きつとわたしに着てほしい水着を考えている。横顔がとても愛おしい。

はるひとは耳まで赤くなっていた。ここらでトドメといきましょう。

耳元に唇を寄せて、精一杯の甘い声で囁く。

「…でも、えっちなのはだめですよ」

ぼんって効果音が鳴ってもおかしくないリアクションをした。湯気もみえたりしないかな。

ちよつとやり過ぎたかもしれない。俯いてぶるぶるしてる——
反省はしないけど。

普段はキリツとしててカッコイイ。でもこんな風に羞恥心にまみれるとあら不思議。母性くすぐる子犬みたいになっちゃう。

んふう。ちよーまんぞく。

「…まいりました」

「またわたしの勝ちですねー♪——ん…」

勝ったご褒美にキスを落としてくれました。ちなみにわたしが負けてもなにもありません。

だって負けないし。

わたし達がじゃれあっているとユキせんぱいに似てる子が比企谷せんぱい達とこつちを指さしながら話してた。

はるひとの手を引いて行ってみる。キスしてるの見られてても問題ありません。むしろ慣れてほしいです。

「はちまん。この人達、誰？」

「一色いろはですっ」

「柊春仁。君が留美ちゃんかな？」

すごくかわいいです。ユキせんぱいを幼くしてみたみたい。

「なんかこの2人も、他とは違う感じがする」

「あー、たしかにそうだな。一色は猫かぶるし、春仁はそもそも寄せ付けないからな」

「ねえハル君。いろはちゃん。ふたりだったら留美ちゃんみたいになっちやったらどう対処するの?」

「わたしのやり方はわたししかできないと思いますけど——実際にわたしもこーゆーのありました。無視して無視されてつてやつ。私は可愛かったので回数を数えるのがめんどくさくなる程度に標的にされましたね。それを無視してたらエスカレートしていったんですけど、クラスの男子を味方につけて対処しましたね」

これは輪の外にいたからできた事だ。輪の内にいるなら別の手段になるけど、クラスの女子が敵になる結果は同じだろう。

私はこの方法しか知らない。

「俺は…そうだなあ——八幡の言う様に友達いなかったし、我関せずって感じだな。返事になってなくて悪いけど」

はるひとにちよつかいかけれる人はいないと思うので、あんまり参考にならないですね。

わかってました。はい。

「留美。惨めなのは嫌か?」

留美ちゃんは目尻に涙を浮かべながら肯定の返事をした。

——肝試し、楽しいといいな。

そう言つて比企谷せんぱいはどこか行つてしまった。

「ヒツキー…」

「結衣せんぱい。行かなくていいんですか?」

「いろはちゃん…うん。今は…1人にさせてあげたいかな…」

結衣せんぱいも悲しそう。比企谷せんぱいも罪な人だ。

「あたしもね。こんな経験あるんだ。あたしは無視されるのが怖くて、ずっと上辺だけの付き合いしてたからさ。なんか留美ちゃんの事、他人事とは思えないよ」

結衣せんぱいはきつと救えなかったのだ。見て見ぬフリをしてし

まっつてそれが尾を引いているのだろう。

「壊すしかない——だろうな。きつと八幡も、そう考えている」

「それで、どうするの?」

ユキせんぱいがそう切り出した。何が?とか分からないほど馬鹿ではない。言うまでもなく留美ちゃんの事だ。

誰も口を開かない。わたしとはるひとは口を出さないと事前に決めていたので意見を述べるつもりはない。ただ、アドバイスはできる範囲でする。

そんな中比企谷せんぱいが口を開く。

——俺に考えがある。

比企谷せんぱいの案はやはり『関係の破壊』だった。なるほど確かに効果はあるし、極限状態の人間は鬼になる。あれはもうヒトではない。

わたしの時もそうだった。私が猫なで声で男子に助けてもらった時の主犯の慌てようたらなかった。

必死で行われる犯人のなすりつけ合い。自分の意中の人に嫌われたくない一心で、つい1分前まで一緒に笑いあってた友達を売る。言うまでもなくその子嫌われてフラれちゃったけどね。

はるひとも理解していた。彼はさつき我関せずと言っていたが、あれはおそらく建前だ。本音はきつと『根絶』ではないかと推測できる。彼は無視するとかされる以前に、『その程度の事に構ってられる程、余裕がなかった』のではないだろうか。

はるひとから聞いた訳でもないし、今後聞く事もないだろうけど、なんとなく想像できる。

「みんなぼっちになれば、少なくとも留美は惨めに感じない」

比企谷せんぱいは最後にそう締めくくった。

『誰もが平等な世界は、誰もが等しく不幸せな世界しか存在しない』
脳裏によぎったこの悲しい言葉を見たのは、いつだっただろうか。



林間学校2日目の夜のメインイベントである肝試しが始まった。何やらコスプレ衣装があったが、女子高生のコスプレを見たいという欲望がまる見えだったので誰も着なかった。

雪乃ちゃん——いや、雪ノ下さんだけは浴衣を着ていた。春仁に「どうかしら?」とすりよっていて、いろはが少し膨れていたな。

春仁の仕掛けがうまくいつている様で。あちこちから悲鳴が聴こえてくる。

『肝試しで重要なのは“不気味である事”だ。適当にお経とか悲鳴の音源を携帯に入れてそこそこの音量で流してやればいい』

『ああ、あと霧がかつてるのもいいな、コーヒー豆とか入手できるならそれっぽくできるんだが——…あるみたいだな、これで視界が多少悪くなるから不気味さが増す』

『わああ! はちまんすごいね! 楽しそう!』

『戸塚…怖かったら言うんだぞ? 俺が守るから』

『ヒツキー! そんなの《めっ!》だよ!』

よくもまあ、思いつくものだ。比企谷も春仁も性格悪すぎだろ。

俺は比企谷案の中核である極限状態を作り出す役を買って出た。

春仁が便乗してきたのは意外だったけど、どこか嬉しさもある。

春仁は顔が割れていないから色々都合がいいみたいだ。優美子と戸部も付き合ってくれる。3人ともすまない。

俺のスマホが震える——合図だ。

「優美子、戸部、春仁。行こう」

3人は首肯で応えた。

留美ちゃんのグループを視界に捉えた。戸部と優美子に目で合図する。

相変わらず4人と1人だ。胸が苦しい。

小学生4人組は本人たちにとってさぞ優しい世界に住んでいるのだろう。その世界を壊す事で極限状態にもっていけるだろうか。

肝試しつまんなーい。ぜんぜんこわくなーい。しよぼいよねー。
それぞれが面白おかしく好きに騒いでいる。

『バカみたーい』

「…あんさー。今馬鹿って言ったの誰？ 別にあーしらあんたら友
達じゃないんだけど」

「ちよつと調子乗っちゃってるカンジ？ここで社会のキビシサ教えて
おくのも先輩の務でしょおー！」

優美子も戸部も演技してる訳じゃなさそうだ。多分、本気で気に入
らないのだろう。

「葉山さん！こいつらやつちやっついていいスカ!？」

「……………そうだな。半分は見逃してやる。 選べ」

怒る演技は俺には難しすぎる。無表情が精いっぱいだ。春仁が言
うには、これはこれで怖いみたいだけど、彼にだけは言われたくない
がね。

目の前では比企谷の予想通り友人の売り合いが始まっていた。そ
して、当然の様に差し出される鶴見留美。

「……………あと2人だ。 選べ」

「隼人。あんま時間かけんな。行くぞ」

春仁が低い声で追い打ちをかける。俺はカウントダウンを始めて
焦燥感を煽る。

5——4——3——2——1。

俺の心が折れそうになった時に目の前が真っ白に光る。闇夜に慣
れていた視界はチカチカとしている。

『走れる？ こっち』

声と足音が遠ざかっていく。予想した結末ではなかったが、確かに
鶴見留美という少女は、自らの行動によって救われた。

「こんなやり方でも救えるのか…しかし、こんな気持ちは二度とごめ
んだな」

春仁は比企谷の所へ向かった。こういうのは慣れてるらしい。こ
れに慣れてるって…春仁、君はどんな思いをしてきたんだ…。

俺と戸部、そして優美子は精神的な疲れもあって、そのまま休むことにした。

「戸部、由美子。ありがとうな。辛かっただろう」

「隼人くん。お互い様っしょ。でも、こんなのは、もうやりたくないね」

「……あーしはもう寝る。気分悪いし。おやすみ、隼人」

俺も少し横になりたかった。というか1人になりたかった。

今回救われたのは留美ちゃんだけじゃないかもしれない。少なくとも俺は、過去と向き合う事ができた。

「挫折……か……」

少し目を瞑って考えていると煮詰まっているのか眠れない。

「……そごと音が聞こえる。どうやら比企谷が帰って来た様だ。」

「比企谷君……」

「葉山……眠れないのか？ まあ、あんな事を目の前で起こしたんだ。

気分悪かっただろ？ すまなかった」

「いや、俺が自分でやるって決めたんだ。君が謝る事はないよ」

「……そうか」

「君が俺と同じ小学校だったらどうなっていただろうね……」

「どうだろうな……春仁もいただろうし、案外悪くないかもな」

俺と比企谷と春仁。3人がもし一緒に過ごせていたら……

「それでも」

春仁に言われた言葉を比企谷にも言いたいけど、俺はまだ2人と対等じゃない。いつか春仁と比企谷に『お前の事が嫌いだ』と言いたい。

「俺は君とは仲良くできなかつただろうな」

「ひでえな。春仁経由で仲良くやってるって事にしといてくれ」

これは俺が比企谷八幡に始めて伝えた本音だった。彼らとは対等でいたい。お互いに何も期待しないそんな関係でいたいと願いつつ、バンガローに戻った俺は意識を手放した。

第29話

俺たちの合宿も無事？に終わり、平塚先生が運転するワンボックスは一路、総武高校を目指していた。

「柀は楽しめたかね？」

「ええ、いい気分転換になりましたよ」

「来た意味があつてよかつたよ。昨夜、比企谷にも言ったが、大分危ない事をしたそうじゃないか。なんとか問題にもならず済んだ。

——でも、こんな案件はこれで最後にしてほしいものだ」

「…すみませんでした」

俺達の責任者は平塚先生だ。先生に相談せずに行動したのは確かにまずかつた。しかし、相談して守られるのは俺達だけだ。留美ちゃんの問題を見て見ぬ振りする結果になった可能性も高い。この先生が反対するとは思えないが。

「かまわんさ。少しくらい問題児の方が愛着も沸く。君も教師を目指すのであれば、覚えておきたまえ」

ホント男前な先生だ。——こんなに美人なのに。アニメとかマンガの話しなかつたらいいんじゃないだろうか。あと結婚の話もしなかつたらいいと思います。

「他の部員もどうやら楽しめたみたいだ。ふふつ。よく眠っている」

助手席から首を捻って後ろを見る。

——すごい静か。せいぜいくうくうと寝息が聴こえるくらいだ。千葉村を出たあたりは賑やかだったが、八幡が寝たあたりから皆が気を使って声量を落とした。それで、そのまま眠ったのだろう。女性陣は夜遅くまで女子トークに花を咲かせていたようだ。

「そういうえば君は一色と付き合っているんだったね。あまりハメを外しすぎないようにな」

「肝に銘じておきます」

ふつと微笑む平塚先生は、どこか寂しそうだった。

その後は世間話や結婚とか、八幡の愚痴とか結婚とか結婚の話をし

た。

先生。俺、彼女いるんで。他当たって下さい。応援はするんで。

「柘。ちゃんと未来は見えているか？」

都市部が見えてきたあたりで先生が問いかけて来た。

意味深な質問だ。言葉に詰まってしまふ。

未来を見る。それは自分で選択するって事だ。

俺は選択の余地なく生きてきた。それはわかってる。

「…まだ見えてない。ってのが正しく思えます」

俺は自分の事を、自分で選んでいない。

選択肢を模索せず、感情に、周りに流されているだけだ。

「ちゃんと解ってるようで何よりだ」

未来。未来か：あの日まではひとり生きていける事を第一に考えて行動してきた。だから料理もできる様になった。寂しくても泣かなくなった。苦しくても我慢した。いじめには立ち向かった。その為に身体も鍛えた。

それが俺の“普通”だと己に言い聞かせていた。そしていつしか、言い聞かせるまでもなくそれが日常になった。

だが、母が他界してからはどうだろうか、家に帰れば八幡と小町がいる。学校にはユキ、結衣、隼人もいる。なにより俺の傍らにはいろはが居る。寂しくはなくなった。苦しい事も少なくなった。

俺は、寂しき、苦しきの基準がわからなくなっていた。

「柘。もう一度言っておこう」

——君の未来は君ひとりだけのものじゃない。

今ならなんとなくわかる気がする。だが、言葉にすると消えてしまいきそう。そんな気がした。

俺もいつの間にか寝てしまっていたみたいだ。窓の外には見慣れた校舎が見える。

車の外に出て大きく伸びをする。八幡たちは既に荷物をトランクから取り出していた。

「家に帰るまでが合宿だ。気を付けて帰る様に！ それでは解散！」

あんたそれ言いたかっただけだろ。

「俺と小町は買い物行って帰るが、春仁はどうすんだ？」

「とりあえずいろはを送ってからだな。荷物も置きたいし」

「ねえねえヒツキー。ゆきのん。ちよつとお茶していかない？」

「んー。ならサイゼでもいくか。雪ノ下はどうするんだ？」

「そうね。私も一緒に——」

「ひゃつはろー！雪乃ちゃん。迎えに来たよ」

「…姉さん」

突然後ろから現れた陽乃さん。ユキを迎えに来たと言っているが、はたしてどうだろうか。これは俺も少し言葉を選ばないと少々危険かもしれない。

「——お久しぶりです。陽乃さん」

「…懐かしい顔だね。柊君。——それとも昔みたいにジン君仁って呼んだ方がいいかな？」

流石に忘れてないか。しかし本当に美人だ。昔の可愛い面影も残しつつ美しさが際立っている。

いろはが腕を絡めて来た。少しだけ震えている。八幡も結衣を庇っている。その判断は正しい。

「陽乃さんの好きなように呼んでもらって構いませんよ」

「じゃあジン君も私の事は昔みたいにお姉ちゃんって呼んで欲しいなあ〜♪」

いや、呼んでないから。勝手に人の過去を捏造するのは止めて頂きたい。

痛い痛い。いろはちゃん？足踏んでるよ？わざとか？痛い！わざとだ！痛い！！

「あ！比企谷君！ひゃつはろー！後ろの子は初めましてかな？雪ノ下陽乃です。雪乃ちゃんのお姉さんだよ〜」

「あ、由比ヶ浜結衣です。——ゆきのんの友達…です」

陽乃さんが結衣を冷めた目で舐める様に見た。結衣はたじろいでしまう。

——友達…ねえ。

陽乃さんはユキに何があったのかその目で見ているはずだ。結衣の事を奴らと同類かどうか選定しているのだろう。しかし、結衣とユキはお互いを友達、あるいはそれ以上の関係だと認識している。陽乃さんがユキを心配する気持ちはわかるが、これは少しお節介が過ぎる。

「陽乃さん。もういいでしょう？用があるのはユキだけのはずだ。他の人間を巻き込むのは止めて下さい」

「…雪乃ちゃんをおいて行ったジン君がそれを言うのかあ」

それを言われると痛い。だがここで引き下がる理由もない。俺を貶めるのも構わない。しかし、ユキが認めてる彼女の友達を侮辱されるのは腹に据えかねる。

「本当は、雪乃ちゃんを迎えに来ただけだったけど気が変わったかな。雪乃ちゃん。お母さん待ってるんだけど。——来るよね？」

「…わかったわ。——結衣さん。ごめんさい。お茶には行けなくなっちゃったわ」

「あ、うん…じゃあ…またね。ゆきのん」

八幡と結衣も察した様だ。ここは引き止めるべきではない。

「何突っ立ってるの？ジン君も来るんだよ？」

「え？は？——つちよ！」

「はるひと!？」

陽乃さんが俺の腕を引っ張り、いろはを引き離す。

「はあ…陽乃さん。相変わらずですね。——わかりました。同行しますから、いろはも一緒にいいですか？」

「誰？この娘。ジン君の彼女？」

「そうです。俺の彼女です」

いろはが怖がってる。俺はそつと腰に手を添えた。そうすると少し落ち着いたのか、俺に少しでも体重を預けて来た。背中にも温もりを感じる。と恐怖が薄れるらしい。

「なら問題なし！貴女、名前は？」

完璧な作られた笑顔で質問する。さつきまで素の顔でいたからあまり意味はないと思うが…。いろはもこの笑顔が作りものだって事

はすぐ分かるだろう。

「二色いろはです」

俺の彼女は毅然とした態度で応じた。

八幡たちに別れを告げ、合宿はひとまず終了した。陽乃さんはこの卒業生らしく、平塚先生が頭を抱えている。

先生、ご愁傷様です。

「都築。出して」

陽乃さんの合図で車が走り出す。

ユキはまだ俯いている。俺といろははこれから起こるであろう尋問に耐えるべく、気を引き締めた。



雪乃ちゃんを連れて来なさいと母に命令された。逆らうととつてもめんどくさいので実家には連れて行ってあげた。でも、私は母の前まで連れていけとは言われてない。だからそのあとは雪乃ちゃんに委ねる事にした。

そんな事よりもジン君との邂逅はまさに僥倖きやうじやうだった。

雪乃ちゃんが心を許している唯一人の男性。彼は無自覚だけど、あの時の雪乃ちゃんには、彼がヒーローに見えたに違いない。よく雪乃ちゃんとふたりでジン君を取り合ったね。懐かしいなあ。

本当は彼女さん抜きでふたりで話をしたかったけど、同席させないときつと彼は来なかつただろう。それくらいは譲歩しないとね。私はお姉さんなんだし。

私はふたりを連れて行きつけの喫茶店に入った。この店は知る人ぞ知る店であり人は来ない。私達はテーブルに案内されて注文を済ませると、数分後に鼻孔をくすぐる薰り高いコーヒーが出て来た。

「まずは、ごめんね。ジン君。いろはちゃん」

「陽乃さん。大丈夫です。俺もいろはも怒ってはいませんよ。びつくりはしましたけどね」

いろはちゃんも首肯で応える。このふたりには私の仮面は通用し

ないみたいだ。

「ジン君。昔みたいに呼んで欲しいな」

「……………はるのちゃん」

私をちゃん付けで呼んでくれるのも君しかいなかったよ。今でもないけれど。

ジン君の顔が少しだけ赤い。ジン君は年上が好きなんだよね。お姉さんは知っている。

「おふたりはいつ知り合っただんですかあ？」

「幼稚園の頃だよ。いろはちゃん」

「おおく。幼馴染なんですね。って事はユキせんぱいとも…」

「そうだ。ユキとも幼馴染だ。でも9年間会えてなかったから、今では友達って関係が正しいぞ」

いろはちゃんは気付いてるみたい。雪乃ちゃんにとつてジン君は特別だ。恋愛なのか親愛なのか、それは重要じゃない。

「ところで、何故俺達はこのに連れてこられたんですか？——まあ大体察しはつきますけど…ユキの事でしょう？」

「そうだよ。ジン君といろはちゃんは雪乃ちゃんと一緒にいて、どう感じるかな？」

いろはちゃんが人差し指を唇にちよんと当てて「んー」としている。可愛い。持って帰りたい。ジン君にお願ひしてみようかな…。

「正直、わたしはユキせんぱいの事はあんまり知らないです。わたしが見えてないだけかもしれないんですが」

後輩からの視線だとかかなり分かりにくいと思うからそれは想定内だね。そもそもいろはちゃんは女の敵が多そうだ。

ジン君は腕を組んで目を瞑っている。

「ここ最近の印象で言うと。自分の意見をあまり言っていない様な気がするな。奉仕部の依頼も誰かの意見に乗っかってる気がする」

——そう、それが雪乃ちゃんの問題なんだよね。それともうひとつ。

「…雪乃ちゃんはね、私を目標にしてるんだよ…。姉としてはうれしいんだけどさ、私の真似ばかりしてもだめなんだよね。自分でやり

たい事見つけて、決めて。自分で考えて、悩んで——私は雪乃ちゃんに私みたいになってほしくない」

「…はるのちゃん。だからって嫌われるのは違うんじゃない？」

「はるひと。女心はそんなに簡単じゃないです。——っ」

いろはちゃん。凶星だよ。凶星なの。だからそこから先は言葉にしないでほしいかな。

「はるひとは女心をもっと勉強してくださいねっ」

「……………善処します」

いろはちゃんがちらりとこちらを見てウインクした。思つたよりすごい子だった。そう。いろはちゃんが言おうとした事はおそらく正解だ。

私は雪乃ちゃんが羨ましい。

何ヶ浜ちゃんみたいな素敵な女友達がいる。比企谷君みたいなありのままを見てくれる友達がいる。いろはちゃんみたいな後輩がいる。

それだけじゃない。私にはない自由が雪乃ちゃんには与えられている。私は父の名代で雪ノ下家の娘を演じる必要があった。つまらない会話で楽しそうに見せたり。男性が喜びそうな笑顔だつて…。

でも雪乃ちゃんは大切な唯一人の妹。幸せになってほしい、私みたいに引かれたレールの上を歩く人生は送ってほしくない。

永遠に続くジレンマ。正直苦しい。

「ジン君。いろはちゃん。お願いがあるの」

ふたりは私の目をじつと見つめる。いろはちゃん持つて帰っていい？つてジン君に言ってみたいけどそれは後回し。

「雪乃ちゃんの成長の為に協力して欲しいの」

「……………それは構いませんが、具体的に何をすれば——」

「ううん。何もしないでほしい。雪乃ちゃんが助けてって言うまであの子に委ねて欲しいの」

「なんとなくわかってきました。依存させない為ですね？」

「ああ。たしかにユキせんぱいは妙にはるひとに近いですね。わたしが彼女って事は知ってると思うんですが、わたしもユキせんぱいの

事好きですし、あまり気にしてなかったですね。ぶっちゃけると、ユキせんぱいだったらはるひとに抱き着いても構わないですねえ」

いろはちゃん？割と問題発言してるけど自覚あるのかな？自覚ある方がタチ悪いけど！

「そういう事だね。今までは母が指示出して、それに従ってた。でもそんなの『人生イージーモード』過ぎるでしょ？実際わたしはそうだったし、簡単すぎるからつまらなかった」

簡単って事は誰でもできるって事。やっぱり人生はハードモードじゃないと楽しくない。雪乃ちゃんはすつとばしてエキスパートモード経験しちゃったけど。

「人生イージーモードか…」

「ジン君？ どうかしたの？」

顔に陰りが見える。何か気に障る事言っちゃったのだろうか…。

「はるのちゃん。俺の家族の事なんだけど——」

ジン君のお母さまの事を今知った。確かにジン君のスペックだけを見ると有象無象からは人生が楽そうに見える。実際は真逆で、困難^{ハード}どころか地獄^{ヘル}だ。

そんな風に見られたらそれは腹も立つね。うん。納得。

でもひとつわかった事がある。

「ジン君。あえて言うね。——君さ。マザコンの自覚ないでしょ？」

第30話

「…マザコン。ですか」

何を言われているのかわからなくて固まってしまった。母はすでに亡くなっているのにコンプレックスが存在するのだろうか。

はるのちゃんはそのまま続ける。

「自覚ないみたいだね。世間一般でいうマザーコンプレックスとは別物だよ。そしてひどく歪だ」

「はるひとにそんなトコあるようにはみえませんが…」

いろはがそう言ってくれるのは嬉しい。しかし、はるのちゃんの言うマザコンの意味がわからない。

彼女は「あえて」と言った。つまりそれほど深刻な状況ではないのだろう。

「ジン君はさ。今の状況が恵まれてるって考えてるよね？」

「それは…そうですね」

「小学生の頃から家にご両親がいなくてひとりな事が当たり前だと？子供が親に甘えれないって事は異常じゃなくてなんなの？」

「はるひと。お母さんに甘えた記憶…ありますか？」

「…あんまりないかな」

親に甘える事とはどういう事だろう。俺にはそれが解らない。

真里さんの様に住ませてくれることだろうか。それとも小遣いをくれる事だろうか。

桃花さんの様に病気の時に助けてくれる事だろうか…。

「はるのちゃんは、俺が愛情に飢えてるって言いたいのかな？」

「ちよつと違うね。愛情を欲してるんじゃない。涸れてる事が普通になつちやつてる。それは危険だよ」

ひとまずは今どうこうできる事じゃないみたいだ。はるのちゃんは俺達をいろはの家まで送ってくれた後「雪乃ちゃんの件、よろしく。それと、いろはちゃんと仲良くね」と言って、去って行った。

いろはの家に上がらせてもらう。巖さんは風呂に入っている様だ。

「はあ〜」と、間延びした声が聞こえて来る。桃花さんはまだ帰っていない、買い物にでも行っているのだろう。

いろはの部屋に通された俺は、適当な場所に腰を下ろした。

「わたし、なんとなくはるせんぱいの言ってる事が分かる気がします」
自分の事は他人の方が良くわかるものだ。それがいろはであればなおさらだろう。

いろはが予想外の言葉を口にした。

「わたしにもっと甘えて下さい」

「…甘えるって事がよくわからんのだが」

「じゃあ、わたしが甘えさせてあげるのもっともっと素直になつて下さいねっ」

「お、おお。お手柔らかに頼むわ」

俺達はいつも通り手を繋いで、なんでもないような会話をする。気付けばもう日が暮れていた。

ここ最近、いろはの家にいる事が多く感じる。ストーカーの件もまだ解決はしていないから問題はない。

しかし、こう。アレだ。俺が「お邪魔します」と言つて上がろうとすると「だめ。やり直し」と叱つてきて「ただいま」と言わせるのは勘弁してほしい。

玄関が開く音が聞こえた。桃花さんの声が聞こえる。ふたりでリビングに向かい、挨拶をする。

「春仁くん。どうしたんだ？何か悩み事でもあるのか？俺達でよければ聞かせてくれないか？」

巖さんが俺の表情見て話しかけて来た。そんなに分かり易い顔をしているのだろうか。

夕食の用意を済ませた桃花さんも巖さんの隣に座つてこちらを見ている。彼女も俺の相談に乗ってくれる様だ。

「…今日。昔の知人に会つて言われたんですが——」

はるのちゃんとのやりとりを話す。俺の今までの人生の事も。何もかも全て。隣で聞いているいろはも真剣そのものだ。彼氏とは言え結局俺と彼女は他人だ。それでもこんなに親身になつてくれるい

ろには頭が上がらない。

父を知らず、母の愛を認識していない。それは今は理解できていない。それ自体はいい。はたしてこれは問題なのだろうか。そこが解らない。

「春仁くん。 焦る必要などない。 ひとりで抱え込む事なんかないんだよ」

「私もそう思うわ。 いろはもいるんだし。 ふたりで乗り越えてみなさい」

乗り越える対象がよくわからないけど。いろはと一緒ならなんとかできそうではある。そんな気がする。ちなみに夕食を呼ばれた日は泊まらないといけないルールができていた。いつのまに！俺は聞いていない！

ルールができたのはついさっきだそうだ。

「……………うう…恥ずかしい」

耳まで赤い。俺に「甘えさせてあげます！」って言った時の顔は見る影もない。

団欒も終わり、ふたりでいろはの部屋に入る。いろはがベッドに座りとなりをぼんぽんと叩く。『来い』の合図だ。決して『おいで』とか『来て欲しい』ではない。

いろはの隣へ座ると彼女がそつと頭を撫でて来た。なんだか少し恥ずかしい。

「はるひと」

太腿あたりをぼんぽんとしている。実際はペしペしなのだが。今はどうでもいい。

素直に従って彼女の太腿に頭を乗せた。——良い香りがする。

彼女はしばらく俺の髪を撫でたり手櫛ですーつとしたりしてた。

「…っ」

「はるひと。 首弱いんだね」

クスクスと笑う。俺は首と言うか、うなじがかなり弱い。誰かに触られると体が少し強張る。

「…っちよ」

「うふふ♪」

うなじを指でなぞったり、髪を撫でる時にわざとうなじまで手を滑らせたり。顔が熱くなるのを感じるが、恋人は楽しそうだ。

いじくられて悶える。くすぐったくていろいろはお腹に顔を埋めてぶるぶるしてしまう。

「リラックスしてくださいね〜」

「…じゃあ首触るのやめろ」

はい♪と可愛い返事をして、俺の耳をぐにぐにと揉みだした。

「ん〜。手前は綺麗ですけど、奥はそんなにですね」

「――！」

耳の穴をカサカサと柔らかい綿棒で撫でられる。顔の熱がすごい事になっている。

「――！」

「じつとしてくださいね〜」

鼓膜に傷いっちゃいますよーと言われるが、無理なもんは無理だ。

いつしか俺は身体をだらしとして、いろはに体重を預けていた。アレだ。身体に力が入らない。

「――♪」

「――！」

反対の耳もカサカサと掃除してもらった俺はぐっだりしていた。

羞恥心にまみれているからという事もあるが、何より動くのが嫌になるほど心地よかった。

「…ふーっ」

「うあああ――」

俺の変な声を聴いた恋人はうふふと笑う。当の俺は恥ずかしくてまたもやいろはのお腹に顔を埋める。そこしか顔を隠せないのだ。

「耳も弱いんですね〜」

「ぐうう…」

恋人からの耳掃除は終わった。終わったのだが。なんだろう、彼女から離れたくない。これが甘えるという事なんだろうか。

「…はるひと――んっ」

キスをされた。触れ合ったり、啄ついばんだり。優しく、甘い口づけだった。

いろはの顔は紅潮して、いつもよりも色香を感じる。

「大好きです」

もう一度キスをしてベッドに潜り込み、眠りについた。普段は俺が抱きしめているのだが、今日はいろはが俺を抱きしめてくれた。

谷間に顔を埋めて目を瞑ると、肌の温かさというはの香りに包まれる。髪を撫でる手からは慈愛を感じる。一定のリズムで鳴る子守歌鼓動のお陰で俺はすぐに眠ってしまった。



はるせんぱいが言っていたマザコンの意味。最初は全く分からなかった。

歪と言われてやっと気付いた。彼は両親からの愛情を体験していない。あの短い会話でそれがわかるはるせんぱい、恐ろしい人。

『いろはちゃんと仲良くね』

この言葉はきつとわたしに対しても発せられている。

羞恥心にまみれた時だけ出てくる子犬みたいな彼、あれはきつと本性だ。甘えたいけどやり方を知らない。そんな気がする。ソースは女の勘。

だからわたしは甘えさせた。彼は見た事がない顔をして、しらない反応をして。いつもと違う顔で眠っている。わたしより年上で、わたしより大人な雰囲気出してるのに、今は子供みたいに思える。

「カッコいいのも好きだけど、可愛いのもいいですね」

こう。ぐつとくる。ギャップ萌えてやつだ。いろんなギャップを見て来たけど、ここまで真逆になるのは初めてだ。

「わたしも甘えたいけど…」

どっちも嬉しい事に変わりはない。私を包み込んでくれる、私にだけ見せてくれる。

「甘えてもらうのも悪くない…」

これダメな奴だ。はるひとには天然で人を依存させるフェロモンでも出てるのではないだろうかと妄想してしまう。実際に、ユキせんぱいは既に依存してるだろうし、わたしも依存してる。

「おやすみなさい。はるひと」

恋人の寝息を肌を感じつつ、意識を手放した。

あの日から数日が経過した。わたし達はふたりで比企谷宅を訪問している。

——ひゃんひゃん！

少しづつではあるけど、はるひとが自分から甘える様になってきた。ふたりっきりの時限定だけど。それでも前進はしてる停滞ではない。

比企谷せんぱいの誕生日があと数日な事もあり、小町ちゃんに会いに来たのだが。

——ひゃん！ひゃん！

比企谷せんぱいは結衣せんぱいの家族に呼ばれて舞鶴に海水浴に行ってるらしい。——何それ羨ましいんですけど。わたしも海行きたい！

あとではるひとにおねだりする。絶対する。あ、水着を買いに行かないきや。

「こんにちはー！いろはさん！おかえりハルにい！」

「…なんでサブレがいるんだ？」

そう、さつきから茶色い可愛毛玉^サが走り回っている。はるひとの肩にはカマクラちゃん乗ってるし…前にユキせんぱいに見せてもらった写真を思い出して少し笑ってしまった。

「結衣さんが家族で旅行に行くから預かって欲しいってウチに連れて来たんですけど。流れでお兄ちゃんも行くことになっちゃってですねー。…アハハ」

家族ぐるみで誘拐するんですか。わたしもそれ今度使いますね。幸いわたしの両親は、はるひとの事を息子の様に扱ってるので障害ら

しい障害はありません。

温泉で混浴…とか…？——はわわわ。

——ひゃんひゃん！ ちよつとサブレちゃん？うひゃあ！足を舐めちやダメえ！——つこの〜！

「じゃあ旅行中は俺がこつちに帰つて来ようか。サブレの散歩もあるだろうし。小町も受験勉強しないとな」

小町ちゃんは総武高校を受験するみたい。それはそうだ。大好きなお兄ちゃん達がいるんだし、当然だろう。

「お兄ちゃんの誕生日は肝心のお兄ちゃんが旅行中なんですよねー。プレゼントはどうするの？」

用意しない理由はない。わたしもはるひとも何にしようかと話してた所だ。当日でなければダメな理由もない。気持ちなのだからいつでもいいと思う。

「俺たちは用意するぞ。小町はもう用意してるんだろ？帰つて来てから渡してやろうぜ」

賛成賛成！ユキせんぱいも呼んでまた楽しくぱーりーしましょう。うえーい。また木材せんぱいの邪魔が入らなければいいのですが。

「いろはさん？そんなにサブレ気に入ったんですか？」
「かわいい〜！よしよし。いいこだね〜♪」

サブレをなでくりまわしてた。可愛いは正義。えっへん。

小町ちゃんも比企谷せんぱいがいないから寂しかったみたい。わたしもここに泊めてもらおうかな。最近、はるひがいたら基本なんでもオツケーなお父さんとお母さんが少し心配。

「それじゃ。水着買いにいきましょうー！」

「おう、じゃあ小町。また明日な」

小町ちゃんが元氣よく送りだしてくれた。

マグザムの後部座席に跨る。

「しゅっぱーっ！」

「かしこまりました」

目指すは渋谷！店は適当でいい。なんかいいやつあるでしょ。

途中、休憩をはさみつつお店を見て回る。

「どんな水着がいいですかあ？」

「…ビキニだ」

大胆なお好みですか。そうですか。わたしのスタイルを侮つてましたね？実はわたし結衣せんぱいほどはないですけど、三浦せんぱいよりはおつきかつたりするんです。

「わっかりましたー」

前は黄色だったから別の色にしたい。白や黒はわたしのイメージに合わないから除外ですね。

街を歩くこと数分。ショーウィンドウに明るい緑のビキニが飾つてあるのが眼に入った。さつそく彼の手を引いて、店内に入る。

「表のやつ試着してみたいです」

はるひとの顔がすごく赤かった。きつと彼もあれを着て見てほしいと願ったに違いない。思ったのではなく、願った。これ重要。

体のラインがかなり出るからパレオも用意してもらった。腰あたりは白色で裾の方がオレンジになっていた。水着の緑色と相まって、トロピカルな雰囲気がある。

さつそく試着室に入り手早く着替える。

「……はるひと」

こんな格好で人前に出るのはやっぱり恥ずかしい。だから試着室の前まで来てもらった。

「ど…どう…？」

——絶句。はるひとが固まっていた。それだけでわたしに見惚れている事がわかってしまう。『似合ってる』それ以上の言葉を探しているのだ。わたしはそれだけで嬉しくなってしまう。

「あー…似合ってる…じょ」

ふふっ。また囁んでる♪

他にもいろいろ試着してみたけど、この水着ほどの反応はなかった。

水着を入手したわたしはそれを着るための計画を立てる。

「場所は太平洋側だったらかなりあるし、行き当たりばったりでも問題なさそうだな」

楽しみで仕方ない。いっぱい彼に甘えて。いっぱい彼に独り占めしてもらいます。

始めて本気で好きになった人と行く初めての旅行まであと数日。

第31話

「海だー!」

青い空。白い雲。

そして可愛いわたし。

「海だー!」

「なんで2回言った?」

「ほら!はるひとも!う——んむっ!」

「やめなさい。ほとんど人がいないからって大声出すな」

口を手で塞がれた。んーんーもごもご。

わたし達は、勝浦市の守谷海水浴場にやって来た。7月は人が沢山きたみたいだけど、8月になるとシーズンを過ぎるのか人があまり来ないみたい。

プライベートビーチっぽい。あくまで『っぽい』のだ。

さて、今の時間は朝の7時。手早く着替えて海を満喫しましょう。

「じゃあここで待ってて下さいね」

更衣室に入って、先日買った緑のビキニと白いパレオに着替える。更衣室の中には全身が映る大きな鏡があった。つついポーズを取ってしまう。

わたしは彼と再会するまで、様々な「わたし」を演じて来た。男がわたしの味方で、女がわたしの敵になった。味方しておくためには餌が必要で、色々なわたしを餌にして生きて来た。

既に本物の自分がどんなのか、わからなくなっている。

わたしも、演技をするのもうやめないと。

「おまたせしましたー」

「……やっぱり。似合ってるな——綺麗だ。…すぐく」

彼ははにかんで口にする。

さつきまで取っていたポーズで扇情的に魅せたかったのに、それを忘れるほどまっすぐな言葉だった。

「はう……ありがとうございます……ごいませす」

彼の手をきゅっと握る。すると彼が肩に持っていたパーカーを掛

けてくれた。そんなさりげない優しさがとても嬉しい。

そう、わたしは背中には日焼け対策をしていなかったのだ。オイルを塗ってほしいという邪な考えもあったのは否めないけど、純粹に嬉しい。

ありがとう以上にありがとうを伝える言葉はなんだろうか。わたしは知らない。

知ってたらとつくに使ってる。

「行くか！」

「はい！」

今やりたい事を全部やろう。その気持ちはまぎれもなく私の本物だ。

「ひゃああーつめたーいー！——えいつ！」

「うおっ！——にやろう！」

ぱしゃぱしゃと海水をかけたらざっぱあんって数倍の仕返しをされた。

おのれはるひと！勝負です！えいつえいつ！

「えっあつ。つちよ。は、はるひと？　なななんでお姫様だっこなんですか？　いやあ！だめ！　投げないで！　いやあああ！」

海に投げ飛ばされました。なんとも言えないふわつとしか感じがクセになりそう。

わたしを投げた本人は、お腹かかえて笑ってた。わたしであそぶのはダメですう！

「もう！いきなり投げるなんてえ！　うひゃあ！　だめっ！　やだやだあ！　きやああああ!!」

——ざっぱーん。

これ駄目ですね。お姫様だっこで嬉しい恥ずかしい。からの空中浮遊コンボ。超やばいです。たのしい。

人差し指を立てて目の前に突き出す。反対の手は腰に添えて。《めっ！》としたらもっかい投げられました。

——うひゃあああ！　あははははは！

お昼は海の家で食べる事にしました。味はまあまあですけど、味を

求めるのは無粋だと思ってます。

「あーん♪」

「……」

「手が疲れるので、早く食べてくれませんか？あれですか？手料理しか受け付けないって事ですか？だったらムリに食べなくてもいいですよ。学校始まってからはるひとの教室に押しかけて手作り弁当をあーんするだけです。あ！それを期待してたんですね。なんだあ♪早く言ってくれば良かったのに。腕によりをかけてはるひとのお弁当作りますね！嫌いなおかずありませんよね？」

彼が顔を真っ赤にして食べてくれた。わたしにもあーんしてくれたので教室に押しかけるのはやめておく事にします。

「ごちそうさまでした」

「まいどー！」

海の家のおじさんが超元気だった。

お昼を過ぎたあたりから利用客が増えて来た。さつきみたいに投げられるのは危ないかもしれない。ちよつぴり残念。

「はるひと。オイル塗って下さい」

「……お前は俺を殺す気か」

「え？まだ死んでなかったんですか？てつきり朝の時点で脳は殺せると思っていました」

「そつちじゃねえ！ まあ。悩殺されたのはあつてるけどな……ほら。うつ伏せになれ」

きもちいー。時折変な声でちやうけど。

「んふう〜」

「どんな声だよ。鼻息荒すぎだろ」

「わたしは可愛い。可愛いは正義。正義だからなんでもアリ」

「あーはいいい。可愛いねー。ほれ、仰向けになれ」

しつかり塗ってくれたのはいいんだけど。わたしの顔見ながら塗るのはやめてほしかった。

だって、顔が赤いのばれるじゃないですかー。手で隠しても結局ばれるじゃないですかー。

つまり、横向くしかできなかつた。

火照った身体を冷ます為に沖の方まで行ってみた。

わたしは後ろからはるひとの首に手をまわしてしがみついていただけ。

超らくちん。

「結構深いな」

「うわぁーすごいすごいー」

魚というか海底が見える。千葉県と言ってもここは太平洋。

海面から見える海底はどこか幻想的だ。

「おお…これはすごいな——つちよつとまずいかもな。雨が降るかもしれない。浜にもどるぞ」

はるひとの視線の先に積乱雲が見えた。ずっと振りはしないだろうが、安全ではない。

わたし達は浜に戻る事にした。

「わー。振ってきましたね」

豪雨と言って差し支えない雨だ。空は雲に覆われ時折雷の光が見える。もう海で遊んでいる人はいなかった。

雨はいいけど、雷はまずい。わたしは雷の音が怖い。

はるひとがスマホで天気を確認して、怯えたわたしの顔を見ている。う。

「少し、雨宿りしていこうか」



近くのホテルに入った俺達は、雨が止むのを待っていた。

天気予報にはゲリラ豪雨とあったのですぐ止むだろう。というか止んで欲しい。

俺は先に温かいシャワーで塩を落とした。今はいろはが浴室にいる。

密室でふたりつきり。意識してないといえは嘘になる。意識しない様にするのが精いっぱいだ。

備え付けのソファ―に腰を下ろし、コーヒーを飲んで煩惱を押さえつける。

「もどりましたー」

「おかえり」

いろはも意識しているのだろう。紅潮した顔から期待と不安が見え隠れしている。

「いろは。大丈夫か？」

「…雷は苦手です」

隣にちよんと座る彼女の腰を優しく抱き寄せる。肩に重さを感じた。

きつと、今の空気は呼吸するだけで虫歯になるのではないかと思える程甘いだろう。

指を絡めて、手を握る。軽く力を入れると、同じ様に返して来るいろは。

会話はない。クスクスと笑って甘えてくるいろは。飲んでたコーヒ―はブラックだったが、なんとなく甘く感じた。

「こんな楽しい旅行初めてです」

「…それは俺もだ。っていうか旅行が初めてだ」

「…はるひと——ん…」

いろはも待つていたのだろうか。そつと唇を寄せてキスをする。

触れ合うだけなのにとっても熱を感じる。二つの心臓が奏でるリズムは次第に大きく。速くなっていく。

恍惚な顔をする彼女は可憐で、とても綺麗だ。

「……いいですよ」

愛する彼女をお姫様だつこでベッドまで運び、そつと抱きしめる。見つめあって、キスをして。肌を重ねて…いろはの純潔を奪う。

——愛してる。

雨は、まだ止みそうにない。

苦痛と快楽に振り回される扇情的ないろは。日焼けの跡が艶めかしい。彼女のかわいらしい嬌声が部屋に響く。

何度も交わり、愛を囁く。何度も、何度も彼女の名前を呼ぶ。

——はるひとお！ 好きい！ 大好きいつ！
たまらなく愛おしい。

俺達は一線を超え。いつのまにか抱き合いながら眠りについていた。

雨は、一層激しくなっていた。

目覚めたのはどちらが先だろうか。外からは雨音は聞こえなくなっていた。

なにやら柔らかい。もぞもぞするといろはが可愛らしい声を出した。

「おはよう。はるひと」

「んあ…おはよう。いろは——んむ…」

おはようのキス。ちゅっちゅと触れ合わせる優しいキスだった。

いろはが俺の頭を抱きながら言う

「お風呂入りませんか？」

一緒に。と言わないのはそれが当然という事だろう。もう一度、今度は俺からキスをする。

ひよこひよこ歩くいろはを抱き抱えて、浴室に向かった。

「はあく。お風呂が気持ちいい…。——そういえば雨、止みましたね」
「そうだな。ってか今何時だ？」

いろはを股座に座らせ、後ろから腰に手を回している。シャンプーの香りがするが、鼻腔をくすぐるいろはの香りではない。少し残念だ。

「何時でもいいじゃないですか。わたし今とても幸せなんです。——あ…んっ…」

言葉が嬉しくて、後ろからきゅっつと抱きしめると余韻が残ってるのだろうか、甘い声を出すいろは。

そのままもう1回致したのは言うまでもない。

身支度を整えてホテルを出た俺達はいろはの提案もあって、もう一

度海に向かった。

空はすっかり晴れ渡り、星がうつすら輝いていた。波の音がなんともロマンチックだ。

「次はどこに行きますか？」

「夏休みももう終わるからな…冬には温泉とか行きたいな。スキーでもいいけど」

秋は色々と学校行事が控えているから遠出は難しいだろう。しかもバイクだと行動がしづらい時が多い。やはり普通免許が欲しくなる。

「時間を作ってまたデートに行こう。行きたい場所は早めにな」

「はあ〜い♪」

セルを回して火を入れる、後ろにはヘルメットをかぶったいろは。朝と夜とで雰囲気が違うのは一歩大人に近づいたからだろう。

大人と子供の区別はなんだろうか。

——例えば労働。

働く事なら俺でもできるし、俺はまだ子供だ。その自覚はある。レング詰みの男の話で出て来たBは家庭を支えていた。

誰かの為に働く事ができる事が大人なのだろうか。

身近な男性と言えば、思い当たるのはいろはの父である巖さんだが、あの人は強面なだけで、実はお茶目だ。俺もたまに友達感覚で話してしまう。

では女性はどうかだろう、真里さんが一番に思いつくが、最近の仕事の事情もあってすれ違いが続いている。となると、いろはの母である桃花さんにピントが合うのだが、あの人もどこかいろはと同じ様な顔で笑う。

労働できる事が大人の証明ではない。という事にしておこう。今の俺で答えが出ないのだから今はこれでいい。多分。

——恋愛という観点ではどうかだろうか。

俺の父が真っ先に出てくるのは仕方ない事だ。俺が産まれる前に母を捨てた父。どんな気持ちで母と結婚して、どんな気持ちで浮気をしたのだろうか。——分かりたくもないが…。気持ちが分からなけ

れば反面教師にすらできない。

——いけないいけない。考え出すと哲学っぽくなってしまふのは俺の悪いクセだ。ケースバイケースで流される事無く、自分で選んでいこう。

「それじゃ、帰ろうか」

「はぁーい」

あれから数日が過ぎた。一色家と下宿先を往復して、サブレの散歩をする事が日課になってしまっている。呼んでいるのがいろはなら断わる事も簡単なのだが、巖さんが俺を呼ぶ事が多い。

「春仁くん。おかえり」

「…ただいま」

少しどころかかなり気が早い巖さん。いろはと結婚——ではないな。単純に俺を気に入ってくれたのだ。

プロポーズもまだしてないのだから、それっぽく扱われるのは気恥ずかしい。

夏休みも残り2週間を切った。学校が始まれば昨年のごとく文化祭が待っている。

将来の事、家族の事。なにより彼女の事。考えないといけない——いや、考えたい事が増えて来た。

——人生イージーモード。

はるのちゃんが言っていた言葉を思い出す。

そういえば、俺も大岡君に言っていたな。あの時はらしくなかった。簡単か難しいか——いや、そうじゃないな。はるのちゃんはずまらないと言っていた。だったら俺は面白い人生にしたい。

俺はたしかに一般とは違う生き方を強いられてきた。でも今は違う。いつか胸を張って言える様になりたい。

『人生フアニーモード』と。

第32話

「おはようー!」

「ちーっす!」

約1ヶ月振りに制服に袖を通して通学路を歩く。

朝の挨拶は1日を始めるためには欠かせない儀式だ。気持ちの良い1日は、気持ちの良い挨拶から始まる。ソースは元バイト先の店長。

今日も1日よろしく願いします!から始まり、お疲れ様でした!で終わる。実に気持ちが良い。次もがんばろうと思える。

目の前の彼らを見てると挨拶をしている筈なのだが、それではない様に思える。おはようなのに違う。『ああ、こんな奴も居たっけ。休みの間何してたか知らんけど友達面して声かけて来るのやめてくれない?』が圧縮されて「ちーっす!」になっている。

「久しぶり!」

「元氣してた?」

後ろから女子の声が聴こえた。明るい声だが内容には闇を感じる。

お前、久しぶりって。会ってたんじゃないのかよ。

振り返らなくてもわかる。少しトーンの低い「元氣してた?」には『は?あんた休みの間に連絡一切なかったくせに友達のもりなの?でも感じ悪くしちゃったら気まずくなっちゃうから何か返事しないと』が圧縮されている。多分。

圧縮言語で会話できる様になるのも時間の問題だ。

3分間しか活動できないヒーローの『ヘアツ!』が翻訳なしで通じる様に会話が成立して、『イーッ!』と言うだけで統率が取れる集団の様

様に授業がつつがなく進行する。

なにそれこわい。
救いような無い思考を巡らせていると、何か背中からどんつとぶつかってきた。

「おはよう。はるひと」

「おはよう。いろは」

今日も1日ががんばれる！——気がした。

下駄箱でいろはと別れてF組に向かう。すでに何人か教室でわいわいと楽しそうだ。しかし、こっちは一味違った。

結衣を除く隼人達のグループは、ベーバー言ってる戸部が中心になつて会話に花を咲かせている。三浦さんも少し肌が焼けている。

まさしくギャルだ。オカンだけど。

彼らはいい。一味違うのはその周りだ。

やれどこ行つた、やれ何やった。聞かれてもいないのに答える様は滑稽だが楽しかったのなら話したいのは当然だろう。なのに聴いてる側は『や、興味ないから』『あっそーふーん』と顔に書いてある。

彼らは隠せてるつもりなのだろうか。

控えめに言つて気持ち悪い。嘘臭い友達付き合いだ。はつきり『羨ましい、そんな話ムカつくから聴きたくない』つて言えばいいのに。

お前ら、ここが千葉で良かったな。大阪だったらお前ら吊るされるぞ。

『○○に行つてん』と、会話のスタート切るものの『その話、オチるんか?』と、秒で返つてくる。実はオチるかはどうでもよくて、ただの様式美なのだが。

話を聞き終わった時の台詞が『お前が楽しかっただけやんけ!他におもろい事なかったんか!』だった。

聴いてて気持ち良かった。ごつつええ感じ。

「おう」

「おはよう。ハル君」

「おはよう。八幡。結衣」

ふたりが俺をじろじろ見て一言。

「くろい」

「主語を言え」

肌だよな?腹じゃないよね?つかお前らも圧縮言語使うのかよ。

でもまあ——たしかに綺麗に焼けている。いろはに塗ってもらったオイルのおかげで痒みもあまりない。

「ハル君は海行つたの?」

「ああ。勝浦まで行った」

「八幡達はどこに行ったんだ？」

「ふえ!?　　なな、なんで知ってるの?」

小町が全部白状しました。違うな。情報共有だ。

っていうか。サブレの散歩してたのほぼ俺なんだが…

「小町から聞いた」

「もう!そう言うハル君はいろはちゃんと行ったんでしょ!」

「そうだ。あと声がでかい」

「俺が拉致されたのは軽井沢だったぞ。涼しくて帰る気が失せたな」

それは任意同行って言うんじゃないかな?八幡くん。

「えへへえ。拉致しちやっただよ」

「軽井沢って事は山か。こっちは日帰りだったからそつちも魅力的だな」

「花火大会も行けたし——あ…」

結衣の顔が曇る。花火大会で何か嫌な事でもあったのだろうか。

花火は行きたかったけど、いろはが熱出して看病してた。

どうせ行くなら京都祇園の大文字焼きに行きたいなあ。

ふたりで行くとして、バイクで行くのは無茶だ。新幹線は旅費が高い。行くなら来年だな。

「結衣:気にすんな。もう終わった事だ」

「そうだけどき…」

「:…なんかあったのか?」

八幡と結衣が関係していて、言いづらい事。かつ、もう終わってる事。

予想はつく、でも口に出すのは駄目な気がした。なんとなくそう思った。

「花火の時にね、ゆきのんのお姉さんに会ってさ——」

結衣は八幡を轢いた車を見たのだ。八幡と俺の中ではとつくに話がついてる、きつとユキの中でも、もう終わった事になってる。

ユキは1年前に俺と事故の事を話してるせいで、話さなければという意識すらないだろう。

はるのちゃんが何を言ったか知らないが、見事にすれ違ってる。

「あたしは…やっぱり言ってる欲しかったな…。謝ってほしいとかじゃなくてさ、こう…信頼されてないのかなーって…不安になる。」

「あの時は情報規制がかかってたからな。それとも…結衣は裏切られたと思うか?」

「そんな事ない! あたしはゆきのんを信じてる!」

「なら、それでいいんじゃないか? その不安な気持ちは、ユキの事を信頼してる証拠だ」

結衣は得心がいったみたいでいつもの可憐な表情に戻った。八幡もほっとしていた。

ロングホームルームも終わり、3人で特別棟の4階にぼちぼち向かってっていると、スマホがピピピと鳴った。音から察するにメールだ。

おそらくいろはだろう。

「春仁のか。俺のかと思ってビビったわ」

「ピツキーにメール打つ人いるの?」

「いるよ! 戸塚とか小町とか! あと戸塚!」

八幡の自虐ネタは放置して差出人を確認する。メールを確認した俺はすぐさま走り出していた。八幡と結衣が俺を呼んだ気がするがそれは後でいい。

『はやく』

いろはからのメールにはそれだけが打たれていた。



「ねえ…いろはちゃん。そーゆーのもうやめたって何の事?」

——なんなのコイツ…やだ…怖い。

やはく来て——はるひと。

純潔を捧げた時に、演技はもうやめる事、ありのままにいる事を決めた。

猫などで声を引く事もやめた。隣のクラスのイケメン君には来

なくていいからって言っただけ切った切った来た。

でもこの男——ニタ男だけは引き下がってくれない。笑った顔がキモい。

「いろはちゃん。聞いてる？」

「……………」

今、わたしを助けてくれる人はいない。自分のモノにならない女には興味がない男と、わたしの敵である女しかいなかった。

はるひとは来てくれるだろうか。あの短文だけで通じるだろうか。

「聞いてんのか！」

「っひい!!」

怒鳴る程の事なのか疑問だ。

そもそも、なんでわたしがこんな目に遭わないといけないのか。

夏休み前だっただけで、ストーカーに尾行されて怖い思いして、はるひとが追っ払ってくれて、あれで終わったんじゃないの？

「びっくりしたあ。怒鳴らないですよ」

「お前がボクの事無視するからだろ！」

いやいや、キミの場合は無視される方にしか問題ないですよ。バカなの？

「はいはい。じゃあ聞くから。何の用？」

「ボクと一緒に買い物行ってくれるって約束破ったでしょ」

「は？」

そんな約束してないけど…：やんわりお断りしたの通じてないのかな？それとも自分の都合のいい言葉しか聞こえないのかな？

「わたし、行くなんて一言も言っただけ」

「嘘だ！いろはちゃんはボクと約束したんだ！一緒に水着を見に行くって！なのに……！」

あー。あの時ね。アホらしくなってきた。なんだか怯えてたのかバカみたい。

ニタ男には悪い事したかもしれない。でもここでわたしに迫る意味がわからない。

「わたし、彼氏いるんだけど…：キミと一緒に水着見に行く理由ないよ

ね」

教室のドアの前にはるひとが見えた。安心して顔が綻びそうになるけど、ぐつとこらえた。

彼に通じるかわからないけど、目で合図してみる。すると彼は音を殺してスマホを構えた。

——通じた。

ニタ男ははるひとが後ろにいる事に気づいていない。ここからは、ずっとわたしのターンだ。

「あのさ…ほんつと迷惑だから、付きまとうのやめてくれない？ なんだかキモいしストーカーみたい。別にキミとは友達でもないし、勝手にキミから声掛けてきてるだけだよ？ わたしに話しかけないでくれるかな？」

ちよつと言いすぎたかもしれないけど。これでわたしの学校生活が少しでもマシになるならそれでいい。

「ストーカーみたいって…」

「…あ！ 柘せんぱあい！」

潮時だ。なにより目の前にはるひとがいるのに、傍に居れないのは拷問と言っている。

ててと駆け寄って彼の腕にしがみつく。

「おお…すまん。いろは。待たせたな」

「彼女を待たせたら めっ！ ですよ？ おいしいケーキのお店に連れて行ってくれたら考えてあげますっ♪ ——あいつがストーカーかもしれない。話合わせて下さい」

ニタ男がストーカーという言葉に反応した。まさかとは思うけど、もしこいつがああストーカーなら…。

ダメだ。すごく怖い。何時間も同じ部屋にいる事に耐えれない。

これから、高校生活で初めての文化祭もある。なんでこういつも邪魔が入るのだろうか。

「はいはい。いくぞー」

「あつ！ まってくださいよー！」

はるひとがユキせんぱいにぼちぼちとメールを入れていた。

部活に遅れたからだろうか…だとしたらごめんなさい。

でも、わたしの予想は外れた。

「このまままっすぐ帰るぞ」

「わかりました。きてくれてありがとうございます。はるひと」

「どういたしまして」

奉仕部へは行かずにそのままわたしの家に向かった。

一番安全なのは、はるひとが傍にいる事。その次に、わたしの家だ。

「たすかりましたあ…」

「あいつヤバいな。目が血走ってなかったか？」

顔なんて見てられない。吐き気する。

「それよりも、あのニタ男と同じクラスって事がイヤです。どうすればいいんだろ…」

「ふむ…」

はるひとがいる事で安全にはなる。でもそれは学校の外だけの話。わたしがひとりでも大丈夫な様にするにはニタ男をどうにかしないといけない。

——でもどうやって？

教師に言う？平塚先生なら動いてくれるだろうか？でも周りに言いつらされるのは絶対に嫌だ。

はるひとに守ってもらうにしても、前みたいに体調崩してほしくない。

「いろは。文化祭の実行委員やらないか？俺もやるからさ。今のところ、解決は不可能だけど一旦解消はできる。手を考えよう」

「…わかりました」

悔しい。すごく悔しい。なんで毎回うまく行かないのだろう。

わたしが自分を守るために演技をして、それに勝手に群がって来ただけじゃないか。それなのに、わたしが振り向かないと男を掌で転がす悪女扱い——わけわかんない…。

——どうしてこうなってしまったんだろうか…ぐすつ。

「いろは…」

「えっ…あ…ひうう…」

いつのまにか、こんなにも弱くなってしまった。はるひとの胸に顔を埋めて彼のシャツを濡らす。

きつと、今のわたしが本物のわたし。とても弱くて、脆い。簡単に壊れてしまう。

大好きな彼の両手がわたしの背中と髪を撫でる。その優しさでわたしの堤防は決壊して、とめどなく感情があふれ出た。

弱いわたしでごめんなさい。絶対に強くなるから。貴方の隣に立てるように強くなるから。

今はもう少し甘えさせて下さい。

第33話

総武高校全体が文化祭に向けて慌ただしくなりつつある。

2年F組も漏れなく——と思いきや、わいわいきやあきやあと賑やかな他のクラスに比べて、少しどんよりした空気が流れていた。隼人達ですら苦笑いしている。

原因はクラス全員に漏れなく配布された紙の束にあった。

俺も恐る恐る目を通してみる。どうやら演劇のプロットの様だ。

『2年F組文化祭！』とでかでかと書いてある1枚目をぺらりとめくる。

『星の王子様』

監督・海老名姫菜

脚本・海老名姫菜

演出・海老名姫菜

——ぺらぺらぺら。

ぼく・柊春仁

王子・葉山隼人

へび・比企谷八幡

——ぺららららら。

原作は世界的に有名な小説だ。愛情とは、そして友情とはなんだろうか？と考えさせられる話だ。

他のきつね等のキャストも全て男子で埋められていた。

そつ閉じ。薔薇の香りがぶんぶんする。

「なんでキャストは男子だけなの？」

クラスの女子が監督に質問している。

不満というか、ただ単に疑問に思った様だ。

安心してくれ。きつとその疑問は、監督以外の全員が抱いている。

「え？なんで男子以外が出演するの？」

会話のベクトルが違った。男子だけでいい、ではない。男子だけがいい、だった。

三浦さんが頭を抱えている。がんばれオカン。まけるなオカン。ため息を吐くオカンを放置して監督が壇上に立つ。

「ぼく」役候補だった終君が文実になっちゃったんで、配役を変更し直します！」

そう、監督には悪いが、俺は自分の意思で実行委員に立候補した。勿論、自分の成長のためだ。

去年はクラスに貢献した。同じ事をやっても、きつと楽しいだけで終わってしまう。

「ごめんな。海老名さん」

「これは仕方ないしね。相模さんと一緒に実行委員頑張つてね！」

相模が立候補したのは意外だった、彼女はどんな事を考えて文実などというめんどくさい役割をやるうと思つたのだろうか。

キャストが監督の独断と偏見で決まっていく。

「そうだね。根本から見直した方がいいかもしれない。王子役とか」

「海老名さん。話し合おう。人前に立つと俺は死ぬ。——しかもへび役とか主要キャラじゃねえか」

抗議を受けた海老名監督が英断ともいえる采配を見せた。

ぼく・葉山隼人

王子・戸塚彩加

へび・比企谷八幡

「これでよし！」

「……俺が出る事は変わらないのか……」

おお君たち！息ピッタリだね。

しかも八幡へび役か。たしか最後の方に王子にかみつくシーンあつた様な気がする……。

「えつと——ボクでいいのかな……？」

主演が来た。知らないのもムリはない。戸塚君はずっとテニスに打ち込んでるんだ。

「あー、原作はなかなかいい話だぞ。持つてるから一度読んでみるか？」

「八幡！　ありがとう！」

嗚呼戸塚　ほんとに君は　男なの。

はるひとこころのはいく。

季語がない。やり直し。

うなだれる隼人と、ぐぬうおとよくわからない声を出す八幡を尻目に、相模に声をかけて文化祭実行員定例会議に向かう。

隼人。八幡。――強くいきろ。

会議室にはぽつぽつと人が来ていた。室内に入ると一斉に視線が向けられる。

そんな事はどうでもいい。適当な席についていろはにメールを送っておく。

「ねえ、柊君」

隣に座った相模が話しかけて来た。

「1年の時はそれほどじゃなかったのに、どうして立候補したの？」

「…そうだな。成長したいって思ったからだな」

「成長…かあ」

「――1年の時。覚えてるか？」

「うん。覚えてるよ。カレー堂でしょ？　アレ、評判すごかったんだから」

相模は嬉しそうに話す。良い思い出になってるみたいだ。

あの後に結衣と揉めて少しづつこの子も変わって来てる。

「うち、あの時何もできなかったから…今年は何かやりたいなって思ってる」

なんとなく雰囲気が変わってる気がする。勿論、いい方向に。

少し前の相模であれば、承認欲求を満たす為だけに『推薦』という形で参加していただろう。

何が彼女を変えたのだろうか。レンガ積み男の話だろうか。

カラカラと扉が開く音が聞こえて来た刹那、喧噪がぴたりと止んだ。

何事かと思つて入口を見る。

総武高校随一の才女がそこにいた。

1年生の間では『3人のお姉さま』というくくりがある。その一角が、今入って来た雪ノ下雪乃だ。

あとの二人は結衣と三浦さん。ソースは俺の彼女。

少しきよろきよろして俺と目が合う。ユキがすこしはにかんで俺の隣に腰掛けた。

「こんにちは。ハル」

「こんにちは。ユキ」

なんでもない挨拶。しかしどこかぎこちない。というか、彼女はどうして文実に来たのだろうか。少し気になってしまう。

なんというか、こう。らしくない。ユキはこんな役割は避けるはずだ。

はるのちゃんが何か言ったのだろうか…。『何もしないで』というはるのちゃんの言葉がよぎる。俺は彼女の言葉の真意をまだ図れない。

視界の隅に見慣れた亜麻色の髪が映る。

「こんにちはあ〜。 あーはるひと！ユキせんぱい！」

とてと駆け寄ってくるいろは。ユキの隣へ腰かけてすぐにユキに抱き着いた。

「ちよつといろはさん…その…近いのだけれど。 あと暑苦しいわ」

「ユキせんぱい。 わたしの事…きらい…ですか？」

あざとい！流石いろはあざとい。ユキが庇護欲を刺激されて頬を染めている。

あれには俺も陥落する自信ある。

「い、いえ…嫌いではないわ。 むしろ好きよ」

ゆりのん！結衣といろはでユキを取り合う未来が見える。

桃源郷ですね。わかります。

「ユキせんぱい。 ガチですか。 ちよつと引きます」

「えっ…」

「いろは。 ユキで遊ぶのはやめなさい」

そうこうしてるうちに平塚先生と厚木先生が入って来た。その後
に続いて生徒会の面々も会議室に入つて来る。

さすがにこの状況でびーちくぱーちくしゃべる奴はいない。生徒
会長らしき女子生徒に皆が注目する。

「えっと。生徒会長の城廻めぐりです。文化祭がんばろー！ おー
！」

「「「「……………」」」」

誰も反応しない。そりやあいきなり「おー！」とか言われても反応
に困るだろ。心が鍛えられてるのか天然なのか、城廻生徒会長の素
早い切り替えで定例会議が開始された。

生徒会役員が配布した議事録に目を通す。

「まずは実行委員長を決めましょう！ 2年生でやりたい人！」

——委員長。つまり責任者だ。

去年実感したが、文化祭は地域でも注目されるイベントだ。

ここで成功しても失敗しても成長できるのは間違いない。

——やってみるか。

「いろは。ユキ。相模。頼つてもいいか？」

「…仕方ないですね。頼られてあげます♪」

「ハルが人を頼るなんて…少し嬉しいわね」

「うちも大丈夫…」

3人とも、ありがとう。

俺はすつと手を挙げて意思表示する。目だけを動かして辺りを見
回すが、対抗馬はいなかった。

「おお！ いいねいいねー！じゃあ自己紹介お願いします！」

「2年F組。終春仁です。よろしくお願いします」

「ああく。君がひいらぎくんかあ。たしかカレー堂？のコックさん
だったよね？」

「まじか」とか「知ってる」とか。ざわざわと喧噪が起こる。

そんな有名なの？ただのカレーだよ？確かに結構、いや、かなり盛
り上がったけどさ。

「クラスの団結がすごかったんだよねー。本当のお店みたいだった

よ。カレーおいしかったし」

「…お粗末様でした」

1年前の事をほめられるとなんかこう…もによる。

もによもによしても何ら進展しない。城廻生徒会長から会議の進行を委ねられた俺は、各役割を決める為に、再度議事録に目を通す。

宣伝広報。

テレビやラジオ等のメディア関連に行く可能性がある。ポスター作成依頼それを貼らせてもらう為に店への交渉も必要だ。

有志統制。

部活動やバンドの参加者とのやり取りが見込まれる。外部の参加者もあるだろうがそれほど多くはなさそう。

物品管理。

机や椅子はもちろん。必要な機材の運搬も含まれる。男子多めの方がいいだろう。

保健衛生。

食品関連の申請の取り纏めが主な仕事になる。

会計監査。

金銭の管理。説明不要。

記録雑務。

まんま。雑務。もしかしたら一番仕事多いかもしれない。

この6部署は分担されているが、相互協力が不可欠だ。

では、相互協力する為に今できる事はなんだろうか。

ふう。と、一呼吸。

ちらりと平塚先生と目が合う。先生は微笑んで小さく頷いた。

「それでは、各分担を決めて行く。誰か補佐をお願いできないかな?」

「わたし、やります」

「軽くアンケート取ります。希望者は挙手で応えて下さい」

宣伝広報から記録雑務までずっと挙手してもらった。予想通りばらつきがある。有志統制におおよそ3分の1の手が上がった。

「…ばらつきがすごいですね」

「大丈夫だ」

問題ない。人を減らすのではなく、仕事を増やせばいいのだ。

「有志統制と宣伝広報を『営業部』。会計監査と記録雑務を『総務部』。物品管理と保険衛生を『管理部』に再編する」

「えっ…どういう事？」「えー有志だけでいいのにー」

ざわざわと文句が出る。当たり前だ。むしろ言いなりだと危ない。言うだけなら誰でも出来る。論理的に説明しないと誰も納得しないだろう。

「文化祭というプロジェクトを宣伝するには、有志参加の内容をある程度知っておく必要がある。察しの通り有志統制担当は間違はなく目立つ。だが、それはクラスだけの話だ。ここに宣伝という要素が加わると、学年、いや学校として注目を浴びる事になる。　　どうだ？面白そうじゃないか？」

「なんか…すぐくね？」

「うん…考えてたよりもスケールが大きいよね…」

「…確かに面白そう」

「祭の舞台を作るのが俺達の仕事だ。でも、舞台が無ければ役者は輝けない。——そんなのは祭じゃない。ただ賑やかなだけの何かだ。これでは成功とは言えない」

城廻会長。先生でさえも俺を凝視している。

文化祭実行委員とは何の為に存在するのか？その目的は何か？

その意識を統一しておきたい。

「では、俺たち実行委員にとつての成功とは何か。　それは、全生徒が、全力で輝ける舞台を用意する事だ」

全員が聴いている。さっきまで欠伸をしていた男子でさえ前のめりだ。

厚木先生が腕を組んでうんうんと頷いてる。平塚先生はすらりとした脚を組んで微笑を浮かべたまま目を瞑っていた。

「俺は、責任者として祭を成功させたい。皆はどうかかな？」

「俺らがいないとクラスの皆が頑張れないって事か…そんなの嫌だな」

「私やる！私も委員長に賛成！」

「俺も!」「私も!」

すつと手を少し挙げて場を鎮めた。俺は、一人ひとりと目線を合わせる。

実行委員は誰一人として目を逸らさなかった。

管理部と総務部の人員配置も終わり、各部署の長を決める為に立候補を募ったのだが「委員長が指名して下さい!」と要望が出た。

俺に指名されたらいい事でもあるのだろうか。まさしく謎である。

——ふいにそう考えたが、それは間違いだとすぐに気づけた。

俺が指名する事で、責任の所在が明確にできる。何より俺が背負うべき責任だ。

「はるひと。貴方はすごい人って事、自覚して下さいね」

いろはが言う。指名、つまり期待だと。彼、彼女らはそれを望んでいるのだ。

「総務部長はひとまず俺が兼任する。営業部長に相模南さん。管理部長に雪ノ下雪乃さんを指名する」

ふたりはにこりと微笑んで首を縦に振って賛同した。

「ふたりの就任に賛成の人は、拍手で応えてくれ」
会議室が一気に騒がしくなったのは言うまでもない。

——俺がふたりを指名した事にはちゃんと意味がある。

相模は何かをやりたいたと言った。つまり健全な承認欲求だ。

活躍できなくても構わない。でも、流されずに自分の意志で行動して、成し遂げたいのだ。

ユキは俺に頼られる事を嬉しいと言った。これは俺と対等でありたいという意味表示だ。

文実に参加した理由はわからない。でも、そんな些末な事はもうどうでもいい。

肝心なのは、ユキが俺にはつきりと『自分の意志』を伝えられる場を設けた。という事だ。

実行委員定例会議開始から、およそ2時間が経過していた。開始直後のよそよそしさは欠片もなく、活発な議論が交わされている。

その原因は30分ほど前に俺が言った言葉にある。

『やりたい事があるから先にスローガンを決めておきたい』

本格的に活動するとなると、全員が揃うのはほとんどないだろう。できる事なら、今この場で決めておきたい。

「はるひと。やりたい事ってなんですか？」

「あ、それ。うちも知りたい！」

「：頼られる側としては知っておきたいのだけれど」

それを聞きつけた文実メンバーが一斉にこちらを向く。

『知りたい！』

なんだなんだお前ら！そんな所で団結するんじゃないやねえ。

サプライズでやりたかったのだが、聴かれてしまったては仕方がない。諦めて白状する事にした。

「あー：そのだな。文実メンバー専用のTシャツを作りたいんだ」

——しばしの沈黙の後。俺の案は満場一致で可決となった。

「それにスローガン入れたいって事かしら」

「すごいすごい！文実専用ってなんかかっこいいです！」

「うちもそう思う！ 柘君のあの演説良かったし、役者？舞台？輝くとか。そんな感じだとピッタリなんだけどなあ」

「相模、ナイス！それだ！」

音を立てて立ち上がり、ホワイトボードに力強く書く。

Be^光 the^に Light^な !

『おぉー！ かっこいい!!』

「今年のスローガンはこれでいこう。相模！ナイスだ！」

「えっ…うち？…恥ずかしいな」

「相模せんぱい。悔しいけど、これはぴったりです」

「よし！時間も時間だし。今日はここまでにしよう。 っと、帰る前

に、この紙に部署とフルネームで名前を書いてくれ。それでは、起立！」

ガタタツと実行委員が立ち上がる。始まりの挨拶はなかったけど。終わりはこの挨拶で締めるべきだ。

「お疲れ様でした！」

『お疲れ様でした!!』

文化祭まで、あと1カ月。

第34話

私は集団に馴染めない。

国際教養科のクラスメイトはメイド喫茶をやるみたいなのだけれど。私のメイド姿を想像して恍惚な表情をする学友達にはなんとも言えない気分になってしまった。

実行委員に立候補したのも彼女達を傷つけない気持ちがあつたから。

それ以外にもあるのだけれど…。

——いえ、この気持ちは押し殺さなければ…。友達の幸せを願う事は素晴らしい事のはずなのに、どうして胸が苦しいのだろうか。

「それでは。定例ミーティングを始めます」

『よろしくお願ひします!!』

ハルが委員長に就任してから1週間が経過した。

私は管理部長という役職に指名された。彼は私に、何を求めるのだろうか。

だってそうでしょう？指名するという事は『責任は俺が取るから』という事。

私が自分の責任から逃げる事などないのに…。

「各部署の担当者は進捗を報告してくれ」

営業部、総務部、管理部の順で報告をして行く。

私が預かる管理部はまだ本格的な仕事はない。忙しくなるのは来週あたりからでしょう。逆に相模さんを長とする営業部はすごい一言。

少し張り切り過ぎだとおもっただけけれど。大丈夫だろうか。

それとは別に、気になる事がある。

「ハル。貴方、ちゃんと休んでいるの？毎日最終まで残っているみたいだけど」

「…流石にユキの目はまかせないな」

ほとんどの人が気付いてない。でも、彼がごくごく稀に船を漕いでいるのを私は知っている。

貴方は体調を崩したら粉々になるのだから、いい加減自重してほしい。心配する方の身にもなってほしいものだ。

「あら。「頼っていいか?」と言ったのは貴方なのだけれど、私達文実メンバーに対する挑戦状かしら?」

少し声が大きかったかもしれない。他の子達も集まってきてしまった。

そんなに大きな声で話してるつもりはないのだけれど。

「ありがとう。ユキ。まだ大丈夫だ。無茶はしないから、今は無理する事を許してくれ」

「営業部の外回りについて行って、帰って来たと思えば有志担当の手伝いもして、さらに雑務もこなす。これが無茶でなくて何だと言うの?」

「…ユキ。俺は責任者なんだ。だからちゃんと見る事は、俺の仕事でもある」

「……わかったわ」

ちゃんと見る事。それはどういう事なのだろうか。監視でもしているの?——いいえ違うわね。ハルが同行する時は皆どこか嬉しそう。見方を変えればサービスに見える。

いろはさんは彼の恋人なのだから、彼女が嬉しいのは当たり前なのだけれど。相模さんも彼と仕事をしてる時は声が跳ねている。

——少し淋しい。彼は私を見てくれているのだろうか。

総武高校でハルと再会するまで私は世界を変えたいと考えていた。努力した人間が報われずに、世界からつまみ出された様な世界。そんな優しくない世界を変えたかった。

でも今はどうだろう。彼と関わった2年間で、変わったのは世界ではなく自分自身だった。あれほど憎んで、諦めていた世界が、今は色づいている。

彼という時間が当たり前になったのはいつからだろうか。

「ユキせんぱい」

とてと可愛い後輩が寄って来た。

「もつと素直になって下さい。わたし達は、大丈夫ですから」

少し固まってしまおう。ぱちぱちと瞬きを数回してからやつと復帰できた私は、彼女の意図を理解した。

「いろはさん。ありがとう」

すぐには難しい。でも私は変わったのだから、この偽物の気持ちも変えたい。

ハル。私の事もちゃんと見てて。



はるひとの稼働率が異常だと言わざるを得ない。

少しでもいいから休んでほしい——ならば彼の仕事を減らせばいい。

そう考えたわたしは任命されるでもなく勝手に「委員長補佐」の役職に収まった。てつきり「俺の仕事を取るな」とか言ってくると思ってたけど、彼は「わかった。頼む」とだけ告げて受け入れてくれた。

言いづらかったのだろう。最初はそう思っていた。——でも、それは間違いだった。

ユキせんぱいとの話話を聴いて、わたしの目から鱗が落ちた。

『モチベーションの維持』

それこそ、はるひとがやっている事だった。彼にしかできない彼の仕事。

相模せんぱいがわかりやすい。

あの人はきつとはるひとの事を好きになって、告白して、振られる。しまった。本音がでちゃった。口に出してないからセーフ。

営業部は相模せんぱいのパワーですごい成果を上げている。その成果で営業部全体から活気を感じる。

ららぽーとにポスター掲示の許可をもらえるってすごくないですか？その時は、はるひとも現場に一緒にいて、交渉に立ち会ったみたいだけ。

今なら分かる。彼の目的は交渉が成功する事ではなくて、努力して

いる相模せんぱいを見る事だったのだ。

そんなの、アガらない訳がない。メーター振り切るまでである。

今思い返せば、はるひとは責任者として、具体的な指示は何一つしていない。やら命令されてしたる仕事にならない様にすごく言葉を選んでいる。失敗しても、間違っても、決して怒ったり、残念な顔をしたりしない。「じゃあ次はどうすればいいと思う？」と質問してアドバイスをするに留めてる。

——惚れなおす自信しかない。

「はるひと。そろそろ時間ですよ」

「ん。ああ。もうこんな時間か。いろは。今の全体の進捗を教えてくださいませんか？」

「全体で、だと30%ってトコですね」

ふむ。と応えた彼はパソコンでホームページを開いた。文化祭のページを印刷して、マーカーで線を引いて行く。

「どうかしたんですか？」

「ん。誤字があつてね。ついでに少し加筆してもらおうかなーって」
そう言つて彼はてくてくと相模せんぱいの所に言つて修正を依頼していた。

貴方、どこまで見てるんですか？しかも指摘されたのに営業部は何故か盛り上がってる。

少し聞き耳を立ててみた。

『ホームページのチェックしといたよ。このページ作ったのは誰かな？』

『あ…私ですけど…ダメ…でしたか？』

『作者名が入ってないからダメだ。良い絵は画家のサインがあるだろう？。それと同じだ。隅でいいから名前を入れよう！。あ、あと』

誤字に線引いといたからついでに直しといて』

『えええ〜！ サインとか！ ははははずかしいです！』

『ははは。じゃあペンネームでもいいから。必ず入れる様に！』

んじゃ。よろしく〜』

『えええ！ つちよ！。いいんちよ〜！』

あざとい。

くすりと笑ってしまう。ホームページを見る人は想像以上に多い。作った子もそれはわかってる。

そこをつついてあげる効果は絶大だろう。

——少し羨ましい。

はるひと。貴方の事。ちゃんと見てますから、安心して下さいね。でも無茶はダメですよ。

屋上で愛しの彼とお昼を食べる。はい。あーん。

文化祭の準備が進むにつれて学校全体が熱気を帯びて行く。

スローガンである『Be the Light』が大々的に告知された事も要因のひとつだ。

それと同時にわたしのタイムリミットも迫って来ている。速く決着をつけなければ、わたしは輝けない。

——ストーカーは予想通りニタ男だった。はるひとと帰ってる時に彼が確認した結果だった。

「いろは。少しいいか？」

「はい。どうしました？ キスしたいんです——んむっ…」

言い終わる前に唇で塞がれて、先手を取られてしまった。

はう…とても嬉しいけど…学校こんなとこの廊下でいきなりするのは反則だと思う。

誘ったのはわたしだけだ。 てへり☆

「これからニタ男と会う」

聴き間違いだろうか。今なんて言いました？ ストーカーと会う？ なんの為に？

「彼は、いろはの事が好きなんだ。だから受け止めて、一刀に切り伏せよう」

「あー。そういう事ですか。ちゃんと振ってあげればいいんですね？」

そうだ。と彼は言う。ついでに録音もしておくみたいだ。わかってたけどわたしの彼氏は少し腹黒い。

階段をてしてと降りて自分のクラスに向かう。教室に入って無表情のままニタ男に声を掛けた。

「ねえ。ちよつといいかな」

わたしの素の声。周りの知り合いが猛獣を見る様な目でわたしを見ていた。冷や汗をかくニタ男を連れて、彼氏の待つ屋上へ向かう。「いろはちゃん。何の用かな？　もしかして、やっとボクの気持ちに気づいてくれたのかい？」

名前を呼ばれた時点で寒気がした。気持ち悪い。死んでくれないかな？

「君はさ、わたしの事どう思ってるの？　好きなの？」

「好きだよ。愛してるまである」

ニタ男の死角にははるひとが隠れてる。大丈夫。大丈夫。そう、自分に言い聞かせる。

「へえ。——わたしのどこが好きなの？」

正直耳栓が欲しい。わたしの演技を自分の都合のいい様に解釈して、自分の都合を押し付ける言葉に吐き気を催す。

息を切らしながら妄想を垂れ流すニタ男を、ゴミを見る様な目で見ると。

「だからストーカーになったの？　凄く迷惑」

「仕方ないじゃないか！　ボクが守ってあげないと、いろはちゃんが汚されてしまうんだ！」

一周して冷静になつて来た。ニタ男の言葉は言質としてはまだ弱い。もう一声いつてみよー☆

「…やっぱりストーカーだったんだ」

「……………」

沈黙は肯定の証。はるひとと潮時と感じたのだろう。ニタ男の前に姿を現す。

「こんにちは。ストーカー君」

「っひい!!」

ニタ男が気持ち悪い声で寒気のする悲鳴を上げる。冷静になっても気持ち悪いモノは気持ち悪い。

「さっきのさ、録音してるから。もう逃げられないよ」

「…お前が…お前がいろはちゃんをたぶらかしたんだ！ボクのいろはちゃんを！」

はるひとが狂って叫ぶニタ男を無表情で睨んでいる。

「君はいろはは何を求めてるんだい？」

「黙れえええ！」

ゴン。と鈍い音がした。

——はるひとの口から血が流れている。

わたしのせいで彼が傷ついた。わたしのせいで彼が殴られた。彼は何も悪くないのに血を流している。

わたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいで

わたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいでわたしのせいで

「いろは」

——はるひとは笑っていた。

その柔らかな笑顔でわたしは錯乱状態から立ち直る事ができた。はるひとが笑っている理由も彼の言葉ですぐわかった。

「軽いパンチだな」

「えっ…あ…その…殴るつもりは…」

「分かってるよそんな事くらい。でも君が今、俺にやった事は傷害罪っていう犯罪だ。この意味が分かるかな？」

「犯罪…逮捕…」

ゾツとした。最初からこれが狙いだっただろうか。

「そうだね。通報すれば。君は、最悪退学になるだろうね。でも俺はそんな事は望んでない」

はるひとは微笑んだまま続ける。

「君の、いろはの事を好きって気持ちには否定しないよ。でも、どうして傷つけるんだ？どうしていろはの言葉を信じないんだ？惚れた女な

んだろ？自分自身で気持ちを踏みにじってどうするんだよ」

「ボクは…いろはちゃんに…」

ニタ男はすつと立ち上がりはるひとの顔を見る。その顔はニタ男という汚名を返上できる凜々しい顔だった。

「柘先輩！すみませんでした！」

最敬礼で謝罪する元ニタ男。声からは気持ち悪さを感じない。

こちらに向き直りわたしを見る。不思議と寒気はしなかった。

「一色さん。君の事が好きでした。今までごめんなさい！」

「…わたしもごめんなさい。わたしには、大好きで大切なヒトがいるの」

「うん。ありがとう——さようなら」

胸がきゅつと締め付けられる。これが想いを断ち切る痛みなのだろうか。今まで何度も告白されてその全てを振って来たけど、こんな痛みは初めてだった。

やっと、ついに、ようやく。なんでもいいや。終わった！わたしは自由だ！

とにかく！わたしを縛り付ける鎖は解かれた。けれども愛しい人が傷ついた事は嫌だった。苦しかった。悔しかった。——でも、もう過去の事。

「はるひとー」

わたしは彼の胸に飛び込んだ。彼は受け止めて膝裏に腕を通し、ひよいとお姫様だっこをしてくれた。

はうう。この姿勢は反則です。彼はわたしが好きな抱かれ方をこぞぞという時にくれる。

「んむっ…んはあ…はぶっ…んちゅっ」

キスが流星のごとく降り注ぐ。彼の血の味はなんとなくほろ苦く感じた。

わたしの舞台が出来上がるまであと2週間。

第35話

去年の文化祭はずっと隣のカレー堂にいた。何をするか当日になっても知らされてなかったのだからそういう事なのだろう。

むしろ参加を強制されなくて良かったとさえ思える。

昔の偉い人は言いました。無能な働き者は銃殺刑に処す。と。

自分自身が無能だとはこれっぽっちも思っていないが、あの時のあいづらは、俺を無能だと判断したのだろう。

無能な俺は仕事をしない事でクラスに貢献しようとした。俺がない事で、クラスがまとまって楽しめるなら大いに結構。そう思っていた。

——今年が違う。今までが間違っていたのか、これが正解なのか、今の俺には解らない。

「…ヒツキー？大丈夫？」

「うお！……結衣か」

すこしばーつとしていた。なにせ演劇でやった事ある役と云えば『木』くらいしかない。小道具で事足りるのにわざわざキャストを用意してくれた当時の連中の思考回路が気になるが。

俺はへび役に選ばれた。ただ単なるキャラクターならばいいのだが、最後のシーンに問題があった。

『王子を毒牙にかける』

つまり。戸塚に噛みつくのだ。なんで実際に噛む必要があるのかはなはだ疑問だ。脚本を丸ごと作り直してもいいと思う。

まあ、その練習がさつき終わったところなのだが——

『ピキタニ君。手じゃないよ。首。だからね』

『八幡…やさしくしてね…』

『戸塚…そのセリフはやめろ』

ぎゅつと抱きしめて首に歯を立てないとダメだと監督に何度も言われた。理性がガラガラと音を立てて崩れていく。頬を染める戸塚から目を離せなかった。

戸塚を抱きしめて、見つめあう。ちらつと首すじに視線を落とし、心臓の音が煩い。脈動の度に少し視界がブレる。

抱かれる戸塚も緊張しているのだ。彼の鎖骨あたりに顎が当たって彼が身震いする。

——白くて綺麗な彼の肌に俺の牙を穿つ。

『んあつ…』

『はい！カー！ツト！ 違うよヒキタニ君！ ここは——』

言うまでもなく俺と戸塚は真つ赤で、監督は鼻にティッシュが詰められてた。

メイク担当もすこし恍惚な顔をしている。葉山は遠い目で景色を眺めていた。

「ヒツキー。さいちやんにでれでれしすぎ！」

「してない！やらされてるんだ！」

俺の可愛い彼女は男に嫉妬している様だ。文句は監督に言って頂きたい。今日の稽古はもう無理だろうな。時間的にも精神的にもしんどいし…。

委員長になった春仁の陣中見舞いに行こう。俺はふらりと立ち上がる。

「春仁の所に行くのか？ なら俺も行くよ」

「なんか用あんのか？」

有志の用紙提出と葉山は答えた。バンドをやるらしい。さぞや華やかになるだろうね。まあ、俺には関係のない事だろう。

「結衣がヴォーカルなんだが、比企谷もやらないか？」

「…：ドラムくらいしかできねえぞ、ってか人足りてんのか？」

「丁度良かった。ドラムだけいなかったんだよね」

関係者になっちまった。断ることもできたが、俺にその選択肢はない。

葉山の家で練習しているらしい。最近結衣がよく三浦と一緒にいる事もそれが原因だろう。

あと2週間までどこまで詰めれるだろうか。ひとまずやってみてから考えてもらおう。

「葉山。俺も素人だからな？あんま期待するなよ？」

葉山はふっと笑って前を向いて歩きます。目的地はそれほど離れていない。

ふと見ると、文実の会議室前に数人がたむろしていた。

「何かあったの？」

葉山が声をかける。しかし、返事はなかった。俺も葉山の肩ごしに会議室の中を見る。

「おいおい……」

「はあ……」

おい、葉山。同じ様な反応するな。仲良しに見えるだろうが。俺とお前は友達なんかじゃないんだから。もうちよつとずらして反応して欲しいものだ。

とりあえず、簡潔に言う『雪ノ下陽乃がいた』

「ひゃつはろー！ジン君！雪乃ちゃん！」

「こんにちは。はるのちゃん」

「姉さん…何しに来たの？」

ホントそれ。陽乃さんは卒業生だけど完全に部外者だ。「よよよ。雪乃ちゃんがつめたい」などと三文芝居をやらかす。思ってもない事を口に出す天才なんじゃないだろうか。俺は天災に清き一票を入れておく。

「有志の参加申し込みに来たんだよ。ららぽーとのポスター見て、めぐりに教えてもらったんだよねー♪」

は？あそこに掲載してもらってるの？普通にすぐくね？春仁の手腕なのだろうか。

「柊君。…勝手な事しちゃったかな？」

ぼわぼわしてる。ああ、あの人が生徒会長か。

「問題ありませんよ。だからそんなにしゅんとしないでください」

「あつ…うん。——んう…」

春仁のいい子いい子攻撃。こうかはばつぐんだ。城廻先輩は気持ちよさそうに目を細めてる。

「はるひと？なにしてるんですか？」

「…はるのちゃん。有志は何組くらい参加するのかな?」

一色が冷めた目で春仁を見てる。いや、それくらい許してやれよ。あんな風にしよんぼりされたら罪悪感しかないんだよ。

しよんぼりぼわぼわした人は少し頬を染めて下がった。

「ん〜そうだねえ。4組くらいになるかなあ〜」

「4組か…ユキ。枠は用意できそうか?」

「期日を過ぎてるから、少し難しいわね。…全体のリスケをすればなんとかなるかもしれないけれど。正直4組は不可能よ」

リスケジュールね。なんの毛かと思つたわ。言葉はちゃんと下ろして下さいね。雪ノ下さん。あ、高校生の方な。

「雪乃ちやくん♪ おねがい!1組でもいいから!」

「ちよつと…姉さん離れて」

「あ!比企谷くん!雪乃ちゃんを説得して!彼女の姉には協力するべきでしょ?」

——は?彼女?何言つてんだこの人は。

ああ、俺と結衣が付き合つてる事知らないのか。合宿の帰りは隠してたし、その前はららぽだったか。よく覚えてないけど。

「いや、俺彼女いますし。それに1組ならいけるんじゃないですかね?」

「えっ? 雪乃ちゃんの彼氏になつたの?」

「ちげえよ!」

言わないとダメなんだろうか。これはあまり言いたくない。俺に突き刺さる視線が増えるのは遠慮したい。

「由比ヶ浜ちゃんか…」

「…知ってるならなんで聞いたんですかね」

ホント性格悪いなこの人。

「葉山。用は済んだだろ。行くぞ」

「そうだね。そうだ、春仁。」

「どうした?隼人」

「あのスローガン。君らしくて俺は気に入ったよ。がんばってな」

「そうかよ。お前もな!あと考えたのは相模だ。そこ言葉は相模に

言ってくれ」

「つちよ！ 柊君！うち、恥ずかしいから言わないでって言ったのに！」

誰だあれは、俺の知ってる相模南とは違うぞ。

まあいい。春仁の影響でいい方に変化してるならいいじゃないか。それでいい。

すたすたと教室へと戻る。ほとんど下校していたが、結衣は俺を待っていた様だ。

「ヒツキー。かえろ♪」

今年の文化祭は色々な変化を実感できてる。あるいは変化してただけど見ようとしてなかったただけなのかもしれない。

結衣が彼女になつてから、お互いの事を沢山話した。言いたくない事も、聞きたくない事も沢山あった。

『ヒツキー。逃げちゃダメ。あたしも逃げないから。ね？』

変化が実感できる様になったのはそれからだった。俺が変化したのか。周りが変化したのか。それはどうでもいいんだ。

俺は今まで逃げていた事を認める。それが大事なんだ。でも、立ち向かう必要はない。そんな事は俺にはできない。

俺と結衣。春仁と一色。雪ノ下は俺達4人をどうみてるのだろうか。

考えるまでもない。雪ノ下は俺とどこか似ている。俺がそうするように、彼女は俺達から離れようとするだろう。

春仁達の為、俺と結衣の為。そして彼女自身の為に…。

5人であるあの^{奉仕部}部屋はひどく心地よかった。あの場所は俺達にとって大切な場所になってしまっていた。

でも、雪ノ下を残したまま、俺達は変化してしまった。

「ヒツキー。ゆきのんがね…なんだか遠くに感じる。なんかさ。

よそよそしいって言う感じ？ 言葉にうまくできないけど…」

「結衣。大丈夫だ。ちゃんと伝わってる。」

結衣とのメールの返事が遅かったり、会う約束そのものができなかったり、彼女達の接点がなくなっていくって。

「…寂しいな」

「結衣。ひとりじゃダメだったらふたりで。だろ？」

「ヒツキー…。うん。そうだ。あたし達でだめだったらハル君といろはちゃんも入れて4人で言うの！」

俺達の言葉でちゃんと伝えるんだ。

「本物が欲しい」



姉さんが有志の申し込みに来た。

いえ、それ自体は良い事なのだけれど。

城廻会長も厚木先生も姉さんが実行委員をやった文化祭は凄かったと褒めたたえる。

実際に私も見ていたのだし、言われなくてもわかってる。

——姉さんには負けたくない。

でも、どうやれば勝てるのか分からない。どこで勝ち負けを決めるのだろうか。

「…ユキ？」

「…あ。ハル、どうしたの？」

「…はるのちゃんの分、ねじ込めるか？」

「え、ええ。問題なさそうよ。総務の方を調整すればなんとかなるわ

——あ…」

ハルにぽんぽんと髪を撫でられた。いろはさんが温かい目で私を見ている。

先ほどは冷ややかな目をしていたのに、なんででしょうね。

あれこれ考えるのは後回しにしましょう。今は私ができる事をやらなければならぬ。

「管理部の方はこちらへ。一部変更があります」

私はハルに任された。それを全うしましょう。今はそれでいい。

管理部の生徒に指示を出す。書類関係は総務へ回す。仕事が終わった人から下校してもらって、私はスケジュールの確認と調整。

気付けば陽は暮れて月が見えていた。

『雪ノ下先輩。お疲れ様でした』

『お疲れ様。遅くまでありがとう』

ハルの仕事は何なのか、私はまだよくわかっていない。でも私でもできる事を、私がやってあげば、彼の力になれる。——と思う。

余計なお世話かもしれない。しなくていい事かもしれない。しかし、仕事をするな。という指示はされていない。

ハルが見てくれると思うとなんでもできる気がする。相模さんも文実メンバーもこんな気持ちなのかしらね。

私はいつもより少し多めに仕事を持ち帰って、いつもより少し遅く眠りについた。

翌朝になつて起きた私は、身体の異常に気付いた。

まっすぐ歩けない、頭がぼーっとする。あきらかにおかしい。

「……なんでこうなるのよ……」

ベッドにぼすんと座った私はそのまま横に倒れてしまった。

頭がぐわんぐわんして気持ち悪い。

——学校に行かなければ。文化祭の仕事がまだ残ってるのに……

そのまま私は意識を失った。

——何やら音が聞こえてくる。

インターホンだと気づくのに時間がかかってしまった。

のそのそとベッドから這い出て、ドアホンのボタンを押す。

『……はい』

『ゆきのんーあたし！大丈夫？』

……結衣さん？ああ、もう学校は終わってるのね。お見舞いに来てくれたのかしら。

「結衣さん。ありがとう。私は大丈夫だから帰っ」

「雪ノ下。いいから開ける。春仁もいるから」

少し怒っている様な気がする。ボタンを押してオートロックを解除した。

部屋着に着替えてカーデイガンを羽織る。少し経ってから、玄関のインターホンが鳴った。

「…どうぞ」

結衣さん。比企谷くん。ハルの順で上がってもらった。

「…適当に座ってて、今お茶を入れるから」

「っユキ！」

世界がゆっくりと傾いていく。

——いいえ違う。私が倒れていつてる。

それを理解したのは、ハルに抱きかかえられてからだだった。

意識は朦朧としていて、今どんな状態なのかよくわからない。ふわりと宙に浮いた感覚を抱く。

そのまま私は柔らかい所に寝かされた。

「ユキ。今は休んでいいから」

「…ごめんなさい」

看病される事は嬉しい。でもそれ以上に悔しくて情けなく思う。ハルの為に頑張った結果が今の私だ。

——頑張ってる私を見てほしかったのに。

視界が曇る。目の前にいるハルの顔がぼやけている。

「ユキ。よく頑張ったな。後は俺達に任せろ」

私に優しくしないで。押さえつけてた気持ちが決壊してしまう。

彼は穏やかに微笑んで、髪を撫でてくれている。

ふと、ここにはいないはずの、いろはさんの声が聞こえた気がした。

『ユキせんぱい。私達は大丈夫ですから。もつと素直になって下さい』

ハルの胸に顔を埋めて声を殺して泣く。声を我慢する事がこんなに難しいだなんて思わなかった。

結衣さんと比企谷くんにはこれ以上心配させたくない。

——ごめんなさい。ありがとう。嬉しい。悔しい。

荒れ狂う感情に身をゆだねて、ハルにしがみつく

彼は私の髪を撫でて赤子をあやす様に背中をとんとんと叩く。

「…ごめんなさい。——ごめんなさい」

「ハル君。ゆきのん、大丈夫？」

「結衣。ユキを頼む。俺はお粥作るから」

鼻をぐしぐし言わせながら結衣さんを見る。

「ほら。おいで。ゆきのん」

ぱつと開かれた懐に吸い込まれた。とても暖かい。

「ゆきのん。あたし、ちよつと怒ってるんだから」

「…ごめんなさい」

「無理したことじゃなくてさ。辛い時は甘えていいんだよ？」

「…ありがとう。結衣さん」

ハルが作ってくれたお粥を頂いたのだけれど。

「ゆきのん。あーん♪」

「結衣さん。その…自分で食べれるから」

「あーん♪」

「……はむっ。——美味しいわ」

結衣さんは嬉しそうだけど、お粥を作ってくれたのはハルよ。貴女ではないわ。勘違いしてはダメよ？

結衣さんは今日は泊って行ってくれるみたい。でも、ハルが居てくれないと食事が怖いから、いろはさんを連れて来てくれる事になった。

私は結衣さんに髪を撫でてもらいながらゆっくりと眠りについた。

第36話

ゆきのんが休んでるってハル君から聞いたのは、放課後になってからだった。

ハル君にも連絡は来てなかったみたいで、平塚先生から聴かれてそれでわかったんだって。

あたしはいてもたってもいられなくて、クラスを飛び出してしまった。

『結衣。落ち着け』

『ヒッキー！ はやく行かないと！ゆきのんが……！』

ヒッキーに腕を掴まれて止められた「事故に遭ったらどうするんだ」とか。「お前が慌ててもここに雪ノ下が来る訳じゃない」って言われてさ。

結果としてゆきのんは無事だった。

今はすやすやと寝てるけど、さつきまでは子供みたいに泣いてたんだ。いつもはキリつとしててさ。カッコいいのにね。

ずっとハル君に縋すがって「ごめんなさい」って繰り返してた。

ヒッキーは「頼む」って言って先に帰った。

ヒッキー。ありがとう。

「結衣せんぱい。どうですか？」

「いろはちゃん。うん。大丈夫そうだよ」

いろはちゃんがほっと胸を撫でおろす。彼女は少し前にハル君が呼んで来てくれた。そのあとハル君はやる事があるって言って帰って行った。何するんだろうか。

料理はいろはちゃんができるみたいだから安心だ。あたしも力になりたいけど。料理はまだ駄目だね。

奉仕部で料理ができないのは、実はあたしだけだったりする。かなしみ。

「ん。はるひとが食材とかいろいろ買って来るみたいです。結衣せんぱい。何かいるものありますか？」

「いるものはないけど。一旦家に帰りたいかな」

「りようかいです。はるひとに言っておきますね」

必要な物はたくさんあるけど、ハル君に用意できるものじゃない。流石にハル君に下着頼むのはムリ。絶対ムリ。恥ずかしすぎる。

いろはちゃんもそれを察してくれたみたいで、あたしを見てくすりと笑った。

「わたしは家から持ってきてもらおう事にします」

「え？何を？」

「ブラとショーツですよ。あとお泊りセット一式」

「いいいいろはちゃん!?ダメだよそんなの!いくらハル君でも男の子に見せるなんて!」

まったくこの後輩は…少しは恥じらってもんをだね。

「え？何がダメなんですか？」

「え？ダメじゃないの？」

あたしは恥ずかしくてムリなだけだし。いろはちゃんはなんでそんなにオープンにできるんだろう。

まさか、もうシちやつてるのかな…

「彼とはもう何度も裸で抱き合ってますし、下着くらい見られても今更感ありますね」

やっぱりかく。そっかく。いろはちゃん大人になったんだ。うん。

あたしもヒッキーと…ヒッキーに…ヒッキーのが…

——すごい…どきどきしてる。

「結衣せんぱい。顔赤いですけど…風邪うつってないですよね？」

「うえっ!? ああうん。だ、だいじょーぶ」

そんなわけない。どきどきしすぎてる。

深呼吸して落ち着こう。うん。

「はるひとが来たみたいですね」

いろはちゃんがすっと立ち上がってドアから出て行った。なんと
いうか、彼女じゃなくて妻って感じがする。

いいなあ…うらやましいなあ…。このふたり以上のカップルいる
んだろうか。

しばらくするとドアががちゃりと開いてハル君というはちゃんが
入って来た。

「よしつと。いろは。冷蔵庫に食材入れといてくれ。んで結衣。いつ
たん帰るんだろ？乗せてくから」

「あ、うん。わかった」

「いつてらっしやくい」

なんだろう。いろはちゃんがすごい。友達とは言え彼氏とふた
りつきりにするの許せるのかな？

ゆきのんが泣いてた時も仕方ないなあって感じだった。

ヘルメットをかぶってマグザムに座る。ハル君の背中に手を回し
たと同時にエンジンがかかった。

あたしの準備はすぐ終わったんだけど、ママがハル君にちよつかい
だしてて少し遅くなっちゃった。

ゆきのんの部屋ではいろはちゃんがご飯作ってくれてるみたいだ。

あたし達は来た道を引き返して部屋のドアを開ける。

「おかえりなさい。結衣さん」

「ゆきのん。大丈夫なの？」

「ええ。貴女達が来てくれたから安心して休めたわ」

「ユキ。大丈夫か？」

ハル君の声が少し低い気がする。怒ってるのかな？ゆきのんが落
ち着くまですごい優しい顔してたけど…。

ヒッキーのお兄ちゃんなのに、ゆきのんのお兄ちゃんに見える。

ゆきのんは「大丈夫。心配させてごめんなさい」って言ってる。

ゆきのんが元気になって嬉しい。

——でもちゃんと言わなきゃ。

「ゆきのん。あたし、怒ってるからね」



結衣さんの表情が険しい。

怒っている理由は文実の仕事を抱え込んだからでしょうね。

「じゃあ、俺は帰るから。いろは、後は頼んだ」

「…はるひと。…うん。わかりました」

「えっ？ハル君帰っちゃうの？」

「いや…俺いらんだろ」

「結衣せんぱいは餌付けして欲しいみたいです」

結衣さんの顔がころころ変わってとても面白い。私でも作れるのだけれど。少し負けた気分になってしまう。

「餌付けってなんだし！」

「はるひとにご飯作ってほしかったんですよねー？ 結衣せんぱい♪」

それは魅力的な提案だけど、ハルはきつと断る。

結衣さんが私に話がある事はわかりきってる。そして、ハルはそれをわざわざ聴く様な人間ではない。女子の話は男子には受け入れられない事も多いのだし。

「また今度な」

「それやらないやつだ！」

「結衣せんぱい。ご飯はわたしが作りますから、ユキせんぱいをお願いしますね」

私の部屋のはずなのだけれど。私は何もさせてもらえない。

もどかしい。

ハルが帰って、結衣さんというはさんが残った。

いろはさんがお粥を用意してくれてる間、私はというと、ベッドでごろごろしてた。いえ、させられてたと言うべきね。

せめて文実の事を何かしようかと思ったのだけれど、ハルが全部持って行ってしまった。

「…あのさ。ゆきのん。あたしね——」

「結衣せんぱい。お粥できたんで手伝ってくださいーい」

「——っ。はいーい」

結衣さんが怒ってる事は何に対してだろうか。私が無理してしまったのは、私が頑張ったから。それに偽りはない。

貴女の為ではないのだけれど、好きな人とふたりでいたいというの

は当然の事でしよう？少なくとも私はそう思った。

——ハルが来る前までは。

「ユキせんぱい。一人で食べられますか？」

「ええ。ありがとう。大丈夫よ」

お粥を口に運ぶ。薄く味付けされた料理にはいろはさんの気遣いを感じられた。

「…美味しい」

「よかったです！はるひとも褒めてくれた味なんですよ！」

ハルは良く体調を崩すものね。たしか千葉村の時だったかしら？

「いいなあ…ヒツキーが風邪引いたとかほとんどないし…なんか変な話だけどき。看病ってやってあげたくなるよね」

「なら。きつと冬にハルが風邪引くだろうし、その時に比企谷くんと一緒に看病したら？」

「いろはちゃんがいるじゃん！」

「結衣さん…そもそも料理はどうなの？あのクッキーから少しは上達したのかしら？」

うぐう。と顔をしかめる結衣さん。いろはさんはくすくすと笑っている。

「なんだか。こう——ほっとする。」

「なんだか女子会みたいだね」

「え？女子会じゃないんですか？」

「…女子会って…うちは喫茶店ではないのだけれど」

「…えっ」

女子同志でカラオケに行ったり、カフェでお茶したりする事が女子会だと聞いたのだけれど…違うのかしら？

今は私の看病しに来てるのであって、お茶をしに来てるのではない。ふたりとも間違えてない？

「まあ。なんでもいいや」

「うわっ…適当ですねえ…」

…なんだかいろはさんがアグレッシブね…。

美味しいお粥をもくもく食べていたらいろはさんが寄ってきてお

べんとうを取ってくれた。

凄く…恥ずかしかったです。

「じゃあ！ユキせんぱいが眠るまで本音で女子トークでもしましょう！」

「うえ!? いろはちゃん?」

「…ちそうさまでした」

食器をいろはさんが片づけてる。彼女はいいお嫁さんになるでしょうね。

誰の。と考えた私の胸がしくんと痛む。しかし、私はその痛みのも由に気づかない。

——そうして女子トークが始まった。

ねえ。ゆきのん。

なに? 結衣さん。

あたし達から離れようとしてない? 最近のゆきのん見るとさ。なんか、こう。そんな気がするの。

結衣せんぱいも同じ事感じてたんですね。わたしはヒント出しちゃいましたけど。

結衣さん。そんな事ないわ——と。言いたいだけけれど。…そうね、たしかに避けていたわ。

…:…どうして? あたし達の事嫌いになっちゃった?

結衣せんぱい。あざといです。わたしのマネするのやめてもらっていいですか?

していないし！

ふふっ。確かに同じ事聞かれたわね。そういえばあの時は私
で遊んでたのだったかしら？ いろはさん……？

うひい！ ごごごごめんなしゃい！ 怖い！ はるひと助けてえ
！ きゃああああ！

あははは。いろはちゃん。じごくじとくつて言うんだよ。

結衣さん。ちゃんと知ってるのね。偉いわ。

ゆきのん!! それくらい知ってるし！ むうく！ この汚名を挽
回したい！

結衣せんぱい…汚名は返上するものなのですが……。

はあ…どうして総武に合格できたのかしら。未だに謎よ……。

あれ？ そうだっけ？ ちよつと！そんな目であたしを見ないで
よお！

ところでユキせんぱい。素直になれましたか？

……わからないわ。でも…5人でいる奉仕部が、私は好き。あ
の場所はなくしたくない。でも私は取り残されてしまった。貴
女達が幸せな事は嬉しい。これは本心よ。でも…私はその障害
にはなりたくない。

………。

ゆきのんはさ。 どうしたいの？

私は……………。

ユキせんぱい。

っいろはさん。 どうしたの？

ユキせんぱいってはるひとの事好きですよ？ しかもわたしと
会う前からずっと。

……好き。 だったのかもしれないわね。 でもなんでそんな事を
聴くのかしら？

ユキせんぱい。 嘘はいけません。 もっと素直になって下さい。
あんな可愛い顔するのに好きじゃないとか、よっぽどの天然さんか
魔王クラスの悪女です。

ゆきのん。 あたしもそう思ってたけどさ。 どうなの？

……………好きよ。 今でも でも自覚した時にはいろはさんがいた。
この気持ちは胸にしまっておくことにしたの。

ユキせんぱい。 ぶつちやけますね。 わたし、ユキせんぱいにな
らるるひとに抱き着いていいと思ってます。 結衣せんぱいはダメ
ですね。 言うまでもなく。

いろはさん？

いろはちゃん？

えっ？ 何この空気。

貴女、問題発言した事わかってないのかしら？

そうですか？ 好きだったら抱き着きたくないですか？ ユキせんぱいが嘘ついてわたし達から離れる方が問題だと思いますけど。

いろはちゃん…ちよつと言いすぎだよ。 ほら、ゆきのん涙目なってる。

泣いてないわよ。 目にゴミが入っただけよ。

よーしよし。 ゆきのくん。

ちよつと結衣さん。 子供扱いは止めてほしいのだけれど…あう…。

結衣せんぱい。 逆効果です。 その凶器を押し当てるのは反則です！

わぷつ！ ちよつと…苦しい…。

えへへ♪ ゆきのんゆきのくん♪

結衣せんぱい…ずるいですう！

なにさ！ いろはちゃんも結構おつきいじゃんか！ 可愛いし料理できるし可愛いしあと可愛いし！

はうう…そんなに連呼されると恥ずかしいです…。

…どこの話をしているのかしら…？

ひやあんっ！　つちよ。　ゆきの　ん。　動いちやだめえっ！
んあうっ！

おお：ユキせんぱい、責めますねえ…。

こんなに大きい…羨ましいわ…どうせ比企谷くんに大きくしてもらってるのでしょうか？

ひやあん！　うえっ！　ヒ、ヒツキーとは…まだ…あん！　ゆきの
ん！だめだよお！

えっ。　まだだったんですか？　まああの反応じゃそうですよね。

いろはちゃん！　んあっ。　たしゆけてよお！

噛んだ。　やり直しですね。

いやああああ。

ユキせんぱい。　ほどほどにしてくださいね。

そうね。　ごめんなさい。　つい取り乱してしまったわ。

それで、何の話だったかしら。

ユキせんぱいが嘘ついてるって話です。

うう…貴女達に嘘をついてないじゃない…。　素直になれるなら
なりたいわよ…。

ハア：ハア……。じゃあさ。ゆきのんはさ。どうしたいの？

……私がどうしたいか？

そうだよ。ハル君の事。好きなんですよ？ 好きになっちゃうのは仕方ないよね。でもさ。それで離れるのはおかしいと思う。

それだけじゃないですよ。ユキせんぱい。わたし達から離れて、何か良い事ありますか？ 今楽しくないですか？ わたしはすぐたのしいです。

……楽しいわ。

なら、それでよくないですか？ ユキせんぱいが私の彼氏を好きになっても問題ありません。むしろはるひとの事を知ってくれる人が増えて嬉しいくらいです。はるひとは渡しませんけど。

そう：それはわかったわ。でも、それなら私は誰に嘘をついていたの？ まさか：適当に言ったのではないでしょうね？

ゆきのん。たしかにゆきのんはあたし達に嘘はついてないよ。ゆきのんってそういうのムリだもんね。あたしもいろはちゃんもわかってる。でもね。ゆきのんは嘘ついてるよ。

……誰に？

ユキせんぱい自身にです。

ゆきのん自身にだよ。

そう：そうね……たしかにそうかもしれない。

私は：ハルが好きだった。きつとこれは愛じゃなくて憧れの方。愛だったらいろはさんが一緒にいるのを見てきつと嫉妬に狂っていた。だからこの気持ちは愛じゃない。

わたしは貴女達と一緒にいたい。こんな偽物の気持ちを抱くのは嫌なの。

えへへ♪ ゆきのん。あたしね。ゆきのんの事好きだよ。わたしもユキせんぱいの事、好きですよ。

結衣さん。いろはさん。私も貴女達が好きよ。

5人の関係は壊れちゃったてたけど。また作り直そうよ。一緒に！

結衣さん。ありがとう…ううっ…ひうううくく…

結衣せんぱい。そのままベッドに運んであげてください。もういい時間です。

そうだね。ほら、ゆきのん。いこっか。

………うん。

ユキせんぱい：可愛いんですけど…そのギャップずるくないですか？わたしもだっこしたいです！

だめっ！ ゆきのんはあたしのっ！

………寝かせてちょうだい。

私は自分に嘘をついていた。それに気づけないのは嘘に悪意がないからでしょう。

私が良かれと思った事は、結果的に自分を苦しめる事だった。

最も恐ろしい『嘘』とは。

自分を騙す『嘘』である。

どこかで見えた事がある言葉を思い浮かべつつ。結衣さんの温もりというはさんの香りに包まれて、私はずっと眠りについた。

第37話

文化祭を明日に控えた俺達実行委員は、最後の定例会を開催していた。会議室の壇上に立ち、全員と目を合わせる。1ヶ月前、瞳に灯った炎はまだ強く揺らめいていた。

何も言わずに背を向けて、磁石を使って備え付けのホワイトボードにTシャツを貼り付けた。

真つ黒の生地。胸元には白い文字でスローガンが描かれている。白い墨汁で筆を使った様なフォントからは躍動感を感じる。さらに脇腹の辺りには大きめに『終』と行書体で描いてある。

そう、これは俺のだ。

文化祭実行委員のTシャツがギリギリ間に合った。

予想以上の出来栄えにぎわめきが起こる。

「委員長……これって例のTシャツですか？」

「すっげえ……かっこいい……」

俺はそれをもう1枚取り出して目の前で広げる。それには『雪』の文字があった。

「私の分かしたら？　ハル……まさか……それ、全員分あるの？」

「マジかよ……委員長はねえな……」

ユキの推測は正しい。全員の苗字の1文字目を脇腹の所に描いた。

ユキのTシャツは背中を見せて、同じ様に貼り付ける。

そこには実行委員全員の名前がずらりと描かれていた。最初に名前を聴いた理由はこれにある。俺達が成し遂げた証を思い出だけだなく、形で残しておきたかった。

一人ひとりデザインが違うシャツ。予算はそれほどしなかったが、かなり時間がかかってしまった。でも間に合ったのだし結果オーライだ。

ひとりづつ名前を呼んで、直接手渡していく。中には感極まって泣いてしまう女子もいた。彼女自身が辛かった事を乗り越えたからこそその涙なのだ。その涙を馬鹿にしたり、茶化したりする人はここにはいない。むしろ拍手が湧き起こり、まるで表彰式みたいだ。

3年の先輩方も感慨深いのだろう。じつとTシャツを見つめている。

「委員長！ありがとうございます！」

「相手が違う。礼を言うのは俺にじゃない」

お前を支えたのは俺じゃない。他のメンバーだ。

「みんな！ありがとう！」

会議室が喝采に包まれる。

いろはとユキが暖かい目でこちらを見ていた。

全員にTシャツを渡し終わり部屋に静けさが戻る。

もう暦は10月になり、少し肌寒い季節だというのに、ここは初夏のそれではないかと思えるほど熱気が籠っていた。

「それでは！定例会議を始めます！」

『よろしくお願いします！』

滞りなく会議は進む。それもそうだが、これから話し合う事と言えば後夜祭の事くらいしかない。

当日の確認。今、出来る事はそれだけだ。もう、他にやる事はなかった。このメンバーで集まるのもきつと最後になるだろう。

だからこそ。俺は言いたい。

「みんな。本当にありがとう」

場が静まり、俺に視線が集まる。

「みんなが頑張ってくれたから、ここまでやり切る事ができた。しんどかったよな。いっぱい無理を言ったよな。でも、応えてくれた事が嬉しかった」

「ありがとう」

真摯な気持ちで頭を下げる。

かすかにすすすんと鼻をすすする音が聞こえた。

視線を戻して口を開く。

「明後日まで、気を抜かないでくれ。最高のメンバーで最高の祭にしたいから、あと少しだけ力を貸してほしい」

返事はなかった。しかしこれは拒否ではない。口にするまでもない肯定なのだ。なら、せめて今日はゆっくり休んでほしい。

「では。定例会議を終わります」

『お疲れ様でした!』

舞台は俺達が仕上げた。役者はスタンバイしている。

——後は、成功させるだけだ。

『まもなく開演。各自タイムスケジュールをチェック』

『舞台袖、オツケーです』

『城廻会長もいつでもいけます』

『ハルもいける?——わかったわ。時間よ。カウントダウン開始』

俺の2回目の文化祭が今始まるうとしている。オープニングセレモニーは体育館で執り行われる。内容としては生徒会長の挨拶と委員長の挨拶と一部の催しだけなのだが。これが割と緊張するみたいで、城廻会長の手が少し震えていた。

「会長。大丈夫ですか?」

「あ、委員長! 大丈夫。だと思っ。やっぱり大勢の前に出る時は緊張しちゃうよね。よし! 行ってくる!」

城廻会長が跳ねる様に向かっていった。

——文化祭の開幕である。

「お前ら〜! 文化してるか〜!」

『おおお〜!!』

「舞台はここだ〜! 役者はどこだあ〜!」

『ここだあ〜!』

「輝け! ビー! ザ!!」

『ライツ!!』

どこの軍隊だろうか。と思ってしまうほどのノリの良さだった。生徒会が教育したのだろうか…。

恐るべし。ほんわかめぐり会長

そうこうしてらうちに委員長挨拶のパートが来た。会長のアナウンスで誘導される。

「ご紹介に預かりました。委員長の終春仁です」
自己紹介した俺は、すうつと息を吸う。

「祭りの時間だああ!! 楽しめなかったら承知しねえぞお!!」
「うおおお!!」

学校が沸きに沸いた。

俺は素早く袖に移動して喉を労わる。少し叫びすぎたみたいで、ひりひりと痛む。

「はるひと。やりすぎです」

「…貴方は加減つてもものを知らないのかしら…」

ひどい言われようだ。俺はあのやり方しか知らないのだから大目に見てほしい。しかし、彼女たちは微笑んだまま俺を労ってくれた。

さて、大事な仕事を一旦終えた俺は文実会議室で一息つく。営業部以外のメンバーも同様だ。文実の仕事は準備だけではない。運営も大事な仕事の一部だ。しかし、それを全員でやる必要はない。

営業部の仕事はほぼ完了しているから相模に一任してある。挨拶の際に黒いTチャツがちらほら見えたから、自由行動の指示を出しているのだろう。

管理部は物品管理の仕事が都度発生するが、俺一人でも十分に対応できる。

「管理部も自由行動で構わない。ユキも楽しんできてくれ」

「わかったわ。少し回る事にするわね」

総務部の仕事は今日より明日が重要だ。外部の人が来るのだから下手な事はできない。

「総務部も自由行動でいいぞ。ただし、明日はキツイから覚悟しててくれ」

三々五々、めいめいに散っていく実行委員達。そして、俺いろいろだけが会議室に残った。

「はるひとはいかないんですか？」

黒いTシャツを着た彼女が話しかけてくる。いつものゆるふわな恰好とは違ういろはのボディラインに目を奪われた。

「…行くかうか」

「えっちな事考えてる目ですね」

バレてる。えっちな事というか。アレだ。胸が少し大きくなってる気がした。

彼女の変化に気づける事はポイント高いんじゃないだろうか？

いろはが俺の背中に腕を回して豊満と言つていいソレを押し当て来た。

「1サイズ大きくなっちゃいました。誰のせいなんでしょうね〜♪

——んっ…」

「俺です」と言わんばかりにキスを落としました。誰かに見られてようが問題ない。情事を致すのは問題だが。

いろはの柔らかい唇を堪能していると俺のスマホがぶるりと震える。確認してみたら相模からだった。

「はるひと。ちゃんと受け止めてあげてください」

いろはも察した様だ。メールには『屋上に来て』とあった。

屋上に異性を呼び出す。それがどういう事なのか分からない俺ではない。去年にあの階段を何往復しただろうか。何度心をへし折つただろうか。

あの頃の俺はまだまだ未熟だったのだ。自分の事しか考えていなかった。素直にそう思える。

——相模南。

1年の時は俺の世界では危険人物だった。しかし2年でも同じクラスになってから少しづつ彼女は変わった。職場見学で話す様になって、文実の苦楽を経て、今に至る。

いろはと俺が恋人関係である事は彼女も知っている。その上で、想いを告げようとしている。

いろはを会議室に残してひとり屋上へ向かう。急がず焦らず。一歩一歩を踏みしめる。

「柊君。来てくれてありがとう」

第一声に感謝の言葉が出てくる時点で、彼女の成長を伺える。

「話があるんだろ？　ちゃんと聞くから」

「うん。　うちね、ずっと謝りたかったの。　1年の時の事、覚えてる？」

「ああ、ちゃんと覚えてるよ。あの頃はお互いに色々ヒドかったな」
笑い話にできるほど時間は経ってないが、経過した時間ではない。
過ぎた密度がそうさせるのだ。

「あはは。そうだよ。　うち、ヒドかったんだ——」

相模南は打ち明けた。俺をグループに取り込んでチャホヤされた
かった事。そして俺をアクセサリーの様に見ていた事。

「でもね。今は違うの。　うちは…柊春仁君の事を本気で好きになっ
てしまいました…うちなんかよりも可愛い彼女いるのにな…」

目尻からぼろぼろと大粒の涙が零れる。しかし、彼女は逃げない。
ならば俺はそれに応えなければならぬ。

「相模。俺の事を好きになってくれて嬉しい。　ありがとう。　で
も、君と付き合う事はできない」

「うん…わかってる…ぐすつ…」

彼女は涙を袖でぬぐい、にこりと微笑んだ。——その刹那。俺の胸
に飛び込んで来た。

背中に腕を回されてきつく抱き締められる。俺はだらりと腕を降
ろしたままだ。

「ごめんなさい…！　こんな事して…！　でも！でもお！」

「相模。　聞いてくれるか？」

彼女は首肯する。

「お前が好きになった柊春仁は、告白されたからと言ってほしい乗
り換える様な奴なのか？　そうじゃないだろ？　俺はいろはを愛し
てる。　それを貫いてこそその俺なんだ」

「…ぐすつ…うん。　そうだね。　柊君はそういう人。　だからうち
も好きになった」

彼女は力を抜いて、一步下がる。

「ありがとう。柊君。うち、ちゃんと失恋できた」
そう言つて去つて行く彼女はついさつきとは別人に見える程、素敵な笑顔をしていた。



はるひとが胸に濡れた跡をつけたまま、わたしの所に戻ってきた。相模せんぱいの想いを受け止めたのだろう。

モテる男は大変ですね。わたしも他人事ひとごとじゃありませんが。

「ただいま」

「おかえりなさい」

そうする事が予め決まっていたかのように、わたしとはるひとの唇が触れる。

本当は行つてほしくなかった。相模せんぱいの事は無視してほしかった。でも同じ女として、その勇氣は讃えたいのだ。

「それじゃあ、行きましよう」

はるひとの手をきゅつと握つて一緒に校内を歩く。記録雑務の仕事でもある巡回のついでだ。

行く先行く先で声を掛けられる。それもそうだ。少なくともはるひとは有名人だし、わたしもそこそこ知名度ある方だと自負してる。文実Tシャツもかなり目立ってるみたいだ。というか7割ほどはコレのせいだろう。

「はい♪あーん♪」

「……あーん」

いつになつたらあーんに慣れてくれるのだろうか。一緒にいる時点でこうなるのはもうテンプレなんだから、顔を真っ赤にするのはやめてほしい。わたしまで恥ずかしくなつちやう。

ベッドではあんなに狼さんなのに…。

「んんっ！ あーF組に言つてみようぜ。演劇やってるし」

「結衣せんぱいがげんなりしてましたね。揶揄ったら面白そうですし、行きましよう！」

面白そう。そう思っていました。演劇は『星の王子様』わたしは知らないお話だけど、どこまでが本当の内容なんでしょうか。

考えた人誰ですか？海老名せんぱい？——ああ…あのご腐人でしたか。

わたしなつとくしました。まる。

でもでも、比企谷せんぱいが戸塚せんぱいの首を噛む所は面白かったですね。比企谷せんぱいが面白かったです。

顔真っ赤にして、いい顔どころじゃないですね。首まで赤くなくなりました。それを見る結衣せんぱいもなんかもじもじしだして、いじらしいです。

ひよつとして噛んでほしいんでしょ？…ありえますね結衣せんぱいは否定してましたけどあの人ドMですからね。

わたしは噛まれた事はあんまりないですね。どっちかっていうと噛む方なので…。なんだかむらむらしてきました。

「いろは？顔が赤いぞ？」

「うえあう！ ななんでもないです」

はるひとの眼光が怖い。今日の夜がすこしたの…怖いですね。

「春仁。見たたのか？」

「ばつちりな」

比企谷せんぱいがよくわかからいうめき声を出して蹲ってしまった。

比企谷せんぱい…強く生きて下さい。

「ヒツキーやっぱりさいちゃんにでれでれしてるっ！」

「文句は監督に言え！俺だつてあんな事はしたくない！」

『あ、あたしにならシテもいいよ…』とか言いそうですね。この人。女子会の時にさんざんいじくられた事が効いてるんでしょうか。

「その割には楽しそうだったなあ、八幡」

「おい春仁！ いらん情報を与えるんじゃない！バレ…あ…」

「…ヒツキー…？」

比企谷せんぱい…骨は拾ってあげますね。

さて、一通り回ったわたし達は休憩も兼ねて奉仕部へ足を運んだ。部室に行くのも久しぶりに感じる。

懐かしい紅茶の香りが愛おしい。ユキせんぱいいないかな。

「あら。ここにちは」

「ユキ。ここにいたのか」

居てほしい人が居ました。願いは叶うんですね！

やはりこの香りはわたしをダメにする。今度クッキーでも焼いて持ってこようかな。さらにダメになる未来が見えた。

「丁度よかったわ」とユキせんぱいが紅茶を淹れてくれる。久しぶりに味わう紅茶は本当に美味しくて。幸せな気持ちに浸った。

しかし、ユキせんぱいの言葉でわたしに緊張が走る。

「ハル。私、貴方の事が好きよ」

綺麗な佇まいで座ったユキせんぱいは、ほのかに紅潮して微笑を浮かべている。そこだけ切り取ったら誰もが足を止める絵画みたいだ。美術館にあつてもおかしくない。

その可憐さにわたしも見惚れてしまう。

「ユキ…俺は…」

「ハル。私は付き合って欲しいなんて言うつもりはないのだけれど」

はるひとは目をぱちぱちさせている。わたしはユキせんぱいの言葉に耳を傾けるしかなかった。

「ハル。私にとって貴方は大切な人なの。貴方はどうなの？私を大切に想ってくれるなら嬉しいのだけれど」

「ユキの事は大切に想ってる」

返事に迷いがなかった。それはそうだ。何の問題もない。だってわたしもユキせんぱいの事好きだし…。

「ありがとうハル。私はそれがいい。親友…というのかしら？何があつても離れない。そんな関係」

ユキせんぱいの部屋にお泊りした時の本音トークでこの人は吹っ切れたのだ。偽物の感情を理解して、それを否定した。

「ユキせんぱい。やっと素直になれたんですね。わたし、うれしいです」

「いろはさん。ありがとう。いろはさんも大切な人よ」

ユキせんぱいは前に進んだ。でもはるせんぱいが言っていた事が

引つかかる。

ユキせんぱいは姉を目標としている。それだけなら問題ではないと思うけど、今回のこの変化でユキせんぱいはどうなるんだろうか。「俺のだ。ユキにはやらんぞ」

「あら。いろはさんは私の事も好きなのよ？知らなかったのかしら？」

「…あの…かなり恥ずかしいんですが…」

ユキせんぱいにぎゅっつてされた。全然力入ってないのに、逆らえないのはなんでだろう。あと顔がすごく近い。ちゅーしちゃいそう。ああ…いいかほりい…。

「紅茶ありがとな。そろそろ仕事に戻るわ」

文実の仕事といっても何もなかった。何かあるって事は問題が起こったって事だからそれはそれでいいんだけど。なんだか味気ない。その後、何事もなく下校時刻になって、わたしの文化祭1日目は終わる。

わたしはクラスの方にはほとんど参加できていない。彼と一緒にいた時間もそれほど長くない。

でも充実していると言い切れる。

「はるひと。わたし、幸せです」

「俺もだ。なんかこう…言葉にするのが難しいよな」
だから…ね？

その夜。わたし達は肌を通して互いの幸せを確かめ合った。

首に歯を立てられた時に甘い声が出てしまった。

もしかしたらわたしは夜だけDMなのかもしれない。

第38話

ちゅんちゅんちちちと鳥の声が聴こえる。一色家に泊った時は必ずと言っていいほど、この鳴き声で目覚める。

——朝か…。

しかし瞼ごしに光を感じない。きつと夏が終わったせいだろう。

寝る場所が変わったとしても体内時計は狂わないみたいで、俺の身体は活動を開始している。もぞもぞと身をよじると「ん〜」と。甘つたるい声が耳元で聞こえた。仄かに香る柑橘系の香りと柔らかい感触。耳をすませば、とくとくと安らぐ音が聴こえてくる。

俺はいろはに抱きしめられていた。しかも、俺の頭は彼女の谷間に埋まっている。

昨夜寝るときは俺が彼女を抱きしめて寝たはずなのだが、朝になったら逆になっている。背中に回してる腕に少し力を入れて俺も抱きしめた。

——満たされる。

何が。と言われると困ってしまう。コレに名前をつけるのは俺にはまだ早い気がするのだ。いろはと出会う前の俺であればとも簡単に名前を付けていただろう。しかし今はそれができないでいる。これは成長なのだろうか…。

「はる…ひとお…」

「……」

一気に顔が熱くなった。悶えてごろごろしそうになるが、ぐつと堪える。いろはを起こしたくない。

ゆっくりと身体を下げて拘束から抜け出す。いろはの肌は磨いてる成果もありすべすべしていた。

元の位置まで戻ると彼女の腕が何かを探しているかのようにふわふわしている。

彼女の寝顔も、どこか悲しそうだ。

「…ぎゅっお…」

「……」

俺の彼女が可愛すぎて辛い。

腕を頭の上から枕の間に滑り込ませる。虚空を漂っていた腕は俺の背中を探し当ててきゅつと身体ごとすり寄って来た。

ほにやりと緩んだ顔をじつと見る。

「いろは…」

「うんう…おはよう…」

くああとあくびをするいろは。なんだか猫っぽくてつい髪をよしよしと撫でてしまう。朝の挨拶を言葉と唇で交わして、ふと窓の方を見る。

カーテンの隙間から漏れる光はまだうつすらとしていた。つまり早朝だ。いつもならジョギングをしている時間だけど、いろはという時は走らない事になっている。

寝てる間でも俺を探しているのだろう。前に俺が勝手起きてに走った後に戻ったら、いろはが泣いていたのだ。『怖かった。いなくなったのかと思った』と零された時は胸が苦しかった。

すりすり頬を当ててくるいろは。亜麻色の髪が鼻にかかってくるすぐつたい。

「やんっ…」

彼女の背中をつつと指でなぞる。色っぽい声が漏れだして、頬が赤く染まる。

そんな彼女を見て、俺が我慢できる訳もなく…。

「あんっ…昨日あれだけシたのに…んっ…やんちゃなひと…ですね」

——朝っぱらから致した俺はきつと間違つてない。と思う。

二度寝から目覚めた俺達は、もう一度朝の挨拶を交わして身体を起こす。俺もいろはも一部を除いて気分の良い目覚めだった。

「腰が痛いですね…」

何も言えない。だって俺のせいだし。いや、俺も痛いけどさ。

ふわあくと抜けた声を出してぐつと伸びをするいろは。

お前、下着すらつけてないの忘れてるだろ。もしかしてわかって

やってるのだろうか。なら悪魔と言って差し支えない。

「はるひとのえっちー！」

いろはがハツとした顔で言う。…どうやら悪魔ではなかったみたいだ。

顔を赤くしてうーうーと唸ってる。自業自得だと思っただが…。

それでも彼女に逆らう事は得策ではない。

「ひとつ、言う事を聞いて下さい」

愛する彼女の為だ。出来る事はやってやろう。

しかし、いろはの次の言葉で俺は深く後悔する事になる。

「今度。わたしの下着を選んで下さい」

「は？」

俺にある意味で極刑になり得る判決が下された。弁解の余地はない。

いや、そもそも冤罪なのだが…。

裁判ごっこはさておき、汗を流して劣情をリセットしよう。支度を終えた頃にはいろはママである桃花さんが朝食を用意してくれていた。

ひとりで生きていく事を基準としている俺にとって、だれかと一緒にいる事は素晴らしい事だ。心からそう思う。

隣のいろはとキッチンにいる桃花さんに感謝をしつつ朝食を頂いた。

昨日と同じ様に記録雑務の仕事を引き受け、学校内を巡回する。流石に外部の人が多く中、黒いTシャツの生徒が人員整理だったり場所の誘導だったり、臨機応変に対応していた。

途中、小町からのタツクルをモロに喰らったり、ユキといろはから両腕を拘束されて周囲からの視線に突き刺されたりとラブコメなトラブルはあったものの、他に目立った問題もなく、文化祭の幕が下りた。

中でもはるのちゃんのオーケストラは凄かった。それを俺の隣で

じつと睨む様に見ていたユキはどんな気持ちだったのだろうか。折鞠まれている腕にぐつと力が入ったのを覚えている。

天才の姉の背中を追う、秀才の妹。傍目には美しく見えるのかもしれないが、俺にはそうは見えなかった。

『なにもしないで』

あの言葉の裏にはどんな気持ちが隠れているのだろう。しかし、俺がわかったとしても何もできない。

——いや、しない方がいい。

はるのちゃんがユキに嫌われようとしている事はわかった。彼女にはちゃんとした目的があるのだろう。それを邪魔するのは駄目な気がするんだ。

はるのちゃんとは少しだけ目があったけど、妖しい微笑みを見せてそのまま帰って行った。

エンディングセレモニーの挨拶もしつかりできた。実行委員にキチンとお礼も言えた。文句のつけようもない成功だと先生も言うてくれている。

——しかし、本当にこれで良かったのだろうか。

今回は成功した。しかしそれだけだ。失敗した上での成功と、ただ成功と。価値があるのはどちらだろうか。

言うまでもなく前者だ。いろはもユキも相模も、困難に立ち向かい、失敗した上で改善して、最後には成功させている。

果たして、俺はちゃんと失敗できていたのだろうか……。

あれから数日が経過し、日常らしい日常を送っている俺は、奉仕部での日常がひどく懐かしく感じている。たった1ヶ月ほど来ないだけでこんな気持ちになるとは思わなかった。

やはり、自分が思ってるより此処は大事な場所なのだと再認識する。

衣替えも済みあと2ヶ月もすれば1年の節目となるこの時期、2年生には修学旅行という行事がある。3泊4日の京都観光だ。歴史的な文化遺産も数多くある。個人的には豊臣秀吉と彼の妻であるねね

を奉つてる高台寺が気になる。実際に見てみたい。

歴史的な場所と言えば広島県の江田島にある参考館には、一度ひとりで行ってみたいと思っている。ちなみに元海軍墓地だ。館内には第二次世界大戦の遺品、遺書が納められている。つまり神聖な場所だ。

京都特集をペラペラめくってめぼしい場所に折り目をつけていくユキとそれを見てきやんきやんと燥ぐ結衣。八幡も学問としての好奇心は高く、どこか浮ついて見える。

「わたしだけでお留守番ですかー。寂しいです…。でも！お土産期待してますねっ！」

「ふふっ。いろはさん。奉仕部をお願いね」

しゅんとするいろはにユキが返す。3日目の自由行動の時は4人で観光地を巡る事になっている。結衣と八幡もユキが来るのが当然と言わんばかりに行く先を決めていく。

「ゆきのんとハル君はどこに行きたいの？」

「俺は高台寺に行きたいな」

「高台寺か…ねねが秀吉の為に建てた寺だな」

「え？大阪まで行くの？」

「結衣さん？私達は京都に行くのだけれど…」

どうやら秀吉と大阪城を結び付けたようだ。ユキがこめかみに指を当てて呆れている。

「4人で回るのがだし、私は適当でいいわ」

すっかりドッグイヤーがついた特集を閉じながら微笑むユキ。間違いない、この子が一番修旅を楽しみにしている。

秋の風情を4人で楽しめればそれでいい。どこに行くかが重要ではない、誰と行くかが重要なのだ。

「わたしも、いつか連れて行って下さいね」

返事をしない変わりに髪を撫でた。彼女は目を細めて気持ちよさそうにしている。

俺達は京都へ行くが、正直京都くらいならいつでも行ける。2人で行くならお互いが知らない場所に行きたいものだ。

ユキがいつの間にか、いろはの隣に移動して同じ様に髪を撫でていた。うちのお姫様はユキに抱き着いてすりすり甘えている。

「いろはさん…暑いんだけど」

ユキ、それは「もつとして」と言ってるのと変わらないのだが、学習してないのか、それとも確信犯なのか…。

あ、顔が真っ赤になった。学習してないだけか。

ユキが口だけの抵抗をしていると、部室のドアがトントンとノックされる。

「…どうぞ」

奉仕部を訪れたのは隼人と戸部君、大岡君に大和君のいつもの4人だった。戸部君の落ち着かない様子から、悩み事があるのは彼だと一目瞭然。隼人は付き添いで後の2人はヒマなのだろう、戸部君を揶揄っていた。

「…ほら戸部」

「言っちゃえよ」

「ほらほら」

なんだろうか、見てて煩わしい。隼人はまだわかるが、あとの二人は何をしに来たんだろうか。

「用件はなに？」

ユキが冷たい声で言う。隼人が嫌いなのは確かなのだろうが、大和と大岡の茶々入れに嫌気がさしたのだろう。確かにこれは見てて気分の良いものではない。普段から同じグループに属している結衣ですら、冷ややか目線を投げつけている。

「隼人。用件があるのは誰だ？」

「…戸部だよ」

うつとおしい位の前置きを経て依頼が告げられた。

「俺さ…海老名さんに告白して、イイ感じになりたいいつつーか…でも告白してフラれたくないっつーか。そんな感じでオナシヤス！」

「戸部せんぱいが何言ってるのかちよつとわからないですねー」

いろは、言ってるな。俺達全員そう思ってるから。

「頼むよ！奉仕部の人達てさあ、恋愛経験豊富そうじゃん？オナシヤ

ス！」

女性陣は言わずもがな、告白された回数全員で3桁に乗るのではないだろうか。そういう俺も人の事は言えない。

しかし5人とも全員が告白した事があるのは事実だ。経験豊富と言えば豊富だが、それが何の参考になると言うのだろうか。

「戸部っちの事は応援してあげたいけど…」

「…俺は関わりたくないんだが……」

結衣とその彼氏が言う。

「お断りよ」

「わたしそもそも学年違いますし…」

姉妹みたいにじやれあつてふたりもはっきりと拒否した。

「柊君！なんとか！オナシヤス！」

「……」

自分の想いを告げる。それは凄いいエネルギーが必要だ。緊張もするし、もしフラれたらと考えてしまう。誰かを頼りたくなるのも理解できる。

——しかし、ひとりでやらなければその気持ちは嘘になるのだ。

…戸部君はどう考えているのだろうか。本気だったらここには相談には来ない。隼人だけで完結している事だ。

「奉仕部としては、その依頼は受けない。でも個人的にであれば、見守ることくらいはやってやろう」

「柊君…ありがとー！俺さ、がんばるからさ！ちゃんと見ててくれよな！」

なるほど理解できた。戸部君が望んでいるのは逃げ道をなくしてほしいという事だ。背水の陣というやつだろう。鶴翼の陣かと思っただが、それは見当違いだったようだ。

「…そういう事ね。なら私も個人的に応援する事にしましょう」

「ゆきのん…あたしも応援する！」

「逃げ道無くすだけなら…まあ。いいんじゃないの？」

これで戸部君の逃げ道はなくなったと言っていいだろう。

しかし腑に落ちない事がある。ここに依頼に来たという事は、彼ら

3人では戸部君の背水の陣は完成しなかったという事だ。

——隼人に話を聴く必要がある。

俺は、お手洗いにいくと告げ、密かに隼人を屋上へ呼び出した。



春仁から呼び出しを受けた。言うまでもない、さっきの事だ。

屋上へ向かうと春仁がぼーっと空を眺めていた。

「すまない。待たせた」

「気にするな。それで呼び出した件なんだが」

「戸部の事。だろ?」

「いや、隼人。お前の事だ」

——さすが春仁。勘が鋭い。

「お前だけが少し苦い顔をしていたんでな。あと、隠してる事があるだろ」

「…わかった。話そう。でも、他の人には黙っててほしい。他言無用だ」

彼は嘘をつく人間じゃない。千葉村でも俺を支えてくれた数少ない『友達』と呼べる人。

彼も、俺の事をそう認識してくれているだろう。だったら、俺がする事はひとつだけだ。

「姫菜からも相談を受けてね。…内容は戸部からの告白を未然に防いでほしいって事なんだ…」

「……板挟みか…」

「戸部はもう決心してしまった。姫菜には悪いが、もう戸部を止める事はできない」

「……」

俺はみんなで仲良くできればそれでいいと思っている。揉め事があつたとしても話し合つて、仲直りすればいいじゃないか。

ずっとそうやって来たし、それが間違つてるとは思わない。

「隼人。戸部君を止めたかったのか?」

「戸部の事は応援したい。むしろ俺に止める権利なんかないさ。でも、姫菜がそう望んでるんだ。今の関係を壊したくないってさ」

「こんな事で壊れるほど薄い関係って事は俺も分かってる。でも、姫菜の気持ちもわかるんだ。」

春仁は俺の言葉を受けて真剣に考えてくれている。

「そのふたつを両立させるのは不可能だな」

「…春仁。俺はどうすればよかったんだ？お前だったらどうした？」

「簡単だ。海老名さんに受け止めさせて、戸部君にちゃんと失恋させてやればいい」

彼はそのまま続ける。

「普通は個が集まって群になる。群に人が属してる訳じゃないんだよ。お前たちのグループは後者だ。これはわかるか？」

「それはわかるけど、社会ってのはそういうものじゃないのか？」

「じゃあ聞くが、お前のグループはお前に属してなんの対価を得てるんだ？」

——対価。と聴いてピンときた。

部活動や企業をモデルとして考えていた俺は、個と個の関わり方を勘違いしていたかもしれない。

俺が部長をやっているサッカー部は、部活という群に属する事で体力や技術の向上という対価を得れる。

俺のグループに属する事で得れる対価…。

——なにもない。一緒にいれる、それだけだ。そんなモノは対価ではない。

「俺は根本が間違っていたみたいだ。ありがとう春仁」

「戸部をしつかりと見ててやれ、他でもない隼人を真っ先に頼ったんだろ？」

ああ、そうだ。ほかの人には目もくれず。彼は俺に本気の気持ちを語って来た。

「姫菜の事は…そうだな優美子にお願いしてみようかな」

「三浦さんに言うタイミング間違えるなよ？あの人才カンだから、ミスると戸部の告白どころじゃなくなるぞ」

「ははっ。違うない」

姫菜は優美子には話してないだろう。俺達はあくまで4人＋3人のグループであって7人のグループではない。

公開はしてないが比企谷君と結衣がカップルになった事もあって優美子と結衣が一緒にいる時間も前よりも減って来ている。

ここで優美子に相談するときと彼女を苦しめる。姫菜はそう考えたのだ。

姫菜なりの優しさなのだろうけど、はたしてどうだろうか…。

春仁にお礼を言って別れた後はいつも通り優美子と何でもないようなことを話していた。戸部達3人は既に帰ったみたいで、姫菜もここにはいないが彼女の鞆はまだあった。

「隼人。なんかあった？顔が暗いし」

「ああ、ちよつとね」

まだ、ここで言うべきではない。せめてここを出てから言うべきだろう。

言葉に詰まっていると教室に姫菜が戻って来た。優美子が下校を促して3人で教室を出る。

ほどなくして姫菜と別れ、優美子とふたりになった俺は彼女に相談を持ち掛ける。

「相談があるんだ。聞いてくれないか？」

「隼人…わかったし」

適当な喫茶店に入り、席に座って注文を済ませます。ホットコーヒーの香りで心を落ち着かせて優美子を勘違いさせない様に細心の注意を払う。

「それで、相談ってなんだし」

「落ち着いて聴いてくれ」

姫菜の相談と戸部の相談が相反する事。奉仕部へ戸部が相談に行っている事を話した。

優美子は最初は憤っていたが、姫菜の想いを代弁すると理解してくれたみたいで、今は落ち着いている。

「…優美子はどう思う？」

「あーしは…ヒナとはちゃんと友達だっと思ってる…あーしに相談してくれなかった事が悲しい…かな。でもね。あーしはヒナの考えがおかしいと思う。ユイみたいにはびっさり振ってやる事が正しいと思うし」

「姫菜にとって今のグループは薄っぺらいんだ…。告白した、されたで、簡単に崩れると思ってる。俺はそこを何とかしたい」

「隼人…あーしもそう思う」

「春仁がね…俺に言ったんだ。個が集まって群になるけど俺達は群に属してる個だっ…。俺はそれに言い返せなかったよ」

優美子は俯いて黙ってしまった。彼女も思うところがあるのだろう。

三浦優美子その名の通り、凄く優しい可憐な女の子だ。面倒見もいい。姫菜が彼女から離れてしまったら優美子は悲しむだろう。

——だったら離さなければいいのだ。

「優美子。強力してくれるか？」

彼女は小さく頷いてくれが、顔は少し暗かった。

喫茶店を出てその場で別れた

俺は、ひとりで考える。

数時間前までは修学旅行の行先で盛り上がっていた。しかし、今はどうだろうか。少なくとも優美子は楽しい気持ちではない。

——何に責任があると言うのだろうか。

良くない事が起こる時、それには原因がある。火のない所に煙は立たない。

今回の火は何だろうか。

戸部が姫菜の事を好きになったからか？

——それは絶対に違う。

姫菜が現状維持を願ったからか？

——それも違う。

俺が応援したり相談に乗った事か？

——違う…とりたい。もしそうなら…世の中はなんて生きにくいのだろう。

誰にも責任がないのに、良くない事が起こる。誰かのせいでできれば楽なんだろうな…。

でも、それは逃げてるだけだ。

思考の沼から抜け出せないでいる。ふと電話がかかってきた。誰からかかってきたのか確認しないで電話に出る。

「…もしもし」

『隼人。俺だ』

春仁からだった。新手のオレオレ詐欺か？と言ってやろうとも思ったが、声色がそれを許さなかった。

「優美子に話したよ」

『…そうか』

「なあ、春仁。俺が悪いんだろうか…俺が間違っていたからこんな事になってしまったのだろうか」

『隼人。それは違う。お前が正しくても戸部君は海老名さんの事を好きになっているだろう。少し頭を冷やした方がいい、現地でも相談に乗るから、今日はとりあえず頭を休めてろ』

「わかった。それじゃあ…」

お前は俺が悪くないと言ってくれるが、それを証明しろと言うのは所謂悪魔の証明ってやつだろう。

友達という事は素直に聞いておこうと思い、俺は沼から抜け出した。

自宅に帰ったその数分後に俺の友達からメールが届いた。

『責任を追及しないといけなくなったら、俺がそれを背負ってやるよ。全部俺のせいにしてしまえばいい』

視界が曇る。零れた雫はスマホの画面に落ちた。

俺は袖を濡らして前を向く。

「そんな事には、俺がさせない。残念だったな春仁」

3泊4日の京都へ行く修学旅行で学ぶのは歴史だけではない。もっと大切な何かを学ぶのだ。

こうして、俺の夜は更けていく。

第39話

「クラスの班分けねえ」

「春仁は俺と組んで欲しいな。他はまあ、成るように成るだろ」

戸部君が奉仕部に来た数日後、俺達はLHRの時間で修学旅行の班決めをしていた。

関係者をざっと洗い出すと9名、隼人たちはこれをどう割り振るのかを考えている。

——正直、そんな事はどうでもいいのだが…。

「とりあえず、大岡君と大和君はできればご退場願いたいね」

「…そうだな。面白がってるだけみたいだし…俺から話しておくよ」

あれこれ考えた結果。

当事者である戸部君、隼人、八幡、戸塚君の4人。

三浦さん、海老名さん、結衣に川崎を加えた4人。

あぶれた俺は相模のところにもまぜてもらった。

「こうなるのか…」

「そういう事だ。何かあったら連絡すればいい」

というか、これ以外に思いつかない。

戸塚君は八幡と一緒にいい。三浦さんは隼人と一緒にいい。戸部君は当たり前だが、海老名さんと一緒にいい。

めんどくさくなったから隼人には諦めてもらった。

「戸塚君もごめんね。大所帯になっちゃって」

「うん。八幡と一緒にだしボクは大丈夫だよ！」

「戸塚：俺と一緒に暮らさ」「ヒツキー？」…いい、いや…なんでもない」
南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

おお怖い怖い。この場にいろはがいなくてよかった。実は俺も少しどきつとしてしまった。

「ひーらぎ。ちよつと付き合えし」

三浦さんに小声で呼ばれる。何の用だ？などと野暮な事は言わない。
い。

「…わかった」

三浦さんは目を会わずにスタスタと先に教室を出て行った。彼女の数歩後ろをついて行く。すると、彼女は八幡の言うベストプレイスあたりで足を止めた。

「隼人から聴いた…」

「そうか…」

「ひーらぎはこんな時、どうするし…」

「その質問は無意味だ。ちゃんと聴くから。三浦さんがどうしたいか言ってくれ」

「いい加減に“さん”付けやめろし！」

「おおお…流石にちよつと怖い。」

「みう「優美子！」…」

「もう！他人行儀なのやめるし！」

他人でしょ？他人じゃないの？他人だよ。

俺とお前の関係はクラスメイトだ。それ以上でもそれ以下でもない。

でも、3人のお姉さまの内この子だけ呼び方が違うのもアレか。

「で…優美子はどうしたいんだ？隼人から話は聞いてるんだろ？」

「うん…」

優美子は分からないのだ。我を通すか否か、それがあつてるのかどうか。

自分の思い通りになる事と、自分の思い通りにする事は似てる様で全く違う。

彼女は今までそれをはき違えていたのかもしれない。でも、それは仕方ないと思う。周りが自分の都合の良いように動いてくれてた事の方が多いだらう。

自分のやりたい事を、先に周りが感じ取って先手を打たれる。ワガママを言う前に望みが叶ってしまったのだ。

「あーしは…海老名に受け止めてほしい。ひーらぎが大岡にキレた時あつたっしょ？ あんな事があつてもあーしらは乗り越えれたし。

今回もきつと乗り越えられるって思う」

「言葉を間違えるな。乗り越えたい。じゃないのか？」

周りに期待するな。周りも自分と同じ考えでいると思うな。それは違う。

「ひーらぎ…」

「優美子。自分でどうしたいのか、自分で決めろ」

らしくない。

クラスでは女王の如く振舞っている——違うな：持ち上げられるのか。

なんにせよ。こう…元気がないと調子が狂うってのはある。

「お前がそんなんだと、心配する奴がいるんだ。しつかりしろ」

「…わかったし」

放課後になつてからは奉仕部で依頼を待っている。八幡と結衣は京都の何処に行くかという話題で持ちきりだった。ユキは特集を見終えたのかじつと文庫本に視線を落としている。俺は俺でぼーっと外、というか空を見ていた。

空の色つて人間じゃ描けないよな。こう…青と赤の境界線とかどうなつてんだらうとか。そんな事を考えてた気がする。

『気がする』

ほんの数秒前の事があいまいになつてる、実は何も考えてないのかもしれない。

「こんにちはあー」

「つやつはろー。いろはちゃん」

何？今の間は。京都の話をしてたんじやないの？いろはが入つて来てから修学旅行の話はピタリと止んだ。ユキはいつもの様にいろはの好きな紅茶を淹れている。

結衣がいろはに気を遣つて話題を変えた。

それが結衣の優しさなのはわかる。5人の内4人が旅行の話をしていて、疎外感を感じない高校生はいない。いろはも例外ではなかった。

だが、ひとりの方にも言い分はある。自分に気を遣つて話題を変えられる様なマネは酷く傷つくのだ。隠し事をされてる様な、陰口を叩かれ

てる様な、そんな感覚に陥る。悪意がない分性質たちが悪い。

結衣もいろはも、優しく素敵な女の子だ。相手の事が大切だからこそ、こうなってしまう。でも、結衣を咎める事はできないし、いろはに間違つてると言う事もできない。

なぜなら、ふたりの思いやりは正しいからだ。

ユキが淹れてくれた紅茶がことりと置かれる。横目で見る彼女とちらと目があった。

「結衣さん。そういうのは、良くないと思うのだけれど」

「ゆきのん…えつと。あの…」

曲がった事が嫌いなユキが一石を投じる。

「何かあつたんですかあ？」

全て見通しているであろういろはが場に突風を巻き起こす。

「もしかしてアレですか？わたしだけ除け者になっちゃうから京都の話はしない方がいいってやつですか？」

突風どころじゃすまなかつた。ハリケーンというかサイクロンと
いうか…あれだ。飛んでいく系。

「いろはちゃん。違うの！」

なんだか浮気現場を目撃された言い訳みたいな事を口走る結衣。
なんだか雲行きが怪しくなってきた。

「へえ。わたしを仲間はずれにしたのは結衣せんぱいでしたか」

「い、いいいろはちゃん!? 違うから! 違うからね!」

ちらちらというはがアイコンタクトを送ってくる。ユキも八幡も
気付いた様だ。

「わたし…傷つきました。 結衣せんぱいはわたしの事嫌いなんです
かあ…?」

あざとい。

瞳を潤ませて結衣を上目遣いでじつと見る俺の彼女。結衣の庇護
欲が掻き立てられる。結衣は元々甘えさせるのが好きな女の子だ。
甘えてくるのが後輩で、しかもいろはだったら、躊躇わないだろう。

ユキは文庫本で顔を隠して肩を震わせている。震源地の隣にいる
八幡はぎゅつと自分の太腿を鷲掴みにして無表情を維持していた。

八幡もそろそろ限界が近い。

「あたし…いろはちゃんの事、好きだよ」

「っ結衣せんぱあいー!」

いろはを抱きとめる結衣。とても百合百合しいです。

八幡。あと少しだけ頑張れ。

「結衣せんぱい…」

潤んだ瞳。ほのかに赤い頬。ふたりの美少女の距離がゆっくりと縮まって…。

「ちゅーしてくだしい」

「ぶふっ!」

八幡とユキが嘔き出した。結衣は顔を赤くしてあわあわしている。結衣だけがいろはの演技に気付いていなかった。

「いろは、結衣で遊ぶのもやめなさい」

「はあーい♪」

「うえ!?何?何なの?あたし遊ばれたの!」

八幡とユキは目尻に涙を浮かべている。笑い過ぎだろ。いやまあ、俺も声出して笑ってるけどさ。

仕掛け人のいろはも結衣に抱かれながら満足そうにニコニコしている。

「うう…いろはちゃんひどい!」

「ふふっ。わたしも結衣せんぱいの事好きですよ」

ちゅっ。

「わひゃあつ!ダダダメだよいろはちゃん!」

わたわたきゃんきゃんする結衣のお陰?で空気が弛緩する。

微妙な空気は吹き飛ばせばいい。つまりはそういうことなのだ。

「わたし、5人で旅行に行きたいです!」

「なら今年中がいいわね。来年は私達は受験生なのだし」

「あたしスキーに行きたいっ!」

はいはい!と手をぴんと伸ばす結衣。

「18になったら普通免許取るし、行動範囲はかなり広がるな」

「免許か…」

これは前から考えていた事だ。維持費が馬鹿にならないから購入はしないが、免許はあるに越した事はない。

旅行の行き先で盛り上がる。車で行ける範囲だと指定しても「北海道！」と嬉しそうに言う結衣。

いや行けるけど…行けるけどさ！せめて本州にしてほしい。

それを言うと今度は「長崎！」と来た。それ九州だから。本州じゃないから。

この女…日本地図の位置関係わかってんのか？

ユキが結衣を叱っているとドアがトントんとノックされた。

「どうぞ」

ユキが入室を促す。入って来たのは俺にとってある意味で重要人物だった。赤いフレームのメガネがよく似合うご腐人。

「あつ。姫菜じゃん！」

「結衣ちゃん。ハロハロ」

——胸騒ぎがする。

彼女は何の用でここに来た？彼女は隼人に戸部君からの告白を未然に防いでほしいと相談している。それを知るのは当事者以外では俺だけだ。

ここで俺がそれを知ってる事がバレるのはよろしくない。そうそうに退散するでしょう。

「つと。いろは、そろそろ約束のアレ、買いに行こうか」

「はるひと？ その…今日でいいんですか？」

「ああ、今日がいい」

頬を赤く染めるいろは。約束のアレ。つまりいろはの下着を選ぶという羞恥心しか感じないお仕置きの事だ。

男が女の衣服を選ぶ基準は、色合いだったり種類だったり様々だ。

しかし下着は違う。男が女の為に選ぶ基準はただ一つしかない。

『脱がせたいかどうか』

これにつきる。これは彼女も理解しているだろう。というかしててくれ。

俺も恥ずかしいんだから、これくらいの不意打ちは許してほしい。

「んじや。俺達は買い物行ってくるわ。あとよろしくな」

「おう、またな」

俺は顔を真っ赤にして俯くいろはを連れて脱出に成功した。

「はるひと…」

「ん？」

「アレって…し、下着の事ですよね？」

そうだ。と言うと彼女は腕にしがみついていた。耳まで赤くなっている。

きつと今夜は簡単には寝れそうにない事を覚悟して、俺は学校を出た。



「あのね。戸部っちの事で相談があつて…」

海老名さんが椅子に腰掛けて依頼内容を話し出す。

と思いきや。腐女子全開の布教を始め出した。

葉山が総受け？俺が責め？戸部が俺に嫉妬？正直、やめていただきたい。

思うのは個人の自由だし、好きだから楽しんでくれるのは構わない。ただし口にするな。お願いします！ほら、結衣も引きつった顔してるから。友達でしょ？やめたげてよお！

雪ノ下は何の事かわかつてないようで、疑問符を浮かべている。雪ノ下。知りたいなら春仁に聴いてくれ。俺にはハードルが高すぎる。「せっかく元に戻って仲良くなったのに…私的にはこのままの関係でいたいんだよね…だからね！ヒキタニ君！おいしいの期待してるから！」

そう言つて海老名さんは去つて行った。さつき見せたおそらく素であろう表情と、ため息にも似た心情の吐露で、何を伝えたかったのだろう。

「彼女は一体何の用だったのかしら…」

「あたしもわかんない。途中からあんまり聞いてなかったし」
「……」

『ヒキタニ君！』

海老名さんは俺に用があった。では、その要件とは？

「元に戻った」ってのはいつが基準になっているんだ？

『おいしいの期待してるから！』

「まさかな……」

「ヒツキー？」

これは仮説に過ぎないし、俺がそう思い込んだだけなのかもしれない。
い。

それに春仁がそそくさと出て行った事も引つかかる。

「比企谷くん。貴方は彼女が何を言いたかったのかわかったの？」

「……」

——口に出して良いのだろうか。

「ヒツキー。教えてほしいな」

「……根拠も何もない、ただの仮説なんだが——」

海老名さんは今の関係がいいと言った。あたりさわりのないふわふわした関係。きつと戸部の事も気付いている。

しかし、これは欺瞞だ。互いに嘘を吐きあつて、それを黙認しあつて、傷を舐め合う。

俺はこれが大嫌いだ。

嘘をつかなければ続けない関係などいらぬ。そんなのは本物じゃない。

しかし彼女はそれがいいと言っている。簡単に繋がれて簡単に切れる関係を望んでいるのだ。

「つまり、男子を自分から遠ざけてほしい。という事かしら……それで、その仮説が正しかったとして、貴方がどう対処するのかしら？」

「何もしない。 っていうか、そもそも依頼自体を口にしていないし、それで俺達が動く道理がない」

一歩進みたい戸部と、距離を維持したい海老名さん。

彼女が言う「仲良くなった」とは自分の事ではないのだろう。これは葉山グループの事を指しているのではないだろうか…。

「…仮に依頼されたとしても、私達には何もできないわね」

「あたしもそんな依頼はやだなあ…」

海老名さんの依頼は今までと性質が違う。

結論を言うと、海老名姫菜という女の子が努力をしてる様に見える。いい。

結衣はもちろんのこと。戸塚、材木座、川なんとかの弟、葉山も戸部も、小学生の留美ですらなにかしらの努力をしていた。

では、彼女はどうか。

俺が知らないだけだと言われればそれまでだが「やってみただけダメだったから力を貸してほしい」だとか「こうしたいけどやり方がわからない」といった言葉は一切なかった。

「あと憶測だけど、春仁はこの事知ってるな」

「え？　　ハル君が？」

「…確かに。あのタイミングで出て行くのは今思えば不自然ね…」

「…もし春仁が動く様なら少し考えないといけないな」

何故？と首を傾げるふたり。控え目にいつてすごく可愛いですよ。いや、そんな事は置いといて。

「…春仁が関わった依頼を思い返してみろ」

雪ノ下がハツとした顔をする。彼女は気付いたみたいだ。

結衣は「んー」と唇に指を当てて明後日の方向を見ている。

「春仁が関わった依頼は、テニス、感想、チェーンメールの3つだ。結衣、覚えてるか？」

「…うん。よく覚えてる」

——全て、暴力に訴えてもおかしくないほど、怒りに身を委ねている。

春仁は俺の自慢の兄だ。大抵のことはできるし、努力もしている。しかし、人間的にできてるとは思えない。俺が春仁の事をどうこう言える程優れている訳ではないけど、あいつは異常だ。

「ハルは…危ういのね」

「ゆきのん？どーゆー事？」

結衣は困った顔で雪ノ下と俺を見つめる。

「春仁は…かなり特殊な『アダルトチルドレン』だ」

——アダルトチルドレン。

元々はアルコール中毒の親に育てられて成人した子ども。という意味で、発祥はアメリカである。

春仁の家庭は機能不全としか言いようがない状態だった。実際、今でもそれは変わらない。春仁が独り暮らしをしているのがいい証拠だ。

春仁が怒った時の解離^多性同一性障^重害を彷彿とさせる人の変わり様が気になって、少し調べてみたのだ。

その結果、俺は確信に近いモノを得た。

泣きたい時に泣けなかった。

嫌な事があっても文句を言えなかった。

嬉しい事、楽しい事があっても家ではひとりぼっち…。

家庭であるべき挨拶さえ、その相手がいなければ無意味になってしまふ。いや、無意味だけならまだいい。それは寂しさとなって己を抉るのだ。

——それが終春仁の『普通』になってしまった。しかも幼い頃に。

「携帯で調べてみたけど…なにこれ…ハル君ってこんななの…？」

「それが今の春仁の現状だ。俺はこれをどうにかしたいとずっと考えてる…でも、何をしたいかわからない」

そんな状態の春仁に解決が不可能な依頼が舞い込んできたら、結果はどうあれ春仁の心を深く抉る。しかし肝心の春仁はその痛みに気づかない。

楽しみな修学旅行の話は消し飛び、陰鬱な空気が流れる奉仕部。その空気を変えたのは、結衣だった。

「ハル君を泣かせよう！」

「「はっ。」」

雪ノ下とすつとんきような声でハモった。

あの、雪ノ下さん？ 睨まれても困るんですが？ 意味がわからないのは俺も一緒なんだからさ。そんな虫を見る目はやめてくれませんかね。

「ハル君さ。自分の事で泣いた事ないよね。だからさ。泣かせてあげようよ！ あたし達で！」

「そういうえば…私も1度しか見た事はないわね…」

具体的にどうやるかはこれからでいいだろう。というか、話し合う必要ない。

痛みや苦しみなどのマイナスの涙ではなく、喜びや幸福などのプラスの涙を流させる。それだけでいいのだ。

「そろそろ帰りましょうか」

「そうだな」

帰る支度をして、雪ノ下が鍵を返し終わるのを下駄箱あたりで待つ。今日は感情の起伏が激しいが、今はなんだか悪い気分じゃない。

それから数日が経過して、修学旅行の当日になった。

この3泊4日の旅で起こる出来事で戸部翔と海老名姫菜は、そして春仁は、どう変わるのだろうか。

期待と不安を感じながら、俺は集合場所である東京駅に向かった。

第40話

修学旅行。

日本で行くのは初めてだ。留学先のアメリカでもこの行事はあったのだけれど、特筆する事はなかった。だって、行っただけなのなの。

今日、私はわくわくしてる。

何度も時計を見たり、そわそわして落ち着かない。

ダメよ雪乃。

まだ出発すらしていないのに、体力を減らすのは上策とはいえないわ。

いいえ。それは少し違うわ。

私は今、暖気中なの。これは言わば投資よ。

部屋の中をうろうろとしながら、落ち着かなくていい理由を探す。

だって仕方ないじゃない。座っててもいつのまにか立ち上がっているのだから。

自分の尻尾を玩具と勘違いしてくる回る子猫が自分と重なり、少し顔が熱くなった。

ソファーにぼすんと腰掛けて彼の迎えを待つんだけど、約束の間まであと30分もある。

私はまた立ち上がりうろうろしてしまった。

エントランスからの呼び鈴が来客を告げる。

ぐりんっ！と首を回して時計を見るのだけれど、うろうろした割にはたった5分程しか経っていなかった。

ふふっ。幼稚園児みたいね…。

『おはようユキ。俺だ』

「おはようハル。上がって頂戴」

とても待ちくたびれたわ。といっても、ハルは1ミリも悪くないのだけれど。

せつかく私の為に来てくれたのだし、おもてなしをしたいのだけれど今はそうもいかない。なにせこれから向かう場所が問題なのだ。

その場所とは京都の事ではない。

そう、集合場所である東京駅だ。

あそこは最早迷宮と言って差し支えない程入り組んでいる。私が集合場所に迷わないで行けるとは思えない。人が多すぎるのも辛い点ね、酔って倒れてしまう可能性すらある。

昨日の夜の内にハルにお願いしたら彼は快諾してくれた。仮に私が倒れてしまったとしても背負ってくれるでしょう。彼はそういう人なのだし。

——でも、お姫様だつこは恥ずかしいわね…。

いえ：倒れる前提で物事を考えるのは愚の骨頂だわ。邪な考えは今は置いておきましょう。

：おんぶなら大丈夫かもしれない。

「んじゃ行くか、少し…：というか大分早いけど」

ハルが私のポストンバッグを担いですたすと先に行く。さりげない優しさも気取らない性格も、私が憧れる柊春仁そのものだ。

貴重品や小物をまとめたシオルダーバッグを肩にかけて彼と並んでマンションを出た。足取りが軽いのは心が躍っているからだろう。

その理由はハルと一緒にいるからではない。結衣さんたちと京都に行けるからでもない。

『修学旅行、楽しんでらっしゃいね』

昨日実家に呼び出された際に、母さんに相談した事がきっかけで言われた言葉。

私が相談したのはハルの事だった。

『雪乃。おかえりなさい』

『…ただいま。母さん』

『学校はどう？文化祭では活躍したらしいじゃない。よく頑張ったわね』

『…私は何もしてないわ。責務を全うしただけよ』

『母さん：アダルトチルドレンって何？』

『……雪乃?』

『友達が…大切な人がそうなってしまったてるの。勿論調べただけれど…その、よく理解できなくなってる』

『陽乃から聴いたわ。柊君が戻って来てるみたいね。彼の事なの?』

『…そうよ』

『…聴いてて気持ちの良い話ではないの。修学旅行から帰ったらゆっくりと話しましょうか』

『母さん…』

『雪乃。帰ってきたらもつと貴女の事を聞かせて頂戴。どんな事をして、どんな風に感じたのか。それと柊君の事も好きなのでしよう?』

『だから——修学旅行、楽しんでらっしゃいね』

皮肉にもハルの問題のお陰で私達親子の距離が縮まった。全て終わったらキチンとお礼を言おう。

東京駅に着いたら後は新幹線の乗降口辺りに向かうだけだ。ハルが言うにはそんなに離れていないみたい。それならきつと大丈夫だと思つた。

しかし、私の考えが甘かつたと言わざる得ない。

「お、おい。大丈夫か?」

「つへ、平気よ!この程度!」

予想を大幅に上回る雑踏にめまいがする。密集する高層ビルは森みたいで空が狭く感じる。

彼の袖あたりをちよんと摘んでいた指にきゅつと力が入る。

「ユキ。ほら」

ハルが両手に持っていた荷物を右側に纏めて、左肘をくいつと突き出す。

私は躊躇うことなくその腕に掴まり少しだけ寄りかかった。

「…ありがとう」

「どういたしまして。もう少しだから、がんばれ」

なんとか迷宮を脱して集合場所に辿り着いたのだけれど。

この十数分で東京駅が嫌いになった。今度からは都築に任せる事にしよう。

「ありがとう。荷物重かったでしょう?」

彼は口を開かず優しく微笑んで私の頭をぽんぽんと撫でてF組の方へ向かった。

「雪ノ下さん。おはようございます」

「おはよう。五十嵐さん」

「今の男性つて柊くんですよね? おふたりとも仲が良いんですね」
にこやかに笑うクラスメイトの五十嵐さん。

すっかり見られていた。しかもJ組の女子は全員と言っているほどこちらを見ている。

おかしいわね…そろそろ冬なのにどうしてこんなにも暑いのかしら…。

「雪ノ下さん。お隣よろしいですか?」

「ええ、どうぞ」

五十嵐さんが隣に座って話しかけてきた。

「雪ノ下さんと柊くんはお付き合いなさってるのですか?」

「いえ…ハルとは、その…親友、よ」

直球で来る質問に戸惑う。これがあるから彼女の事は少し苦手だったりする。

気にかけてくれているのだし悪い気はしないのだけれど…こう、恥ずかしい事をズバツと聞いてくる。

「…そっ、それがどうかしたのかしら?」

「いえ、最近雪ノ下さんがとても可愛くなったので少し気になりました」

彼女は私の顔が真っ赤に染まっても意に介さずそのまま続けた。

「雪ノ下さんはとても綺麗な女の子です。でもどこか冷たい印象が拭いきれませんでした。ところが文化祭が終わった辺りからでしょうか、笑顔が多くなった様に感じたのです。それがとても可愛くて――」

「恥ずかしい…たまらなく恥ずかしい！」

両手で顔を覆って、いやいやと顔を横に振る。

「その時、わたくしはわかったのです。雪ノ下雪乃さんが、恋をしている。という事に」

「は、はじめかしい…」

噛んで羞恥心を上乘せしてしまった。泣いてもいいかしら？

五十嵐さんの言葉にはお世辞という成分は一切含まれていない。混じりつけなしの賛辞。「今日もお綺麗ですね」みたいな社交辞令の挨拶だったらこうはならないのだけれど。五十嵐さんはそれをしない人だ。

「ほら、今のお顔もとても可憐ですよ？」

「はうう…やめてえ…」

そんな嬉しそうに言わないで頂戴。

勿論、私も嬉しいのよ？ありがとう五十嵐さん。

でもね、それ以上に恥ずかしい。顔から火が出そう。いえ、出てる。

「……お花をちゆんでくりゆわ…」

ああ…もうだめ。助けて…ハル…

脱兎の如く戦術的撤退をした私は安らぎを求めて彼の元へ向かう。羞恥心にまみれて過ぎした1時間を取り戻さなければ、京都観光に影響が出てしまう。

そして彼を見つけたのだけれど。

「…すう…すう…すう…」

そう…そうよね。朝早くから私を迎えに来て荷物を持ってくれて、私を支えていたんだもの、疲れていて当然よね。

「あー…雪ノ下さん。ここ座る？うちは他の子と話して来るからさ」

「相模さん…いいのよ。貴女もその席がいいのでしょうか？」

「うん。うちもここがいい。けど、雪ノ下さんが辛いのはうちもイヤだな。だから、ね？ 変わる？」

いろはさんから聴いてある。相模さんもハルの事が好きになってしまつて苦しんでいた事。彼に想いを告げてキッチンと整理できた事。

私は彼女に甘えてもいいのだろうか。その資格があるのだろうか？

「んん……んん？ ユキ？」

「あれ？ 起きちやった。まあいつか。それじゃあうちは他の子のところに遊びに行つてくるね！」

くああと欠伸をするハルから幼さを感じて母性がくすぐられる。相模さんはにつこり笑つて他の席へ行つてしまった。

ありがたく彼女の席を使わせてもらいましょう。

「ふわあ……ユキはどうしたんだ？」

「…気分が悪いのに、休ませてくれないからこつちに来たのよ」

半分本当で、半分嘘な言い訳。

「そうか。じゃあ起こしてやるからゆつくり休め。京都でバテちまうぞ？」

「…おやすみなさい。ハル」

そうして私は彼の肩に寄りかかり、意識を手放した。

—— ユキ。 おきろ。 着いたぞ。

彼の声がうつすらと聴こえてきた。さらさらと頭を撫でられているのがほんのりわかる。

「んん……」

子猫みたいに撫でる手に向かってぐいぐいと頭を押し付けてしまふ。とても気持ちいい。

ペットショップですり寄つてくる子猫がこんな感じだったかしら。

あの愛くるしさはもはや兵器と言っても過言ではない。

「にゃー……」

と鳴くと胸がきゅんとする。ああ私と一緒に暮らしてほしい。でも悲しいかな、あのマンションはペット禁止なの…。

引越してできるようになったら飼いましようそうしましょう。そして撫でる手を甘噛みしてきて、ぎらぎらした舌で舐められるの――

「噛むなアホ」

「あむっ」

デコピンされた。じんじんする。なんで私が痛い目に…――あつて当然だったわ。

――私はハルの手を甘噛みしていた。

私が猫を愛してるのだからその逆もまた然り。私を愛する猫が私に猫の気持ちや味合わせてくれたのよ。きつとそうに違いないわ。

「私は悪くないわ。それは猫のせいよ」

「つまり、私は子猫です。って事か？ ネコミミカチューシャツつけて1日過ごすか？」

「すみませんでした」

私の暴論がさらっと返されてしまった。プランBの用意もできていないのだし、ここは謝罪しておきましょう。

そもそも寝てる乙女の髪をあんなに優しく撫でる貴方が悪いのではなくて？

「ほら」

ハルがすつと手を差し出してくれる。その手に導かれて五十嵐さんの所まで連れていかれた。

私はやはり幼稚園児なのかもしれない…。少なくとも彼の前では。

京都は建物の高さが制限されている事も相まってとても穏やかに感じた。京都駅の最上階から見下ろす京都はそれだけで絵になる。夜にはどんな景色が広がっているのだろうか。

1日目はクラス単位での行動となった。私は学友たちと歴史に触れて、学ぶ。

一面に広がる紅葉。その美しさに息を呑んだ。風でざあと奏でる

葉音はとても心地よい。千葉村で聴いた音と全く違う。これが風情というもののなのね。

清水の舞台ではその景色もさることながら、その造りに感銘を受けた。――

重要文化財に指定されている清水寺は懸造りかけづくという技法で組まれた舞台が有名で、その足場は釘を使用していないのだ。これは授業で習った事なのだけれど、実際に見るとその技術が凄まじい事が理解できる。

「過去に何度も焼失しているけどその度に再建されているみたい」

「はあ：1200年かあ。学校で習ったけど実際に見るとやっぱり違うね」

クラスメイトが同じ様な事を漏らしている。これでこそその修学旅行よ。

その後もクラスメイトと歴史的な学問を深めつつ、京都の重要文化財を巡った。

体力のない事が不安だったのだけれど、ホテルに着くまで不思議と疲れは感じなかった。

クラスメイトも満足気な顔をしている。

「楽しいですね。雪ノ下さん」

「ええ。やはり実際に見るのは重要な事ね。機会があれば奈良とかも行ってみたいわね」

ハルが広島に行ってみたいと漏らしていた。第二次世界大戦の参考館は私も興味がある。

食事と入浴を終えて部屋に戻る。浴槽が檜でできていて普段とは違う心地よさを感じた。今日は充実した1日だったと言える。

――と思っていた。

「ねえ！雪ノ下さん！ 柊君とどんな関係なの!？」

「あっ！私も知りたい！東京で腕組んで歩いてたの見た時は雪ノ下さんがしんどそうだったから遠慮しちゃったけど、やっぱり気になる!」

戦術的撤退をしたいのだけれど、回り込まれてしまったわ。これは…まずいわね。

また羞恥心に塗れるのはごめんだわ。そうそうに避難するのでしょうか。

「ごらごら、雪ノ下さんを困らせたらダメよ」

五十嵐さんが助け船を出してくれて助かった。

でも、貴女がそれを言うのはどうなのかしら？

少し夜風に当たつてくると伝えてそそくさと部屋を抜け出した。

拷問部屋が落ち着くまで少し売店でも覗こうとぱたぱたと見て回る。

——こ、これは…！

京都アレンジのご当地パンさん！京都でしか売ってない事は確認するまでもない。

でも…こんなぬいぐるみを買ってる事が学友たち…ひいては五十嵐さんにバレると「雪ノ下さんは可愛い趣味をお持ちなのです」とか言われて、また恥ずかしい思いをしてしまう。

彼女は決して悪い人ではないのだけれど、あのド直球の言葉はどうにかならないかしら。

パンさんをふにふにといじっていると自動ドアが開く音が聞こえた。

「ん、ユキか。何してんだ？」

「つハル…脅かさないでほしいのだけれど」

どうやらいろはさんと電話してたみたい。彼は白いロングTシャツ、紺のジーパンとラフな恰好をしていた。通話をしながら外を歩いていたのだろう。黒いコートを羽織っている。

「クラスメイトが盛り上がってしまったって、少し避難しているの」

「ははっ。ユキもそうなのか。俺もがつつりと聴かれたよ」

女子に。と彼は付け加えてロビーにあるソファアに腰を下ろす。もちろん私もそれに倣った。

清水がどうだったとか紅葉がすごかったとか今日の事を話していると、サンングラスにマスクを付けたカーキ色のロングコートの襟を立て

てて顔を隠そうとしているあからさまな不審者が目の前を横切った。

——平塚先生？何をなさっているのかしら？

「先生…隠せてないですけど」

ハルが呆れた顔で言う。そこなの？どこに行くのかではなくて、そこにツッコむの？

聴けば千葉にはないラーメンをこつそり食べに行こうとしてたみたいだ。口止め料として連れて行ってくれと有難迷惑な申し出があったけど、今日はもう眠りたいから私は遠慮した。

ハルはラーメンという単語に目を輝かせている。なんでも関西にいた頃に何度か食べているらしい。つまり、彼に行かないという選択肢はなかった。

「私はもう寝るわ。おやすみなさい。ハル」

「おやすみ。ユキ」

温かい手がぽんぽんと頭を撫でる。今朝も同じ様にしてくれた事を思い出して、ロビーが少し涼しく感じた。

部屋に戻った私は猛烈な睡魔の襲撃を受けて布団に潜り込む。

さっきまでは散々な気分だったけど、今はそうでもない。

やっぱり今日は充実している。そう結論付けて私は目を閉じた。

第41話

早朝に目が覚めた俺はホテルの周辺を散歩していた。本当は走りたいけど、生憎それ用の衣服を持ってきてないし、何より汗を吸ったシャツをそのままにしておくのは嫌だ。臭いし。カビが生えそう。

朝昼夜と景色がまるで違うのは初めて訪れる場所だからだろう。千葉よりも標高が高いせいかな、少し霧が出ていた。

くああと欠伸をしてぐつと伸びをする。

「早いな柊」

「ああ、先生おはようございます」

教師の朝は早い。先生も朝の散歩かと思いきや早朝の見回りだった。しつかりと化粧まで済ませてある。

美人と言つて差し支えない先生が言うには「何処で何があるかわからないだろう？」らしい。

そうですね。食パンをかじりながら走っていて曲がり角で男性とぶつかって恋に落ちるかもしれないですね。

と邪推してみる。

事故や犯罪に巻き込まれない様に警戒しているのは考えるまでもなくわかるのだが、昨日縁結びの水をペットボトルに入れて持っていたこととしていた姿を目撃してしまった俺がそう考えても仕方のない事だろう。

修学旅行2日目。

俺は八幡達とは別に行動している。一緒にいる理由がないって事もあるが、俺達の班を入れると12人という大所帯になってしまい、行動が制限される事が最大の要因である。

太秦映画村は時代劇の収録にも使われる観光地だ。過去に何回か来たことがある俺は、別段興味を引くこともなくゆるりと過ごしていた。映画村が楽しくない訳ではないが、どこかぼーっとしている。

「柊君。どうしたの？ぼーっとして」

相模が顔を覗き込みながら聞いてきた。

ぼーつとしてるからだよ。とも言えずに適当に「なんでもないよ」と曖昧に返した。

昨晩は隼人から色々相談と言うか報告を受けた。もちろん戸部君と海老名さんの事だ。

あのふたりはそれほど変わりなく過ごしているが、優美子が少し元気がない様に見えるらしい。

お前らふたりがそんなんでどうすんだよ。八幡と結衣をみならつてほしいものだ。あいつら超楽しんでる。

遠くを見て、相も変わらずぼーつしていると、腹の虫が情けなく可愛らしい音で鳴いた。

「ぶっ。あはは！　うちも小腹がすいちゃったからさ。何か食べにいきましょうよ！」

「さんせーい！」

ぐぬぬ。これは恥ずかしいな。顔が赤くなるのがわかる。

そしてやってきたのは甘味処。外で焼かれている餅とみたらしのタレの匂いに吸い寄せられたのだ。「気が付いたら席に座っていた」というのは4人の共通認識である。

飲食店に入るとまずは水が出てくるのが普通なのだが、ここでは抹茶が出て来た。

はあ…。と4人でほっこりする。甘い口当たりにかすかに残る苦み。コーヒーや紅茶とはまた違った香りが素晴らしい。

「おいしい…」

「ねー。私もこの味。好きだな」

「俺もこれ好きだな。あ、買えるみたいだし、俺は買っていくわ」
そして注文が運ばれて来た。

黄金色のタレ。焦げ目がついた餅。デパートで見るそれとはまったく別のものだった。

「おお…すごいな」

4人で「いただきます」と唱和して口に運ぶ。

口に入れた餅の柔らかさ。タレの絶妙な甘さに言葉が出ない。

「すごく美味しい…甘いのに甘くないってなんだか不思議」

何を言っているのかわからない。しかし、それしか表現できない。それほどの美味。

その後に啜る抹茶の苦みがまた格別だった。

「抹茶の味が違う！なにこれ美味しい！」

「はああく…幸せ」

「あれ？何か音が聞こえない？」

音のする方を見ると臼があつておじいさんが杵で餅をついていた。

「もしかして、全部手作り…？」

——食べたい。

ぐぐくりと喉をはじめに鳴らしたのは誰だろうか。

「あんたらあれが気になるん？あれでな、あんころ餅作るんやで」

「「「欲しいです！」」」

「はあ…。幸せな時間だったあ…」

「いや…お前ら食いすぎだろ」

あの後も抹茶をおかわりしつつ、和菓子を薦められるままおいしく頂いた4人である。最早餌付けと言つていい。

和菓子が出て来るとぴたりと止むおしゃべり。目をキラキラさせている俺達を見ておじいさんがカラカラと笑う。おばあさんの「たんとお食べ」からは慈愛を感じた。

「大丈夫！うち、ちゃんと運動するから！」

「「そっちなのだ！」」

それ俺も思った。相模も米2合分くらい食べてるはずだが、夕飯は食べれるのだろうか。

心配無用。彼女は胃袋がふたつあるらしい。しかし、そこに触れるのは野暮というものだ。わざとらしく、そつと流しておこう。

次はいろはと一緒にここで味を楽しみたい。そう心に決めて、次の旅館へと足を運んだ。

「わああー！おはぎだー！」

「……………比企谷くん」

「雪ノ下…何も言うな」

高校生らしからぬテンションで大はしゃぎの結衣。八幡とユキが保護者に見える。というか保護者だ。

昼間に寄った甘味処で奉仕部用におはぎを買っておいたのだが、ここまで喜ぶとは想定外だった。

「結衣さん。落ち着きなさい。貴女は小学生ではないでしょう？」

「えへへ♪ごめんごめん。あたしさ。和菓子好きなんだよ」

昨日のユキが幼稚園児みたいだった事は黙っておこう。

俺はまだ死にたくない。

「今日まで団体行動だったからな…結衣と一緒に入れたからいいものの、やっぱり京都はひとりかふたりでがいいな。もつとじっくり見たい所結構あったし」

「ヒツキー。それもつと早く言えし」

「ハルは見かけなかったけど、何処に行っていたの？」

「班員4人で和菓子食ってた」

ユキが凍てつく様な冷たい目でこちらを見ている。

ユキちゃん？怖いからやめようね。

「貴方は京都に何をしにきたのかしら？」

「和菓子食いに来たと言ってもいい」

それくらい美味であった。

「そう…。な、なら明日も和菓子を食べないとダメね。仕方ないから私も一緒に行つてあげるわ」

ユキ。連れて行つて欲しいならそう言え。

結衣は相模達と同じかそれ以上に目をキラキラさせている。

八幡はと言うと…。

「…んめえ」

超食つてた。あのさ、話聴いてる？

「んで。明日はどこに行くんだ？」

「和菓子よ」

「…いや。それ場所じゃ——」

「金つばがいわ」

「あたしはお団子！」

「…春仁。助けてくれ」

「すまん。俺にも無理だ」

ユキ。お前も小学生みたいだぞ。

とりあえず。和菓子が最優先ってのはわかった。伏見稲荷の中腹あたりに何軒かあるはずだ。いや、ないとおかしい。

「高台寺に行ければそれでいいから適当にぶらぶらしようぜ」

文句が出る事もなく可決。

小学生つばいふたりを旅館に返して、俺と八幡も自分達の部屋へ向かう。

「春仁…：戸部の件なんだが…」

「…何かまずい事でもあったのか？」

旅館に入ろうとする足を止めて、踵を返す。

そんなにすぐ終わる話じゃない。そんな気がする。

「コンビニでも行こうか」

「…そうだな」

旅館から見える位置にあるコンビニでコーヒーを手に取り、適当に会計を済ませて外に出る。

「ひーらぎ」

雑誌コーナーで立ち読みをしていた優美子が声をかけて来た。隼人の言う様にどことなく声にハリがない。

この2日間優美子達は8人で行動していたはずだ。出発時点では今ほど思い詰めた顔はしていなかったはずなのに、一体何があったのだろうか。

「三浦。俺は外すから。ゆっくり話してこい」

「ヒキオ…：あんたも知ってるっぽいし。一緒に聞いてほしい。もう少しで隼人も来るし」

——静かだ。誰もしゃべらない。

「すまない。待たせた」

「おう」とか「ん」とかでそれぞれが返事をしてから、八幡が切り出し

た。

「あー。先に言っていていいか？修学旅行前になるんだが、海老名さんが奉仕部に来たのは知ってるか？」

あの時か…隼人も優美子もそれは知らなかったみたいだ。俺も秘密がバレるのを恐れて逃亡したから何をしに来たのかは知らない。

『依頼』って程で言われてないから無視してるが、あれは『告白を未然に防いでほしい』というメッセージだと推測してる。お前らに心当たりはあるか？」

「………ある」

隼人が苦い顔をして言う。

「姫菜からは…比企谷君が今言ったのと同じ内容の相談事をされてる。それで戸部からは告白を成功させたいと…それは比企谷君も知ってるだろう？」

「…なるほど。ひとまず俺は後回しでいい。三浦、割り込んですまなかった。続けてくれ」

俯いたまま優美子が口を開いた。

「…前に言った、『どうしたいか』って事」

「隼人には言ったのか？」

優美子は首を横に振って否定する。

隼人に限らず、誰かに言う事に意味はない。声に出す事にこそ意味があるのだ。

「優美子。言ってくれないか」

「あーしは——」

「さて、何処に行こうか」

「金つば！」「お団子！」

「それ場所じゃねえからー！」

この小学生供…。おはようの後の第一声がそれかよ！

…まあいいか。ふたりとも楽しそうだし。

八幡は：耳まで赤くなってる。

結衣に抱き着かれて恥ずかしいのか？いや、違うな。結衣に庇護欲を感じて悶えてる感じだ。

結衣に対しては父性全開の八幡である。

よし、こいつはそつとしておこう。

ユキが俺の隣にすすすとやってきて肘あたりの服をちよんとつまんだ。

向かった先は、俺が行きたいと声を上げた高台寺。

ねねが秀吉の為に建てたとされるそれは一部は焼失してしまっているが、現存している部分は一度も改築されておらず、400年前のままここに在る。そう説明された。

「あたし。ここに好きだ」

「私も、こう：うまく言えないのだけれど。落ち着くわね」

女性が立てた寺だからだろうか、俺には落ち着くという感覚はない。

歳を取ればわかるのかもしれないが…。

庭をぐるりと巡り紅葉を楽しむ。春には枝垂れ桜が美しいそう。

機会があれば次は春に来よう。

「ねねって人はどんな気持ちでここを建てたんだろ」

「どうでしょうね。授業では『秀吉の妻である事』としか教わってないから…」

歴史が好きな人じゃないとここには来ないだろう。

実際、参拝に来ているのはほとんど大人だった。俺達みたいな学生服を来た人は見当たらない。

「ねねと秀吉は恋愛して結ばれたんだ。戦国時代は政略結婚が普通だったみたいだし、親にも反対されたんだと。そこを押し切ってるんだから、すげえよな」

ヒキペディアの解説が入る。

「なんかさ…素敵だね。だつてさ。豊臣の次は徳川でしょ？その人達から認められてないとき。建たないよね。関ヶ原では戦争やってさ。敵同士なのに…その敵に認めさせるって凄いや」

結衣は話しながら頬を濡らしていた。ねねの在り方に感動したの
だろう。秀吉とねねの遺体が奉られる霊屋わたまやを後にして、高台寺の参拝
を終えた。

「何年か経ってから、また来たいな」

くしゃつと笑う彼女はさつきとは別人みたいだ。

「何年か経ってから」というのは、きつと『結婚したら』という事だろ
う。

ここでの結衣はどこか大人びて見えた。

服を摘んでいる指に一瞬力が込められる。ユキが何を考えている
か、なんとなく想像がつく。しかし何も言わずに、頭をぽんぽんと撫
でるに留めておいた。

「そろそろお団子食べたいな!」

「たしか伏見稲荷大社へ行くのよね?」

「そうだ」

結衣が八幡に涙を拭いてもらって復活。無糖の珈琲が飲みたい気
分になる。

俺の事はいいとして、伏見稲荷大社と言えば千本鳥居が有名なのだ
が、ひとつ問題がある。

「歩けるかしら…?」

「…がんばれ」

最初の鳥居を『通り』なだらかな階段を1段づつ上っていく。

「そんなに辛くないわ。大丈夫そうね」

「無理すんなよ?」

シーズンを過ぎている事も幸いしてそれほど参拝客はいなかった。
ユキと八幡が、結衣に鳥居の由来であったり物事の意味を教えてい
る。

そんな中、俺はというと…。

—— 昨晚の事を思い出していた。

あーしは…グループって考え方。もう止める。それに拘ってるか

らこうなってる気がするし…。

優美子…それは。

隼人は今のままでいいの？つておいヒキオ！帰んなし！

いやいや…俺いる？いらぬよ？つてか超怖いんですけど…。

俺はみんなで仲良く出来ればいいと思ってる。和を似つて。つて言うだろ？

和を以って貴しとなす…か。葉山。それは違うぞ。お前は言葉の意味を履き違えてる。

…比企谷君。何が違うんだい？

人はみんな違う。だからみんな納得できるまで話せて事だ。つまり、ぶつかって喧嘩しろつて言ってるだぞ？

ヒキオ。怒んなし。あーしが言いたい事の結論がそれだし。

優美子は海老名さんと喧嘩するのか？

する。

あーしはヒナと向き合うつて決めた。あーしが納得いく答え聞くまで離さないし。

で。優美子は口に出したが…隼人。お前はどうしたいんだ？お前と優美子の意見は真反対だぞ？

俺は…。いや違うな。俺が悩むのは今じゃないね。もう少し後の

事だ。

隼人。あーしは隼人の傍にいるから。そこは変わらないし。今は任せてくれない？

「ハル？」

そうだね。優美子に任せるよ。

ひーらぎ。ありがと。少し楽になったし。

俺は何もしてない。でも、どういたしまして。と言っておこうかな。

「ねえ。ハル？」

「ん…ああ。どうした？」

「それはこっちのセリフなのだけけど」

珍しくむくれているユキ。いろはが見たらなんて言うだろうか。

「何を考えていたの？」

「ゆ…三浦の事だ。海老名さんの件でちよつとな」

「そ。貴方ひとり抱え込まなければいいわ。どうせ今夜に一悶着あるのだし、学校に帰ってから5人で考えましょ」

だから今は。ね？ と付け足してユキが微笑んだ。

休みながらも階段を上る。ふと来た道を振り返ると、京都の街が一望できた。

「あ！お団子！」

「っはあ…疲れた」

「ヒツキー！はやくはやく！」

「だああ！引つ張るな！行くから少し落ち着け」

結衣が超元気。あの階段けっこうキツイかと思っただけケロッとしている。さらに汗ひとつかいていない。

「ふふっ。ひよつとしたら神懸かりかもね」

「そんな事は…案外あり得るかもしれないな」

伏見稻荷大社。つまり縁結びだ。しかもここは総本山なのだし、名

前に「結」が入っている彼女に何か良い事があってもおかしくなさそうなものだ。

「はあ…はあ…。春仁は まだわかるが、俺でも 結構しんどいのに、お前なんで そんなに元気なんだよー」

「なんかね。身体が軽いの！自分の身体じゃないみたいでさく」
まさか。ね。

伏見山の中腹辺りにある茶屋は京都市内が一望できる場所だった。

4人で抹茶を飲んで、団子を食べる。

この場でしか経験できない味に誰もが舌鼓を打った。

「戸部っちがね。今晚、姫菜に告白するんだって」

「ああ、そうだったな。すっかり忘れてたわ。場所は嵐山の竹林だったか」

「あそこは陽が暮れると何も見えないから足元に灯りがともるみたいよ。ああハルは行ってないのよね。和菓子食べてたみたいだし」

「なんだか言葉にトゲがあるように感じるんだが、気のせいだろうか。」

「結衣が言ってただろ？何年かしたらまた来よう。今度は5人で。な？」

「…：…：そうね。他にも行きたい所は沢山あるのだけれど…」

ユキが言葉を濁す。それは、いつかは5人でいられなくなるという事を示唆しているのかもしれない。

日没が近いのか、辺りが徐々に暗くなってきた。鳥居の灯りを頼りに山を下りる。次の目的地は嵐山の竹林だ。そこで戸部君の勇気を見届けよう。

後になって、神懸っていたかもしれないのは結衣だけではない事を、俺は知る事になる。

第42話

ヒツキーに支えてもらって伏見稻荷大社の石階段を下っていく。さつきまで身体が軽く感じたのは、神様が住まう世界に近かったからなのかな。

ヒツキーが言うには、階段や坂道は上りより下りの方が脚にクermみたいだし、そのせいかもね。

「大丈夫か？」

「うん。大丈夫」

ヒツキーの優しい言葉であたしは頑張れる。ううん。頑張りたい。

あたしは高台寺で感銘を受けた。秀吉が没したのは伏見城つて所で、伏見稻荷は縁結びで有名な場所だ。

あたしにはそれが無関係に思えない。だからあたしはこのふたりの縁にあやかっつて、結ばれた縁を大事にしようつて思った。

「まだ身体は軽いのか？」

「え？ ー。わかんない。でもさつきよりは疲れてるかも」

「そうか」とヒツキーが言う。彼の優しさは言葉だけではない事をあたしは知つてる。むしろそつちの方が多かつたりする。

手を繋ぐ時は必ず歩道側だつたり、歩く速さが一緒だつたり…。

言葉にしてほしい時もあるけどさ。口にしないからこそ、伝わるものもある。こうやつてさ。手をにぎにぎするだけでも『好き』つて伝えれる。

そしたらさ。ヒツキーもにぎにぎし返して来てくれる。

あたしはそれが嬉しい。

ヒツキーがタクシーを止めて行き先を告げる。助手席にはハル君がそうするのが普通かのように乗り込んだ。あたしの両隣にはヒツキーとゆきのんがいる。

「あの…結衣さん？ その、恥ずかしいのだけれど」

「えへへ」

ゆきのんと、指を絡めて、手を繋ぐ。

ヒツキーとの縁だけじゃ嫌だ。あたしは全部欲しい。

ゆきのんもいろはちゃんも、もちろんハル君も。でもさ、これは口にしちゃったらいけない気がする。根拠のないただの勘だけどさ。今はあたしがそう思っていればいいかなって思うんだ。

嵐山に着く頃にはもう日は暮れて、灯りが街を照らしていた。戸部っちが告白するまであと一時間ちよつとだ。

戸部っちの恋はきつと終わる。だからさ。綺麗に終われたらいいね。

夜の竹林で男の子がひとりで立っている。ゆきのんが言っていた通り、足元の灯り以外に光はなかった。

男の子はそわそわしてて落ち着きがない。心臓が破裂しそうな程どきどきしているのが物陰のあたしからもわかる。

逃げたい。でも逃げたらだめだ。彼は自分にそう言い聞かせてる。あたしはヒツキーの手を握ってエールを送る。

——戸部っち。がんばって！

ゆきのんとハル君は覗き込んだりしないで柵にもたれてじっとしてる。つてかさ。覗き込んでるのあたしだけだった。

少しすると戸部っちの正面から女の子が歩いて来た。姫菜だ。

姫菜はどう言うんだろう。あの子は好きって言われて迷惑だった事も多いと思う。何気に姫菜はモテるしね。

「…それで、話って何?」

姫菜の顔はあたしからじゃ良く見えないけど…声がなんか違う…気がする。

何?…ってしらばつくれるのもその声だとなんかさ…ヤダな。

「来てくれてありがと。海老名さん」

「……………うん」

「俺さ、海老名さんの事…」

「だめだよ！」

「姫菜？何言ってるの？ダメって何が？」

「ふつふつと怒りがわいてくる。」

「その気持ちは隼人君にぶつけないとダメ！ヒキタニ君とのカップリングに割り込んでこそその戸部つちだよ！大和君も大岡君も仲いいんだし、今の関係に割り込んでいかないとダメじゃん！」

「え？ あ？ はい？」

「——かつちーん。」

ヒツキーがあたしの手をすつと放して頭を撫でて送りだしてくれた。ゆきのんもハル君も腕を組んだまま目を瞑っている。あたしは考えるより早く立ち上がってカツカツと姫菜目掛けて進む。

「姫菜！何言ってるの!?!」

「結衣…そこにいたんだ…」

「結衣？え？あの——」

「戸部つちは黙ってて！」

あ、はい。と言って戸部つちが少し下がった。あたしは姫菜をまっすぐ見て相對した。

「戸部つち。ううん。戸部翔君に謝って」

「姫菜は目をそらして言う。」

「なんで？」

「姫菜？人の気持ち踏みにじってるんだよ!?!わからないの!?!」

「姫菜の後ろから優美子がこつちに来るのか見えた。」

「ユイ、ちよつと落ち着けし…」

「優美子、ちよつと黙ってて」

「う、うん。わかつたし」

「あたしはそのまま続ける。」

「それで姫菜。わからないの？それともわかつてやってるの？」

「わかつてるよ…サイテーって事もちゃんとわかつてる…」

「姫菜は俯いてぼつぼつと話し出した。」

「戸部つちの気持ちには大分前から気づいてた。でもね、私は今の関

係がいいの。みんな仲良くつてき、私は仲良しなみんなを眺めれたらよかったの。それは戸部つちに告白された時点で変わっちゃうんだ…そんなのイヤなの」

ヒツキーの言つてた事が当たつてた。あたしは驚きを隠せない。「もういいや…。あ、戸部君。ごめんね。私は誰とも付き合う気ないから」

あたしが「姫菜！」と言うより先に『パァン！』と竹林に音が響く。あたしの目に映っているのは優美子の手と手の方に顔が向いている姫菜だった。

「ヒナ。いい加減にしな」

「優美子…」

——結局。戸部つちは告白できなかつた。

「いやー。まさかああなるとはね〜」

「戸部つち…あれでいいの？あんなのつてひどいよ」

戸部つちは悲しそうだけど受け入れてる感じだ。でもさ、アレで良いワケないよ。戸部つちはいいよいいよと言うけど、あたしは納得できない。

今の戸部つちを見ると人を好きになる事が罪みたいに思えてしまう。今の彼は笑ってるけど笑えてない。

罪には罰が必要だ。人を好きになる事が罪なのだとしたら、その罰は失恋するまでの苦しきだとあたしは思う。失恋してからもずっと苦しいままなんて、あんまりだ。

「戸部。ちよつと来て」

「優美子？どしたん？」

「いいからー」

平手打ちをかました優美子が険しい顔で戸部つちを連れて行く。ヒツキーはハル君たちと一緒に少し離れた所であたしを見ていた。

あたしはしよんぼりして彼の元へ行く。

「ふわあ…ヒツキー？」

「…よくがんばったな」

ヒツキーに抱きしめられたあたしの糸が切れた。

「もういいんだ」

あたしはヒツキーの胸に縋って泣いた。これの理由はあたしの事じゃない。ヒツキーの事でもない。

でも、なんでこんなに苦しいんだろうね。

あたしが泣き止んだ頃にはふたりきりだった。

ヒツキーに旅館の玄関まで送ってもらって、おやすみのキスをする。

今日はヒツキーからしてくれた。いつもはあたしがおねだりしないとしてくれないのにな。

こんな時だけなのは卑怯だ。うん。

部屋には誰もいなかった。優美子と姫菜はどこに行ったんだろう。

「あれ？メール？」

優美子からの呼び出しだ。用件なんて確認するまでもない。姫菜の事に決まっている。

「ユイ。悪いね」

「ううん。さっきの事だよな？」

向かった先は旅館の裏側にあるベンチだった。

姫菜の頬に赤い筋がある。泣いた跡だ。優美子に叱られたのか、反省したのか姫菜はしゅんとしている。

「姫菜。大丈夫？」

「…結衣——うえええん！」

あー。あはは…すごい勢いで泣いちやったあ。

いつも変な事言ってる姫菜だけど、こんな風に泣きじやくる彼女を見るのは初めてだ。優美子もやれやれといった感じでハンカチを用意している。

あたしに縋ってくる姫菜の髪を優しく撫でる。ゆきのんにもこんな風にしてあげたなあ。

姫菜はずっと嗚咽まじりにごめんなさいを繰り返していた。

「落ち着いた？」

「うん。ありがと、結衣」

落ち着いた姫菜があたしの目を見て話す。

「私は今の関係が良かったんだけどね。優美子から聞いたんだ。そもそもね。私がグループを意識しすぎてただけだったの」

姫菜はそのまま続ける。

「結局ね。私は優美子と結衣の事が大事なんだ。だから。私と仲良くしてほしい。その…友達になってほしい」

姫菜の言いたい事はわかった。なんとなく一緒にいるんじゃない。一緒にいたいから一緒にいる。そういう事だ。

でも、それはそれだ。戸部つちの事はどうするんだろう。

あたしの心を見透かした様に姫菜が言う。

「戸部つちの告白はね。ついさっきちゃんとしたんだ。私、サイテーな事したけど…戸部つちは許してくれたよ」

戸部翔の恋は終わったんだね。でもまた始めればいいだけなんだし。姫菜がもっと戸部つちの良い所知って行けば、きっと。ね。

こうして、あたし達の修学旅行は終わった。



はるひとが修学旅行からわたしの所に帰って来た。わたしは唇で「おかえりなさい」を伝える。

たった数日会えないだけでこんなにも苦しさを感じているわたしは、やはり彼の事が大好きなのだ。

——彼がいない間に何もなかった訳ではなかったけど…。

やったらめったら声をかけてくる男子生徒達。それを嫉妬の目で見てくる女子生徒達。はるひとがいないだけでここまで再燃するも

のなのだろうか。

これは何かあるかもしれない、と。少し猫をかぶって情報を集めたら簡単にわたしの『噂』が耳に入ってきて来た。

『一色いろはが、彼氏がいるのに男を漁っている』

何の根拠もないただの噂。それに女子生徒わたしの敵がそれを流して炎上させたのだ。その噂を真に受けた男子生徒バカな男が声をかけてくる。そして、何も知らない人はそんなわたしに悪い印象を抱く。

そしていつのまにか、次期生徒会長に推薦されていた。

わたしが生徒会長になれば男漁りをする時間もなくなる、彼氏と一緒にいれる時間もなくなる。彼氏に振られてしまえばなおよし。といった具合だろうか。

担任の教師は自分のクラスから生徒会長が出る事で舞い上がっていて、わたしの話を一切聴かない。唯一頼りにしている平塚先生も、当時は修学旅行で京都にいた。

現会長のめぐりせんぱいは相談に乗ってくれたけど、成果は出ていない。

八方ふさがりだった。

もちろん、彼に相談する事は何度も考えた。

でも、楽しい旅行に水を差したくなかったから相談できてない。それに…。

——きつと血を見ずに終わらない。そう思った。

わたしにちよっかいをかけてくる男子生徒がはるひとを見た時の怯えようは記憶に新しい。女子でさえ手を出した事があるとかないとか…。

女子の顔に傷がつこうが、男子の骨が折れようがそんな事はどうでもいい。肝心な事はそれによってはるひとが処罰の対象になっってしまう事だ。

それだけは避けないといけない。もし彼が停学、あるいは退学になっってしまったらわたし達はどうなってしまうのだろうか。

「何もなかったか？」

「はい！ なにもなくて退屈なくらいでした！」

わたしは嘘をついている。そんな自分が嫌いになりそうだ。

「いろは。本当の事を言ってくれないか？」

「あー。バレてましたか…」

電話の時の声で何かを察したみたい。お願いだから、これ以上貴方を好きにさせないで欲しい。

「わたしの悪い噂を流されてると、勝手に生徒会長に推薦されちゃってまして…」

「生徒会長…か」

悪い噂の内容も全部話した。ここで隠すと後ろめたい事をやってみたいに思われてしまう。

やってない事は胸を張って、やってないと言うべきだ。

「少し考えがあるんだが、ひとまずは平塚先生に相談してみよう」

「…わかりました」

わたしが生徒会長になる事で失うものが多すぎる。はるひとは来年は受験生で勉強の時間が増える。わたしの家に泊りに来る事もぐつと減るだろう。

せめて学校だけでも一緒にいたい。でもそれは、わたしが会長になつてしまうと叶わない。

このまま放置していると信任投票でわたしは会長になってしまう。

しかも、自分の意志ではなく、やらされる程で。

「まあ。あんまり思い詰めるな。なんとかできるさ」

「はるひと…」

わたし以外に立候補を立ててわたしが負ける事はできるだろう。しかし、しょぼい人に負けるのはわたしのプライドが許さない。はるひとやユキせんぱいなら負けても納得できるんだけど…。

「——んっ」

優しい口づけ。温かい抱擁。髪を撫でる大きな手。

全てが愛おしい。

わたしはベッドにころんと横になって、彼に身を委ねた。

すやすやと眠るはるひとの髪を撫でる。わたしを抱きしめてくれる彼は、寝ると子どもみたいに甘えてくる。

わたしの胸に顔を埋めてまるで赤子みたいだ。すごくかわいい。彼の重荷になりたくはない。彼に頼るばかりでは嫌だ。わたしもひとりでどうにかする努力をしないと、彼に愛想をつかされてしまう。

私はそう心に決めて彼の額にキスを落とす。

「おやすみなさい。はるひと」